
パーソナル・リアリティ/自分だけの現実

こやマンボウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーソナル・リアリティ／自分だけの現実

【Zコード】

Z6064

【作者名】

こやマンボウ

【あらすじ】

アニメ、漫画、小説等から一つ選んだ「世界観」の能力を用い、戦うことのできるバーチャル・リアリティー・ゲーム、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」。西暦22××年、このゲームは世界中に普及し、ネットゲームとしてNo.1のシェアを占めていた。だが、それは、世界を巻き込んだ大事件の為の布石に他ならなかつた。

【現在のあらすじ】

反乱軍が持ち出してきた決戦兵器は、なんと「ラピュタ」！？
絶対の防御力を誇る伝説の空中要塞をどうやって落とせというのか
！？

【「世界観」一覧 現70種】

Angel Beats! / BLEACH / [C] THE MO
NEY OF SOUL AND POSSIBILITY CO
NTROL / Decoration Disorder Disc
onnection / Death Note / Fate / ONE
PEACE / X-MEN / Akutan! / Accelerator / Astral
Crayon / ichibanchirō no Daioh! /犬夜叉 / IS インフィニ
ット・ストラトス / 宇宙戦艦ヤマト /うみねこのなく頃に /ウルト
ラマンティガ / おおかみかくし / おまもりひまり / 怪盗クイーン /
学園アリス / 風の谷のナウシカ / 刀語 / 神様ドオルズ / 仮面ライダ
ー カブト / 仮面ライダー 龍騎 / 空の境界 / 喰靈 / 傷物語 / 起動戦士
ガンダム00 / 黒神 / ゲゲゲの鬼太郎 / 結界師 / これはゾンビです
か？ / 金色のガツシユベル！ / コードギアス / 戯言シリーズ / 灼眼
のシャナ / 新世紀エヴァンゲリオン / シーキューブ / スターウォー
ズ / スパイダーマン / 絶対可憐チルドレン / ゼロの使い魔！ / 全死
大戦 / ターミネーター / ダンス・イン・ザ・ヴァンパイア / ツバサ
/ テニスの王子様 / デュラララ！ / 天空の城・ラピュタ / 電脳コイ
ル / とある科学の超電磁砲 / とある魔術の禁書目録 / ドラえもん /
ドラゴンクライシス！ / ドラゴンボール / 鋼の錬金術師 / 人間シリ
ーズ / ハヤテのごとく！ / ハリー・ポッター / バカとテストと召還
獣 / 化物語 / ひぐらしのなく頃に / フリージング / ポケットモンス
ター / 魔法先生ネギま！ / 無限航路 / 夢喰いメリーノ / ルパン三世

抜粋（前書き）

本編（予定）より、
一部抜粋。

その象徴たる右腕を構える彼に、俺は投げ掛ける。

「そんなものは所詮幻想だ。現実を否定して幻想に身を委ねる気か？」

「幻想とか現実とか、そんな区別は関係なんだよ」

いつの間にかツンツン頭になってしまった彼は、俺に自分の正義を語る。

「誰が何と言おうと、俺は俺の幻想を守り抜く」

「上条当麻」(*とある魔術の禁書目録)に侵された彼は、そのまま腕を以つて俺の前に立ちはだかる。

「だから、てめえのふざけた幻想は、俺がぶち壊す！」

それは守るための一撃。

確かに、彼は大切な物を守るためにそこに立っている。

だけど。

そんなものは、俺は認めない。

そんな「台詞」を、俺は認めない。

「それせ、お前のお葉じやないだろー。」

「上條迦麻」とこいつの夢を。

「上條迦麻」とこいつの幻想を。

俺は、ぶち壊す。

「お前は、『上條迦麻』ではない。」

抜粋（後書き）

あんまりにも本編に入らないので、ここに一部を抜粋しました。

プロローグ（前書き）

注意

この小説は最強モノではありません。ですが、最弱からスタートもしません。

この小説には、原作の世界観、登場人物等は登場しません。ですが、一部に限り最終部分で登場します。

この小説は、原作に独自の解釈、変更を加えています。

この小説は、物語の視点の問題で、矛盾が数多く発生していますが、それらは全て使用ですので、ご了承下さい。

この小説は、「感想」での作品への要望については、積極的に取り入れる方針です。

プロローグ

その部屋は創作物で溢れていた。

ゲーム、漫画、小説、etc・etc……。

そして、その中央のベッドの中に座る「の部屋の主」は、唯ひたすらにPCを操作する。

PCに蓄積されていくのは、データであり、世界でもある。

最後の仕上げを終えた主は、ふつゝとため息をつく。

後は計画を実行に移すだけ。

そうすれば、この世界から抜け出すことができる。

主はそのために今までの全ての時間を費やしてきた。

その間、同士はなされた。

協力者もできた。

だが、仲間といえる存在など皆無。

孤独の戦いだけがそこについた。

だが、それも今日で終わる。

世界を抜け出し、己の中に埋没する。

そのためだけの生きてきた、と言つても過言ではない。

だから、躊躇する間もなく。

開始のベルを鳴らした。

「ゲーム、スタート」

『声音を認証。 パーソナル・リアリティ／自分だけの現実 の展開を開始します。展開完全終了までの予測時間、後、10年3ヶ月25日18時間45分52秒……』

プロローグ（後書き）

何のじとせりやつぱりだつたと思ひます。

この「プロローグ」は「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」全体としてのプロローグで、次話の「プロロープ」は「第一部」のプロローグです。

プロローグ（前書き）

『なぜなぜに？』

この「一ノ一」では、本編では明かされない疑問にお答えしていく
ます。

～「感想」で聞いてくれたら、ここで答えるかもよ？

プロローグ

派手な爆発音が森中に響く。

相手はかなりの攻撃力の持ち主とみた。

俺は、木の枝の上を跳ねるようにして、音の発信源を田指す。さつきの音に驚いて逃げ出した野生動物達を避けながら、滑るように足を動かす。

再び、爆音。

今度はかなり近い。その証拠に、土煙がたっている。

田標はすぐ近くとふんで、傍にあつた木に登る。

一回のジャンプで10メートルほど飛躍し、木の上部に立つ。

土煙の中、今回の対戦相手を見つけた。

同じく、向こうもこちらの存在に気づいたようだ。

相手が構える。胸の前で両手首を合わせて手を開き、腰付近に両手を持っていく、独特の構え。

「か・め・は・め……」

相手が氣を集中させ終わる前に、自分の足に意識と魔力を集中させる。

「波！」

放たれた『かめはめ波』（＊ドラゴンボール）は、真っ直ぐにこちらに向かってきた。

と同時に、「瞬動術」（＊魔法先生ネギまー）。

爆音。

「よつしゃー！」

ガツッポーズを取る相手。

が、自分の背中に手が置かれていることに気づいた。

「こいつの間に……」

驚く相手に、俺は冷静に告げる。

「確かに、『かめはめ波』は極めれば星を破壊するほどの威力のビームだが、基本は直線。連続使用も不可能といつ弱点がある。

『^{ヒミツタム}解放』（＊魔法先生ネギまー）

俺が呟くと同時に、背中に押し付けた右手から、無数の光の矢が飛び出す。

「つぐ……」

相手は力なく地面に倒れた。

「**遅延呪文**」(*魔法先生ネギま!)により発動を遅らせていた零距離射程の「**魔法の射手**」(*魔法先生ネギま!)により、相手は完全にダウンしたようだつた。

西暦、22××年。ゲーム機は進化し、ついにバーチャル・リアリティの世界で五感を完全に再現して、遊べるよになつた。

専用の「カプセル」に入つて遊ぶわけだが、そのカプセルには、使用者に人口栄養剤を投与できる機能がついている。これは、何時間も続けてゲームをしたい、という利用者達の要望に合わせて作られた物だ。これにより、最高で6ヶ月はゲームをし続けても死ななくなつた。だが、筋肉の衰えに対処する機能はないので、実際にそんなことをすれば結局のところ、死ぬか廃人になつてしまふのがオチだ。それに、「カプセル」の自動機能で、長期間のバーチャル・プレイを行えば、自動的に現実に引き戻される仕組みになつている。他にも「カプセル」には様々な安全対策が行われており、先進国では一家に一台的なりで普及されていた。

そんな中、「カプセル」を用いたゲームで今最も人気なのは、バーチャル世界で戦う「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」というロール・プレイング・ゲームだ。このゲームは、まず最初に「世界観」を選ぶことから始まる。予め向こうが用意した世界設定から好きなものを選んで、それを「自分だけの現実」とするのだ。一度選んだ「世界観」は変更不可能で、ゲーム中、各プレイヤーの

能力はその「世界観」によつて構成される。つまり、「ドラゴンボール」の「世界観」を選べば「かめはめ波」が撃て、「仮面ライダー」の「世界観」を選べば「变身」できる、というわけだ。もちろん、最初から能力全開というわけではなく、自分のレベルに合わせて使える技や能力値が変化する。

俺が選んだ「世界観」は「魔法先生ネギまー」。講談社コミックスで赤松健が手掛けた漫画だ。

俺の高校のクラスメイト達も皆このゲームにはまっており、放課後はすぐに家に帰つてログインしている。

ちなみに、最高レベルが100なのに対し、俺のレベルは43。これはかなりの高成績に入る。通常レベルは25とされており、40を超えるとやり込みのレベルが半端なくなる。でも、それでもまだ40で、ラスボスの設定が100ときたもんだから、このゲームのゲームバランス酷いものである。そのため、ストーリーを進む者ヨリ、各自で対戦を楽しむの方が多いのだ。俺も日々、対戦で遊んでいる。

これは、そんな俺らの物語。

プロローグ（後書き）

長い作品になると想いますが、末永くお付き合いで下さること。

世界観一覧（あշਵਾਨੁਕ）（前書き）

注意

ここはかなり重度のネタバレを含みます。

最新話まで読んでから読むことをお勧めします。

「」の見方は以下の通り

「世界観名」

使用者

その「世界観」の使用者の名前

保有能力

その「世界観」に関わる武器・技等の名前

初期設定

「パーソナル・リアリティ」を開始したときに予め決まっている
設定。変更不可能。

補正効果

……。

作品紹介

その「世界観」の紹介。主にウイキペディア参照。

セキュリティ上開示不可能な情報。

世界観一覧（あいわんおも順）

【あ行】

「アスラクイン」

使用者

三木 恭介
みき きょうすけ

保有能力

「演操者」
「機巧魔神」
「？鐵」
「黒の拳撃」
「副葬処女」

初期設定

使用者は「演操者」として設定され、基本スペックとして「機巧魔神」の一体である「？鐵」を所持している。レベル上昇に伴い、「機巧魔神」の入替え、複数同時制御が可能となる。「機巧魔神」を操る際に必須となる「副葬処女」は、デフォルトで女性NPCが務めるが、「世界観設定」時において一人で登録を行った場合、「副葬処女」を人間が務めることが可能となる。又、条件を満たせば「副葬処女」を全く無関係の他者が務めることも可能である。ただしその場合、「副葬処女」になる人間は

……。

補正効果

幽靈（幽靈限定）が見える。

作品紹介

高校入学を機に1人暮らしを始めたことにした夏目智春。彼は3年前から自称・守護霊で幼馴染の少女・水無神操緒に取り憑かれていた。

智春の兄・夏目直貴が暮らしていたオンボロ屋敷・鳴桜邸に引越した日、鳴桜邸に2人の美少女がやって来た。直貴から託されたという銀色のトランクを届けにきた黒のスーツの美女・黒崎朱浬、そしてその晩、トランクを奪いに鳴桜邸へ忍び込んだ巫女装束の美女・嵩月奏。この銀色のトランク「イクストラクタ」を手にした事を契機に、智春は世界の隠された真実と向かい合う。第一生徒会会長・佐伯玲士郎は言った。神は人間を見放し、この世界は一度滅び、「悪魔」の力を借りる事でやり直した「二巡目の世界」なのだという事を。

いざれ劣らぬ強烈なクセの持ち主である美少女達に囮まれた智春の受難の日々と波瀾に満ちたハイスクールパンク。

「犬夜叉」

使用者

不明（賞金稼ぎと思われる）

保有能力

「風の傷」

「鉄碎牙」

初期設定

使用者は最初、「鉄碎牙」を所有してはいないため、条件を満たして初めて手に入れこととなる。使用者が完全に妖になった場合、……。

補正効果

月に一度「世界觀」の使用が不可能となる。

靈の類が見える。

肉体が丈夫（爪で戦えるほど）。

五感がいい（時には犬のように、時には妖のように）。

作品紹介

戦国時代の日本、あらゆる願いを叶えるという宝玉・四魂の玉を巡り人間と妖怪の争いが続いていた。四魂の玉を守る巫女・桔梗は、半妖・犬夜叉に恋心を抱いていた。しかし、罠にはまり、お互いに裏切ってしまう。玉を奪った犬夜叉を最後の力で封印し、自分もまた力尽きる。遺言により、四魂の玉は桔梗の亡骸と共に燃やされ、四魂の玉はこの世から消え去った。

そして500年後の現代、神社の娘・日暮かごめは15歳の誕生日に神社の祠にある古びた井戸から戦国時代へとタイムスリップしてしまう。そこは犬夜叉と桔梗の争いから50年が経過した時代で

あつた。桔梗の生まれ変わりであるかごめの体内から再び四魂の玉が現れ、犬夜叉は蘇る。そして玉を巡って妖怪たちが動き出す。

戦いの中で四魂の玉はとんでもないハプニングにより無数のかけらに飛び散ってしまった。四魂のかけらを集めるために旅することになつた犬夜叉とかごめ。最初は嫌々だったが、2人は次第に惹かれ合っていく。その旅の中で、50年前、犬夜叉と桔梗を罠にかけた張本人・奈落の存在が明らかに。一人は奈落を追う中で、旅の中で出会つた子狐妖怪七宝、奈落に呪いをかけられた法師弥勒、妖怪退治屋珊瑚の仲間と共に、宿敵奈落を倒すため、玉の因縁を断ち切るために戦つていく。

【か行】

「仮面ライダー カブト」

使用者 羽河 頂司はねかわ たぐじ

保有能力

- 「cast off」
- 「clock up」
- 「マスクドアーマー」
- 「マスクドフォーム」
- 「ライダー キック」
- 「ライダーフォーム」

初期設定

使用者は「カブト」の「ライダーベルト」を最初から所持しているため、「変身」だけなら最初からできる。「ライダーベルト」自体は譲渡可能であるが、受け取った者が「ゼクター」に「ライダー」として認められるかは不明。レベルの上昇に応じて、使用できる「ライダーベルト」の数が増える。「ワーム」により完

……。

補正効果

肉体が丈夫（生身で人間大の異形の者と戦える。但し、勝てるか否かは不明）。

料理が上手（プロ以上）。

作品紹介

1999年10月19日、地球に飛来し日本・渋谷に落下した巨大隕石により、その周辺地域は壊滅した。そして7年後の2006年、人間を殺害しその人に擬態する宇宙生命体・ワームが出現。ワームに対抗するため、人類は秘密組織ZECTを結成し、マスクドライダーシステムを開発した。一方、ZECTの見習い隊員・加賀美新は、自らを「天の道を往き、総てを司る男」と自称する天道総司と出会い。

「喰靈」

使用者

寒 かん 篠子 とうじ

保有能力

「喰靈解放」

「白叢」

初期設定

使用者は最初から「殺生石」を所持し、「白叢」を呼べる。又、条件を満たせば「白叢」を譲渡できる。その際、「殺生石」も一緒に譲渡しなくてはならない。もし「殺生石」の力に飲み……。

補正効果

靈の類が見える。

作品紹介

式村剣輔は靈が見えること以外は普通の男子高校生だったが、ある日巨大な靈獣を使役して悪靈を屠る少女・土宮神楽と出会ったことから機密機関「対策室」に入り、妖怪や惡靈と奮闘することになる。

「黒神」

使用者

神崎拳
かんざきけん

保有能力

「サウザンド」
「超新星儀」
「テラ」
「方陣障壁」

初期設定

使用者は誰かと契約をしない限り、「イクシード」が使えないため、基本の攻撃は「サウザンド」によるものとなってしまう。使用者が「ルート」か「サブ」かは不明であり、「テラ」を使い切……。

補正効果

ボクシング（戦闘で使用可能レベル）ができる。

作品紹介

母親を事故で亡くした主人公の伊吹慶太は、ある夜、上位元神靈であるクロと出会う。しかし、クロを抹殺しようとする謎の男に襲われ、左腕を吹き飛ばされてしまう。クロは慶太を死なせないために、自分の左腕と交換し、契約を結ぶ。そして、慶太とクロを取り巻く状況は急変していく……。

「結界師」

使用者

高田 一志
たかた かずし

保有能力

「結界術」「間流結界術」

初期設定

使用者は最初から「結果術」が使えるが、実際に使えるのは「間流結界術」のみであり、「結果術」自体の完成度はかなり低い。使用者が外部からの力の委託を許容し過ぎた場合、……。

補正効果

靈の類が見える。

お菓子作りが上手。

作品紹介

400年続く妖退治の専門家、結界師一族の家に正統継承者として生まれた墨村良守。すみむら よしもり隣に住む雪村時音も良守と同じ結界師だが、両家は犬猿の仲。良守と時音が守っているのは妖を呼び寄せ、その力を高めてしまう鳥森からすもりの地。2人は夜になると結界術を使い、鳥森

の地に建つ私立烏森学園に集まつてくる妖を退治している。良守はかつて自らの失策により、時音が妖の攻撃から自分をかばい大怪我を負つてしまつたことを後悔し、一度と時音や自分の周りの人々が傷つかないようにするため、強くなることを心に誓つのであつた。

やがて良守と時音は、妖犬の斑尾の旧友・鋼夜との戦い、夜行に所属する少年・志々尾 限との出会いと妖の組織・黒芒楼との対決、良守の兄・墨村正守との葛藤、人の心を喰らう魔物・邪煉に対して封魔師・金剛毅と共に闘、戦闘用の妖・黒兜との死闘、など様々な出来事を通して成長していく。そんな中、烏森に現れた巫女・サキによつてある予言がもたらされる。「恐れよ…血の臭い纏いし災いの神…この地に舞い降りん」。

今、裏会を中心に何かがおきようとしていた・・・。

【さ行】

「灼眼のシャナ」

使用者

華焰 香奈
かれん かな

保有能力

「炎弾」
「自在法」
「存在の力」

「贊殿遮那」

「封絶」

初期設定

使用者は最初から「贊殿遮那」と黒衣「夜笠」を所持。「紅世の王」との契約を複数行うには高レベルになる必要がある。

補正効果

不老（故に
メロンパンが好物。
……）。

作品紹介

御崎市で平凡な日常を過ごしていた高校生の坂井悠一は“燐子”（りんね）と呼ばれる怪物の出現と共に非日常の世界に巻き込まれ、名も無き少女と出逢つた。その名も無き少女は、人知れず人を喰らう異世人“紅世の徒”を探し討滅するフレイムヘイズの一人。彼女は、悠一が自覚のないまま死んでいることを告げ、訳あって“紅世の徒”から狙われるようになつた悠一を護る様になる。そんな彼女に悠一は、彼女の太刀『にえとののしゃな贊殿遮那』から「シャナ」という名前をつける。2人は反発しながらも、少しずつ惹かれ合っていく。

「シーキューブ」

使用者

近藤 美紀

保有能力

- 「王権を果たす完全人形」
- 「教会区『奈落』」
- 「クーンズベリの死の屋敷『アベニュ－14番地』」
- 「剣殺交叉」
- 「五番機構・刺式併立態『グラード・シェペシユの杭』」
- 「雑で豪放な食材の断ち方」、乱切りにしましょう
- 「十九番機構・抉式螺旋態『人体穿孔機』」
- 「十四番機構・搔式獸掌態『猫の手』」
- 「術法・藍蠶」
- 「箱型の恐禍」
- 「八番機構・碎式円環態『フランク王国の車輪刑』」
- 「編執狂的な碎片の刻み方」、微塵切りにしましょう
- 「ミンチ用のお肉の処理法」、何度も叩き潰しましょう

初期設定

使用者はデフォルトで「箱型の恐禍」なので、一边一メートルほどの黒い立方体の拷問用具に変形が可能であり、重い（近藤は自分の体重が重いことを気にしている）。又、持ち主を求める性質から、契約ができる。

補正効果

自然治癒

作品紹介

ある日、高校生の夜知春亮のもとに、旅先の父親から謎の黒い立方体が届く。それはヒトになるまで『負の思念』を取り込んだ呪われた道具だった。黒い立方体ことフィアは夜知家に居候しながら、おなじく夜知家の世話になつていてる村正このはや春亮に教わり、呪いを解くために善行を重ねることとなる。そして彼らは、呪われた道具が関係する事件に次々と巻き込まれていく。

「ゼロの使い魔」

使用者

齊藤一樹
さいとう かずき

所有能力

「神の左手・ガンダールヴ」

初期設定

「神の左手・ガンダールヴ」を最初から持つていて、「魔法」は「解禁」でないと使えない。そのため、「使い魔召還」は「解禁」状態でのみ可能である。

補正効果

主従関係を結ぶと、結んだ相手に恋をする。

作品紹介

平凡な高校生・平賀才人はある日突然、異世界ハルケギニアに召喚されてしまう。彼をこの世界に召喚したのは、トリステイン魔法学院の生徒でありながら魔法の才能がまるで無い「ゼロのルイズ」こと、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだった。

失敗とはいえ、召喚の儀式によつて呼び出された才人は、「使い魔」としてルイズと契約のキスを交わす。すると、才人の左手には使い魔の証である契約のルーンが浮かび上がつた。こうして、ルイズと「犬」扱いされる才人との奇妙な同居生活と冒険が始まった。

【た行】

「電腦コイル」

使用者

不明（「トーキュー特区」上層部関係者と思われる）

保有能力

「キュウちゃん」
「サツチー」

初期設定

不明

不明

作品紹介

202X年「2」。「電腦メガネ」と呼ばれる眼鏡型のウェアラブルコンピュータが全世界に普及して11年。「電腦」と呼ばれる技術を使ったペットや道具が存在し、インターネットも「電腦メガネ」を使って見る時代。

ヤサコこと小此木優子は、金沢市から大黒市に引っ越ししてきた。引っ越し早々に、ヤサコは謎の電腦生物イリーガルに遭遇する。電腦ペットのデンスケは、イリーガルからヤサコを守ろうとして古い空間に迷い込んでしまう。それを救つたのが「電腦探偵」を名乗るフミエだった。これをきっかけに、ヤサコは電腦探偵局に入会する。その夜、ヤサコは自分の幼い頃の絵日記に「4423」の文字と鍵穴のような絵を見つける。さらに、夢の中の鳥居が連なる階段で「僕は4423、君の兄だ」という声を聞く。翌日、ヤサコは転入した大黒市第三小学校でフミエと同じクラスになる。ところがその日の放課後、彼女らは市が導入している電腦空間のウイルス駆除ソフト「サツチー」に追われる。そしてそのざくさのなか、デンスケが謎の少女に誘拐されかける。コイル電腦探偵局の主であるメガバあは、その少女の調査をフミエらに指示する。どのようにして少女を捜し出すか、思案にくれるふたりのまえに、もう1人の転校生として現れる少女。彼女こそが件の謎の少女、ヤサコこと天沢勇子だった。

イサコに対し、ヤサコは友達になろうと声をかけるが、イサコはこれを拒絶する。クラスメイトの悪童ダイチは、自らが立ち上げた組織、大黒黒客俱楽部にイサコを勧誘するも無視され、腹いせに罵

を仕掛けるが、返り討ちにあう。イサコは黑客を完全に制圧し、自分の目的のために利用し始める。一方でヤサコは、フミ工から生物部部長ハラケンを紹介される。ハラケンは、幼馴染のカンナを失った原因であるかもしれないイリーガルについて研究していた。ヤサコとフミ工は、その研究を手伝うことにする。

やがて、イサコの探し求めていたものが何であったのか明らかになつたかのようにも見えた。しかし実は、イサコも……。

「とある科学の超電磁砲」

使用者

寿 緋麻里
ことぶき ひまり

保有能力

- 「一方通行」
- 「空間移動能力」
- 「幻想殺し」
- 「超電磁砲」
- 「発電能力」
- 「表層融解」

初期設定

使用者は「発電能力者」としてデフォルトされる。同時に複数の「超能力」を使うことは、「多重能力者」、もしくは「多才能力者」にならないと不可能である。

補正効果

常に体から微弱な電磁波が放出されている（動物に好かれない）。

作品紹介

総人口230万人の8割が学生の学園都市、そこでは学生全員を対象にした超能力開発実験が行われており、全ての学生はレベル0（無能力者）からレベル5（超能力者）の6段階に分けられ、様々な能力を開花させてている。学園都市でも7人しか居ないレベル5の1人であり、電撃を操るその能力から「超電磁砲」の通称を持つ御坂美琴は、学園都市で起こる様々な事件を解決していく。

「とある魔術の禁書目録」

使用者

落 ふき
当 麻 とうま

保有能力

「駆動鎧」
「吸血殺し」
「幻想殺し」

初期設定

「幻想殺し」が常に発動しているため、呪いなどの概念的攻撃

を受けない。

補正効果

不幸（「幻想殺し」のせい。だが、躊躇は何かの方法でそれを封じている様子）。

攻撃に「幻想殺し」を当てることがだけに特化した反射神経を持つ。

作品紹介

超能力が科学によつて解明された世界。能力開発を時間割り（カリキュラム）に組み込む巨大な学園都市。その街に住む高校生・上条当麻のもとに、純白のシスターが現れた。彼女は禁書目録インテックスと名乗る、魔術師に追われていると語る。こうして上条当麻は、科学と魔術の交差する世界へと足を踏み入れてゆく。

「ドラえもん」

使用者

不明

保有能力

「ビームでもドア」

初期設定

不明

補正効果

不明

作品紹介

ドジばかりの少年「野比のび太」。お正月をのんびりと過ごしていると、机の引出しから、のび太の子孫「セワシ」と未来のロボット「ドラえもん」が現れる。

未来の野比家では、のび太が残した借金がセワシの代まで及んで困っているという。悲惨な未来を変えるために、セワシが世話係として連れてきたドラえもんと暮らす事になるのび太。

ドラえもんはポケットからひみつ道具を取り出しのび太を助けてくれる。のび太は道具に頼りがちになりながらも、時には反省し学んでいき、少しづつ未来はより良い方向へと進んでいく。

「ドラゴンボール」

使用者

不明（山下は一度会ったことを忘れている）

保有能力

「かめはめ波」
「ドラゴンボール」

初期設定

使用者はデフォルトで「サイヤ人」であるため、負ければ負け
るほど強くなる。

補正効果

満月の光を浴びると大猿になる（しつぽが生えている場合のみ）。

作品紹介

地球の人里離れた山奥に住む尻尾の生えた少年・孫悟空。ある日、彼は西の都からやつて来た少女ブルマと出会い、7つ集めると神龍^{シェンロン}が現れどんな願いでも一つだけ叶えてくれるというドラゴンボールの存在、そして育ての親孫悟飯の形見として大切に持っていた球がその一つ「四星球」（スーシンチュウ）であることを知り、ブルマと共に残りのドラゴンボールを探す旅に出る。

【な行】

【は行】

「ハリー・ポッター」

使用者

不明（「バッファローズ」の一員）

保有能力

「破れぬ誓い」

初期設定

不明

補正効果

一番最初に殺されそうになつた相手を返り討ちにして、互いに繋がりを持つ。

作品紹介

孤児でいじめられっ子のハリー・ポッター少年は、11歳の誕生日に自分が魔法使いであることを知る。ホグワーツ魔法魔術学校へ入学し、今まで知らなかつた魔法界に触れ、亡き両親の知人をはじめとした多くの人々との出会いを通じて成長する。そして、両親を殺害したヴォルデモート卿と自分との不思議な因縁を知り、対決していくこととなる。

「ポケットモンスター」

使用者

保有能力

- 「テレポート」
- 「なんでもなおし」
- 「ネコ騙し」
- 「未来予知」
- 「モンスターボール」

初期設定

「ポケモン」自体は存在せず、その能力は全て使用者が使用する。

補正効果

なし。

作品紹介

不思議な生き物、ポケットモンスター（ポケモン）と人間が互いに助け合って生きている世界。この世界ではポケモン同士を戦わせる「ポケモンバトル」が盛んに行われており、多くの少年少女たちが最強のトレーナーを目指して旅をしていた。

マサラタウンに住む少年・サトシもポケモンマスターに憧れる1人。彼は10歳の誕生日に、町に住むポケモン研究家のオーキド博士からポケモンを貰つて旅立つことになっていた。しかしサトシはその旅立ちの朝に大寝坊、慌てて研究所に向かつたもののヒトカゲ、フシギダネ、ゼニガメの3匹は全てライバル達を持って行かれた後

だった。そんなサトシに博士が差し出したのは、ねずみポケモン・ピカチュウ。かわいい容姿のピカチュウにサトシは一目ぼれ。こうしてサトシの旅は始まつたが、相棒のピカチュウはサトシに対して心を開こうとしなかつた。

対立しながらの旅を始める1人と1匹であったが、ふとしたことから起きたオニスズメの大群との戦いを通してうち解け、唯一無二のパートナーとなる。そして多くの人やポケモンとの出会いと別れを繰り返しながら、サトシや仲間達の冒険の日々は続していく。

【ま行】

「魔法先生ネギま！」

使用者

山下 宏治
やました ひろじ

保有能力

- 「紅き焰」
- 「アーティファクト」
- 「居合い拳」
- 「雷の暴風」
- 「いどねにつき」
- 「桜華崩拳」
- 「オソウジダイスキ」

- 「開放」
- 「弓歩沖拳」
- 「風よ」
- 「加速」
- 「感掛法」
- 「氣合防御」
- 「鬼神の童謡」
- 「豪殺居合い拳」
- 「コチヒノオウギ」
- 「最強防護」
- 「七首・十六串呂」
- 「獸化」
- 「術式封印」
- 「瞬動術」
- 「白き雷」
- 「精靈囮」
- 「世界図繪」
- 「千里眼」
- 「対物・魔法障壁」
- 「戦いの歌」
- 「遅延呪文」
- 「力の王笏」
- 「杖よ」
- 「天狗之隱蓑」
- 「念話」
- 「パクティイオーカード」
- 「ハマノツルギ」
- 「光よ」
- 「風花施風風障壁」
- 「風精召喚」

「風陣結界」
「魔法の射手」
「魔法無効化能力」
「まほネット」
「無極而太極斬」
「無音めくり術」
「燃える天空」
「闇の魔法」
「四つ身分身 脣十字」
「読み上げ耳」

初期設定

使用者はデフォルトで「魔法発動体」となる長い杖（2メートル以上）を所持している。「パクティオー」による仮契約は誰とでも可能であるが、本契約については不明である。「始動キー」は正しく設定するまでは使用不可能である。そのため、設定するまでは「始動キー」なしで魔法を行使する。「始動キー」を設定するということは、「世界觀」を自

補正効果

靈の類が見える。

くしゃみで「武装解除」が暴発し、周囲の女性を脱がす（山下は今だ未経験）。

作品紹介

舞台は普通と変わらない現実の世界。しかし、その世界には迷信と信じられていた魔法が密かに存在していた。

イギリスのウェールズにある、魔法使い達の村。その村のメルディアナ魔法学校を首席で卒業した、10歳の天才少年がいた。少年の名はネギ・スプリングフィールド（通称ネギ）。彼の目標は「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になって、行方不明になつている父親のナギ・スプリングフィールドを探す事である。

魔法学校を卒業した後、ネギは「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になる為の修行として与えられた課題が日本の学校で教師をやる事だと知る。2003年2月、一人日本に向かつたネギが辿り着いた先は巨大な学園都市「麻帆良学園」。その内の麻帆良学園本校女子中等学校でネギは自分の正体を隠したまま教育実習生として、2年A組の代理教師を務める事となる。2年A組で31人の女子中学生を相手にするネギだが、ほとんどの生徒には可愛がられ、時に振り回されたりするし、教師としても魔法使いとしてもまだ未熟なネギも学校で騒動を起こしてしまったりで、修行は思う様に上手く進まない。

そんな中、着任初日に2年A組の生徒である神楽坂明日菜に自分の正体がバレたのをきっかけに、ネギの正体を知る生徒が増えてきてしまう。そして、修行に進めていく中で次々とネギの前に敵や困難が立ち塞がっていく。ネギが一人で危険に立ち向かおうとする中、正体を知る生徒達はネギへの協力者となるとするが・・・。

【や行】

【ら行】

「ルパン三世」

使用者

不明（賞金稼ぎの一員と思われる）。

保有能力

不明

初期設定

不明

補正効果

不明

作品紹介

怪盗ルパンの孫で大泥棒のルパン三世が仲間次元大介、峰不二子、石川五エ門や、ルパン三世逮捕に執念を燃やす銭形警部と活躍を繰り広げる。

【わ行】

「ワンピース」

使用者

不明

保有能力

「海楼石」

「監獄弾」

初期設定

不明

補正効果

不明

作品紹介

かつてこの世の全てを手に入れた海賊王ゴー^ルド・ロジャーが遺した「ひとつなぎの大秘宝」^{ワンピース}をめぐり、幾多の海賊たちが霸権を賭けて争う大海賊時代。

そんな時代に生まれ、幼い頃の命の恩人である海賊赤髪のシャンクスに憧れる少年モンキー・D・ルフィは、「ゴムゴムの実」という悪魔の実を食べてゴム人間となり、その副作用で泳げない体ながらも、海賊王を目指して仲間と共に冒険と戦いを繰り広げていく。

世界観一覧（あշխابад）（後書き）

世界観一覧です。

オリジナル設定一覧（あこづれお題）（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 背中に手を置かれたら、全身を「氣」で覆うなりしたらよいの
ではないのでしょうか？

A 「パーソナル・リアリティ」での特殊攻撃、つまりコマンドの
使用に必要な「氣」、つまりEXゲージがゼロになつたため、何も
出来なかつたのでしょう。
「それまでの戦いでEXを使い切つちゃつたのかな？」

オリジナル設定一覧（あいうえお順）

【あ行】

「アドベンチャーワールド」

「パーソナル・リアリティ／自分がだけの現実」の冒険世界。

「インフレックス」

「ジャポン帝国」との交戦で、軍隊を持つことを余儀なくされた「トーキュー特区」が、自国の警察組織を強化したもの。

「ウエイトルーム」

「バトルワールド」で戦闘を終えた者と、「アドベンチャーワールド」で体力がゼロになった者が運ばれてくる。ここでは能力を使つことはできず、もちろん戦闘も不可。ロード中の待機場所。

【か行】

「解禁」

「リミニシター」を解除するための合意葉。

「カプセル」

擬似感覚入力デバイス。中に六ヶ月聞いたとしても、人口栄養剤の投与で死ぬことはない。

「神のお告げ」

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内で困ったことがあつたら質問すればよい、とのこと。

【さ行】

「ジャポン国」

実世界の日本の上に重なるように存在している国。国内に国際技術開発特区である「トーキュー特区」を保有する。

「ジャポン帝国」

「ジャポン国」のかつての名称。三度の世界大戦を「トーキュー特区」の開発した戦闘道具を売りさばいて世界大国となつた。

「世界観」

「パーソナル・リアリティ／自分がだけの現実」で使用する世界観のこと。

【た行】

「トーキュー特区」

周囲を特殊な森で護られ、独自の発展を遂げた「ジャポン国」内の独立学術都市。

【な行】

【は行】

「バッファローズ」

「バトルワールド」

対戦者同士が同意の上にバトルする対戦専用の世界。

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」

「世界観」に則つて仮想現実内を生きるゲーム。

「ポートゲート」

「ワープ航法」を利用するための装置。世界に10箇所ある。

【ま行】

「無制限対戦」

「レベル」に関係なく、コンピューターが無差別に選び出した相手と戦うシステム。

【や行】

「有力者」

独自の世界観に則り、現実に縛られず、異能の力を有する者。

【ら行】

「リミッター」

レベル40以上のプレイヤーに「えられる機能。通常のプレイヤーは、「世界観」による能力発動は、その「世界観」の主人公的人物が理論上可能なものに限られる。だが、レベル40に達した者は、脇役や敵役の能力も制限付きで使用することができる。その制限、というのが「リミッター」である。「リミッター」を「解禁」している間は、気力と体力が同時に削られる。それ自体別に構わないのだが、一々「解禁」と口にするのが面倒くさい。一対一の戦いでは、その間に攻められかねないという弱点があるが、そこを突かれることはほとんどない。

「レベル」

「有力者」のもつ力の強さを示したもの。1～100まであり、一般的な「レベル」は20代。「解禁」可能となると使える技の量が一気に増えるので、レベル40というのは一種の壁となっている。

【わ行】

「ワープ航法」

「トーキュー特区」が周囲を覆つ森を通らずに外へ移動するため作り出した空間移動の方法。

オリジナル設定一覧（あこいつたお順）（後書き）

機会があれば増やします。

武器・技一覧（お行～な行）（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「オリジナル設定」は、ちゃんと覚えておいた方がいいのでしょうか？

A 今のところ、その必要は大してありません。
「第一部からなら必要かも？」

武器・技一覧（あ行～な行）

【あ行】

「紅き焰」（＊魔法先生ネギま！）

威力：1000 MP：30 習得レベル：40（解禁）

熾烈な炎を発生させ、敵を焼き払い破壊する魔法。「白き雷」の炎バージョン。

「アーティファクト」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：200（カード状態）

「パクティオーカード」によつて呼び出される魔法具のこと。

「居合い拳」（＊魔法先生ネギま！）

威力：1500 MP：50 習得レベル：40（解禁）

刀の居合い抜きならぬ、拳の居合い抜き。ポケットを刀の鞘代わりにして、目にも止まらぬ速さでパンチを繰り出す。

魔力によって達人でも見切れぬ極限の速度まで拳速を加速するとで、射程10メートルの風圧による攻撃が可能になる。撃ち出さ

れるのが「気弾」ではなくただの「拳圧」であるため、察知が著しく困難。正確には「無音拳」。だが、初速を得るために1~2メートルが必要なため、接近戦では使えない。

文献にしか載っておらず、実際に使用するバカはいない。

「雷の暴風」（*魔法先生ネギま!）

威力：3000 MP：130 習得レベル：4

強力の旋風を発生させ、竜巻の要領で中心の推進力を上げ、その中央を稻妻を走らせる、直線的な攻撃魔法。

ゼロ距離で放てば相手の体は消し飛ぶ（バグキャラなどの一部を除いて）ほどの威力を持ち、決め手としても悪くはない。但し、詠唱時間を考えると、もう少し詠唱時間の長くても、より強力な魔法を使った方がラスボスレベルには有効と思われる。もちろん、「雷の暴風」でも十分通用するが。魔力消費を考えれば、序盤はこれが決めてとなるのは確実であると思われる。

「一方通行」（*とある科学の超電磁砲）

威力：なし MP：50（常時消費型） 習得レベル：40（
解禁）

運動量・熱量・光・電気量など、体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を任意に操作（変換）する能力。

デフォルトでは重力や酸素などの生きるのに必要な力を除いた全てのベクトルを「反射（ベクトルの反転）」するよう、無意識下で設定している。また、足元のベクトルを操作することで高速移動や

飛行を可能にしたり、相手に触れて血流を操作するなど、応用力も高い。（「幻想殺し」など特殊例を除き）核兵器を打ち込まれても無傷のまままでいられるとされ、不意打ちなどでも反射で全く効果がない。

山下の「魔法障壁」を軽く破る「超電磁砲」を、軽くあしらつうことができる（もちろんそれ相応のレベルに至っているのが条件）。原作では「一方通行」というコードネームの人物が「ベクトル変換」を行つおり、「一方通行」＝「ベクトル変換」ではないのだが、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の中では「一方通行」のことベクトル変換能力としている。

「いぢのえにつき」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：200

「アーティファクト」の一つ。本のアーティファクトで、対象となる人物の名前を呼んでから開くと、その人物の表層意識を読むことができる。

有効範囲は半径5パスス（約 7・4 m）である。対象者に質問するとその質問に対する回答が現れる。また名前を呼ばずに開くと使用者本人の表層意識が現れることになる。複数の相手に縮刷版を一冊ずつ割り当て、リアルタイムで思考をトレースすることも可能（こちらは文章のみ。また呼び出しの呪文は「アデアット」ではなく複数形の「アデアント」になる）。

いずれも日付が示されることから、読者も劇中の日時をつかがい知ることができる。戦闘支援や尋問においては、名前さえ判れば敵の思考や情報を引き出す事が出来る（ただしロボットなどの無生物には通用しない）。能力の強力さから「マスター・ピース」と称される程の「アーティファクト」。

前述の通り、相手の名前が判つていれば相手の動きを先読みすることができるが、名前が判らない相手には使えない、絵日記を見るために相手から視線を外す必要があるのが弱点。相手の名前を見破る魔法具「鬼神の童謡」と文字を読み上げる魔法具「読み上げ耳」でその弱点を補強することができる。

「演操者」(*アスラクライン)

耐久力：50

「機巧魔神」を召喚し「演操」することの出来る人間。体内にナノマシンが注入されており、そのナノマシンによって「機巧魔神」を操る。

「炎弾」(*灼眼のシャナ)

威力：50 MP：5 習得レベル：1

初步的な攻撃の「自在法」。

「存在の力」は熱エネルギーを持たず、物も燃やさないが、最も単純な破壊のイメージである「熱量」を「存在の力」に具現化させることで、物理的な意味での炎同様に熱を持ち物を燃やすようになる。「炎弾」はその代表例であり、炎の性質を発現させた「存在の力」を砲弾のように撃ち出す。通常ならば着弾後に炸裂するだけだが、器用な者であれば、着弾後に変形させたり任意に爆発させたりと言った遠隔操作も可能。

「桜華崩拳」（＊魔法先生ネギま！）

威力：装填される「光の矢」×10 MP：装填される「光の矢」×1 習得レベル：20

「魔法の射手」で破壊属性の「光の矢」を崩拳に合わせて撃つ。一発で岩をぶち壊すことができる。

「王権を果たす完全人形」（＊シーキューブ）

威力：なし MP：5 習得レベル：40（解禁）

人の姿を模したものなら、なんでも操ることができる。

「オソウジダイスキ」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：200

「アーティファクト」の一つ。全体武装解除ができる魔法の籌。飛行用に使用。

【か行】

「開放」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：1 習得レベル：20

「遅延呪文」を発動させる。

「海楼石」（* ワンピース）

耐久力：50000

悪魔の力を封じる特別な石。その効力ゆえ、「有力者」の「力」を基本ほとんど封じることができる。

「弓歩沖拳」（* 魔法先生ネギま！）

威力：20 MP：5 習得レベル：20

鋭い踏み込みと同時に、踏み込み足と同じ方の腕でパンチを繰り出す。無詠唱の魔法と組み合わせることで威力を上げたりすることも可能だが、それ単体でもそれなりの効果を發揮する。

「案山子」（* 神様ドオルズ）

最低耐久力：800

「神様」として祀られている人形。人を数人乗せて飛行できるほど巨大。

単独で動くことはないが、資格を持つ者が「案山子」に魂を入れ

て操ることができる。瞬間移動や物体の通過、種類によつては電撃や光線の発射など様々なことが出来るが、操る者の資質によつては使えない能力もある。「神様の媒介物・抜け殻」と言われているが、起源や正体、本当に神であるかなどは全て不明。

「風の傷」(*犬夜叉)

威力：50 MP：5 習得レベル：1

「鉄碎牙」を用いた初心者用の技。強力な殺人疾風が敵を襲う。奥義を使うのにこの技を連動的に使用する必要があり、単体としてより、奥義のための技として使われる。又、単体としてなら出は早いが、高レベルの戦いになると殺傷能力はほとんどないに等しい。

「風よ」(*魔法先生ネギま!)

耐久力：5 MP：1 習得レベル：1

風を身に纏つて体を保護する。

「加速」(*魔法先生ネギま!)

威力：なし MP：10 習得レベル：5

文字通り、飛行している箒を加速させる呪文。

箒や杖の飛行に呪文が使われることはあまりないが、言葉の魔力を付与することでより高い効率で加速が行える。

「神の左手・ガンダールヴ」(*ゼロの使い魔)

威力：なし MP：0（常時展開型） 習得レベル：1

あらゆる武器や兵器を自在に扱える能力。

証のルーンが左手に刻まれることから「神の左手」と呼ばれる。また「神の盾」とも呼ばれるが、これは「虚無」を発動させる為に長い詠唱を行う間、無防備になる主を守ることが「ガンダールヴ」の役割だからである。そのため、主が側に居ないと全力を發揮できない。

「かめはめ波」(*ドリフコンボール)

威力：レベル×50 MP：レベル×5 習得レベル：1

体内的潜在エネルギーを凝縮させ一気に放出させる技。

基本的には対象に向けて一直線に放つビームとしての性質を持っているが、鍛錬を積めば、軌道を操つたり、連続で撃つたり、手の代わりに足からでも撃つことが出来る。

「プロローグ」で山下が「連續使用不可能」と言っているが、それは相手がそのレベルまで達していない、ということを踏まえている。

「喰靈開放」(*喰靈)

威力：なし MP：10（常時消費型） 習得レベル：1

「白叢」を自身の体内から呼び出す。但し、「殺生石」がないと使用不可能。

「感掛法」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：30（常時消費型） 習得レベル：40（
解禁）

気と魔力を融合して身の内と外に纏い、強大な力を得る高難度技法。

肉体の外部の気である陽の気、「魔力」と、肉体の内部の気である陰の気、「氣」という相反する二氣をそれぞれ、左手、右手に溜めて使用する。発動すると、肉体強化、加速、物理防御、魔法防御、鼓舞、耐熱、耐寒、耐毒等の作用が働く、超便利技だが、体力と精神力を同時にすり減らすため、消耗が激しい。

「監獄弾」（＊ワンピース）

耐久力：50000

対悪魔用兵器。「海楼石」が仕組まれた網で「有力者」を捕縛する。

「気合防御」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：100000000 MP：2000 習得レベル：8

0（解禁）

大呪文を喰らってもまったく平氣。極限の気に練り込められて鍛え抜かれた鋼の肉体でのみ可能。

魔神すら倒す一撃を体内から喰らっても、なんとか戦い続けることができる。山下が習得レベルに達していないのに使えていたのは、配信で入手したためである。

「機巧魔神」（*アスラクライン）

最低耐久力：10000

模造品の悪魔。悪魔に対抗するために彼等の秘技を盗み出し、人間の手で生み出された、機械製悪魔と言つべき魔神（機神）。身長は4メートル前後。

召還に応じて「演操者」の影を介して出現し、「演操者」の命令に従つて動く。機体」とに特性があり、それぞれ強力な特殊能力を有している。召還時や特殊能力使用時には各機ごとに異なる呪文を紡ぐ。「演操者」の技量によっては、腕だけを出して能力を使えるなど、完全に呼び出さずともわざかながら能力が使える。

「演操者」側には決められた召還呪文は存在しない。「演操者」は術式を既にインストールされていて、後はそれを発動させるだけで良いので、基本的に「呼ぶ」意味を有していればどんな詠唱詞でもよい。「演操者」の死亡、あるいは「副葬処女」（「機巧魔神」に封印された生贊）の消滅により（「機巧魔神」は「副葬処女」の魂を削つてエネルギーに変える）その機能を停止させ、操者不在の人形となり果てる。

「鬼神の童謡」（＊魔法先生ネギまー）

耐久力：20

指に填めて使う魔法具。相手が自分の存在を認識した状態で名前を問うと、相手の名前を見破ることができる。見破った名前は、使用者の意思に合わせて、空中に「鬼神の童謡」が描く。

「cast off」（＊仮面ライダーカブト）

威力：なし MP：100 習得レベル：20

「マスクドフォーム」から「ライダーフォーム」へと2段変身する工程。

これは昆虫の脱皮に相当する。

「キュウちゃん」（＊電腦コイル）

耐久力：100

セキュリュティープログラムが視覚化された際に、バレーボール大の球体に見えることからついた名称。

複数機が宙を浮遊しながら巡回し、親機である「サッチー」の探索範囲を拡げる他、自らもビームを放ち、小規模なバグを初期化したり、データの破損を修復する。正面はドマークを模したようなデザインになっている。

「駆動鎧」（*とある魔術の禁書目録）

耐久力：500

いわゆるパワードスーツだが現実の物とは厳密には異なる。着込むタイプで、使用者の身体能力を強化する。いくつかのバージョンがあるが、基本的に武器などが内蔵され、兵器として運用される。使用される技術は現在の3、4世代上のもので、現在の一般的な武器ではびくともしない。

「空間移動能力」（*とある科学の超電磁砲）

威力：なし MP：10 習得レベル：40（解禁）

11次元絶対座標を介して、触れた物質や自分自身を移転させる能力。能力者の総称は「空間移動能力者」。比較的貴重な能力。移転させた物体は「出現先にある空間を押しのけて」出現するため、飛ばした物質の強度とは無関係に切断、あるいは貫通などの事象を引き起こす（そのため、相手の占有している空間に武器を移転させて攻撃するなど、テレポーターの主要な攻撃手段となっている）。

汎用性に優れる能力だが、11次元絶対座標の演算が複雑なため、その時の精神状態などが大きく影響する。

「玖吼理」（*神様ドオルズ）

耐久力：1000

頭部からツインテールの様に2本の腕が生えており、右腕のナイフや頭部から放たれる光線を武器とする、コケシの様な形をした「案山子」。

「？鐵」(*アスラクライン)

耐久力：80000

漆黒の魔神。「機巧魔神」の中でも高いクラスの性能を誇る。その能力は、重力制御能力。

「黒の拳撃」(*アスラクライン)

威力：500 MP：50 習得レベル：10

「機巧魔神」の「？鐵」の能力。

高重力エネルギーを持つた球体を生み出して敵を攻撃する。その際、腕の軌道に攻撃が乗る。空間を歪曲させて防御壁を構成する事もできる。その力は光の速度を凌駕し、核は無限重力の状態となつている事になり、時の流れすらも変えられる事ができる。

「Clock up」(*仮面ライダーカブト)

威力：なし MP：10 (常時消費型) 習得レベル：20

「ライダーフォーム」が、自らのタキオン粒子を操作し、自分の

時間の流れを操作することで行う超高速の特殊移動方法。が、時間に制限があり、自動的に解除される。

「クーンズベリの死の屋敷《アベニューハイウェイ》」（＊シーキューブ）

耐久力：800

真の姿は呪われた家。中に何でも入れることができ、取り出した物は何でも強化される。

「結界術」（＊結界師）

威力：なし MP：5（常時消費型） 習得レベル：1

空間支配術のことであり、使用者を結界師と呼ぶ。支配した空間を結界と呼ぶことから、「結界術」と呼ぶ。

道具を使えば結界を張れる術者は多くいるが、空間の理を変化させたり、一から空間を作り出したりできる術者は稀である。

「教会区《奈落》」（＊シーキューブ）

威力：100（常時攻撃型） MP：30（常時消費型） 習得レベル：40（解禁）

相手に告解されることで記憶を奪つたり。闇を操り触手のよいつて操ることができる。

近藤は局地的に大量に闇を放出する」とで、空を飛んでいた。

「剣殺交叉」（* シーキューブ）

威力：なし MP：100 習得レベル：5

相手の攻撃を分析し法則化することで敵の動きを予測して、相手の武器の構造上最も弱いポイントにカウンターを叩き込む。これにより相手の武器を一撃の下に破壊することが可能。

「幻想殺し」（* とある科学の超電磁砲・とある魔術の禁書目録）

とある科学の超電磁砲

威力：なし MP：50（直接攻撃にのみ有効） 習得レベル：40（解禁）

とある魔術の禁書目録

威力：なし MP：0（常時展開型） 習得レベル：1

右手に宿る、触れるだけで全ての異能の力（顕現した超能力や魔術）を消滅させる（生物が持つ、魔術的な生命力、地脈は例外）。空気に触れている事が空間に作用して運気を下げているらしい等と、絶大な効果に反比例して欠点盛りだくさんの困った超能力。

核を破壊しない限り、半永久的に生産・再生するタイプの異能であるため、使用者は永遠に不幸なままである。

「第一部／二章／六話」で少女？が「豪殺居合い拳」を無効化していたが、これが「幻想殺し」を用いていた場合、拳速の速度を落とせても、それまでに加速された拳圧による風圧によって、少女？

はダメージを受けることになる。そのため、少女?の使用した無効化能力は「幻想殺し」ではない、と推測できる。

「豪殺居合い拳」（*魔法先生ネギま!）

威力2800 MP:100 習得レベル:40（解禁）

「感掛法」用いた「居合い拳」。

大砲クラスの一撃を放つ。だが、予備動作が大きく、避けられやすい。

「第一部／二章／六話」では、その弱点を「居合い拳」を用いることでカバー。

「コチヒノオウギ」（*魔法先生ネギま!）

耐久力:200

「アーティファクト」の一つ。「東風の檜扇」。3分以内に受けた、即死以外の怪我を完治させる。

使用するには触れられる距離まで接近しなければならない。完全治癒は一日一回だけ。セットである。又、「コチヒノオウギ」と対になる「南風の末広」である「ハエノスエヒロ」（30分以内に発生した怪我以外の異常を治療することができる）がある。

「五番機構・刺式併立態《ヴラド・ツュペシュの杭》」（*シーキューブ）

耐久力：1000

大きな杭。投擲武器として使用。

ヴラド・ツエペシュはドラキュラのモデルとなつた人物。

【さ行】

「最強防護」（* 魔法先生ネギま！）

耐久力：5000 MP：200 習得レベル：38

「魔法障壁」を十数枚展開して攻撃を防ぐ技。

これ以上の「魔法障壁」を瞬時に展開することは理論上不可能なため、「最強」と名づけられている。そのため、何でも「防護」できるわけではなく、しばしば破られることがある（破られても衝撃緩和は働くので、展開するに越したことはない）。

「サウザンド」（* 黒神）

最低耐久力：500

使用者の純粹な「テラ」を触媒にして作動する戦闘装身具。

「サッチャー」（* 電脳コイル）

耐久力：1000

正式名称「サーチマトン」。空間管理室が導入した強力な違法電脳体駆除ソフト。

視覚化された姿は、赤く丸みを帯びた形で口大（高さ2・5から3メートル）、顔は日本の郵政省のマスコットキャラクター（？）に似ている。腹部（にあたる部分）に「キュウちゃん」を4機収納することができる。「ボクサツチー、ヨロシクネ」と音声を発しながら滑るように移動する。

収納した「キュウちゃん」から駆除対象に向けてビームを放ち、命中した電腦物質のデータを初期化する。あまり高度な識別機能を持つておらず、わずかにバグを持つていてる電腦ペットや、「ちょっとお茶目な電腦ツール」も駆除対象と認識して攻撃する。自らを壁から壁へ「郵」の字の文様の陣を通して転送でき、距離を無視して駆除対象に近づくことができる。

郵政局の管轄なので、管理外ドメインである、民家や学校（文部局の管轄）、病院、公園の敷地内、神社などの鳥居のある敷地（文化局の管轄）には許可なく侵入や認識ができるようになっている。標的を感知できる範囲は半径20メートル程度だが、「キュウちゃん」によって探査範囲を広げている。「ポチ」、「タマ」、「ミケ」、「チビ」、「ロロ」などがいる。

「〔雑で豪放な食材の断ち方〕、乱切りにしましょっ」（＊シーキューブ）

威力：10（4、5回連続して攻撃） MP：5 習得レベル：
40（解禁）

人間を乱切りにした斬りつけ四、五回分が纏めて一度に現れる。

「自在法」（＊灼眼のシャナ）

威力：なし MP：50 習得レベル：5

「存在の力」を操ることで、この世では起こり得ない不思議を現出させる術とそれに付随する紋様をそれぞれ「自在法」、「自在式」という。

「自在法」はこの世の「存在の力」の流れに直接干渉するため、「存在の力」を感じできる者は発動時の違和感を察知することが出来る。効果の大きい「自在法」ほど生じる違和感も大きく、「存在の力」を察知できない人間の感覚にも影響を与える場合がある。

「七首・十六串呂」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：300

「アーティファクト」の一つ。本体は、柄頭に房飾りがついた、一口のヒ首。

名称通り、最大で十六口まで分裂させることが可能（本体以外は全て房飾りがない）。十六口にはそれいろいろは歌の順に平仮名の番号がつけられていて、番号と本数を指定して出現させることもできる（例：「ろ・は・一ノ刀」）

それぞれのヒ首は、従者が念じるままに飛翔させることができ、またそれらを用いて捕縛結界を発生させるなどの応用も可能。

「獣化」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：10（常時消費型） 習得レベル：40（解禁）

自らの体に流れる妖怪側の血を自覚めさせることで、肉体が変化して視界から消えるほどの速度・大地を碎くほどの力などを得たりする。「変化」とも言われる。

「十九番機構・抉式螺旋態《人体穿孔機》」（＊シーキューブ）

耐久力：1000

全長178・7センチの巨大なドリル。槍のように使うことが多い。

「十四番機構・搔式獸掌態《猫の手》」（＊シーキューブ）

耐久力：1300

猫の爪を模した五本の力ギツメがついた大きな孫の手状の拷問具。

「術式封印」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：15 習得レベル：8

恣意的なキーワードを設定しているため、「条件発動」であって、

「遅延呪文」ではない。

「術法・藍蠍」(*シーキューブ)

威力：なし MP：100 習得レベル：40（解禁）

概念的に「閉じた」空間内で生き物を殺すことで、それを蠍毒として使役できる。

この蠍毒は、元になつた生き物に似た姿をしているが、全身が藍色の水銀のような金属質のものに変化しており、身体能力なども跳ね上がつている。

「瞬動術」(*魔法先生ネギまー)

威力：なし MP：20 習得レベル：30

超高速移動。「入り」で高速に入り、「抜き」で高速から抜ける。地面上に足がついていないと、使えない。又、一度「入り」に入るど、方向転換することができないのが、弱点である。達人達の戦いでは必須うテクニックとなつていて、

山下は「瞬動」と略している。

「白き雷」(*魔法先生ネギまー)

威力：100 MP：30 習得レベル：8

掌から迸る熾烈な電撃で敵を殺傷する魔法。

物質に対しての破壊力はさほどでもないが、人間や動物に対して

は極めて攻撃性の高い本格的な戦闘用魔法。

「精靈囮」（＊魔法先生ネギまー）

威力：なし MP：8（常時消費型） 習得レベル：38

風の中位精靈を自身の代わりとして、囮として使う。

「世界図繪」（＊魔法先生ネギまー）

耐久力：200

「アーティファクト」の一つ。その正体は、従者の質問に答える形で魔法に関する情報を提示できる魔法書である。

その情報量は図書館一館分にも匹敵するうえ、「まほネット」に接続することで情報の自動更新も行う。しかし、自動更新という能力ゆえ、記載されていた古くとも貴重な技術や知識に関する記述が消滅してしまう弱点もある。

実質極めて情報量の多い辞書であるため、本を読む力も必要である。

「千里眼」（＊魔法先生ネギまー）

威力：なし MP：3（常時消費タイプ） 習得レベル：40
(解禁)

ESP（超感性知覚）の一種で、肉眼では捉えられない対象、場

所、および現在起つてゐる出来事を眼で見るかのように知覚する。

「存在の力」（* 灼眼のシャナ）

威力：なし MP：なし 習得レベル：1

この世に存在するための根源的なエネルギー。人間や動物・物質など、この世のあらゆる個体が持つており、この世の時空に過去・現在・未来に渡つて広がつてゐる。これが失われるとその個体は「最初からこの世に存在していなかつた」ことになり、所有物や関わつた人間の記憶や写真など、あらゆる「存在した証」も失われる。「存在の力」の量が多い人間ほど、周囲に強い影響力（存在感）を持つことになる。

【た行】

「対物・魔法障壁」（* 魔法先生ネギま！）

耐久力：300 MP：30 習得レベル：1

魔法使いは、物理的な損害から身を守るために、自らの周りに魔法障壁をめぐらしているのが普通である。

「戦いの歌」（* 魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：10（常時消費型） 習得レベル：10

自身への魔力供給を行い、身体強化を行う。

「遅延呪文」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：3 習得レベル：8

「果報は、寝て待て」と言われるよう、呪術やまじないの効果というものは、術の行使の直後に生ずるものではないのが普通である。が、術の行使の直後に効力を発生させるということは、術の効力をより術者の意に適った状況で発現せるものであるため、呪術やまじないよりも高度になる。

「遅延呪文」はその意味で、より術者の意に適った形で術の効力を発現させるものであり、さらに高度になる。その上には、「条件発動」といったものもある。

「力の王笏」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：200

「アーティファクト」の一つ。このステッキ自体が一機のネットワーク・コンピュータ（「まほネット」にも接続可なもの）であり、「千人長七部衆」が率いる電子精霊群を統制し、操ることができ。精霊とは契約の力で結びつけられており、魔法陣内で呪文を詠唱することで電子精霊との交信が開始される。なおこの際、魔法陣内に居る他の人間も同時にダイブすることになる。初使用時には七部

衆から命名を求められることになるが、「データの軽さが信条」であるため、文字入力は四文字制限（濁点・半濁点含む）である。そのためつけられた名前が、「しらたき」、「だいこ」、「ねぎ」、「ちくわふ」、「こにゅー」、「はんぺー」、「きんぢや」である。

電子精霊との交信は念話によつて行われるが、精霊から送られてくる視覚情報などを受け取りやすいよう、肉体的に眠りながら使用することになる（覚醒中でも交信すること自体は可能で、「聴覚情報のみ」というように受け取る内容を選別することもできる）。使用者は、電子精霊と交信することで電子空間内にダイブしたような感覚を得ることができ、「力の玉笏」が構成したコーネー・インターフェースを用いてサイバーバトルを行つたり、様々なオプション機能を用いることができる。

電腦戦自体は、七部衆への指示とキーボード入力、そしてステッキを振りかざすアクションとで行われる。基本的には七部衆が用意したソフトウェアを用いることになる。呪文詠唱の際に他者が魔法陣内に入っていた場合、その他者も電子精霊との交信に巻き込まれてしまい、眠りの状態に入るようである。電子空間では、その者達に小型のステッキを分け与えることも可能で、サイバーバトルや変身の機能を（プログラミングの知識が相手に無くても）使いさせることができる。

なお七部衆は現実世界でも活動が可能で（ただし近くでパソコン・携帯などの電子機器が作動している必要がある）、食事もできる。

「杖よ」(*魔法先生ネギま!)

威力：なし MP：1 習得レベル：1

魔法発動体である杖への呼びかけの言葉。

「鉄碎牙」（*犬夜叉）

耐久力：30000

普段はただの鎌刀だが妖力によって巨大な牙のような刀に変化する。

人間を慈しみ守る心がなければ扱えないと言われている。邪悪な妖怪には結界が働き、触れることができない。この結界は戦闘中でも有効。人間は触ることはできるが変化はしない。

その力は「一振りで百の妖怪をなぎ倒す」といわれ、「風の傷」、「爆流破」という技を持つほか、斬った妖怪の能力を奪い取る力もあり、結界破りの「赤い鉄碎牙」、金剛槍を無数に放つ「金剛槍破」、敵の妖力を吸い取つたり妖穴を切る「龍鱗の鉄碎牙」という形態を持つ。

「テレポート」（*ポケットモンスター）

威力：なし MP：10 習得レベル：10

瞬間移動。移動先を頭に思い浮かべるだけで、理論上はどこにでも移動可能。

「テラ」（*黒神）

威力：なし MP：なし 習得レベル：1

全ての生命に等しく『えられている世界の容量。その量は運と比

例したりしなかつたり。

「天狗之隱蓑」（* 魔法先生ネギまー）

耐久力：500

「アーティファクト」の一つ。全体が黒くて長いボロ布。身体に被ると、布の内部に身体が隠遁され表面も背景に同化するという、まさに忍者の使う隠れ蓑のような品。他人を中に入れて移動することも可能であり、主に非戦闘員を連れて移動するのに活用する。又、中には和風の家が備わっている。

「どこでもドア」（* ドラえもん）

耐久力：100

片開き戸を模した道具。目的地を音声や思念などで入力した上で扉を開くと、その先が目的地になる。

ドアに内蔵されている宇宙地図の範囲で、また10光年以内の距離しか移動できないという制限がある。10光年を超えた距離のある目的地を指定して扉を開くと、「どこでもドア」としての機能は働かず、ただのドアとして機能する。次元を超えることはできず、また過去や未来との移動はできない。

扉の上には空間歪曲装置があり、扉の下には空間歪曲装置、連鎖コニックトがある。柱にはコンピューターが、扉には時差修正装置、空間座標決定機、宇宙地図、世界地図、バッテリーがある。ドアノブには行き先受信ノブ。また、プライベートロックというボタンスイッチが付いており、マイクロホン、意志読み取りセンサー、コン

ピューターも内蔵されている。ドアには鍵をかけることもできる。

「ドラゴンボール」（* ドラゴンボール）

耐久力：400000

7つ集めて、命運葉を唱えると、どんな願いでも叶えてくれる。オレンジ色の半透明の球で、中には赤い星が入っており、神秘的な輝きを放ちながらにぶく光っている。特殊な電波を放つており、その位置を特定できるが、特殊なケースに入っていたり、生物の体内に飲み込まれていたりすると、感知できない。「ドラゴンボール」が近くに2つ以上あるとき、共鳴して強く光る。

強度は極めて高い。多少傷が付いていても能力に変化はなく、また穴が開いたり傷が付いても願いを叶えて四散し、再び珠に戻る際には傷も無くなり新品同様になる。半透明の大理石に似た固い天然の樹脂のような材質で、手触りは天然ゴムに似ている。

【な行】

「なんでもなおし」（* ポケットモンスター）

耐久力：5

毒。麻痺、昏睡、火傷、錯乱を直す万能薬。なんとまさかの600円で売っている。

「贊殿遮那」（*灼眼のシャナ）

耐久力：30000

大太刀型の宝具。

「自在法」も含め、刀に直接加えられる敵意によるあらゆる力の干渉を受け付けない最高に頑丈な刀。ただし、使い手への干渉までは無効化しない。元々は人間の刀匠と異世界の王により作られた刀。

「ネコ騙し」（*ポケットモンスター）

威力：10 MP：20 習得レベル：15

威力よりも、絶対先制と絶対怯ませることに力点を置いた技。奇襲攻撃として、最初に一回だけ使うことができる。

「念話」（*魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：15 習得レベル：38

超感覚知覚の一種。靈的なものを媒介とし、この媒体を相互に発する、または捉えることによって成立する。

これは常人の意思疎通が音声（という空気の媒体）や文字（の姿を伝達する光線）という媒体を通じて行われると同じ。相互の心にある意思や意図を直接的に感じ取るというよりも、音声や文字とは異なった媒体で会話する行為である、と言つた方が適切である。

武器・技一覧（あ行～な行）（後書き）

これを見て、わけが分からなくなつた人は確認して下さい。まだ未完成なので、さうさと完成させます

武器・技一覧（は行／わ行）（前書き）

『なぜなぜに?』

Q 「一覧」の内容に関して、間違いはないのでしょうか？

A 「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の設定上、いくらか拡大解釈、又は縮小解釈、あるいは定義の変更などがあります。」といつても、ちほじないけどね。

武器・技一覧（は行／わ行）

【は行】

「パクティオーカード」（＊魔法先生ネギまー）

耐久力：200

魔法使いとその従者が「パクティオー」（魔方陣の中で唇と唇のキスをすることで成立）という契約の儀式を行つた証として出現する。主人用と、従者用がある。

呪文によって定めた時間（コンマ秒単位）、魔法使いが従者に対して自らの魔力を送り込む。これにより、従者が一般人であつても身体能力が向上させられるなどの効果がある。又、遠方の従者を魔法使いの元へと転移させることができる。魔法使い自身の魔力はおよそ必要としない。ただし限界距離はせいぜい5～10kmと短い。また従者の意志や状況に関係なく召喚してしまつため、強制転移魔法の一種とも言える。

「箱型の恐禍」（＊シーキューブ）

耐久力：30000

一边一メートルほどの黒い立方体の拷問用具。中には無数の鉄片が組み合わさっていて、32の機構に変形が可能。呪いにより人化する。

立方体の形の物を媒介として、すべてで32個の機構を顕現させることができる。使用の際は使う形態の名前をいうと、自分の似姿としての立方体が変形する。機構から延びる小さな立方体の角どうしを接合してひも状にしたもの（「立方鎖」と表現されている）で機構を操っている。それぞれの形態には名前がある。

近藤の基本設定がこれであるため、近藤自身も「箱型の恐禍」として拷問危惧になることができる。又、「箱型の恐禍」はかなり重量があるため、近藤の体重もかなりある。

「発電能力」（* とある科学の超電磁砲）

威力：なし MP：10（常時消費型） 習得レベル：1

総じて電気、磁力（電磁波）等操る能力。能力者の総称は「電撃使い」。

単純に電気を操るだけではなく、電子機器の直接的な操作、つまづレーダー微弱な電磁波の発散とその感知など汎用性が高い。

「間流結界術」（* 結界師）

威力：なし MP：5（常時消費型） 習得レベル：1

「結界術」の一部を分かりやすくまとめたもの。基本は直方体に空間を支配するという非常にシンプルな能力。

結界の固さや粘度をコントロールするほかに特定の対象のみ結界の出入りを許可、禁止するなど結界内の理を変えることで多彩な応用が効く。

発動にはいくつかのステップがあり、「方囲」で標的を指定、「

「定礎」で位置を指定した上で、「結」により結界を生成する、という三段階がある（方囲と定礎は省略される事もある）。一度発生した結界は、「滅」で内部の物を押し潰す事も、「解」で何もせずに解除する事もできる。接近戦には向いていない。

「八番機構・碎式円環態《フランク王国の車輪刑》」（＊シーキューブ）

耐久力：2300

進行ルートに在るものを砕きながら進む車輪。

「ハマノツルギ」（＊魔法先生ネギまー）

耐久力：20050

「アーティファクト」の一つ。漢字表記は「破魔の剣」。

普段はスチール製のハリセンだが、本来の姿は、身の丈以上の長さを持つ片刃の大剣。どちらの形態でも魔法無効化能力と同じ効力を持つが、対象を叩くことで召喚された魔物を一撃で送り返したり、他者にかけられた魔法を解除したりする」ともできる。

「光よ」（＊魔法先生ネギまー）

威力：なし MP：1 習得レベル：1

小さな明かりを灯す基礎魔法。占術や念力に次いで教わる初等魔

法。

暗がりで突然明かりを灯すと、目眩ましとしても使える。

「白叢」(*喰靈)

耐久力：100000

狗神と呼ばれる靈獸。白い毛並みで狗の頭に龍のような長い首を持ち、身体の至る所が鎖で巻かれている。

調伏された「九尾」の「殺生石」が複数集まって生まれた「殺生石」の集合体で、一般の悪靈に比べ圧倒的な妖力を持つ。だが、その力に目をつけた者たちによって捕らえられ「悪靈によって悪靈を喰らう呪われた最終兵器」として体内に封印された。これを喰靈計画と呼び、それ以降は封印した家系に代々引き継がれた。

封印した者の魂と繋がっているため白叢自身が傷付くと術者も影響を受ける。また、腹が減ると封印を破ろうと暴れるため維持するためにエサ（靈体）を定期的に与える必要がある。宿主の魂を食い続け、また、悪靈との戦いの最終兵器である為、術者は歴代の最凶の敵と戦うことになる。故にその家系の人間は短命が多い。その核となっているのは「殺生石」であり、「殺生石」を失えば消滅するとされているが、過去数百年、その所在は確認されていない。

「表層融解」(*とある科学の超電磁砲)

威力：なし MP：20 習得レベル：40（解禁）

触れた物体の表層を融解することができる。力を途中で抜くことによって、融解した表層を固定し、形状を思い通りに変えることが可能。

「風花施風風障壁」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：2000 MP：50 留得レベル：10

数分間持続する竜巻を発生させ、外部から身を守る呪文。竜巻周辺は、激しい気流が流れしており危険だが、その内部は、竜巻の目のように静かである。

「封絶」（＊灼眼のシャナ）

威力：なし MP：20 留得レベル：10

現代では最もポピュラーで初步的な「自在法」の一つ。

「結界」のようなもの。封絶を「張る」と、地面に封絶の作用を生む火線の「自在式」が出現し、炎を混ぜたドーム上の陽炎の壁が形成され、内部の空間はこの世の流れから非物理的に切り離される（「因果孤立空間」という）。内部では原則「紅世」に関わる者以外のものは停止し、外部では「存在の力」を感じする能力がない限り、「封絶」を張られた空間の存在を認識できなくなり、また「存在の力」を感じする能力を持つた者にも内部の様子は掴み辛くなる。また、外部と内部は物理的には繋がっているため、出入りは自由にできるが、「存在の力」を感じできない者にとって「封絶」の内部は「存在しない空間」であるため、無意識のうちに避けて行動するようになる。

「封絶」の内部で破壊された物体や生物は、その「封絶」を解くまでは「存在の力」を用いることで、「封絶」発動前の状態にまで修復することができる。

「バーチャル・リアリティ／自分がだけの現実」の中では、「有力者」を「紅世」に関する者として捉えているため、「有力者」はこの中でも動ける。

「風精召喚」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：15 緊急レベル：3

風の中位精霊による「精霊召喚」。一種の死神もある。

「風陣結界」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：1500 MP：18 緊急レベル：18

気流を利用した中規模の魔法障壁を開発させる。炎、冷気、毒ガス、エローなど、空気を媒体にした攻撃等から身を守るために適している。

これは、空気を利用した魔法の中でも、固体の衝突を防ぎられる「風楯」や「風化風障壁」よりも基本的な魔法である。

「第一部／一章／四話」で、風で作った中位精霊から身を守るのに利用したのは、適切な処置である。

「副葬処女」（＊アスラクライン）

耐久力：1

「機巧魔神」を動かすための「贊」として「機巧魔神」の中核部

に収められている少女の呼称。

「機巧魔神」はこの少女らの魂の質量を削つて「演操者」の願いを叶え続ける。「機巧魔神」は「副葬処女」の魂で動くため彼女達の意にそぐわない場合、「演操者」の命令でも動かないことがある。魂を削られた「副葬処女」はそのたび感情をすり減らし、全ての感情を無くしたとき消滅する。また、当然ながら封印されている「機巧魔神」の中核部が破壊されれば死んでしまう。

彼女たちは、「演操者」の脳の一部を媒介として「射影体」と呼ばれる疑似感覚的情報入出力デバイスを投影し、「演操者」とミニユニケーションをとる。これは一種の幽霊のような立体映像であり、通常その姿は「悪魔」か「演操者」、あるいは電子的に視力を増幅したものでなければ見ることはできない（稀に写真やビデオには写ってしまう事がある）。「声を聞くのはもっと簡単」との事である。いずれにせよ一般人には知覚できないが、稀に知覚できる者もいるらしい。

「〔編執狂的な碎片の刻み方〕、微塵切りにしまじょう」（＊シーキューブ）

威力：5（約千回連續して攻撃） MP：200 習得レベル：

40（解禁）

縦横無尽に刃がブレて現れて、人間を微塵切りにした動作が一度に現れる。千切り以上の威力を持つ。

予想不可能な刃の斬撃が複数表れるので、対戦相手はこれを受け止めたり、受け流すことが困難。しかし、千回連續で攻撃しないと、その威力を発揮しきれない。そのため、回避不能効果を重点的に使用する。

「方陣障壁」（*黒神）

耐久力：10300

「サウザンド」の一つ。前方に魔方陣のバリアを張り、敵の攻撃から味方を守る。

【ま行】

「マスクドフォーム」（*仮面ライダーカブト）

耐久力：10000

「ヒヒイロノカネ」という、太古日本で様々な用途に使用されたと言われる伝説の合金で製造された「マスクドアーマー」が全身を覆った姿の第一形態。主に防御に重点がおかれている。

「マスクドアーマー」（*仮面ライダーカブト）

耐久力：8000

鎧。「マスクドフォーム」時に身に纏っている。

「魔法の射手」（＊魔法先生ネギま！）

威力：矢一本×5 MP：5 習得レベル：1

魔法学校で唯一教える戦闘呪文。「光の矢」や「氷の矢」など様々な種類があり、その属性によって効力も違い、応用性も高い。

一発だけなら出が早く、又、拳に乗せて撃つことができる。さらに、ある程度誘導も可能で、発動から発射までの一定時間、光球状態で滞空させておくことも可能である。だが、一発だと戦士には避けられ、魔法使いには「障壁」で防がれるため、通常17発とか29発とか撃つ。

翳した手の手前に、放つ矢の分だけの魔力溜まり（これが待機状態の光球となる）が円を描いて出現し、そこからビームのように矢が出現（正確には転化）する。

「収束」型 「魔法の矢」を一点に収束させ、攻撃力に任せて一点突破を狙う。その分、回避されやすくなる。

「連弾」型 「魔法の矢」を何本も連續で放ち、回避不能にさせる。

「風の矢」 捕縛属性の矢。空気を用いて敵を拘束する。拘束した際、空気の繩が硬化し、石のように見える。攻撃力が低い。

「光の矢」 攻撃属性の矢。アブノーマルな一矢。

「魔法無効化能力」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：20 習得レベル：3

放出系魔法や召喚系魔法等の自身を対象とした攻撃（召喚した「レム」の攻撃も自分を対象としたと認識する）を無効化できる。

幻術のように一定空間 자체に作用する空間系魔法の無効化は、自身を対象としていないので、無効化できない。また、惚れ薬も攻撃（害意）がないので無効化は出来ないようである。「召喚」や「強制転移魔法」は、空間系魔法に分類されているため無効化できない。

「第一部／四章／八話」では、謎の襲撃者に「一方通行」の力で拳を防衛、又は手に触れられることで「血流の逆流現象」が起ることを危惧したために使われた。

「まほネット」（*魔法先生ネギまー）

魔法界の「コンピューター・ネットワーク。

「蜜」（*おおかみかくし）

威力：なし MP：0（常時展開型） 習得レベル：1

「有力者」にのみ感じることができ、性的興奮を誘発する。

「未来予知」（*ポケットモンスター）

威力：50 MP：40 習得レベル：18

未来を予知して、未来の相手に向かつて「神通力」を送る。外れることが、しばしばある。

「〔ミンチ用のお肉の処理法〕、何度も叩き潰しましょう」（＊シーキューブ）

威力：80 MP：30 習得レベル：3

人間が振るう腰の入った長柄ハンマーでの一撃数十人分を一つに纏めた衝撃に匹敵する威力がある。

「無極而太極斬」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：40 習得レベル：40（解禁）

「氣」と「魔力」を切る技。無極にして太極有り。
太極図では動によつて陽が生成される。動は極まつて静になり、
静は陰を生じ、静は極まつて動になる。動と静は太極図の根本であ
る。太極図では陰と陽の両者が共に存在し、そして合わされること
により、水、火、木、金、土の五気が生まれると考えられている。
五気が組み合わせることによつて四季が生まれる。五行は陰陽から
生まれ、陰陽は太極から生まれ、太極は常に無極である。
つまりは、無極 太極 両儀という流れ。

「無音めぐり術」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：30 習得レベル：40（解禁）

相手のスカートなどを一瞬にしてめくつてしまつ。相手がこれを事前に察知することは不可能。

さらに上は、「無音脱がし術」がある。

「燃える天空」（*魔法先生ネギま！）

威力：4500 MP：200 習得レベル：40（解禁）

一定空間内に超高温の炎を発生させる広範囲焚焼殲滅魔法。翳した手の手前の空間に発生する。

「モンスターボール」（*ポケットモンスター）

耐久力：100

「ぼんぐり」と呼ばれる木の中身をくり貫き、特殊な装置と「キャプチャーネット」と呼ばれる捕獲網を仕込んだ物。相手の質量、体積は関係無いが、「キャプチャーネット」が破られると捕獲不可能となる。開閉スイッチを操作して中のものを出し入れする。中央にあるボタンを押すことで、小型化することが可能。「第一部／六章／一話」では生き物ではなくバリケードを収納していた。また、「第一部／六章／四話」で近藤が言っている通り、「モンスターボール」の開閉場所を操ることで相手との間合いをとることにも役立つ。

【や行】

「破れぬ誓い」（＊ハリー・ポッター）

威力：なし MP：500 習得レベル：40（解禁）

2人が跪くように向かい合つて座り（別に3人でもかまわない）、手を握り合う。それから「結び手」と呼ばれる保証人が、握り合った手の上に杖の先を置く。2人が口頭で約束を交わし、互いが合意するごとに、杖先から細い舌のような眩しい炎が飛び出し、灼熱した赤い紐のように2人に巻きつく。この巻きつきが完了すると誓いが成立する。

この誓いを破つた者は死ぬ。

「闇の魔法」（＊魔法先生ネギま！）

威力：なし MP：30（常時消費型） 習得レベル：60

敵に仇成す攻撃魔術を敢えて自らの肉体に取り込み、零体にまで融合する、術者の肉体と魂を喰らわせて、それを代償に常人の倍する力を得ようという狂気の技。

「童姿の闇の魔王」、「悪しき音信」、「禍音の使徒」、「闇の福音」と呼ばれたある吸血鬼の真祖が生み出した禁術である。

「光は闇を生み出せないが、闇は光を生み出せる。闇は光に対立するものではない。闇は諸々の事情をその内に抱いていた源であり、絶対な包容力を持つ。そして、この絶大な包容力こそ、善悪、優劣、自他あらゆる対立を取り込む力となる」といった考え方からきており、善も悪も、強さも弱さも、全てをありのままに受け入れ、飲み込む力が、「闇の魔法」である。

「四つ身分身 龍十字」（＊魔法先生ネギまー）

威力：150 MP：40 習得レベル：40（解禁）

気配、密度、攻撃の重みまで、本体と同等の分身を四つ作り、対象の左右前後から同時に同時に掌底をすれ違ひ様に叩き込む。技の軌跡が十字を描いている。

「読み上げ耳」（＊魔法先生ネギまー）

耐久力：20

文章を読み上げる魔法具。耳が悪い人のために作られた物で、た
いして貴重ではない。

【ら行】

「ライダーキック」（＊仮面ライダーカブト）

威力：2000 MP：100 習得レベル：10

波動に変換したタキオン粒子を脚に集中して放つ。

「ライダーフォーム」(*仮面ライダーカブト)

耐久力：6500

「cast off」を経て変身する第一形態。
「clock up」及び必殺技が使用可能になる。

武器・技一覧（は行～わ行）（後書き）

これを見て、わけが分からなくなつた人は確認して下さい。まだ未完成なので、さうせと完成させます

ジャポン暦（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「氣」とか、不思議な世界設定とかは「一覧」のどちらに含まれるのでしょうか？

A 「技一覧」に含まれます。

～そのうちいつしょいたになつて、「あかさたな～」で区切ることになるけどね。

ジャポン暦

ジャポン暦

- 120 ジャポン国内に独立国が多数出現
- 20 各国が独自に大国への大使派遣開始
- 3 ジャポン国内統一開始
- 1 ジャポン国内統一終了
- 0 ジャポン帝国成立
- 1000 トーキュー特区成立
- 1015 トーキュー特区への留学開始
- 1880 第一次世界大戦 ジャポンは未戦闘
- 1945 第二次世界大戦 ジャポンは未戦闘
- 2120 第三次世界大戦 ジャポンは未戦闘
- 2200 トーキュー特区がワープ航法確立
- 2221 トーキュー特区が国際技術開発特区に指定
- 2230 ジャポン国内、トーキュー特区内にそれぞれ一箇所ず

つ、ポートゲート設置

2240 世界主要都市8箇所にポートゲート設置

2260 民主主義国家ジャポン成立

2280 復古の乱

2281 復古の乱鎮圧

現在に至る

ジャポン暦（後書き）

話が進めば、ここも更新します

一章 事の起りつ／一話 レベルを上げよ！（漫書き）

『なぜなぜに？』

A 年表とか作っていますけど、ちやんと活躍するのでしょうか？

Q ちやんと活躍します。が、最初は確かに出番はあります。
～とこりか、第一話まで出番なしかも？

一章 事の起こう／一話 レベルを上げよう

子供は学校に行く。

これは、いつの時代でもそうなのである。

現に西暦22××年の今でも、こうして未成年の僕らは、毎日学校までの徒歩で登下校している。

2100年代当初は、通学は一週間に一回になり、授業は基本ネットを使った通信教育だった。が、その後青少年の犯罪が大幅に増加したため、また、セキュリティーシステムが強化され、交通事故の心配、通学途中の誘拐の恐れがなくなり、人間としての「コミュニティー」能力を鍛える、という名目で学校制は復活した。

学校制が復活したおかげで、子供は親の目から離れられる空間と時間を得、親は常に子供の世話をする、という重労働から解放された。そのため、学校制の復活は大きな問題もなく、すんなり社会に受け入れられたのだ。

こうして、俺達は今日も学校に通っている。

「まったく、なんで今更学校なんだろう？ 科学万能の時代、科学万能の23世紀なのに」

俺の隣を歩く高田一史が愚痴る。

「まあまあ。そんな」と言つても、未成年の俺らには何の力もないわけだし

俺、山下宏治は、科学技術が行き届いたまっすぐな学校までの道を歩きながら答えた。

「でもさ、本当に、なんで学校にわざわざ歩いてまで行くんだ？」

ネット使えば授業ぐらじ出来るの」

「だから、ほら、あれだよ。」

『生物は無機物からは何も得られない。有機物である我々人類が何かを学ぶことが出来るしたら、それは同じ有機物からでしかない』ってやつだよ。で、誰の言葉だっけ？』

一步進むだけで10メートル移動できる科学技術様々の特殊な道路の上を進む。学校制は復活したものの、学校自体の数は大幅に減少した。その分子供の数も減少しているのだが、学校までの道のりが長くなってしまった。そのため、帰宅後に友人と遊ぼうといふときは、大抵リアルではなくバーチャルの世界で行う。

「近藤美紗緒だよ。この前試験に出たる」

現代史の成績のいい一志は答える。

「そうだっけ？」

「そうだ。で、昨日はどこだったんだ？」

「ん？」

「『パーソナル・リアリティ』だよ。あの後、『無制限対戦』でやつてたんだろ」

「無制限対戦」とは、レベルに関係なく、コンピューターがランダムに選んだ相手と対戦できるシステムだ。

昨日、一志達といつもの通り「能力制限チーム対戦」という、強制的に一定レベルに能力を統一された状態でプレイするモードで遊んだ後、一人だけ残つてレベルアップのために「無制限対戦」にログインしたのだ。

「ああ、ちゃんと勝つたぞ。

相手は『ドラゴンボール』使いだったけど、まだ軌道を操れるほどじやなくてさ、勝負は一瞬だった

「で、『闇の魔法』（＊魔法先生ネギま！）は手に入つた？」

対戦の成績で経験値が貯まり、能力値の上昇や、技の獲得、レベルアップをすることができる。

「闇の魔法」は使用者の体力と気力を同時に大幅に削り、使用中に負けると、一週間使用不可能になる最上級魔法だ。

「いや、まだだよ。そんなに簡単にアレは手に入らないよ」

「そりゃ。手に入つたら見せてくれ。使って弱つてるとこひを叩いて、一気にレベルを上げる」

「お前な……」

クラスメイトは25人。21世紀のころと比べたら、少なめの人
数だ。

教室に入つて自分の席につく。

暫く友人と他愛もない会話をし、ホームルームまでの時間を潰す。

会話すること自体は、リアルもバーチャルも変わりはない。違うのは、突つ込みに武器や魔法が使われないことだけだ。

「なあ、今日皆で1対3やらね？」

友人の松山健一まつやまけんいちが提案した。

「1対3って、もちろん俺が1なんだよな？」

「当つたり前だろ」

「でも、何で突然」

最後の一人、羽河卓司はねかわたくじが聞いた。

「レベルが高い奴と戦つた方が経験値が多くもらえるだろ。それに、複数人を相手にしても多くもらえる。もう少しレベルを上げときた

いんだよ

もう少しすると、「パーソナル・リアリティ」で初のランキング戦が行われる。それに向けての調整がしたいのだろう。

「よし。じゃあ、そうしよう」

決定と同時に、ホームルームを知らせるチャイムが鳴った。

一章 事の起りつ／一話 レベルを上げよう（後書き）

本編です。次回はバトルなので、楽しみにしていてください。

一章 事の起こうり / 二話 これが、バトルだ（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「闇の魔法」は、チートの布石ですか？ それと、この主人公はチートなのですか？

A 違います。チートではありません。一章・二章目辺りはそう見えるかもしれません、が、違います。

「だって、主人公まだ限界レベルの半分もいってないしね。

一章 事の起こうり／一話 これが、バトルだ

「3、2……」

ゲーム開始を知らせる音声が鳴り始めた。

両足に意識と魔力を集中する。

3人との距離は約10メートル。

まずは一気に距離を詰めて、一人潰す！

「……1、スタート！」

重心を前に倒す。

つま先に力を込めて、「瞬動術」。

「残念」

「つな……」

体が後方に押し返された。

決して強い力じゃない。だが、完璧に出鼻を挫かれた。

目の前を確認する。目前に迫っているのは健一の右腕。けんいち

健一の「世界観」は「ポケットモンスター」だ。ポケモンが使う

技を、自分の体から繰り出している。

おそらく技は「ネコ騙し」(*ポケットモンスター)。威力は低いが、絶対先制。また、必ず怯むことができる。初回限定の奇襲技だ。

押し戻された体をそのまま、「瞬動術」で後方に飛ばした。

まずは体制を立て直す。そのためには、あいつらと距離を開ける必要がある。

「channe beetle」

再び「瞬動術」に入ろうと思つたとき、電子音と共に前方から何かの塊が複数飛んできた。

常時展開している「アンチマテリアゲート対物・魔法障壁」(*魔法先生ネギま！)でダメージを緩和する。

卓司たくじが「マスクドフォーム」(*仮面ライダー・カブト)から「ライダーフォーム」(*仮面ライダー・カブト)へと「cast off」(*仮面ライダー・カブト)したのだ。さつき飛んできたのは、「cast off」したときに脱ぎ捨てた「マスクドアーマー」(*仮面ライダー・カブト)だ。フォームを変えることで、耐久性が下がる代わりに、攻撃性、俊敏性が極端に上がるのが、卓司の「世界観」、「仮面ライダー・カブト」特徴だ。

障壁が消滅したのを確認する。「cast off」によつて飛ばされる「マスクドアーマー」はそのスピードにより、かなりの威力を持つことになるのだ。直に受ければ、レベル差20といえ

どもただではすまない。

前方に集中する。おそらく卓司は、「clock up」(*仮面ライダー・カブト)して一時的に超高速に入り、事実上卓司の現在の最大攻撃「ライダー・キック」(*仮面ライダー・カブト)をこちらが反応する前に決めるつもりだ。

対処法はある。

「clock up」は制限時間があるものの、常時超高速に動くことが可能であるのに対し、「瞬動」は一瞬しか高速で移動できない分、いくらでも行うことができる。そして、「ライダー・キック」は大技の為、そう何度も使える技じやない。

「ライダー・キック」をヒット直前に「瞬動」でかわすことが出来たら、攻撃呪文をその背中に叩き込んでやればいい。

それに、こちらは「ライダー・キック」を受けたからといって、一撃でやられるわけではないのに対し、向こうはこれを外せば後がない、という精神的余裕が違う。

卓司に動きはない。

と、次の瞬間、卓司の体が消えた。

だが、衝撃はない。

訝しんでいると、背後に風圧を感じた。

「『^{デフレクシオ} 風盾』（*魔法先生ネギま！）……」

とつさに障壁を展開する。

「ライダー・キック」

電子音と共に卓司の必殺の一撃が、障壁を貫通して俺の背中を直撃せんと迫る。

だが、障壁を突破した為に、わずかに直撃が遅くなる。

そのわずかな隙に、俺は「瞬動術」にはいった。

「っく……」

「ライダー・キック」を紙一重で避け、そのまま卓司ではなくすぐ後ろにいた健一に体当たりをした。

「うわー！」

耐久性の低い健一はこの一撃でノックアウト。

そして、卓司に右手を向ける。

「『魔法の射手、連弾・雷の17矢』！」

雷を纏う魔法の矢が卓司を至近距離から襲つ。

「『結』！」

突如卓司を底うように直方体の結界が足元から現れ、「魔法の射

ギカ

手」を防ぎ、俺を別の結界で覆つ。

「『結』。」

さうに、卓司の下から結界を立ち上げることによって、卓司を上空に戦闘離脱させた。

一志の「世界觀」は「結界師」だ。自分一人だけの力で空間を一から作り上げる能力。といつても、一志が使えるのは「間流結界術」(*結界師)という使いやすく整理された「結界術」(*結界師)の一つの方式だけだが。

それでも、位置さえ分かればどこでも結界を作り、圧縮することによって内部の者を潰すことができる、理論上は厄介な技だ。

俺は『パクティオーカード』(*魔法先生ネギまー)を取り出した。

「『アーデアット』(*魔法先生ネギまー)」

一言呪文を唱えると、あら不思議、カードが身の丈以上の片刃の大剣に早代わり。「ハマノツルギ」(*魔法先生ネギまー)。つまり「破魔の剣」。魔法攻撃、気弾攻撃を完全無効化し、召還された者を強制的に送り戻す力を持つている。

「ハマノツルギ」で結界を切り、周囲に意識を集中させる。

健一を倒した以上、さつきのような奇襲はもう使えない。さきほどは、健一が卓司と共に「テレポート」(*ポケットモンスター)で背後に回ることで、俺の裏をかいだ。

だが、一志の能力ではそんなことはできない。又、この剣がある限り、一志は攻撃手段がないのと同等だ。となると、必然的に卓司が攻めてくることになる。

卓司の気配を探つていると、突如、頭痛を感じた。

頭を抑えて、膝をつぐ。

と同時に、体の関節が動かなくなる。

まずい。

気づいたときには、卓司の「ライダー・キック」を受けて、体力が減るのを実感していた。

そういうことか。

なぜ、「テレポート」で健一自身も俺の背後に飛んだのか。

なぜ、卓司の「ライダー・キック」が外れた後、「clock up」せずに逃げたのか。

全ては、確実に、最大限の力で俺にダメージを当たるためだ。

吹き飛ぶ体に意識を戻しながら推測する。

「」の頭痛は、健一の「未来予知」（＊ポケットモンスター）だ。「未来予知」は、未来を予知して、その未来に向かつて攻撃をする。そのため、俺に近づく必要があったのだ。距離が離れれば離れるほ

ど、未来への干渉は難しくなるから。

そして、関節が動かないのは、一志のせいだ。おそらく、体の主な関節に小さい結界を張つて、空中に俺の体を縫いつけたのだ。

そして、完全に体勢を崩された俺に、卓司は「ライダーキック」を最大出力で打ち込んだのだ。

「『アベアツト』（＊魔法先生ネギまー）」

現状を把握した俺は、「ハマノツルギ」を「パクティオーカード」に戻す。

「『アデアツト』」

今度は、傷を癒す「東風の檜扇」である「コチノヒオウギ」（＊魔法先生ネギまー）を取り出して、体力を回復する。

「卓司、今ので決めれなかつたのが、敗因となりそつだな」

体力全開で呪文を詠唱する。

「ト・シヨンボライオン
契約に従い、我に従え炎の霸王」

一定の空間内に超高温の炎を発生させる高等魔法。

「エビゲネコウス・カタルセラス・ギネ・ロシアガス
来れ淨火の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし」

相手は一度の最大攻撃で氣力はほとんど残っていない。

「火と硫黄、罪ありし者を死の塵に」

レベル差20以上もあるわけで、当然逃げれるはずもなく。

「『燃える天空』（＊魔法先生ネギまー）！」

卓司と一志が真っ黒く焦げになつたかどうかを確認する間もなく、ゲームはあっけなく力押しで終了した。

一章　事の起こう／二話　これが、バトルだ（後書き）

バトルでした。結構時間が掛けてしまいました。

『なぜなぜに?』

Q 「ポケットモンスター」の「特性」って、どうなるのですか?
それと、バージョンによつて「物理」か「特殊」が変わると思い
ますが、その辺りは?

A 「特性」は「解禁」で手に入り、一つの「技」としてカウント
されます。「物理」と「特殊」の区分けは初期のバージョンが基本
です。
～最近どーなつてるか分かんないんだよね。

一章 事の起こう / 二話 ランキング戦

「あんな技、喰らつたら負けるに決まってるだろ!」

一志^{かずし}が俺に怒鳴る。

「いやー、つい本気になっちゃった

頭を搔きながら、俺は答える。

先ほどの対戦から数分後、俺達は「ウエイトルーム」に集まっていた。

「パーソナル・リアリティ」の世界は、主に三つに分かれている。

一つ目は、さつき俺達が戦っていた「バトルワールド」。対戦者同士が同意の上にバトルする対戦専用の世界。

二つ目は、このゲームの主軸ともいえる「アドベンチャーワールド」。文字通り、冒険の世界だ。町あり、山あり、ダンジョンあり、ラスボスあり。このゲームはレベルを上げて、ラスボスを倒すのが本来の流れだけど、それに従う必要はない。実際、「アドベンチャーワールド」は現実世界の丸写しのような世界だ。八百屋があれば、交番もある。ご近所付き合いもあれば、仲違い中のやな奴もいる。違うのは、全員が何らかの力を持つていてのことだけだ。「パーソナル・リアリティ」内の人間は、大抵そこにいる。

三つ目は、今俺達がいる「ウェイトルーム」。この場所は、「バトルワールド」で戦闘を終えた者と、「アドベンチャーワールド」

で体力がゼロになつた者が運ばれてくる。ここでは能力を使つこと
はできず、もちろん戦闘も不可。「ウエイトルーム」は、ロード中の
待機場所といったところだ。

「それはそうとして、この後どうする？」

卓司たくじが聞いた。

「そうだな。もう夜も遅いし、今日は帰るつ。

そろそろ内の家では夕食の時間だし。あまり遅くて、接続を切ら
れても困るしな」

俺がそう答えると、解散の流れになつた。

数日後、俺達は「ウエイトルーム」に集まつていた。

集まつているのは俺達4人だけではない。俺と同じ高校の生徒も、
現実の「近所さんも、会つたことも見たこともない人も大勢いる。

これから、「パーソナル・リアリティ」で初のランキング戦が行
われる。

ここに集まつている人のほとんどが、そのランキング戦に出場す
る。中には、観戦目的の者とか、唯單にロードを待つてゐるだけの
者もいるけど。

「お待たせしました」

脳内に直接声が響く。

「これより、『パーソナル・リアリティ』内のランキング戦を行います。

当初の予定通り、一回戦は『バトルワールド』においてバトルロイヤルを行い、参加者を100名に絞ります。この段階で戦闘不能になつた者には、ランディングが与えられませんので、ご注意下さい。安全のため、一回戦が五時間以上続いた場合は、一時中断とさせてもらいます。体力、気力の変化を記録し、翌日、その状態から再戦とさせていただきます。

一回戦からは、トーナメント式を採用します。このとき、各順位決定のため、体力、気力の消耗率が順位決定の資料となる場合もありますので、ご了承下さい。

今回行うランキング戦による順位は一時的なもので、予定では、ランキング戦を二ヶ月に一回の調子で一年間行い、それを正式なランキングとします。その後もランキング戦は同様に行い、その結果に伴つてランキングを変動させます。

それでは、時間です」

一章　事の起こうつ／二話　ランキング戦（後書き）

そろそろ、物語の本筋に入れそうです。
気長にお待ち下さい。

一章 事の起り / 四話 一回戦（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 主人公の実力は一体どのくらいなのですか？

A 同じ学校に通う生徒で相手になる人はいません。それどころか、同じ町の中でも敵う相手はいません。ですが、上には上がります。レベル的には上の中の下といったところかな？

一章 事の起こうつ／四話 一回戦

「移動します」

アナウンスと同時に、空間転移する。

一瞬何も見えなくなり、すぐに視界が開ける。

見えてきたのは、形がまちまちのコンクリートの塊。

「一回戦、展開世界、『二十世紀末の大都市』」

足がコンクリートを踏みしめる。濁った空気を吸い込む。

「開始です」

周囲に目を走らせる。誰もいない。

まずは近くのビルに侵入する。

自動ドアはなく、手動ドアを手で押し開けて入る。エレベーターではなく、階段を使って屋上を目指す。

まずは視界の確保。だからといって、跳ぶわけにはいかない。途中で迎撃されれば即座にノックアウトもありえるのだ。存在をしらなければ、無駄な戦闘は省ける。このゲームはバトルロイアル。無駄な力は使わず、温存するに限る。

ビルの屋上に着いた。

「二十世紀末の大都市」は、一応ビル群ではあるが、大きさが整つてない。また、所々に木製の家屋も見受けられる。区画整理が行われているのは中心だけで、その周りには大小様々なビルをただ寄せ集めただけのようだ。

深呼吸。

やはり、空気が汚い。

わざわざいろんなところまで再現しなくてもいいこと思つたのだが。

所々で煙が上がっている。誰かが戦闘しているのだ。

俺はもう一度周囲に目をやる。

一志達は今頃どうしてこられるのだろう。この旧東京にこられるのは確かなのだが。

マップを開く。目の前に旧東京の地図が浮かび上がった。今回の範囲は旧東京の東京都内。端まで行くと、ワープして反対側に飛ばされる。

「あ、そうか

俺はマップを置んだ。

いつもなら、一志達は仲間申請してあるのでマップ上に位置が示される。だが今回はランキング戦。仲間申請は意味をなさない。

空を見上げる。」この「パーソナル・リアリティ」の世界は、一応宇宙まで再現されているそうだ。一体誰がそこまで行くんだ、とか思つけど、まあ、別に困ることはないし。

ふと、足元に注意を向ける。

「『八番機構・碎式円環態《フランク王国の車輪刑》』（＊シーキューブ）、禍動」

突如、足元から車輪が飛び出した。

コンクリートの床を粉碎しながら現れたそれは、そのまま俺に向かって襲い掛かる。

「『カントウス ベラーツス 戦いの歌』！！」

自分の体に魔力を供給する。

「ふん！」

右手を前に出し、車輪を止める。

しまった！　とつたに自分の手で止めちました！

「『十四番機構・搔式獸掌態《猫の手》』（＊シーキューブ）、禍動」

車輪が変形する。

現れたのは、猫の爪を模した5本のカギヅメがついた大きな孫の

手。

「『魔法の射手、光の一矢』！」

破壊属性の「光の矢」を放つ。

「光の矢」は孫の手の中に当たって、粉碎する。

「『十九番機構・抉式螺旋態《人体穿孔機》』（* C3）、禍動」

居場所の分からぬ相手は臆せず攻撃を続ける。

現れたのは、全長178・7センチの巨大なドリル。それが、槍のようになんでくる。

まずい。相手は少なくともレベル30代。

体を前に倒す。

「瞬動術」。

ドリルを交わし、その背後に回る。

「つく、『五番機構・刺式併立態《グラード・ツエペシュの杭》』（* シーキューブ）、禍動」

正体不明の敵は、少したじろぎながら、現れた巨大な杭を俺に飛ばす。

杭が俺に届くよりも早く、俺は最初の車輪が現れた床の穴から中

に飛び込んだ。

「風の精霊 11人、縛鎖となりて敵を捕まえろ、『魔法の射手、戒めの風矢』（＊魔法先生ネギま！）！！」

捕縛属性の「風の矢」を周囲に11本放つ。

対象の位置は掴めていないが、近くにいれば捕まえられるだらう。それが無理でも、何らかの反応はあるはず。

土煙が晴れてくる。

「つっすりと対象のシルエットが浮かび上がった。

居る！

「風の矢」11本をそのシルエットに軌道変更。

すぐさま、「風の矢」がシルエットの人物を捕らえた。

「悪いけど、このままリタイヤしてもらひよ」

俺は呪文詠唱を始める。

「『解禁』！」

捕らわれの誰かさんが「リミッター」を解除した。

「つなにー！」

「リミッター」は、レベル40以上のプレイヤーに与えられる機能だ。通常のプレイヤーは、「世界観」による能力発動は、その「世界観」の主人公的人物が理論上可能なものに限られる。だが、レベル40に達した者は、脇役や敵役の能力も制限付きで使用することができる。その制限、というのが「リミッター」なのだ。「リミッター」を「解禁」している間は、気力と体力が同時に削られる。それ自体別に構わないのだが、一々「解禁」と口にするのが面倒くさい。一対一の戦いでは、その間に攻められかねない。

11本の「風の矢」は一度は対象に巻きついたが、次の瞬間木つ端微塵に粉砕された。

「『術法・藍蠱』（*シーキューブ）」

全身が藍色の水銀のような金属質のが突如現れる。

「殺れ」

蠍毒達が鋼鉄の体で襲ってくる。

「光の矢」を撃つて応戦するが、相手にはそれぞれ意思があり、なかなか仕留められない。

「つく、『エウオカーウアルキヨコアトウガラディアーロアトラザーゲネット風精召喚』剣を執る戦友、迎え撃て（*魔法先生ネギま！」

風の中位精靈による自分のコピー。意思を持つ藍蠱に対し、回避行動が可能なコピーを向かわせる。

「『サヴァレンティ・バーフェクション・ドール王権を果たす完全人形』（*シーキューブ）」

シルエットの人物がぼそりと呟く。

と、同時に「ペー」が方向転換して、じつに向かつて来た。

「『王権を果たす完全人形』は、人型の物なら何でも操ることができる」

「ト寧に説明してくれるが、そんなことに耳を貸している暇はない。

『『風陣結界』（＊魔法先生ネギま！）』

魔法陣を描いて結界を張り、攻撃を防御する。

「『風よ』（＊魔法先生ネギま！）！」

風を身に纏い、次の攻撃に備え体を保護する。

相手が悪い。レベル40以上となると、真っ向勝負をせずには、回避するに限る。

「逆巻け、春の嵐、我らに風の加護を、『風花旋風風障壁』（＊魔法先生ネギま！）」

続いて、竜巻のような風の障壁を作る。

「逃げるだけ？ それでも男？」

挑発を受ける。

言つてくれるね。それなら。

「『解禁』」

「リミッター」を解除する。

「やつと本氣?」

「楓忍法、『四つ身分身 脣十字』（＊魔法先生ネギま！）――！」

「コニーではない、自分の分身を4人作り、四方同時攻撃。

相手はこれらの攻撃に備え、構える。

「秘技・『無音めぐり術』（＊魔法先生ネギま！）」

「つな、なんて破廉恥な！」

分身攻撃はフェイク。

本当の狙いは、相手のスカートをめぐること。

スカートの端を押さえながら、相手の女の子が叫ぶ。

土煙の中、魔力供給によつて得られた視力で確認したのは、相手が女の子で、スカートを履いていたということ。これだけだと変態のようだが、戦闘において精神錯乱は重要なキーだ。

「まあ、『男』だし」

「やつこつ意味じやないわん

一章 事の起り / 四話 一回戦（後書き）

遅くなりなした。

そろそろ本筋に入らないとまずいかも。

一章 事の起こうり / 五話 VS「シーキューブ」（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 主人公がスカート捲りをしていますが、電子世界でもパンツは履いているのですか？

A 履いています。電子世界、つまり仮想現実内に入るときに、「カプセル」の中のスキヤナーによって全身をスキヤンされ、そのときの体調から体格、服装等がデータとして持ち込まれます。

だから仮想現実内の人間は変な格好していないんだよ。

一章 事の起じつ／五話 ＶＳ「シーキュープ」

少女と対面する。

今だ、スカートの裾を持つて俺を警戒する少女に向かって提案する。

「戦うのは止めこしないか？」

「つふ、ふやけないでよー。」

きつと俺を睨む。

「気の強さと、長い黒髪がキャラを成り立たせている。たぶん。

「さうか？　でも、俺らが戦つたら消耗が激しいと思つぞ。勝つても負けてもな

俺は余裕つぶしを演出しながら語る。

「『リミッター』持つてゐるつてことは、レベル40以上つてことだ
る。ここで潰しあつてもお互にメリットはないと思つぞ」

「スカート捲るような奴に言われても、説得力ないんだけど

「は、は、は……ふん！」

俺は「ハマノツルギ」をその首筋に当てる。

「つべ……」

「現状認識は大切だよ。せつかく手を引いて言つてるんだ。素直に受け入れるべきだと思つたがね」

威嚇程度に魔方陣も張つておく。

「共に意義のある選択をしようじゃないか」

黒髪少女は俯く。

そして、ぼそりと呟いた。

「つふ、馬鹿ね」

「つべ、やられた」

俺は呟きながら再度、竜巻による「風障壁」を張る。

相手の「世界觀」に関してまったく知識がなかつたことが失態の原因だ。

本来ならここで相手の「世界觀」を調べたいところだが、あいにく、そんな暇は与えてくれないようだ。それなら、起きた事から想像するしかない。

数秒前の出来事を思い返す。

「ハマノツルギ」を彼女の首筋にしつかり当てていた。そして、突如右腕に力が入らなくなつた、否、正確には痺れたのだ。おそらくこれは相手の能力。

突如襲つた重度の痺れに手を放してしまい、防備用の結界も、威嚇用の魔方陣も、「ハマノツルギ」のマジック・キャンセル能力でかき消してしまつた。その間に黒髪女は自身の髪を伸ばして、俺に絡み付けてきた。こちらが髪の毛に視界と新鮮な酸素を奪われている間に（酸素を吸う行為を行わないと、急激に能力が下がる設定がある）、自身はより髪を伸ばして距離をとつていた。

「風障壁」の上にさらに、10ほどの魔方陣を展開して、「最強^{クラティス}防護^{テ・アイギス}」（＊魔法先生ネギま！）を張る。

これでどんな能力だとしても、少しばし時間が稼げるはずだ。

右手を頭の上に持つていき、とんと叩く。

すると、目の前にパーソナル・コンピュータ（俺達は端末と呼んでいる）の画面が広がつた。同時に浮かび上がつたキーボードを打つ。

「機構」、「禍動」、「王権を果たす完全人形」……

……、でた。

「シー・キューブ」。負の思念を取り込んだ道具は呪われた道具と呼ばれ、呪いを持つようになる。それが酷くなると、道具が人にな

つたりする、らしい。興味ないけど。どうやら最初に攻撃してきたのは変形する謎の物体は、32の拷問処刑道具に変身できる「箱形の恐禍」^{キューブ}の能力のようだ。

つまり、基本は物理攻撃だが、呪いを使うことにより遠距離攻撃、最悪の場合は障壁を無視して直接ダメージを受ける可能性もある、ということか。

直接遣り合つのは危険。かといって距離をとつても同じ。

接近戦は向こうの十八番。遠距離戦では未知の呪いで狙い撃ち。

さあほどの「箱形の恐禍」の攻撃を思い出す。あれが彼女の基本攻撃。そして、調べたところによると、その他の「解禁」による攻撃も、基本的に打撃系。だけど、向こうにはまだアレがある。

「……、出てきなさい……」

竜巻の外から怒鳴り声が聞こえる。

時間を確認。そろそろ「風障壁」が消える。

両足に魔力を集中させる。

「特殊術式」「夜に咲く花」、無詠唱用発動鍵設定、キーワード「風精の主」！――

「遅延呪文」の詠唱。

「光の精霊」、柱、集い来たりて敵を射て、魔法の射手、集束・

ケントウホト・ウヌス

スピーリトカズ・カシテス

イニミクガギント

サギタ・マギカ

コンウェル

ゲンティア・ルーム
光の101矢『！』

101本の「光の矢」を集束させる。

「『デイラティオ・エフエクトウス
術式封印！！』」

来るべきに時に備えて、「光の矢」を封印。

風障壁が薄くなつていく。

……限界か。

「やつとこの竜巻、晴れてきたわね。いいかげん男らしく、いや、
違つたわね。紳士らしく正々堂々勝負しなさい。じつから行くか
ら

待つてました！

俺は腰を落として、次の体勢に備える。

「再現、『[ミンチ用のお肉の処理法]』、何度も叩き潰しましょう
(*シーキューブ)。行くわよ」

目の前の竜巻が晴れる。

まだ残つてゐる薄い風の幕を切れ裂いて、彼女は突つ込んできた。

左手にルービックキューブ。右手に……包丁？

柄の長いハンマーと槍が合体したような姿で、先端には牛包丁が

ついている。

それを、彼女はただ振り下ろした。

「……」

重い。だが、それだけだ。障壁で緩和すれば何ら問題はない。

「どうした？ 全然効いてないぞ」

「再現、『〔雑で豪放な食材の断ち方〕、乱切りにしまじょひ』（
* シーキューブ）」

彼女がぽつりと呟く。

すると、突如、衝撃が急激に大きくなつた。

「な……」

障壁が突破されるのを感じる。

とつたに後ろに飛び退いた。

足元を見てみると、ぽつかり床が粉碎している。

「つか」

いや、「つか」って。これ、当たつたらまじでヤバそんなん
ですけど。

彼女は包丁もじきを持ち上げると、再び振り降ろす体勢にはいつた。

「つげ、『解禁』、『気合防御』（＊魔法先生ネギまー）－」

気を体内に直接練り込み、防御力を瞬時に極限まで上げる。

「これでどう？　つて、なに素手で止めてるのよ！」

そんな」と言われても、

「氣合防御」は一種の裏技的技だ。すぐに効果を失う。

「『ルーカス光よ』（＊魔法先生ネギまー）」

「きやっ！」

田へらましに光を発する。

後ろに下がりながら、田標を見失った包丁もじきの一撃を回避。

「つなり」

彼女は包丁もじきを横に振る。

「再現、『編執狂的な碎片の刻み方』、微塵切りにしましょ！」
（＊シーキューブ）

縦横無尽に刃がブレて現れ、それぞれが暫撃を繰り出す。その数、さと1000。

つて1000?!

「まじかよ。『獣化』(*魔法先生ネギまー)…」

自らの体に流れる妖怪側の血を自覚めさせることで、肉体を変化させて攻撃力、防御力、素早さ、等の身体能力を格段に上昇させる。

「つぐ……」

「あら、さつきまでの威儀はどうしたの? 戻撃でもしてみなさいよ。できるものならね」

暫撃の重みで、腰が落ちそうになる。

「……そうだね。『精霊囮』(*魔法先生ネギまー)…」

1000の暫撃に襲われていた俺の体が消失する。

「え?」

「「」ちだ

彼女の背後に回る。

「つぐ、『二十番機構・開式銳形態《花弁剣ベラゼッラ》』(*シーキューブ)」

左手に持っていたルービックキューブを、槍のよつな細い長剣に変形させる。そして、俺を振り返らずに、長剣を後ろに突き刺す。

「はずれ」

俺の体が消失する。

「小賢しい。これならどうよー。『解禁』、『教会区』《奈落》』（
* シーキューブ）」

彼女の体から黒い靄が染み出す。そして、周囲に広がった。

「消えろ」

彼女の真上にいた風の中位精霊による俺の複製を、触れただけで消滅させる。

それでも靄の広がりは止まらない。どんどん周囲は彼女のだした闇に飲み込まれていく。

確かに、これではいくら複製を作つて接近戦で攪乱させようとしても、すぐに消されてしまい、本体の位置がばれてしまう。

彼女は完全に自分のフィールドを作り出している。自分に絶対的に有利な状況を作り出している。

今しかない。一撃で決める。

「瞬動術」で闇の中に突っ込む。

彼女はまだこちらの接近に気付いていない。だが、彼女の闇は確実に俺の「最強防護」を侵食していく。

「来たわね。って、うぐっ……」

「瞬動術」で彼女にタックルをくるわす。「瞬動術」は点から点へ高速で移動する行為。その間に障害物があれば、高速で衝突する。

不意打ちを受けた彼女は、防御に気が全然回せられていない。

「最強防護」が完全に消滅した。闇が俺を侵食しにかかる。

その前に。

「『風精の主』、『解放』！」

拳を前に突き出す。

「『桜華崩拳』（＊魔法先生ネギま！）！」

「魔法の射手」は拳にのせて撃つことができる。

崩拳に合わせて一〇一本の「光の矢」を彼女の体に叩き込んだ。

「……うぐ」

彼女の体が真っ直ぐ吹っ飛ぶ。途中にあつた建物に激突し、崩壊させても止まることはなく、彼女は飛び続け、三つのビルを倒壊させて、ようやく止まった。

「瞬動術」で近づいて、彼女を見下げる。

今のは効いたはずだ。だが、これだけではレベル40を倒しきることはない。ここで追撃すれば、彼女を倒すことができるだろうが。

「何よ。情けなんかかけないでさつとやりなさい。これはランキング戦なんだから」

これが現実だったら感動的シーンにでも発展しそうな状況だが、これはゲームなのでそんな風にはならない。

でもまあ、格好付けるのも悪くはない。

いくつか候補をあげる。

「俺はお前を殺さない」。

うーん。今までの関係が薄いので、あんまり重みがないな。

次。

「だから言つたら。戦うのは止めにしないか」と。

微妙だな。ひねりもなんもない。

次。

「…………」。

ただ見下げる。

……。

「…………」

「…………」

……。

なんか、沈黙。

そうこうしている間に、彼女の方は少し回復したようで、右腕を
こっちに向けて呟いた。

『『クーンズベリーの死の屋敷』』（アベニューハウス）（* C3）

右腕から飛び出したのは長くて太いきの柱。

それを俺に向かつて投げつける。

ひらりと恰好よく交わすために、体を傾ける。

そして、目の前が真っ暗になった。

一章 事の起りつ / 五話 VS 「シーキューブ」(後書き)

前回に引き続き、対「シーキューブ」編でした。
なんとか本編に入れそうです。

期末テストがあつたので、久しぶりの更新となりました。
お待たせしてすいません。

次回からはようやく本編の入り口です。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 主人公が戦いの中でネットをしていましたが、そんなことが可能なのですか？

A 可能です。「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」のゲームはバーチャルゲームの一つであり、仮想現実に人間を飛ばしているのは「カプセル」本体です。感覚としては、ウインドウを二つ開いている感じになります。

「…」といつても、実際そんなことする人はそうそういないと思うけどね。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「魔法障壁」による防御

「瞬動術」による移動

備考 主人公

高校二年生

高田 一志
たかた かずし

レベル 25

世界観 「結界師」

得意技 「結界」による攻撃&防御

備考 宏治の友達

松山 健一

レベル 19

世界観 「ポケットモンスター」

得意技 特になし

備考 宏治の友達

羽河 卓司

レベル 23

世界観 「仮面ライダー カブト」

得意技 「ライダー キック」による攻撃

「clock up」による移動

備考 宏治の友達

次章予告

一度は願う、現実からの逃行。

それは、彼らとて例外ではない。

望みが叶えられた時、その者が支払う対価とは？

次章、「現状」。

それはもう、遊戯ではない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

「次章予告」ですが、必ずしもその内容通りになるとは限りません。

また、「次章予告」は物語の全てを把握している作者からの視点で構成されており、その内容が次章のみで理解、判明するとは限りません。

「次章予告」の中に隠されるヒントを使って、布石を探してみて下さい。

すでに各所に最終話への布石が散りばめられています。

一章 現状 / 一話 転移（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「現状報告」には全てが書かれるのですか？

A いいえ。ネタバレにならない程度です。
「そりや そうよね」。

一章 現状 / 一話 転移

視覚を奪われた。

「！」

見えない攻撃に備えて、体を硬くする。

「……」

だが、攻撃はこなかつた。

だからといって、油断はしない。

もしかしたら、こちらの視覚を奪っている間に大型攻撃の準備をしているかもしれない。

探知用の魔法を使おうとしたら、闇が晴れた。

鳥のさえずりが聞こえる。人々の活気付いた声が聞こえる。

周りを見渡すと、そこはさつきまでの場所と違っていた。

「……市場？」

そこは、歴史の教科書でしか見たことのない、中世の市場だった。

布で周りを覆つただけの粗末なテントが並び、人々が行き来している。

「幻術か？」

おそらく、幻術の類を掛けられているとみるのが妥当であろう。

一先ず周りを確認しようと、歩き出した。

と、誰かに肩を掴まれた。

来た。

振り返ると同時に、拳を握る。

「おいつ、君。そのポケットに何を隠しも　うひ……」

鋭い踏み込みと同時に、踏み込み足と同じ方の腕でパンチを繰り出し、「弓歩沖拳」（＊魔法先生ネギま！）を放った。

「あれ？」

足元につづくまる人物が男性であることを確認する。

間違えた。

途端に、悲鳴が上がった。

そこでやつと回りを見渡す。

俺の周りには、何故か人だかりができており、皆が俺を見て怯えていた。

「ひつ、人殺し！」

誰かが叫ぶと同時に、人々が血相を変えて逃げ始める。

「つ、つ、つ……」

足元の男性がうめき声を上げた。

そして、何故か偶々近くにいた少年に、首に掛けていたペンダントを渡した。

「これを、娘に……」

「……」

「来い、『くわがね鐵』（＊アスラクライン）ー！」

なつ……

突如伸びる少年の影。

そして、そこから巨大な真っ黒の鎧武者が姿を現し始めた。

「『闇より深き深淵より』出し、其は、科学の光が落とす影』」

前半は少女の声で、後半は機械の声で、呪文を詠唱しながら現れる。

4メートル前後の巨大な「機構魔神」(*アスラクライン)、「
？鐵」。生贊の「副葬処女」(*アスラクライン)の魂を糧に、
「
演操者」(*アスラクライン)の願いを叶える人類の最終兵器。

「演操者」である少年の影を媒介に、「？鐵」はその姿を現した。

『政治小説の歴史』

雄たけびを上げる少年。

それに呼応して、「？鐵」は拳を振り上げた。

「『黒の拳撃』（＊アスラクライン）！」

数枚の魔法陣が現れ、「？鐵」の拳に力を与える。

その力は重力制御。
「黒の拳撃」は重力球を纏つた一撃。

わかるが、よつ！

拳が振り落とされる前に、「瞬動術」で、「？鐵」の背後に回る。

11

少年の顔に焦りが現れた。

いける。

「機構魔神」の弱点は、司令塔である「演操者」本体。「演操者」を倒せば「機構魔神」は制御を失う。

「『桜華崩け』」

「『教会区《奈落》』」

拳を振るつ前に、俺の周りを闇が覆つた。

これは、あの女の！

ここに来たか！

戦闘に備えて呪文詠唱を始めようとすると、いつの間にか後ろにいたあの「シー・キュー・ブ」使いに頭を叩かれた。

「何やつてんの！ わざと逃げるわよ！」『教会区《奈落》』

今度は闇をジェット噴射のように細く、大量に放出して空中に飛び上がる。何故か俺の首根っこを捕まえて。

「おいっ、ちょっと放せ。つか、何なんだよ！ これはお前の幻術か何かじゃねえのかよ！」

「はあ！？ 何言つてんの？ あんた、本気でそんなこと思つてたの？ ばっかじゃない！」

空中で言い合つ俺達二人。

そして、しだいに高度が下がり始める。

「おいつ、落ちてるぞー。つて、おいつー。」

「こつ、空中で俺を放しやがった。」

「『オソウジダイスキ』（＊魔法先生ネギまー）ー。」

「アーティファクト」で、魔法の簾を呼び出す。

と、俺が跨つた簾に、上空から髪長女が降つて來た。

「よつと。乗せてもらひやう。」

「意味分かんねえだけど。つて、お前重くね？.」

髪長女が乗つてから、急に簾の調子が悪くなつた。

「黙つてなさい」

一章 現状／一話 転移（後書き）

前回に引き続き、対「シーキューブ」編でした。
なんとか本編に入れそうです。

期末テストがあつたので、久しぶりの更新となりました。
お待たせしてすいません。

次回からはようやく本編の入り口です。

一章 現状 / 二話 状況確認（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 幻術はどのように働くのですか？

A 「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内の場合、予め定められた映像等が流れ込みます。

「まあ、今はそうではないっぽいけど。

一章 現状／二話 状況確認

ロング少女と町？を脱出し、人がいない川辺まで移動した。

移動しながら分かつことがある。

まず、これはこの女の攻撃ではない。

そして、この町は、外に向かっていくにつれて、発展が遅れている。

それだけならどこの町でも普通なのだが、この町はその差が段違いなのだ。

ESP（超感性知覚）の一種、「千里眼」（＊魔法先生ネギま！）で確認したところによると、町の中心は俺達の住む23世紀の世界と同じレベルに発達しているようだ。だが、俺達がさきほどまでいた場所は、中世ヨーロッパ並の設備しかない。

調べ進めていけば、魔法に関するあらゆる問い合わせの答えを開示してくれ、「まほネット」（＊魔法先生ネギま！）に接続して情報の自動更新も行う魔法学体系、「世界図鑑」（＊魔法先生ネギま！）によると、この町は「トーキュー」といつて、約2000平方キロメートルの広さを持つ（東京都のほぼ同じ広さ）、独立学術都市らしい。学ぼうとする意思と意欲を持つ者なら、例え死神でも受け入れる、というのがスローガンだ。建前上は、どんな権力にも屈しない、ということになっている。

中心約500メートル周囲は、学術都市の名に相応しい学術施設

と、権力に屈しないための独立武装組織、「インフレックス」の軍事施設があり、「千里眼」で確認した通り、23世紀と同等の科学技術を有し、「中枢区」となっている。

さらに外500メートル周囲は一般市民の住居地と市場が広がっており、大抵の国民はここに住んでおり、「生活区」となっている。「生活区」と「自然保護区」の境田である。

そして、それより外の地域は、まだ人の手の加えられていない大自然が残る、「自然保護区」になっている。今俺達がいるのが、「生活区」と「自然保護区」の境田である。

余談だが、俺の顔が全国指名手配犯として載っていた。

これらの情報を、ロング少女に伝える。

「一体どうなってるんだ？ これも『バトルロイヤル』の続きなんか？ どうみても『アドベンチャーワールド』なのだが」

「分からないわ。だからあんたと一緒にいるのよ。ネットの中で迷子なんて嫌だからね」

「迷子って、どういふことだ？」

「ログアウトできないのよ。この世界に来てから」

ロング少女が「故障かしら？.」と呟く。

ログアウトができない、つまり、現実世界に帰れない、ということだ。

それだけ聞くと、人生終わつたかのように聞こえるが、それほど大したことではない。「戻れない、戻れない」と言つてゐる世界は所詮仮初の世界で、数字の羅列によるプログラムなのだから、「カプセル」から本人を引きずり出せば、強制終了だ。引きずりだす人がいなくとも、「カプセル」の中で、生存するだけなら6ヶ月はもつ。もちろん、筋肉の衰えは著しいが、23世紀は筋肉がなくても生きていける。

「スリープモードは、 駄目か」

端末を広げてみるが、結果確認するまでもなかつた。

「これは、まずいかもな。たぶん、再起動もできそうにない。となると、もしこの状況で体力が0になると、いろいろ不都合が起こるかも」

「もし私達の体とのリンクがおかしくなつてゐるのなら、電子空間と現実の狭間に取り残されることになるわね」

「アドベンチャーワールド」で体力が0になると、「アドベンチャーワールド」から一度退出して、ログを新たに作つて、別人としてログインしなくてはならないのだ。死者は基本的に蘇らない設定なのだ。

「とにかく、このままでは埒が明かないわ。今は『ランキング戦』のことを忘れて、行動を共にしておきましょ。そして、何か気づいたら、互いに報告し合つこと」

ロング少女が方針を決めていく。

「ん？ 何？」

「いや、案外あつさりしてるんだな、と思つて」

さつさと殺せ、みたいなことを言つていた人間とは思えない結論ではある。

「どうで、自己紹介といかないか？ すぐに復旧するとは思つけど、折角なんだし」

俺はそつ言つて名前を名乗る。

「やつね。変態に名乗る名前はない、と言いたいけど、まあ、いいわ。近藤美紀よ」

一章 現状 / 二話 状況確認（後書き）

遂にロング少女の名前が分かりました。いろいろと固有名詞が出てきたので、その辺りは、また纏めておきます。

一章 現状 / 二話 指名手配犯じゃないんだって（前書き）

『なぜなぜに？』

Q ロン毛の少女とはいつ仲間になつたのですか？

A 飛行中、打ち解けました。

～本当にちやんとした話があつたんだけど、間違えて消しちゃつた（笑）

一章 現状 / 二話 指名手配犯じゃないんだって

「で、殺人犯さんは、これからどうじょうと考へてるの？ ちなみに私は寝床の確保を優先しておきたいのだけど」

近藤が俺に言った。

「いや、殺人犯じゃないから。って、寝床がいるのか？ どうせすぐには復旧するだろ」

「ここ数年、リンク切れは起こつていなかつたわ。それがここにきての突然のリンク切れ。時間が掛かる可能性も考えておくのが妥当よ」

「パーソナル・リアリティ」は、脳からの電気信号を筋肉ではなく、ネットを介して「パーソナル・リアリティ」内の各キャラクターの行動プログラムに伝達する。10年ほど前、まだ「カプセル」による情報処理スピードが遅かつた頃、アクセス数の上昇に耐えられずになんかちゅうリンクが切れていた。が、リンク切れが起るのの一瞬のことで、大した影響はなかつた。

「確かにそうだが……。寝床ならあるぞ。『アデアット』」

俺は「天狗之隱蓑」(*魔法先生ネギま！)を取り出して、近藤に説明する。「天狗之隱蓑」は全体が黒くて長いボロ布で、被ると表面も背景に同化する代物だ。これは中に和風の家が備わつてあり、戦闘用より移動用として用いられることが多い。

「そう。じゃあ、そのボロ布は私が使うとして、あの何でも調べら

れるつていう本でもつと調べてもられない？

この国、えーと、『トーキュー』だけ？『トーキュー』の情勢とか、その他もろもろ

「何で？」

「備えあれば憂いなしよ」

俺達が今いるこの「アドベンチャーワールド」はいつも俺達が使っている「アドベンチャーワールド」とは違うようだ。

この世界の総面積は地球一個分にもおよぶ。といつか、形が地球そのものだ。形だけは。

「トーキュー」は現実日本の東京都と同じ場所に存在する。どんな権力にも屈しない独立学術都市で、現実日本の位置に存在する民主主義国家「ジャポン」の中立武装組織の一つでもある。「ジャポン」の首都は現実日本の京都に位置し、噂では琵琶湖（「ジャポン」では「ビワ湖」と呼ばれている）の底に「ジャポン」の最新兵器が眠っているとかいないとか。最近政治家の汚職とかが激しくて、国を変えようとする武装組織が出て来て、数は少ないがゲリラ戦でがんばっているとか。そんな「ジャポン」に外国が興味津々だとうこう。

「なんか、やけに現実味のある世界ね」

奔洞が俺の後ろから「世界図鑑」を見ながら囁く。

「やつだな

俺は相槌をつぶ。

「でも、何でその革命者達捕まつていなーの?..」

俺は「世界図鑑」を操作する。

「えーと、何が、『トーキュー』って、世界的にも有名な独立学術都市で、『ジャポン』の都市なんだけど、どっちかっていうと、『トーキュー』ってこの国の周りに『ジャポン』があるような感じらしい」

「それで?..」

「『トーキュー』の独立学術都市としてのスローガンが『例え死神でも受け入れる』って言つただろ。『トーキュー』で学問関連に携われば、例え犯罪者でも『トーキュー』が匿つてくれるってことになつてこららしこ」

「これって、結構無茶苦茶じゃない?..

「へえ。じゃあ、あんたもそこそこ匿つてもいいんじゃない?..」

「だから違つて

「じゃあ向でその『世界図鑑』にあんたの顔が犯罪者として載つてるので?..」

近藤が「世界図絵」を指す。

「さあ？ サイバー口？」

「誰があんたを嵌めるつていうのよ。本当に心当たりはないの？」

「心当たりつて……。確かにゴーチさんつて呼ばれる人に拳を一発ぶち込んだけど、それで死ぬつてことはないと想うけど……」

「体が弱かったとか？」

近藤に言われて、何かそんな気がしてきた。

「…………」

「いくらヴァーチャルだからと言つて人殺しはよくないわよねー。ご愁傷様ね。その「一チさんの息子、やつと結婚相手が見つかっていつのに。ああ、涙が止まらない……」

近藤がハンカチで皿を覆う。

いや、娘だったような……

「止めてくれ。もういいよ、犯罪者でも何でも」

「ついでに言つとくと、あなたの首、賞金かかってるわよ

「えー？」

俺は急いで「世界図鑑」で確認する。

「 まじかよ」

「 まじょ」

「こいつその」と、『トーキョー』の学校にでも入らせてもらおうかな……って、ちょっと待て。これって消せるんじゃないかな?『アデアツト』」

俺は「力の王笏」(*魔法先生ネギま!)という魔法のステッキを呼び出す。

「力の王笏」はそれ自体がネットに接続することができ、「千人長七部衆」(*魔法先生ネギま!)が率いる電子精霊群を統制し、操ることができる。

「広漠の無、それは零。大いなる靈、それは壹。電子の靈よ、水面を漂え。」「我こそは電子の王」(*魔法先生ネギま!)

呪文を詠唱し、電子精霊との交信を開始する。なおこの際、魔方陣内に居る他の人間も同時にネットの中にダイブする。

「え? ちょっと! 何これ!」

近藤が叫んだ。

ネット世界に意識だけダイブする。

「仕事だ。俺の賞金首つていう情報を、改ざんしてくれ」

田の前に現れた電子精霊の一匹（電子精霊は鼠のよつな姿をして
いる）、「しらたき」（＊魔法先生ネギまー）に命令する。

「な、何それ？　かわいいじゃない」

「お褒めにあずかり光栄です」

しらたきが頭を下げる。

「はい、仕事」

俺はしらたきに行動を開始させる。

電子精霊自体が優秀なソフトウェアを所持しており、俺自身が何もしなくても高度な情報処理と電腦戦ができる。といつか、俺はそこまでパソコンが触れるわけではない。

「へえー。あなたの『世界観』って便利ね」

近藤が感心して呟く。

「逆にお前の『世界観』の方が不便なんだと思うぞ。あんなのどうやつて勝ち上がったんだ？」

「道具に変身して闇討ちしてたの」

「闇討ちって」

突然、警報装置が鳴り響いた。

「CAUTION!!」の文字が、俺達の周りを回る。

「どうしたの？」

近藤が俺ではなくしらたきに聞いた。

「敵自動巡回プログラムに我々の存在を気づかれました。データ量大きいからー」

しらたきがあたふたする。

他の七部衆達（だいこ・ねぎ・ちくわふ・じんこや・はんぺ・きんちや）も同様にあたふた。

「防御結界プログラムを開拓しろー！」

俺の指示にしらたきが頭を下げる。

「スミマセン。まだオプションのインストール終わってないんで無理ス

忘れてた！！

「ねえ、どうしたの？」

近藤が事態が理解できずに戸惑ってくる。

「オプションプログラム機能のインストールには数分掛かるんだ。完全に忘れてた」

「つて、これ使うの初めてつて」とへ。

「ああ。つて、来た！」

攻撃が飛んでくる。

「マグロ！？」

無駄データの奔流、DOSアタックが俺達に降りかかる。

「つか、『解禁』、『ちづ特製緊急防壁』（＊魔法先生ネギまー）

！」

「力の王笏」を翳して、防御結界を始動させる。

「ぐうつ……くくく……」

「やつた、持ち堪えました！」

じらつきが喜びの声を上げる。

「いや、全然よくない。俺の持ち球あれしかないとへ

「大体何でいきなり攻撃されてるのよー やっぱあなたが犯罪者だからじやないのー」

近藤が叫ぶ。

「攻撃の気配はありません」

じりたきが言った。

「撤退したのか？ それとも今のは威嚇だったのか？」

「どうちでもいいわよ。ここだと私の力が使えないわ。さつと田庄ましょ！」

「俺の手配書はまづするんだよー。」

「そんなの私の知ったことじやないわよ」

俺と近藤が言いつていると、ストロボ（ストロボスコープの略）の充電音みたいな唸りが聞こえてきた。

田を凝らすと、バレー・ボールほどの大さの球体物質が遠くの方に浮いてるのが分かる。バレー・ボールと決定的に違うのは、それが金属でできているかのように鈍く光り、さらに武器を有していることだ。違法電腦体を索敵する巡視用球体。

「『キユウちゃん』（*電腦コイル）ー

「え？ 何？ 『キユウちゃん』って？」

近藤が聞くが、今は答えている暇はない。

「じりたき、インストールはまだなのか！」

「スミマセン。後少しなんですけど」

俺は「つち」「ひ」を叩いて、ステッキをもつ一本刃喰する。そして、それを近藤に投げた。

「それ持つて。簡単な思考なら電子精靈が受け取ってデジタル化してくれる」

「それで何しろって？」

「自分の身を守ってくれ」

「はあ？ あなたの責任でしょ！ つて、きやあー！」

閃光が迸った。

「キュウちゃん」がビームを飛ばしたきたのだ。

近藤はステッキ振りかざしてビームを止める。

「死ぬかと思ったわ」

近藤が「はあ」とため息をつく。

俺も同様にため息をつく。

と、デジタルで打ち込んだ音声で愛嬌を振りまく声が聞こえてきた。

「ボクサッチャー、ヨロシクネ」

まじかよ。『サッキー』(* 電脳ロイド) のお出ましだ。

一章 現状 / 二話 指名手配犯じゃないんだって（後書き）

ひさしごとの更新になりました。
まことに勝手ながら、「Hチュー下」を「トーキュー」に変えさせて
もらいました。

一章 現状 / 四話 追われて（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 主人公に電腦知識はないのですか？

A 一般レベルしかありません。
／ただの凡人なのだよ。

一章 現状 / 四話 追われて

「サッチャー」。正式名称「サーチマトン」。空間管理室が作り出した、強力な違法電腦体駆除ソフト。視覚化された姿は、赤く丸みを帯びた形で巨大（高さ2・5から3メートル）。その巨大さが、ソフトの強力を表している。又、腹部（にあたる部分）に「キュウちゃん」を4機収納することができる。

「ねえ、ここから早く出たほうがいいと思つんだけど」

近藤ことうが後こうずさりしながら言いつ。

「確かに、そうだな」

俺は賛成して、ここから出る準備をする。

「……」

「どうしたのよ」

黙だまつてしまつた俺に、近藤が尋ねる。

「……戻り方が分からない

「はあ！？ あんた、何言つてるのー。自分の『世界觀』でしょ

「原作には戻るシーンがなかつたんだよー。」

「サッチャー」が滑るように近づいてくる。

俺達は後退しながら、「力の王笏」を振りかざす。

「ねえ、もしあのゲームに当たつたら、どうなるの?」

「データが初期化されて、一度と元には戻らない」

「それって、戻れるってことではないの?」

「戻れるだらうな。でも、電腦体が消されるわけだから、それはつまり、電腦の体と現実の体が分離してしまっわけであり、電腦の体が分離すると……」

「ストップ! 訳分かんないから、いいわ。よつは、あれに当たつたらマズイってことね」

近藤が最低限のことだけ確認する。

「ああ、そうだ」

「で、攻撃方法は何かないの?」

「これくらいしか。『解禁』、『DOSアタック』

マグロの群れを、今度は「さちが」「サッチー」に向けて送り出す。 「キユウちゃん」が、親機である「サッチー」を守るために、ビームを繰り出した。

その間に、俺達はできるだけウイルス駆除ソフトから離れる。

さつき確認したところによると、俺達の本体は、あの川辺で眠っている。ここは完全な電腦の世界だが、容は現実世界（本当の現実世界ではない）だ。だったら、空間管理室の管理外である民家や学校、病院、公園、神社などに逃げ込めばいい。

俺達は、自然保護区に向かって走った。おそれらしくも管理外のはず。

「キュウちゃん」のビームを、即席の障壁でかわしながら（距離ができるので、威力が低まっている）、森へと向かう。

森の中に入りきる必要はない。たぶん……。

ある程度走ったとき、ふと、ウイルス駆除ソフトの動きが止まつた。そして、俺達を探すよつこきょろきょろ辺りを見回す。

管轄外地域に入ったのだ。

「サツチー」達には、管轄外地域にいるこちらの姿は見えていない。

暫くすると、奴らは巡回に戻るべく、もと来た道を戻り始めた。

俺達はため息をついて、その場に腰を下ろす。

「はあー」

「案外、自然保護区つてでかいんだな。まだ森には入っていないのに

「別にいいじゃないの」

近藤が息をきらしながら言つ。

電腦体でも疲れるものなのか。

俺はそんなことを思いながら息を整えた。

呼吸が元に戻つてくると、安心感が湧き上がる。

が、安心したのもつかの間、突如、激しい視界のブレと、ノイズ音が俺達を襲つた。

「な、何これ？」

近藤の質問に答える間もなく、俺達の意識は薄れていった。

一章 現状 / 四話 追われて（後書き）

後一話が一話ぐらい、この章は続きます。

一章 現状 / 五話 敵？（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 二人はどうやって電子世界から脱出してきたのですか？

A 一定以上の衝撃が本体である身体に与えられると、安全のため自動で戻つてこれるように設定してあつたようです。

～そういう設定にしてたけど、忘れてたんだよ、主人公は。

一章 現状 / 五話 敵？

頭をぶつけられた。

痛い。誇張表現なしで痛い。

「つぐづー」

頭を押さえながら、眼を覚ます。

「起きなさい」

女子の声がする。

近藤の声ではない。

俺は眼を開けた。

まず、自分の足元を確認する。電脳空間なら、足が触れている部分から歪みが生じているはずだ。

よし、戻つて来ている。

顔を上げると、頭を再度殴られた。

「いでー」

「黙りなさい。そっちの方は起きた？」

「はい。起きました」

別の女子の声がする。

「やつ。じゃあ、お前」

女子？は俺の頭を押さえつけたままだ。

「『有力者』？」

俺は、地面を見つめながら、沈黙を守ることにした。

じつは、この場合、やはり情報は何も伝えないに限る。

質問を聞くことで、現状を把握するのだ。

「じゃあ、そつまひつへ。

近藤も俺にならって沈黙を守る。

「まあ、いいわ」

女子？はあっけなく追求を止めた。

「『有力者』？、と聞かれて答える訳がないよね。私達は『革命団』（仮）よ

「革命団」（仮）と名乗る女子？はやいで、俺達の反応を待った。

反応が何もないのを見て、女子?は口を開いた。

「やうね、『革命団』と言つだけで、本物かどうかなんて分からないものね。頭がいいわね。山下君」

男が俺の名前を言つのと、近藤が飛び上がるのとが同じだった。

「しまつ……」

女子?の声で状況を瞬時に想像する。

近藤は脱出した。

本当にもう少し話を聞きたかったのだが、仕方がない。

「おつ……」

「瞬動術」で女子?の手から離れる。

やつと自由になつた頭を上げて、一人（推定）と対峙した。

「やつぱり、『有力者』だったわね」

女子?が俺達を見て確信する。

「だつたら?」

近藤が挑発を掛けながら、俺と反対側に、女子一人を挟んで着地する。

「あなた達を守つてあげるわ」

「はあ？ 何言つてゐるの。いつちこは、あんたらに殴られた恨みがあるんだからねー！」

近藤が女子?に向かつて走り出した。

おいおい。

あいつ、そんなに短氣だったのか。

「山下ー、じいつらを捕らえて、聞き出すわよー。」

「了解」

まつたく。

相手の力も分かつてないのに、飛び出すなよな。

俺は溜めていた魔力を、そして、気を一気に開放させる。

「『解禁』、『感掛法』（＊魔法先生ネギマー）」

シユンタクシヌンティケイメイン
氣と魔力の合ー。

左手に「魔力」、右手に「気」を溜めて融合し、体の内外に纏つて強大な力を得る高難度の究極技法。発動すると、肉体強化、加速、物理防御、魔法防御、鼓舞、耐熱、耐寒、耐毒等の作用が働く、超便利技だ。

魔力は精神力を、気は体力を消耗させるので、「感掛法」は消耗が激しい。だが、得体の知れない敵にぶつかるには最適と言えよう。

俺はポケットに両手を突っ込んで、自然体で構える。

「『解禁』、『教会区』《奈落》！」

近藤が毎度お馴染みの闇を女子?に向かって噴出した。

それに合わせて俺も、女子?を攻撃する。

「『解禁』、『居合い拳』（*魔法先生ネギまー...）」

できるだけ、小さな声でぼそつとつぶやく。

「どうしたの? 来なつ……」

少女?の言葉が止まった。

お腹を右手で押さえて、ダメージを確かめる。

「確かに今のは物理攻撃だった。けど、視認できない。氣弾攻撃?」

俺はそれには答へず、再度攻撃する。

右手首に一発、左手と、左肘にそれぞれ一発、右足首と左太腿に一発づつ、そして腹部に再度一発。

少女?は見えない攻撃に顔を歪め、ただダメージを受け続ける。

だが、倒れない。

関節部分を何度も狙つたにも関わらず、顔を壓めるだけで、バランスが崩れない。

「なるほど、刀の『居合い抜き』ならぬ、拳の『居合い抜き』ね」

少女？が技の正体に気づいた。

「ポケットを鞘代わりにして目にも止まらぬ速さでパンチを繰り出しているわけね。しかも、魔力によって極限の速度にまで拳速を加速していく、撃つ出されるのが『氣弾』ではなくただの『拳圧』とは。察知が難しくて困るわ」

少女？は「居合い拳」をその体に受けながら、淡々と言つてのける。

「でも、その程度なら大したダメージにはならないわね」

「なら、受けてみるか？」

挑発に乗り、俺は全開で「居合い拳」に入った。

一章 現状 / 五話 敵？（後書き）

新たなキャラが登場しました。この少女？、最初の予定ではしぶいおじ様になる予定だつたんですよ。

一章 現状 / 六話 一方的な力（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 革命団（仮）と名乗ったのは何故ですか？

A 相手が何者か分からなかつたために用心したからです。
「それでもその名で予測はつくと思うよね？」

一章 現状 / 六話 一方的な力

ポケットに両手を突っ込む。

今度は予備動作を大きく。

「豪殺居合い拳」（＊魔法先生ネギま！）。

大砲クラスの一撃を、真正面の少女？に放つ。

「！」これは……

少女？がとっさに横に飛びのいて、攻撃を回避する。

腰を屈める。「瞬動術」。

「え？」

背後に回って、「豪殺居合い拳」を放つ。

「なつ……」

腰を捻つて、回避。

そこに、普通の「居合い拳」を放つ。

「つぐ……」

先ほど同様、ダメージはないようだ。だが、足止めさえできれば。

潰せる。

「これは、まずいかもね」

少女？が呟いた。

「豪殺居合い拳」はその名の通り、当たればそれでアウト、一撃必殺級の一撃。だが、予備動作が大きく、避けられやすい。そこを見えない打撃である「居合い拳」を併用することで、弱点を補強する。

足止めは出来た。放つないう。

「豪殺居合い拳」！

足が止まった少女？に放つ。

少女？は回避行動を見せない。

「豪殺居合い拳」が迫る。

少女は右手を下から上に、「豪殺居合い拳」が迫ると同時に振り上げた！

「つな、なに！」

「豪殺居合い拳」が消滅する。

「こんな芸当ができるのは……。

「……無効化能力。右手で消したつことは、『幻想殺し』（*とある魔術の禁書目録）か！ だが、しかし……」

「そう、『幻想殺し』は 異能の力しか打ち消せない。君の攻撃はただの拳圧よね」

俺は後ろに下がつて、呪文を詠唱する。

「『魔法の射手、光の101矢』！」

101本の「光の矢」を、少女?に向かつて四方八方から放つ。

「面倒ね」

少女?は、襲い掛かる「光の矢」を、あるものは避け、あるものは潰していく。

その間に「瞬動術」で接近する。

無詠唱で「桜花崩拳」を叩き込む。

「だから、魔力付与のパンチじゃ、普通のパンチになるつ……！」

「桜花崩拳」を右手で受け止めた少女?が、驚きの声を上げる。

「魔力を無効化してもこの威力。なかなかやるわね」

「だったら、倒れてくれない？」

相変わらず平然と受け止める少女？に向かって、俺は言った。

「それは無理ね。君と私とでは、能力の差がありすぎるわ。私の前では、ほとんどの能力が脅威にならない」

右足を踏み込み、肩から当たりにいく。

「だったら、」

後ろに下がった少女？に対し、俺もいつたん退く。

「これなら、どう？」

俺は「感掛法」によって強化された肉体を使って、近くにあった人間大の岩を持ち上げて、少女？に向かって投げた。

「無効化っていうのは、物理攻撃には効かないものだからな

「残念」

少女？は飛んできた岩に触れて、破壊した。

「私の前では、どんな攻撃も無力よ」

今度は少女？がこちらに接近してくる。

無造作に突き出された右手。

俺は触れないように、その右手を避ける。

まずい。

「瞬動術」で後方に飛んで、距離をとつた。

少女？はどうやらこちらの攻撃を何でも無力化できるようだ。それだけでなく、純粹体術も、物理攻撃も無力化している。

その能力を喰らつたら、どんな影響を受けるのか？

「念話」^{テレパス}（＊魔法先生ネギマー）を近藤に繋ぐ。

「近藤、ここは退いつ。あれば勝てそうにない」

「あ？ 何言つてるの！ こつちはあとちょっととなんだからって、やつてやうじやないの、『八番機構・碎式円環態《フランク王国の車輪刑》』、稼動！」

近藤は少女？との交戦を止める気はないようだ。

少女？の後ろの方で大車輪が動き回っているのが見えた。

彼女達をだいぶ移動して戦っていたようだ。

「いいの？ 足を止めて」

少女？がこっちに向かつて來た。

「つぐ……」

突如、頭を強烈な頭痛が襲う。

あまりにも痛みに、体が浮き立つ。

俺はその場に座り込んだ。

「へえ、結構耐えられたわね」

頭痛が止む。

俺は、はあはあと息を切らしながら、少女の顔を見上げた。

「い、これが、耐えてるに入るのか？」

「感掛け」がなければ、一体どれほどどの痛みになるのか？

「ええ。ううよ。まあ、でも、これで終わりよ」

少女?は壊から取り出したナイフを、俺の背中に振り下ろした。

一章 現状 / 六話 一方的な力（後書き）

なんか最近、バトルばかりになっていますね。なんとかして「学園」までは辿り着くつもりです。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 技名を言わずに技を行使していますが、可能なのですか？

A 可能です。一定以上の技の行使を行うと、それまでのデータから「パーソナル・リアリティ／自分がだけの現実」が自動で技を発動させます。

～できる技とできない技があるよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「魔法障壁」による防御

「瞬動術」による移動

備考 主人公

高校二年生

近藤 美紀
こんどう みき

レベル 42

世界観 「シーキューブ」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

備考 ヒロイン

高校二年生

切れ気味体质？

高田一志、松山健一、羽河卓司は行方不明

次章予告

たとえ何も分からなくても、その身の危険は理解できる。

たとえ何も出来なくても、その身の保身は必要である。

なぜなら、命は一つなのだから。

次章、「入隊」。

少年は、己の牙を抜かれたことを、まだ知らない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

一章が終わりました。これからも頑張って続けていきます。

三章 入隊／一話 復活、できるよな？（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 前回の続きですが、その、「データ」というのはどんなものですか？

A 技名を口にする直前の脳の電波の発信、呼吸の仕方、肺の膨らみ、筋肉の弛緩等です。

「肺や筋肉というのは、「パーソナル・リアリティ」自分だけの現実」内に作られたアバターの物だよ。

三章 入隊 / 一話 復活、できるよな？

B A D E N D

転生初日冤罪編

死亡END NO.14

その後、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」は復旧せず、現実と仮想現実の狭間に取り残された山下は、一度と目を開けることはなかつた……

やり直す

終わる

攻略のヒント…どこで選択を間違えたか、考えてみよう

近藤と手を組んでよかつたのか？

安易に攻撃を繰り出して（第一部／一章／一話）よかつたのか？

謎の敵の話を聞かなくてよかつたのか？

そもそも「ランキング戦」に参加してよかつたのか？

セーブポイントに戻ってやり直してみよう
きつと攻略の糸口が掴めるハズだ！

勝手に終わらすなーッ！！

せめて「やり直す」だろッ！！

叫んだ。

「BAD END」機能。危機的状況になると偶に現れるおまけ
能力だ。これは、「魔法先生ネギま！」の「世界観」を選んだ俺だけのもの。

これが出てくるといつとま、俺はまだ死んではない、ということになる。状況打開策が思い付いていない、という意味にもなりうるが。

田の前には「BAD END」の文字が浮かんでいるだけ。周りは真っ暗で、おそらく何も設定されていない。

おそらく、俺の体（仮想現実の方）が田を覚ませば元に戻れるのだろう。

自分の体を見てみようと首を動かすが、体が見えない。いや、ないのだ。体も、腕も、首もこの世界では最初から設定されていない。唯一視覚と意識だけが残っているのだ。

一度、考えてみたことがあった。

「バーチャル・リアリティ」のゲームは、脳とコンピューターを繋いで遊ぶ。肉体に届くはずの脳からの電気信号を変換し、コンピューター上のネットワークに取り込む。だったら、「カプセル」に入つて電気信号を送りながら、こちら側（脳）に電気信号が帰つて来なければ、俺達はどうなるのだろう、と。

外部から見れば、意識不明の重体、内部から見れば、無の中に無として放り出された状態。

視覚が残れば世界の監視者、聴覚も残れば幽霊同様。五感が残つてもその証拠となる電気信号が返されなければ植物人間。

まあ、そんなことは天文的確率で起ることがないのだが。仮に起きたとしても、すぐに対応がなされるだろう。

それより今は現状把握。

この様子だと、おそらく肉体がそれなりのダメージを受けているのだろう。

派手に喰らつたからなー。

俺は背中を摩る、つて背中ないし。

それにしても、問題はある能力。「幻想殺し」じゃないとすると、一体何なんだ？

復活（たぶんできる）の時に備えて、俺は少女？の対策を練る。

魔法攻撃は無効。おそらく氣弾攻撃を同様無効。

純粹物理攻撃も脅威にならず。だが、攻略の鍵はある。

俺は対策法を頭の中で纏めながら、復活（まだ死んでないよね？）の時を待った。

目を覚ましたのは、時間の感覚がなくなつた頃だった。

まず最初に目に入ったのは、立派な大黒柱だった。

つて、大黒柱？ 白い壁の保健室じやないのか？

といふか。

「俺んちじやねえか！」

正確には「天狗之隱蓑」の家だが。

確かに「天狗之隱蓑」出しつぱなしにしてたよつ（第一部／二章／三話）。

「あ、起きた？」

近藤いそとうが大して心配していなさそうに、といつより、昼寝ひるねしていたみたいに言つた。

俺、刺されたんだけどな……。

三章 入隊 / 一話復活、できるよな？（後書き）

今回はあまり話が進みませんでした（いつもそれから……）。

三章 入隊 / 二話 目覚めの悪い復活（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「BAD END」機能は、主人公の不死身フラグですか？

A いいえ。ゲームオーバー寸前で発動するだけです。
主人公はチートじゃないよ。

三章 入隊 / 一話 目覚めの悪い復活

刺された背中を今度こそ摩る。

傷跡がない。

体を起こして近藤こんどうと向き合つ。

「なあ、あれからどれくらい経つた?」

「丸一日?」

丸一日?

うそだろ。

それだけの間、昏睡状態にありながら、俺は少女一人を悲しませることができないのか……。まあ、所詮ゲームだし。

つじやなくて。

「一日間もあつたのに、『パーソナル・リアリティ』自分だけの現実』はまだ復旧していないのか?」

「ええ……」

俺は現状を分析する。

「力プセル」の利用は、使用者が未成年の場合、その保護者の要

請に従つてネットワークの接続を切ることができる。うちの親なら、丸一日「カプセル」を利用した段階で、接続を切られるだろう。それが、丸一日とは……。

「いつの世界の俺は、少女?に完敗。謎の組織に捕まつて、身動き取れない。」

「近藤、この中には彼女達はないのか?」

「ええ。抵抗しても抑え込むことは可能だからって、外で見張つてるわ」

「まったく、なめられたものだ。」

「だが、それが幸いでもある。」

「『アーティスト』」

「世界図絵」を呼び出し、この世界の事情を、今度は入念にチェックする。

「そう言つて、近藤は「調べ物リスト」を俺に手渡す。

「あんたが眠つて役立たずな間に、あいつらとの会話で意味が分からなかつた単語、知識全集よ」

「何これ?」

こいつかの頃田に田が留まる。

「やう言えば、『有力者』って呼ばれたような気がするな」

「アスラクライン」との対決を思い出し呟いた。

「はあ？ だつたらなんでそのとき調べてないのよ。」じつこのまゝの
は、即実行でしょ」

「そんなこと言つても、あのときはよく状況が分からなかつたし。
つていうか、俺はあいつを倒していろいろ状況を知ろうと……」

「はいはい。言い訳は結構。大体、あんた倒せてないじゃない

「お前が邪魔したからだろ」

「助けてあげたのよ。だつたらあんたは、あの黒い変な玉を防げた
の？」

「いや、それ後で分かつたことだし。それともあれか？ お前はあれが飛んでくると初めから分かつていたと」

「ええ。さうよ。あなたの『世界觀』が『魔法先生ネギま！』だつてことも、十七歳だつてことも、本名をそのままハンドルネームにしているつてことも、最近成績が伸び悩んでいるつてことも知つてゐるわよ」

「せうかよ……つて、はあー？」

近藤の発言に、「世界図鑑」を操作していた手が止まる。

「何でそんなこと知ってるんだ？　お前、俺の知り合いか？」

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」で使う自分のアバターは、自分の好みに合わせて外見を作り変えることができる。だが、この作り変えには、一万もの設定事項があり、大抵の人間は自身のデータ（誰もが細かい情報が記載されたパーソナルデータを持っている）から、自分と同じアバターを作るが。

「違うわよ。実は、あなたが寝ている間に……」

「心を覗いたのか！」

「『告解』（＊C3）させてもらつたわ

？

後で「告解」も調べておくこととする。

三章 入隊 / 一話 目覚めの悪い復活（後書き）

少し遅くなりました。

次は、この世界の歴史とか、そういう話になるので、バトルはちょっとお預けになりそうです。

『なぜなぜに？』

Q 「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内で睡眠中は、肉体はどうなるのですか？

A 肉体も寝ています。肉体が寝るように、「カプセル」が脳の代わりに、体に信号を送ります。
「副作用とかはないよ。

ジャポン国は極東の島国で発展が遅く、当初、統一政府というものがなかつた。

だが、「有力者」の出現で情勢は大きく変わつた。

それまでも「有力者」の存在は確認されていたが、この頃ある国家が海の向こうの大國から「有力者」に関する文献を仕入れ、「有力者」を貴重な戦力として活用するようになる。そして、2年といつ驚くべき早さで統一、国名をジャポン帝国とし、ジャポン暦を採用、この年をジャポン暦〇年とする。

その後いろいろあつて（詳細は以後）、ジャポン暦1000年、トーキュー特区成立。

その後もいろいろあつて（詳細は以後）、ジャポン暦1880年、第一次世界大戦勃発。だが、ジャポン国は中立を保ち、軍用品の開発、輸出により国益を上げる。

ジャポン暦1945年、第二次世界大戦勃発。前回同様、ジャпон国は戦闘には参加せず、兵器を売つて国益上昇。

ジャポン暦2120年、第三次世界大戦勃発。終戦時に「世界平和協定」が結ばれ、形式上世界は平和になつた。

ジャポン暦2260年、これまで帝国を名乗つていたジャポン帝国が、時代の流れに逆らえず、民主主義国家ジャポンとして再始動。

ジャポン暦2280年、かつての帝国主義はが反乱を起します。これを「復古の乱」とし、翌年鎮圧。

そして、現在に至る。

「で、『トーキュー特区』って何なの？」

「ちょっと待つてくれ。えっと……、これだ」

天然の魔力妨害石が多量にあり、魔物、魔獣、が存在する太古の森が周囲に広がる「トーキュー特区」は、長年の間外部からの進入を許さず、戦に巻き込まれることがなかつたため、発展の全てを学問に注いできた。そのため、ジャポン暦980年にその存在が確認されるまで空想の国家だと思われていた。

「トーキュー特区」側に戦闘実践はないものの、使用兵器の差にジャポン帝国は侵略を断念。「特区」とし外部の資源、また、国内の全研究データの提供と引き換えに、ジャポン帝国の傘下に入ること、帝国側からの留学の許可、技術の提供などをとりつけることに成功。

ジャポン暦2200年に「ワープ航法」を確立させ、「トーキュー

「特区」への移動のためジャポン国内に一箇所、世界の主要都市8箇所、計10箇所に「ポートゲート」を設置。

現在、世界唯一の独立学術都市であり、学問の最先端を進む特区であるが、周囲の「自然保護区」から発せられる強力な魔力磁場のため、現地に住む人以外は磁場に対する耐性がなく、「特区」に入つてもすぐに体調を壊してしまつ。今のところこの磁場を取り除く方法は発見されておらず、そのため、外部からの留学生等はほとんどない。磁場に対する耐性がないのはジャポン国内の人間も同じであり、「特区」はほぼ独立国家となつており、自治権、自衛権が与えられている。

「へえー。なるほどね。で、『有力者』って何なの?」

「えーと……、『独自の世界法則』のひとり、現実に縛られず、異能の力を發揮できる者』らしい」

「『独自の世界観』つね。まるつきり『パーソナル・リアリティ／自分だけの世界』の『世界観』じゃない」

「確かにそうだな。それじゃあ、『告解』つと……」

キリスト教の幾つかの教派において、罪の赦しを得るために必要な儀礼や、告白といった行為をいつ。

「つてことは、お前、俺が寝ている間に一体何を聞き出しだんだ!」

「さあね? でも、まさかあんたの趣味がそんなマニアックなものだつたなんて。これはちょっとねー……」

「忘れる! お前が聞いたことは全て幻聴だ! 夢を見ていたのだ!
! そうだ! さつに決まっている。さつだと黙ってくれ……」

二章 入隊 / 二話 本当の意味での現状確認（後書き）

今回は戦いの要素がありませんでした。最近、戦う話がありませんが、戦うときはがんがん戦うので、ご期待ください。

三章 入隊 / 四話 続、現状確認（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「ジャポン暦」と西暦のずれはどのくらいですか？

A 「ジャポン暦」の方が西暦より数百年単位で未来です。
→正確には決めてないけど。

「お、やつと起きたわね」

近藤いそとうと二人でぎゃーぎゃー言いっていると、少女少女が「天狗之隱蓑てんぐのいんそう」の中に入ってきた。

俺はやつと構えるが、少女少女は手を振ふって、戦闘意欲がないことを示す。

隣の近藤が構えていないのを確認してから、俺は自然体に戻もどって、少女少女と向き合あわせる。

少女少女は、見た目普通の女の子だった。年は俺達と同じか、一つ上ぐりい（アバターだから、実際の年齢は分からぬけど）。耳に掛かるか掛からないかの境目でカットされた髪が印象的。

ふと、背中を刺されたときのことを思い出した。

痛みを感じる暇さえなかつたんだよな……

となると、レベルとしては少なくとも40以上。

「で、保護される気にはなつた？」

そういえば、そんなことを語っていた気がする。

近藤から聞いた話じや、相手側にこちらへの戦闘意思はない様子。「天狗之隱蓑」に監禁されてはいるが。

「保護つて、じりして私達が『保護』されなくつちいけないの？」

あくまで強気の近藤。まあ、所詮ゲームの話だしね。

「あなた達が『有力者』だから。このままだとあなた達、捕まつて政府のいこよしにされるわ」

「『捕まる』つて、私達が？」

「さう」

近藤は「はあ？ 何で私が？」とじぶ満なお様子。

そりやあ、『一チさん（で合つてたつけ？）を殺した（実感がまったくない）のは俺だけ』

「まったく。町の外に出ているものだから、私達に助けを求めてきたものだと思つてたのに。もしかして何も知らないの？ 無知？ てこうか馬鹿？」

なんだ、なんだ？ 何故悪口に発展する？

近藤が動かないか、隣に田をやりながら、俺が近藤の代わりに答える。

「俺達、記憶喪失なんだ」

「……」

じつと見つめてくる近藤が痛い……。

だが、相手がコンピューターのプログラムなのか、現実に存在する人間の人格なのが分からぬ以上、これは最適の処置だと言える。

「コンピューターなら、状況説明を、人なら笑い飛ばして（？）くれるだろ？」

「誰かに忘却魔法でも喰らった、ってこと？　あ、いい、答えなくて。よし、説明してあげる」

「　はあ……」

「このジャポン国が昔、といつてもつい30年ほど前まで帝国国家だったのは知ってるわよね？」

「一応は……」

「で、民主国家になつたわけだけど、帝国時代が名残惜しい人達がいたわけ。で、『復古の乱』という内乱が起こる。『有力者』達を両方戦闘に参加させ、ジャポン国は崩壊寸前。で、焦つた政府は『有力者』の能力を敵味方問わず、一時的に封じることにしたの。帝国派の主戦力は『有力者』だったので、戦線は後退。政府側は『トーキュー特区』が開発した兵器を手に、次々に帝国派を倒していく。そして、内乱は鎮圧。けど、政府は『有力者』に対して恐怖を覚えた」

少女？は淡々と説明する。

「『復古の乱』は鎮圧したものの、一時は戦線が『キュー・シユ』から首都の近くの『ビワ湖』にまで及んだ。だから、政府は『有力者』を管理することにした。それが、『ジャポン・アカデミー』。政府は『ジャポン・アカデミー』に『有力者』を集め、そこにいない『有力者』を探している」

「見つかったらどうなるんだ？」

話をずっと聞いているだけにするつもりだったが、なんとなく口を挟む。

「『ジャポン・アカデミー』に入るよう勧められる。断つたら、殺されるわ」

殺されるって、またオーバーな。

顔に出たらしく、「分かつてないわね」と少女?がため息をつく。

「今まで何人の『有力者』が殺されたと思ってる？先の大戦で、何人の『有力者』が生き残れたと思ってる？1%よ、たった1%。政府は先の大戦鎮圧後、徹底的に『有力者』狩りを行った。生き残る方法は一つ、政府に従うこと」

「分かつた？」と少女?は俺を見つめた。

正直、情報不足で（「ジャポン・アカデミー」って何だよ）何とも言えなかつたが、ここは雰囲気に任せて曖昧に頷く。

「で、仲間になつたら、政府の追つ手から守ってくれる、と」

「ええ、やうよ」

「でも一体どういった組織なんだ?」

少女へ少し間を置いて答える。

「かつての反政府勢力の意思を継ぐ、現在唯一の反政府組織、『バツファーローズ』。ここにこの反政府行動は全て私達の仕業よ」

皿邊さずに言われてもなあ……。

でも、まあ、悪い組織じゃないんなら。

と、軽い気持ちで近藤を見る。

ん?

「バツファーローズ」?

近藤は考え込んでこる様子で、「うーん?」と唸つてこる。
「少し、時間をくれないか?」

テレビでお決まりの台詞を言つて、一度少女へと退出してしまひ。

「何をそんなに考えてこるんだ?」

少女?がいなくなつてから、俺は近藤に聞いた。

「私達の現状」

「現状って、捕まってるんだろ?」

「そつちじやなくつて」と、近藤は手を振る。

「現実の話。『カプセル』の中で眠っている私達の体の話よ」

「それが、どうかしたか?」

「どうもいつも。心配じやないの? 精神が元に戻れていなーいのよ、
今の私達」

「まあ、確かにそつだけど、ここにいたらそんな実感ないしな」

「信じられない」と近藤は呟く。

「おかしいと思わない? もつ一日以上経っているのよ。その間、
『ログアウト』できるようになつた形跡は一切なし。うちの家庭だ
つたら、とつべ『強制終了』させられているはずなのよ」

近藤の言葉に、俺は頷く。

「確かに、言われてみればそうだな。俺だつて『強制終了』されて
いいはずだ。変だな……」

右田のすぐ横の部分を軽く叩いて、メニュー画面を呼び出す。

自身のゲージは表示されるが、終了画面がメニューから消えてい
る。

「でも、まあ、『カプセル』の中に閉じ込められているんだとして
も、数ヶ月はもつし」

「何言つてるのよ。学校の勉強はビバアーベーのよー。」

確かにそうだ。言われるまで気づかなかつたが。

宿題は止のよつて溜まることだらつて、授業につけていけなくな
る。

「早く戻らなくちやまづこじやんつて、あれ?」

メニュー画面を確認しながら、新しい「コマンド」が増えている」と
に気づいた。

「『神のお世話』? 何だこれ

見るからに、現状を説明してくれそうなコマンド名。

というか、二つの存在で今の現状が人為的だということになる
んじゃないかな?

「コマンドに手を伸ばす。

「あ、こりつ、訳も分からぬものに触るんぢやつ……」

突然、意識が遠のいていく。

何回目だらうか? 肉体(アバターの方)とのリンクが途切れる

のは……。

それこじても、「神のお告げ」。「預言お前が」。他こもつとここの前があつただりづ。

三章 入隊 / 四話 続、現状確認（後書き）

三章はこんな調子で続きます。バトルはもうすこしお預けになりそうです。

三章 入隊 / 五話 神のお告げ（前書き）

『なぜなぜに?』

Q 「痛みを感じる暇がなかつた」 = 「レベル40以上」と判断した根拠は何ですか？

A 今までレベル40以下の相手に、一瞬で負けたことがなかつたからです。

～主人公、ちゃんと負けたことがあるよ。

二章 入隊 / 五話 神のお告げ

田を開くと、そこは「ウエイトルーム」だった。

暫くして、近藤も「ウエイトルーム」にとんできた。

見渡すと、他にも何人かの人間が見える。ただのロード待ちか、それとも「神のお告げ」を求める者か？

「まつたく、どうなってるのよー。でも、まあ、この様子だと帰れそうね」

近藤は安心したようだ。

さつきまでの世界は「アドベンチャーワールド」だったのだろう。

「ウエイトルーム」へ帰還できたということは、「パーソナル・リアリティ／自分だけの世界」の本体とのアクセスはできている、ということだ。だったら、ログアウトもできるはず。さきまでのは、まあ、トラブルに巻き込まれたとしても思つておこう。所詮は人が作ったプログラム。ミスはあつて然るべきだろう。

と、楽観的に考えていたら、脳内に直接声が響いた。

「皆さん、お久しぶりです」

これは、「ランキング戦」のときに案内役をしていた電子音声。

だとしたらこの状況は……。だが、何故？

「ま」に勝手ながら、皆様を『アドベンチャーワールド』に強制転移させてもらっていました

「やつぱつ……」と隣で近藤が呟く。

「『存知だと思われますが、現在、あなた方はこの仮想現実の中に閉じ込められています。もちろん、こちら側から皆様を解放することができます。ですが、皆様は『トーナメント』に出場しようというような方々です。この『アドベンチャーワールド』はこれまでになかったもの。現実の地球をモチーフに、その上に仮想現実を拡げております。『トーナメント』に出演するようなあなた方なら、この仮想現実の中でも生きることができます。これは、私どもからのプレゼントです。現実とは違う、まさにパラレルワールドというべき世界。皆様が夢にまで見た世界だと思います。思う存分、新たな世界で活動なされることを期待します。

これはもはやゲームではなく、現実です。あなた方の現実です。現実世界の方ではこちらから、ゲームを止めることができないようによつて、させてもらっています。何も心配することなく、新たな世界を堪能できます。

ですが、それが本望ではない方もいるでしょう。その方々のために、特別に脱出方法も用意させていただきました。『アドベンチャーワールド』に存在する七つの『聖地』を掌握し、このコマンドを開いてください。全員を強制的に現実世界へ帰還させるようになります。

ただ、皆様に一つ肝に銘じていただきたいのは、これを現実とするため、『アドベンチャーワールド』で生命活動停止となられても、

『ウエイトルーム』に来ていただぐだけで、復活する」ことはできません。また、現実に帰還することもできません

周りを見渡すと、皆それぞれ喜びの笑みを浮かべていた。

隣の近藤を見る。

じつと考え込む様子。

俺も両手を放り上げて素直に喜ぶことができない。

だつて、これつて……。

「何か質問があるときは、『神のお告げ』をお聞きください

それを合図に周りから歓声が上がる。

そして、次々に「アドベンチャーワールド」に帰還していく。

残ったのが俺と近藤だけになつてから、「パーソナル・リアリティー／自分だけの現実」の応答プログラム（いや、ここは「神」とでもいおうか）に、聞いた。

「『戻れない』といつのはビリビリのことだ？」

「これでいい覽下さー」

田の前に現実世界の電子新聞の画像が立ち上がる。

5000人以上が意識不明！

「ここ数日の間に日本全国で確認されていた「カプセル」（＊家庭用バーチャルゲーム機）の使用者が現実に戻つてこない件について、五日、その開発会社である株式会社ソニーから状況説明が行われた。

それによると、脳と「カプセル」との信号交換システムにおいて、一日、トラブルが発生。会社側からのシステムへの干渉が一部不可能となる。すぐに使用者の強制終了を行つたが、その頃行われていた「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の「トーナメント」に参加していた使用者の強制終了が間に合わず、システムは完全に故障。使用者を「カプセル」から出すことが不可能となる。無理やり「カプセル」から引きずりだした場合、脳への影響が心配され、会社側は現状維持を保つている。何者かにハッキングを受けた可能性が指摘されており、海外からのサイバー攻撃とする意見もあがっている。今のところ犯行声明はあがつていながら、警察は史上最大の人質事件として、調査を進める模様。海外から専門家を呼んで、対策を練るつもりである、と説明した。

「カプセル」の安全装置は、「カプセル」内で六ヶ月過ごしても生命活動を維持することができるようになつてている。しかし、復帰後の使用者の社会的遅れ、身体的衰えはかなり大きなものにな……
：（以下省略）

近藤と顔を見合わせる。

「それでは、新たな現実をお楽しみください」

無理やり「アドベンチャーワールド」に戻されるのを感じる。

意識が遠のく。

大変なことになってしまった……

二章 入隊 / 五話 神のお告げ（後書き）

そろそろ二章は終わりです。

三章 入隊 / 六話 ゲーム開始（前書き）

『なぜなぜに?』

Q 「無理やりアドベンチャーワールドに戻されるのを感じる」とあります。一体どうやって感じるのですか？

A そのとき、ゲームでいうロード中という状態になってしまいます。脳と体を繋ぐ「カプセル」の機能が一時的に低下し、脳と体が直接繋がり、「カプセル」内にいることを実感するからです。
「ほんと、ほんとに一瞬だけね。普通の人は分からぬよ。

三章 入隊 / 六話 ゲーム開始

さあ、そろそろ真面目に考えようか。

「天狗之巣」に戻つて、近藤と「少し考え方よう」という話をした。

さて、現状を整理しよう。

何者かに「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」を乗っ取られた、らしい。

今「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」をプレイしているのは、「トーナメント」に出ていた人間で、その数5000人、らしい。

今いる「アドベンチャーワールド」から抜け出したかつたら、七つある「聖地」を掌握する必要がある、らしい。

「聖地」を七つ掌握して一人がログアウトしたら、他全員も強制的にログアウトさせられる、らしい。

……。

さて、どこまでが現実で、どこまでが虚言か？

どこまでが現実で、どこまでが空想か？

誰が僕らの意思の偶像で、誰がNPCか？
（ノンプレイヤーキャラクター）

あの電子新聞の記事は本当か？

本当なら、今「パーソナル・リアリティ／自分だけの世界」を操っているのはまったくの部外者ということになる。ならばその理由は？そもそも、企業が全力挙げてやつと制御できていたものをそう簡単に横取りできるのか（まあ、やれる奴はやれるんだろうが…）？

「聖地」の設定は本当か？

本当だとしても、地球と同じだけの広さのあるこの世界から、七つの特定の地域を絞り（「聖地」なんて呼ばれる場所はいっぱいあるが、それが本物かどうかは分からない）、掌握するなんて、ほぼ不可能だ。それに、もしそれを成し遂げてしまふと、他の人間も強制終了。となれば、残留派との衝突は必須。で、そこで戦闘不能にでもなれば、ゲームからは追放されるのに、現実には戻れない、といつゲームと現実との間に板ばさみ。

「アドベンチャーワールド」で聞かされた設定も怪しいものだ。嘘の情報、嘘の証言であることも否めない。

そうなつてくると、近藤だつて怪しいものだ。そもそもレベル40代同士が衝突することはそうそうない。いぐり「トーナメント」だからといって、こんな状況では偶然は全て怪しくなる。

でも、まあ、死んだらやばい、といつのだけは本当だと思つていだろ？

それだけは偽る必要がないからな。

「さて、皆、新しい仲間だ」

少女？が俺と近藤を仲間と思われしき人間約50人に紹介する。

自身の保身のために、組織に属するのは必須。

「では、山下、誓いをたてる」

少女？が仲間（配下？）の一人を呼んで、「破れぬ誓い」（＊ハリー・ポッター）をたてさせる。

この誓いを結んでしまえば、破つたら即死。

少女？と近藤と、右手を握り合つ。

お仲間（男）が杖を取り出し、結ばれた両手の上に置く。

「山下、近藤、あなた達は私の配下として私に……」

「俺、山下と近藤は『ジャポン国』を革命させ、『有力者』のための王国をつくる」

少女？の言葉を遮つて、先に誓いの言葉を並べる。

近藤は驚いたように俺を見て、少女?は「ふつ」と笑って、誓いに賛同する。

眩しい炎が、細い舌のように杖から飛び出し、灼熱の赤い紐のように入三人の手の周りに巻きついた。

「換わりに、俺と近藤の身の安全を確保してくれますか?」

「ええ」

一つ目の炎の舌が杖から噴出し、最初の炎と絡み合い、輝く細い鎖を作った。

「そして、もし必要になれば、互いに助け合えますか?」

誓いの内容に近藤が頭を捻る。少女?も少し考えていたようだが、すぐに承諾した。

三つの細い炎の閃光が、俺達を赤く照りだす。舌のような炎が杖から飛び出し、他の炎と絡み合い、握り合わされた三人の手につしりと巻きついた。

縄のよう、炎の蛇のよう。

さあ、始まりだ。

三章 入隊 / 六話 ゲーム開始（後書き）

ちょっと田先が変わつてきました。僕にもちょっと予想外の展開になつていつています。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「七つの聖地の掌握」はちゃんとやるのですか？

A わやんといつこつ話にまつします。
～その場で思いついただけの設定じやないよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「魔法障壁」による防御

「瞬動術」による移動

備考 主人公

高校二年生

現状況に疑念を抱きながらも、少女？と「破れぬ誓い」を

結ぶ

近藤 美紀
こんどう みき

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

備考 ヒロイン

高校二年生

切れ気味体質

少女?と「破れぬ誓い」を結ぶ

少女? 本名不明

レベル 不明(40以上)

世界観 不明(「無効化能力」に似た力を持つ)

得意技 不明

備考 反政府組織のリーダー

次章予告

誰も保障などできない。

目的を為すのは、己の力のみ。

生きる場所が欲しければ、自らの手で掴み取れ。

次章、「入学の手引き」。

例えどんな手を使ってでも、少年は前へ進む。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

次から「学園」の話になります。

四章 入学の手引き／一話 命懸け？（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「現状報告」に出てこなくなつた人達は、出番がないということですか？

A そういうことではありません。その章に関係のある人物が載せられます。

「でも、行方不明の三人は暫らく出ないかも？」

四章 入学の手引き／一話 命懸け？

組織名「バツファローズ」（なんちゅう名前や……）。

組員数は総勢50名。何故全員そろつてここにいるのかといふと、本部を移転させていたらしい。

全員が「有力者」というわけではなく、親族や友人が「有力者」でその敵討ちのために組織に属する「非有力者」もそれなりにいるらしい。

トップが年端もいかない少女?なのは、先の大戦で残った「有力者」はほとんど子供だから。

「バツファローズ」の現在の目標は、自分達の「王国」を造ること。

当初は「ジャポン国」を変革させるつもりだつたらしいけど、圧倒的戦力差で断念。

現段階での目標は「トーキュー」を掌握し、「ジャポン」との交渉を行うことらしい。

まあ、俺はできるとは思つてないけど……。

俺が「バツファローズ」との一員となつたのは、自分の居場所を作るため。

この世界には賞金稼ぎが存在して、指名手配犯を探し回っている

「うーん。

最初に不祥事を起こしてしまった俺は、どうか匿つてもうりえる組織に落ち着く必要がある。

そんなことがあって、俺と近藤は「トーキュー」の「中枢区」に侵入、その中にある「トーキュー」唯一にして屈指の学術学園（名前は何だったか忘れたが）に入学する、ところ、一見簡単そうな任務を受け持つことになった。

「そんなに難しいの？ その入学は？」

「『学ぼうとする意思と意欲を持つ者なら、例え死神でも受け入れる』んじゃなかつたの？」と近藤が少女？に聞いた。

「入学するだけなら簡単。わざわざも言つたけど、この国には賞金稼ぎがいるの。『トーキュー』で学術学園に入りさえすれば、どんな罪を犯していくとそれを咎められることがない。もちろん、足かせは付くけど」

「つまり、『トーキュー』内の犯罪者は皆入学しようとするから、それを狙つて待ち伏せしている賞金稼ぎがいるということ？」

「そう。入学するには、直接向こうに行かないといけないの。あと、狙つてるのは『インフレックス』もよ」

「インフレックス」。確かに、「トーキュー」内の独立武装組織だつたはず。

「『インフレックス』はただの軍隊じゃないのか？」 警察組織の役

割も持つていいのか?」

俺が聞くと、少女?は「ほんと何も知らないな」とため息をついた。

「『トーキュー』にはもともと軍隊なんてなかつたのよ。それが、『ジャポン帝国』との交戦で武力所持を余儀なくされたの。その当時『トーキュー』内にあつた警察組織をそのまま軍隊に格上げした、というわけ。だから、昔も今も、『トーキュー』内には『インフレックス』しか武装組織はないわ」

「なんせ周囲が周囲だから、外部から攻撃されることなんてほとんどないしね」と、少女?は付け加える。

「あなた達、自分の『レベル』は分かる?」

「どうやら、この世界でも、『レベル』の概念はそのまま引き継がれているようだ。

「両方とも40代」

「やっぱり高いわね。一応ある程度の予想はしてたけど。あなた達、どこので鍛えたの? って、そうか。記憶がないんだっけ?」

いろいろ面倒くさいので、俺と近藤は記憶喪失といつことにしてある。転生物語ではよくある設定だ。使わない手はない。

「レベル40なら、『トーキュー』の方もほしがるはずよ。『有力者』ってだけでも研究は渉るのに、それが高レベルとなれば、ね

「それじゃあ、それをアピールして入学をせんせいにひつわなにいかないのか？」

「あのねえ、それじゃあ秩序が保てないでしょ」

近藤が「あんた馬鹿？」と視線を投げつける。

「それじゃあつまり、賞金稼ぎの追つてをかわし、『インフレックス』の攻撃を強い潜つて、入学届けを出しに行かなくちゃいけないとこつわけか？ 命懸けの入学なんて、聞いたことないぞ」

「じゃあ、やらない？」

「やるわよ」

俺の代わりに近藤が答える。

「それじゃあ、ちょっと着いて来なさい」

四章 入学の手引き／一話 命懸け？（後書き）

なかなか「学園」の話になりません。入学するにはもう少しあかり
そうです。

『なぜなぜに?』

Q 「インフレックス」は強いのですか?

A 技術力は世界でもトップクラスですが、数が少ないので。
「敷地狭いしね。

四章 入学の手引き／一話 骨董店

「自然保護区」から出て、「生活区」との境目、俺達が「電子空間」に入った辺りまで来た。

俺達が「バッファローズ」と誓いをたてたのは、「自然保護区」の森の中。「バッファローズ」の新たな基地はこれから作る（…）らしく、現在建設中のこと。

「バッファローズ」の仲間達と離れて、少女？（まだ名前聞いてない）に連れられて来たわけだが。

「まさか、『今から行け』とかいうんじゃないよな？」

「違うわよ」

少女？は俺達を連れて堂々と「生活区」に入つて行く。

「いいのか？ こんな堂々と行つて。変装とかそういうのは？」

辺りを気にしながら聞くと、「やつぱあんた馬鹿でしょ」と近藤いそとうがため息をついた。

「いくら賞金稼ぎに狙われているといつても、『トーキュー』中に賞金稼ぎが蔓延っているわけないでしょ」

「なるほどー」と呟く。

「で、どう向かってるの？」

「戦うには、準備がいるでしょ」

「生活区」は現実世界の中世纪ローラッパ並の発展しか遂げていな
い。

「格差社会か……」

町並みを見渡しながら、呟いた。

現実世界でも格差社会真っ只中だが、それは地球の表と裏の距離
を置いての話。こんなすぐ近くでの絶大な格差は見たことも聞いた
こともない。

この辺りは「生活区」の中でも「自然保護区」に最も近い地域で、
「インフレックス」も「賞金稼ぎ」もあまりいないらしい。「自然
保護区」は人類未踏の地といつてもいい。「自然保護区」内に散ら
ばる「海楼石」(*ワンピース)の影響により、「力」に障害をき
たし、「自然保護区」内では「力」の類は全般的に使えなくなる。
予め防護のために魔法をかけていたとしても、「自然保護区」の中
では無意味となってしまう。さながら、「能力無効化」といつたと
ころだ。もちろん、軍用兵器全てが「力」の恩恵を受けているわけ
ではなく、物理法則に則つただけの通常兵器も存在するが、「自然
保護区」内には屈強な野獣や魔物が生息している。とてもじゃない
が「自然保護区」を突破することはできない。そのため、外から中
へやつてくることは不可能だ。「インフレックス」はもちろん警備

してないし（「中枢区」が護られねば、「トーキュー」とつては問題ない）、賞金稼ぎもこんなところまで捜索に来ない（こんな所に逃げてくる前に捕まるし、仮に逃げられたとしても、こんな所に逃げてくる奴は大した指名手配犯ではない）。

「戦いの準備つて言つてたけど、武器でも揃えるつもりなの？」

「やうよ」

少女？はやうよつて、古びた骨董店に入った。

まあ、骨董店では何かといい武器が見つかることが決まつてるからな。

中に入るとい、誰もいなかつた。

周りを見渡しても、それらしきものは何も置いていない。壺やら何やらがあるので、戦力になるようなものは何も見つからない。

近藤と一緒にきよるきよる。

「何してるの？」「やうよつて

少女？が奥で手招きした。

それは、ピンクの淵で彩られた、場違いのドアだった。

四章 入学の手引き / 一話 骨董店（後書き）

話が全然進みません……

『なぜなぜに？』

Q 「自然保護区」と「生活区」との境には何もないのですか？

A 何もないです。大抵の人は近づきませんし、近づいてもただ危険なだけで、「自然保護区」が被害を被るわけではないからです。

（「自然保護」というのは名前だけ。）

四章 入学の準備 / 三話 布石

「ビリでもドア」（＊ドリえもん）。その名の通り、ビリヒでも繋がるドア。

そのドアを開けて、少女？は俺達を手招きます。

「ビリでもドア」を潜りながら、俺は少女？に聞いた。

「これ、ビリに繋がってるの？ つていうか、これがあつたり、学園内に入るのは余裕じゃん」

「あ、これ、動いてないわよ」

はあ？

「これ、壊れてるの。だから、一箇所にしか繋がってないの。で、そこがいい」

少女？がそう言つて、一礼をする。

「よつよそ、私の骨董店へ」

詳しい事情は教えてくれなかつたが、いじは少女？の経歴する（？）骨董店らしい。表向きはすでに廃業してこらじこが（店主が

店にこなごので)。

「ハリスにあるものなら、どれでも持つてこつていいわよ」

「バッファローズ」の資金源。「ゼンジでもドア」の向こうは、運動場一個分の広さを持つ、巨大な格納庫だった。

収められているのは、「世界觀」に相応しい道具の数々。通常兵器や「力」によって鍛えられた兵器ももちろん存在した。

なるほど。革命軍とこだだけのことはある。これは意外といい仲間?に出会えたようだ。

「これはなかなか……」

近藤の方を向くと、すでに山の山に向かって走り出していた……。

俺は近くにあつた、「デラゴンボール」(*デラゴンボール)を手に取る。

それを見て、少女?が俺に言った。

「ここにあるのは持つてこつてこいけど、『力』に関わる物は使用者の『力』の波長が合わないと、ちょっと使うだけでかなりの疲労を被るわよ」

「あ、そう……」

丸々一日使って、格納庫内の武器を調べた。

俺の「世界観」に合つものはもちろん、違つ物も貰つて行くことにする。

少女?によつてもたらされた「ご都合主義」的展開。

少女?への不信感が募る。が、敵対する必要性はまだない。

今大事なのは、自分の居場所の確保。

そのためには、この任務を遂行させる必要がある。

多少の不安には目を瞑る。

「ドラゴンボール」は持つて行くことにした。七つ集めて復活に使おう。

他にも、魔法発動体となる指輪や杖、魔道具やお札など、戦闘に使えそうな物は片っ端から「天狗之隠蓑」に詰め込んでいく。

俺のだけでなく、近藤が持つてきた鏡や黒い下着（これは、ボンテージ?）、なども一緒に詰める。

「ドラゴンボール」以外にも復活するための道具がほしいといふだな。

「天狗之隠蓑」に詰めた物を確認しながら思つ。

「山下！ 何してるので？ セイセイと出でときなさい」

「天狗之隱蓑」の外から近藤が呼ぶ。

「今行くから」

作戦実行は明日。

「バッファローズ」の主戦力が「インフレックス」の小隊に陽動をかけている間に、俺と近藤は学園に入学届けを出しに行く。

決行は夜明け前。

脳が一番活動していない時間帯に、事務所に侵入し、入学届けを提出する。

今日は満月らしい。

やるなら、夜明けまでの数時間しかない、か……。

「バッファローズ」の隊員達は、明日の陽動作戦のため「トーキュー特区」の北部と南部に移動している。俺達は西部からまっすぐ突入する。

今俺と一緒にいるのは、近藤と、少女？、あと、何の力ももたな

い隊員が数名。

狙うなら、こいつら。

少女?と近藤が何やら話をしているうちに、一人の男子隊員と話ををする。

満月の月明かりの元で。

円い、円い、大きな満月を見上げる。

まるで吸い込まれるように。

俺は光る天体に見惚れてから。

『『解禁』』

「なつ……」

男子隊員が俺の姿を見て、後ずさりする。

「悪いね、これも、念のためだ」

長く伸びた糸切り歯を光らせながら、俺は笑った。

「準備はできた?」

少女？が俺と近藤に尋ねる。

「愚問ね」

近藤が俺の分まで答える。

「なあ、行く前に、あんたの名前、教えてくれないか？」

「私の名は

少しは本格的に話が進むようになります。

『なぜなぜに?』

Q 主人公は「解禁」をして何をしたのですか?

A 秘密です。

↓考えてみてね。

「生活区」の中を走り抜ける。

できるだけ「力」は使わない。いつ、どこで探知機に引っかかるか分かつたものではないから。

夜明け前の町並みには、早起きな老人もまだ出てきてはいない。

今頃、「バッファローズ」の別個団体が「インフレックス」に奇襲を掛けているはず。

「インフレックス」の警戒が薄れている今、気にすべきは賞金稼ぎの攻撃のみ。

町並みが変わり始める。

目の前に、高層ビル群が見えてくる。

「中枢区」が近い。

内の「バッファローズ」のリーダー曰く、「中枢区」に入る」と
自体は簡単らしい。

問題は、入つてからだそうだ。

「中枢区」に入った途端、監視センサーに引っかかる。嫌でも「インフレックス」に情報がいき、賞金稼ぎが駆けつける。

「生活区」と「岡村」の境が近づく。

隣を掛ける近藤は余裕の表情。
近藤いんとう

俺は自動車並の速さで走っているだけじゃ（もちろん魔法で肉体強化中）……。

「この調子だと案外簡単にこなしちゃうね

「やつだな。ちょっと抜擢抜けるナビ

風圧で髪がなびく。

近藤の長い髪が俺の顔に当たる。

おっ、今度は髪が逆立つて。

……。

ちよつと待て。

いへりなんでも風圧が強すぎるだろ。

髪が逆立つって。

そこまでのスピードは出しません。

風が吹き付ける。

「風きついな」

手で田を覆い。

腕がひりひりする。

はあ？ ひりひり？

田を凝らして風の流れを見ていると、それは旋風となつて襲ってきた。

「つかつか……」

首に巻いてくる「天狗之隱蓑」をとつせに広げる。

旋風を「天狗之隱蓑」の中に入れることで攻撃を回避。

「ちょっと、何してるのよー 中の物がぐちゅぐちゅになるじゃない？」

「それどいつもじゃないだろ！ 襲撃だぞ！」

足は止めずに魔力配給を開始する。

敵が何か判らないが、わざわざ立ち止まって戦う必要はない。

俺達の田標はあくまで学園の入学。

「障壁」を二段構えに張る。

風が一瞬弱まる。

来るつ！

明らかに人の意図が込められた旋風。

「エレメンタ・エリニアーヴァンティ・スピランティ・ホー・アデウンテスラ・イニミーキスマメイスダント
リースニアエリアーリス大気の精よ、息づく風よ、疾く来りて我が敵より我を守れ！！
『風陣結界』！」

さらに、空氣を媒体にした障壁を開。

同時に、殺人旋風が「風陣結界」に衝突する。

「つく……」

通常の風を用いた攻撃より、旋風による一転集中型は堪え難い。

前方に敵を確認する。

所有武器は見たところ、「鉄碎牙」(*犬夜叉)一つ。

よし。「犬夜叉」なら原作を読んで知識はある。

巨大な牙の形をした「鉄碎牙」を振りかぶる。

「『風の傷』(*犬夜叉)！」

大気を切断する強力な旋風を起こす「鉄碎牙」の初心者用の技。

「やばつ……」

「風陣結界」が破れる。

「風の傷」を障壁で緩和しながら近藤にダメージが及んでいない」とを確認する（＊別に気遣つたわけではないよ）。

「うとおー！」

襲撃者は飛んで、俺達の頭上で「鉄碎牙」を振り下ろす。

俺は前方に、近藤は後方に、それぞれ「風の傷」を回避。

「ウンドキヌベーリトウス・ルーキス ハンテース サギテンキタミクム
光の精霊 11柱、集い来りて敵を射て……」

呪文を詠唱しつつ、体を回転させる。

体の周囲に、光の球体が11個生まれる。

目標を指定。

その間に、近藤の方も攻撃態勢にはいる。

「『一二十番機構・斬式大刀態《凌遲の鉈》』（＊シーキューブ）、

禍動」

長大な鉈を構えて「鉄碎牙」と対峙する近藤。

一人で挟み撃ちの体制になる。

「『サギタ・
魔法の……』

殺氣つ！

「射手……」

背後からの迎撃！

体をひねる。

「連弾、光の11矢！」

爆発音が響く。

数で正体不明の弾丸に対抗する。

これは、嵌められた。

先ほど「鉄碎牙」使いは、狙撃手に背中を向かせることが目的
だったのか。

相手の位置は掴んだ。

相手の武器は長距離ライフル。

111から800メートルほど離れたビルに目を向ける。

この距離はまずい。

なら。

「『精霊化』」

風の中位精霊による囮を瞬時に30体編み出す。

「瞬動術」。

射撃手とは接近戦が定石。

射撃が連續で行われる。

連續なんてレベルじゃない。ほぼ同時に放たれていのうなレベルの早撃ち。

「精霊囮」が確実に撃ち抜かれて消される。

その間に150メートルほど進む。

「ひらが近づけば近づくほど、相手の狙撃は脅威でなくなる。」

「これから上方へ20メートル上がる必要がある。」

「『杖よ』（＊魔法先生ネギま！）」

「天狗之隱蓑」から飛行用の杖を呼び出す。

ジャンプすると同時に杖に跨る。

再度弾丸が飛ぶ。

「『サギタ・マギカ』魔法の矢、光の一矢」、「開放」、「獣化」

射撃手に向けて「光の矢」を放つ。

弾丸の方は「獣化」で耐えればいい。

とつさの考へで、杖を呼んだ意味がなくなつたが、まあいい。

狙撃手にとって一番の弱点は狙撃の後。

もうつた！

「光の矢」が狙撃手を捕らえる。

その前に弾丸が俺の肉体に届いてしまつが、「獣化」中の俺には致命傷にはなりえない。

弾丸が俺の目前まで迫り、開いた。

「しまつた……」

これは射撃用の弾丸ではなく、捕縛用の弾丸。

広がつてゐるのは、おそらく「海牢石」で編んだ網、「監獄弾」(*ワンピース)だらう。

これに捕まつたら即監獄行き。いやな名前だ。

じつらの攻撃は通用しない。

地面を叩く。

「おりやつ

割れた地面から取り出した土の塊を投げつけた。

「獣化」の力で強化された肩で投げられた土の塊が、「監獄弾」を受け止める。

その間に後ろに飛び、「監獄弾」を回避。

射撃手はどうなった？

田をビルの屋上に向ける。

「光の矢」は狙撃手には当たらなかつたようだ。狙撃手の後ろのコンテナが「光の矢」によつて潰れてい（「獣化」によつて視力が上がつてゐる）。

「こ」は逃げた方がよさそうだ。

俺は「解禁」を終了して杖に跨る。

「逆巻け、春の嵐、我らに風の加護を、『風花旋風風障壁』」

竜巻による「風障壁」で俺を見えなくなる。

位置が分からなければ狙撃はできない。

いくら「監獄弾」で通過できるといつても、「監獄弾」の大きさと「風障壁」の大きさでは、俺を捕らえることはできない。

「近藤！ 今だ！」

「鉄碎牙」使いと乱闘中のはずの近藤に合図をする。

「了解」

声を聞くと同時に、「風障壁」内に魔方陣が現れ、近藤が召還される。

「転移魔法符」。一枚80万と高価だが（お金の価値は現実世界とだいたい同じ）、仕方がない（自分で買ったわけではないしね）。

「逃げるぞ」

近藤が杖に跨つたのを確認して（背中が温かくなる）、杖を飛ばす。

重々しく地面から浮き上がり……。

飛ば……、飛ばない。

「あれっ？ おかしいなー。近藤、体重何キロ？ 100キロとか？」

「まだそれをいうか！ 大体、失礼でしょ！」

ポカリと頭を殴られた。

って、何だこの威力。まじでイテー。石で殴られたみたいにイテー。

「あ、悪い。調子悪かつたみたいだから」

すぐに杖は本来の力を發揮し、「風障壁」の天辺に向かって飛ぶ。

竜巻の田であるこの部分だけは移動可能となつてゐるのだ。

「『アクアレレット 加速』（＊魔法先生ネギまー）」

賞金稼ぎ達に見つかる前に、できるだけ高度を上げる。

戦闘離脱を果たして、俺はため息をついた。

暫く空を飛ぶことにする。

もちろん「障壁」類は欠かせない。

「暫くしたら降りようか？」

後ろの近藤に提案する。

ちなみに近藤は俺に抱きついたりはしていない。

杖の周りに力場があるので落ちることがないからだ。

「今すぐ落ちれば？」

そう言つて、俺を殴つて（今度はそんなに痛くない）杖から叩き落とさうとする。

力場があるから落ちないけど。

「何だよ？」

「うるさい。黙つて殴られてなさい」

四章 入学の手引き / 四話 √S賞金稼せき（後書き）

久しぶりのバトルでした。
この章で「学園」に入學できるようになりますので、暫くお待ちください。

四章 入学の手引き / 五話 「学園」へ（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 賞金稼ぎのもう一人の「世界觀」は何ですか？

A 「ルパン三世」です。使っていたのは次元大輔としての「力」です。

（今後も出でくるよ。

四章 入学の手引き／五話 「学園」へ

上空500メートルを筹で飛行する。

「中枢区」に入ったものの、あれから誰から攻撃を受けてはない。

誰かに後をつけられている気配もない。

といふか。

「誰もいないわね」

近藤こんどうが言つとおり。

誰もいない。

町に入つ子一人に見当たらないのだ。

「何か怪しくない?」

「そんなこと言つてもなー」

下を見下りす。

整理された区画。

均一のビル群。

現一十三世紀と同じ町並み。

懐かしさは、まだない。

「ねえ！ 田標って、あれでいいんだよね？」

近藤が遠くに見えてきた巨大な円い壠を指差す。

「トーキュー特区」が世界に誇る学術学園。

名前はない。

その中心に世界最大の円柱型研究施設を備え、周囲にはその小型版八棟が円を描くように配置されている。中心施設は周囲の施設とそれぞれ通路で結ばれており、その周囲の施設は隣の施設と通路で結ばれている。

その一連の施設意外にも、敷地内には関連施設が複数存在する。

レベルとしては学園都市といえるほどの広さを持つが、敷地内に教育組織は一つしかない。ここは俗に「学園」と言われている。

「ちょっと、下へ、高度落ちてる！」

「へえ？」

「学園」の壠を田の前にして、意識していないのに高度が下がり始めていた。

「学園」の壠上には強力な侵入者よけの結界が張られてある。

「」の結界は軍艦の主砲にも耐える強力なもので、また、一部が破れたからといって機能が停止することもない。

侵入の際には、正規の移動口のある地上から行くか、最も結界の密度が薄い最上部を叩くのが定石。中途半端な所に突っ込んだら、即捕縛される。大体、俺達一人の戦力では結界は到底破れないのだが。

上空から急降下して正面玄関から突っ込んでやろうと思っていたのだが、このままではまずい。

体制を立て直す。

箒の先をぐいっと上に向け、加速体制にはいる。

箒が上昇し始める。だが、速度がでない。

「おつかしいな？」

近藤が重いのかと思つたが、さつきまで飛べていたわけだし。

「止一！ 後ろ一！」

近藤が俺の首を無理やり後ろに捻る。

おひつ、ちょっと待て。人間の首はそこまで曲がらない！

体を捻つて後ろを確認する。

「なつ……竜巻？」

「自然保護区」の方から「こちらに向かって巨大な竜巻状のものが接近していた。

「なんだこれ？」

風は強くない。

竜巻の通った後の民家は破壊された様子はない。

引き込まれる感じもない。

ただ、「力」の低下が起きているだけ。

「これ『無気嵐』よ」

「バツファローズ」のメンバーに聞いたわ、と近藤が呟く。

「で、どういう効果なんだ？」

「『自然保護区』の『海楼石』等の能力があふれ出して発生した『力』喰らいの嵐よ」

「それまずいじゃん！」

第の魔力が失われる。

「つげ……」

落ちる。

圧力が突如変わる。

それまで軽減されていた重力の重みが体に掛かる。

「つうげげげ……」

声がうまく出ない。

「無気嵐」が接近する。

こんなに近くまで迫っても、何も感じない。

まじで「力」だけ吸うのか。

つて、目前に「学園」の施設の繋ぐ廊下の屋根が……！

くっそ。

「魔法先生ネギま！」の主人公の基礎能力では、魔力がなければ何もできない。

案外、終わるの早かつたな……。

「レベル」も高いし、異世界冒険ファンタジーの乗りでそれなりに楽しんでたのに。

無念……。

「いつとき、擬似感覚入力デバイスが恨めしい。

屋根に突撃したときの痛みを感じて最期とはな。

「やました山下、しつかり目を開いときなさいよ。」

四章 入学の手引き / 五話 「学園」へ（後書き）

ようやく「学園」にたどり着けました。
長かった……。

『なぜなぜに？』

Q 「無気嵐」を防ぐ方法はないのですか？

A 「海楼石」の力が元となっているため、「力」の産物に影響を与える類の武器を使えばなんとかなるでしょう。
けど、規模が違うすぎるから無理だね。

「山下、しつかり目を開いたきなさいよ！」

そう聞こえた気がした。

が、実際にそれを言つには時間がなさ過ぎるので、幻聴だらう。

目前に屋根が迫る。

と、隣を「箱形の恐禍」(* シーキューブ) が通り越した。

一辺一メートルほどの黒い立方体の拷問用具が、通路の屋根にぶち当たる。

「シーキューブ」に登場する戦闘者において挙げられる特徴は、能力ではなく、彼ら自身の体の硬さだ（例外もある）。人の負の思念を浴びて負の方向に変質し呪われた道具である彼らは、人外の力を前提としてその身に宿す。「無気嵐」に「能力」を封じられようとも、最初の設定までは封じられない。

上空500メートルからの落下による重力加速が、「箱形の恐禍」の運動エネルギーを増幅させ、通路の屋根との衝突エネルギーへと変換させる。

「箱形の恐禍」が屋根に練りこむ。

「有力者」を前提とした防護を施しているため、単純物理攻撃に弱い。

そもそも、ここ「トーキュー特区」内に「能力」なしで突っ込もうとする者はいない。たとえ本人が「有力者」でなくとも、所有物の大抵の物は「能力」の恩恵を受けている。

どうやら「無気嵐」の効果で通常の結界もほとんど働いていない様子。

だが、それだけでは分厚い屋根を突破できない。

「『解禁』、『獣化』！」

落ち着きを取り戻していた思考で、魔力を行使し、超早口で魔獸の力を呼び覚ます。

僅か0・03秒（主觀に基づく）で手にした力で、「箱形の恐禍」を通路に押し込んだ。

「……っ、おりや！」

屋根を突破する。

今まで俺達の力を受け止めていた物がなくなり、運動エネルギーと位置エネルギーに則つて、通路の内部に落下する。

「きやーー！」

瓦礫の中で、同じ年くらいの人悲鳴を聞く。

「げほつげほつ」

埃が激しい。

咳き込みながら、辺りを見渡した。

どうやら内部に侵入できたようだ。

おそらくこここの通路の中を移動していた人たちが、悲鳴を上げながら俺達から逃げていく。

隣を見る。

「箱形の恐禍」から元の姿に戻った近藤（じんとう）が、伸びている。

それもそつか。

俺はとりあえず大事がないことを確認して、自分の体をチェックする。

よし。幸いなことに、大した怪我はないようだ。

腕に残っている魔獣の力を使い、体の上に乗った瓦礫を押しのける。

「よつし」

改めて周囲を見渡す。

施設を行き来するための通路は、とにかく広かった。

横幅50メートルはゆうに超える巨大な通路の床には、ベルトコンベアの歩行者用の道が脇にあり、中央には移動用の乗り物が通るための道が整備されている。通路というより、道だった。

俺の近くには誰かが乗り捨てて行ったのであらう乗り物や、俺達が侵入した際に壊れた乗り物が散乱している。

本当に幸いなことに、俺達以外の死傷者はいないようだ。

ほつと息をつく。

罪を問われないために入学するのに、その入学する過程でまた人を殺していたら（未だに一回目「コーチさんのやつ」の実感がない）話にならないからな。

「『アデアツ』」

「「チノヒオウギ」を呼び出し、近藤の傷の完全治癒を行づ。

「いたた……」

田を覚ました近藤が肩を抑えながらぼやいた。

「つたく、押すなら押すで、もつとましな所押しなさいよ

「知るか。大体、あんな形になつてたら、どこのどこに該当するのか分からねえよ」

近藤の無事を確認しながら、俺はため息をつく。

「で、これどうあるの？」

周りの惨状を見渡す。

「仕方がないじゃない。でもい、まあ、結果オーライよね。何だかんだいいって、『学園』内に入れたんだから」

「これじゃあ、入学じゃなくて侵入だよ」

「もう、いいじゃない。済んだ事は済んだ事で」

だが、事態はまずい方向に向かっていた。

「両手を擧げる！ 床に膝を突け！ お前らは完全に包囲されている！ 抵抗は止めて大人しく投降しろ！」

「もつ。どうすんの？」

まだまだバトルで続きます。

『なぜなぜに？』

Q 「無気嵐」は「力」の全て封じるわけではないのですか？

A 違います。「有力者」のそもそもが持つ「力」までは封じることはできません。できるのは、「力」が外部に与える影響に干渉し、無力化することです。そのため、飛行魔法は使用不可能になりますが、変身など、「己」の肉体に影響を与えるだけの「力」は使用可能です。

～飛行魔法は自分だけじゃなく、周囲の空間、強いて言つなら空氣にも影響を与えているんだよ。

四章 入学の手引き／七話 戦闘開始？

パチッ。

バチッ。

「へ？」

電気を感じて振り向く。

超高压電流を肌に感じて、全身の毛が逆立つ。

ドオツ！

俺のすぐ真横を「超電磁砲」（*とある科学の超電磁砲）レールガンが通り抜けた。

「超電磁砲」。メタルゲームの「コインを電磁誘導で音速の二倍以上にして打ち出す強力な殺人兵器。

今のは威嚇か失敗か。

「近藤！」

「『解禁』！　『教会区《奈落》』！」

近藤が闇を用いた即席の防護壁を展開させる。

「光の精霊101柱、集い来りて敵を射て、『魔法の射手、連弾、

光の101矢』！』

「光の矢」で「超電磁砲」の発射方向へ威嚇。

『闇夜を切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ……』

「はあああああっ！」

「教会区《奈落》」の闇がみだ広がりきつていらない所から、誰かが飛び込んでくる。

目標確認。

詠唱完了。

『『白き雷』（* 魔法先生ネギま！）！』

本格的な戦闘呪文を、拳に宿らせ、強力な電撃で敵を殺傷に掛かる。

本当は攻撃呪文は「魔法の射手」だけに留めたかったのだが、「超電磁砲」が相手にいるのでは仕方がない。

「おりやつつ！」

雷撃が一直線に飛ぶ。

「無駄」

乱入者は右手で「白き雷」を受け止めた。

否、弾き返した。

「つべ……」

戻ってきた「白き雷」を障壁で緩和しながらその身に受け止める。

「……いやいや」

呼び動作なしの無詠唱呪文を使う。

「魔法の射手、連弾、光の17矢」。

「だから、無駄だつて」

体の至る所を狙つた攻撃が、またもや跳ね返される。

「げつー！」

「これはまずい。

わいつきの「白き雷」やら今までの戦闘やりで障壁が大分弱まつている。このままだと障壁が、消える……。

「何やつてんのよ」

近藤が闇による即席の盾で、「白き雷」を防ぐ。

「仕方がない、一気に潰すわよ

俺達は今、闇で周囲を完全に覆われている。

」の中は、近藤の領域。

中の者を潰すも生かすも、近藤しだい。

闇が乱入者に群がる。

周囲を埋め尽くし、球体の形をとる。

「とりあえず封じたけど、これからどうするの？」

近藤は闇に覆われた乱入者を指差す。

「これで封じた、だと？」

なにっ！

乱入者を包んだはずの闇が弾け飛ぶ。

「え？、うそーー！」

「う！」

くそつ。

「『解禁』、『空間移動能力者』（* とある科学の超電磁砲）」
テレポーター

もうつた！

相手の「世界觀」は「とある科学の超電磁砲」。

頭を開発して超能力を行使できる人たちのお話。

「世界觀」が分かればこっちのもんだ。

「山下！」
やました

近藤の声で我に返る。

やばっ。忘れてた。

相手は今、「空間移動能力者」だつたんだ。

乱入者が俺の背中に手をあてる。

しまった。零距離……。

「ぐががががつ！」

体中に刺激的な電撃が走った。

「とある科学の超電磁砲」の主人公の能力は、

「^{ヒレクトロマスター}発電能力者」

(*とある科学の超電磁砲)……。

四章 入学の手引き / 七話 戦闘開始？（後書き）

久しぶりの更新となりました。
これからやつと「学園」の話です。

『なぜなぜに?』

Q 「解禁」から通常状態に戻る場合、何もしなくていいのですか？

A 必要ありません。通常状態のいおける「力」を行使した瞬間、「解禁」が解けます。それまでは「解禁」状態です。
（もちろん、「解禁」を解くコマンドもあるよ。）

四章 入学の手引き / 八話 √S「とある科学の超電磁砲」

「まつたく、なにやつてるのよー。」

間一髪、電撃が体の機能を停止させる前に俺と「発電能力者」の間に闇が広がる。

「『解禁』、『一方通行』(*とある科学の超電磁砲)」
アクセラレーター

最強と謳われる能力を身に付け、彼女は俺に向かって突っ込んできた。

「一方通行」。自身の肌に触れたものの熱量、運動量、電気量、空気量など、あらゆるもののが「向き」を変換する能力。こちらの攻撃は効かない。そして、触れられたら、終わり。

だが。

勝機がないわけではない。

彼女にとって、「一方通行」は基礎能力ではない。

「解禁」を用いた、制限された能力。

本来なら拡散する運動力を一定方向に統一することで、移動力を倍速して接近してくる彼女を「瞬動」で回避する。

近藤が闇を解いた。

戦闘するのに、触れたものを何でも消失させる』の闇は邪魔だ。

背後をとり、拳を握る。

「『『解禁』、『魔力無効化能力』（＊魔法先生ネギまー。）』

マジックキャンセル

まずは試しに一発、背中に拳を叩き込む。

「う！」

避けられた。

そのまま離れて距離をとり、手元にあつた通路の屋根の破片を掴んで投擲してくる。

「『風盾』」

「解禁」を解き、「魔力無効化能力」を終了させる。

つと、後ろで瓦礫を踏む音がした。

「『『解禁』、『幻想殺し』（＊とある科学の超電磁砲）』

イマジンブレイカー

障壁が突破される。

抜かつたつ……！

「幻想殺し」の右腕。

「とある科学の超電磁砲」は「とある魔術の禁書目録」の外伝だ。

同じ能力が出てきても不思議じゃない。

だが。

攻撃自体はただのぐーパンチだ。

致命傷になるようなことはないはず・・・・・・。

「ぶほつ……」

体が吹っ飛んだ。

たかが拳一発で。

何も能力を使わていないので。

床に叩きつけられる。

「障壁」はさつき破壊されてしまったので、ダメージは、緩和なく直に体に伝わる。

転がつて少しでも衝撃を緩和しているところに、彼女は突っ込んできた。

「解禁」を唱えないといふことは、攻撃手段は「発電能力」。

「天狗之隱蓑」を彼女の前に広げる。

彼女が発した電気攻撃は全て「天狗之隱蓑」の中に吸収される。

毎度毎度同じ手だが、なかなか使える、この戦法。

「わいに手使ひjやない」

彼女はさう言つて「空間移動能力者」に戻る。

俺も「瞬動術」の準備をする。

睨み合つ。

しゅっ……。

彼女の体が消えた。

否、瞬間移動した。

俺はそれと同時にさきほどまで彼女がいた場所に「瞬動術」で移動する。

彼女が現れたのはさつきまで俺のいた所の真上。

俺がいないことに気づいた彼女は、頭を回して俺の居場所を特定する。

目標の位置を眼で確認。次に、対象と自身の位置関係を脳内にインプット。

そして、「瞬間移動」。

俺は前に転がり出て、次に彼女が現れるであろう、さつき俺がい

た場所の周囲に体を向ける。

そして、「瞬動術」。

彼女は、俺がいた右横に「瞬間移動」した。

右の拳を握り、腕を横に開く。

「つぐつづー

「瞬間移動」は点から点への異空間を通しての転送だ。座標をずらした、といつてもいい。それゆえに、その「移動」における運動エネルギーは発生しない。

だが、「瞬動術」は単なる高速移動に過ぎない。それがゆえに、その移動には運動エネルギーが発生する。

高速で接近する棒に腹をぶつけた彼女は、呻き声を上げて後退する。

よし。いける。

「ふーくかーいちょーうー 結界張れましたよー！」

構えた瞬間、外から声が聞こえてきた。

戦闘に意識を寄せていて気づかなかつたが、いつの間にか俺たちの周りが包囲されている。

「本気出しちゃつてくださいーー！」

その報告を聞いた途端、彼女はふと笑って、右腕を俺に向ける。

「コインを弾き、宙に浮かせ。

「発電能力」の力で吹っ飛ばす。

つ！

「超電磁砲」が俺に向けて発せられた。

「クラティステ・アイギス
『最強防護』！」

魔法陣十数枚に及ぶ現状最強の防御陣。

一瞬で破られた。

……。

体が痺れる。文字通り、痺れる。

だが、本当に体に電撃が走ったわけではなく、コンピューターがプログラムした痛覚表現を使用しているだけなので、安全装置もかねて、一定量の痛みしか感じない、はず……（少なくとも今までそうだった）。

「気合防御」（これのおかげでんまり痛みを感じていないのかかもしれない。他にはアドレナリンとか？）でなんとか身体の形状の維持には成功したけど、生命活動は危機的状態？ というか、HPが残りわずか13。

レベルが違うすぎる。

彼女は俺から近藤に眼を向ける。

近藤は今度ばかりは両手を挙げて降参を示した。

「これで、やっと、やっと入学できます。

四章 入学の手引き / 九話 入学（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 結界を張つてから副会長が「力」を放出していましたが、それはなぜですか？

A 副会長の「力」をセーブする力が掛かっているからです。それを、あの結界で無効化したようです。

♪結界の中じゃないと思う存分「力」が使えないみたいだね。

四章 入学の手引き / 九話 入学

その後、生徒会執行部を名乗る生徒達に捕まり、生徒用の「反省室」に連れて行かれ（分厚い鉄の扉が付いていた）、先生と名乗る人達に詰問され、身体検査を受け、手錠（海楼石でできる）をされ、牢屋（？）に連れて行かれ、今に至る。

「もう、予定と全然違つじやない！」

近藤が壁を蹴つて愚痴る。

俺と近藤はそれぞれ別の牢屋に入れられていた。

「山下。入学の願書はどうなつたの？」

「取り上げられた」

身体検査を受けたときに持ち物は全部没収された。もちろん、「天狗之隱蓑」（この中にほとんどの武器を入れていた）もだ。といつても、「天狗之隱蓑」を勝手に開けることはできないだろうが。

「その可能性にかけるか……」

近藤があ、とため息をつく。

経由方法がどうであれ、「入学届け」は学園側に届いたはずだ。
問題はそれを受理してくれるかどうかだが。

「……ねむ……」

俺はあぐいをもじす。

捕まつたせいで逆に緊張が解けて、今までの疲れがビリと沸いた。
近藤の方も眠いよりで、愚痴を言いながらも、だんだんと静かになつていく。

「はあーあ……」

俺は眠りに落ちた。

現実って、何なんだろう?

どうしたんだ? 突然。

だって、こゝはこゝんなにも……

眼を覚ましたとき、そこは牢屋ではなかつた。

白い壁に覆われた清潔そうな部屋の、白ごベッドの上に寝かされていた。

保健室。ねそりへそりだらり。

「おっ。田え覚ましたな

二十歳くらいの女性の声が聞こえてきた。

体を起こす。

周囲を見渡した。

うん。保健室だ。

だが、近藤の姿が見当たらない。

5つあるベッドには俺ともう一人（布団の中に潜り込んでいて誰か分からぬ）しかいない。

「なんや、いきなり連れの心配かい」

俺の様子を見て保健室の先生（？）がくつくつと笑う。

「おっと、そんな身構えんでもええで。あんたら2人にはもう何の命令もでてないんやから」

「私、戦闘員となりやう」と、手をひらひら振る。

「どうか、生徒会の執行部の子に感謝しーや。なんやしこんけど、あの『入学届け』受理するように尽力してくれたらじこで。無事入

「学できてよかつたやん」

「そうか。入学できたのか。

「これで作戦の第一段階は完了した。

「うーん。だけどな……。

「なんや、その疑うような田は。まあー、確かに信じられへんのは
よ一分かるで。不法侵入罪やし、器物破壊やし、暴行罪もあるしな。
あと、殺人罪もあつたつけ。

「心配せんでええ。あんたの過去は全てきれいにぱりぱりクリーニング
オフや。首にかかった賞金も〇になつとるで」

「クリーニングオフはまざいんじや……。

「まあ、とにかく。よひいへ、『学園』へ。つてとにかく。編入生

君

四章 入学の手引き / 九話 入学（後書き）

これで確かに入学しました。
「学園」編はこれからです（しばらく革命の話は、表向きにはなさ
そう）。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

『なぜなぜに？』

Q あの回想は何ですか？

A これからへの布石です。主人公の過去がこれからの展開を狂わします。

「といつても、最初は少しずつしか出てこないけどね。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「魔法障壁」による防御

「瞬動術」による移動

備考 主人公

高校二年生

反政府組織「バツファローズ」のメンバーとして、「学園」

内に侵入

近藤 美紀
こんどう みき

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

備考 ヒロイン

高校一年生

内に侵入
反政府組織「バツファローズ」のメンバーとして、「学園」

生徒会副会長 本名不明

レベル 不明（40以上）

世界観 「とある科学の超電磁砲」

得意技 「発電能力者」としての電撃攻撃からなる「超電磁砲」
による攻撃

「瞬間移動能力者」としての「瞬間移動」

備考 本気の「超電磁砲」は山下の「魔法障壁」を紙のよつて貫く

次章予告

例え好意的に見えても、その真意を確かめる術はない。

裏で何が行われようとも、気づかなければ、世は平穏。

しかし、いずれ己に降りかかる。

次章、「監視役と『学園』案内」。

少年は、何も知らない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

「生徒会副会長」をこつぎに変換すると「生徒回復会長」になるんですね。

『なぜなぜに?』

Q 学園の話はどのくらいあるのですか？

A 第一部のほとんどを止めます。

～革命の準備は学園内でしますよ。

五章 監視役と「学園」案内／一話 監視役

保健室の先生（本名、雨休看。あまやすみ。「保健室で働くつて運命付けられたったんやね」と笑っていた）の話によると、俺達の「入学届け」は正式に『学園』側に受理され、俺と近藤はこここの生徒となつたらしい。

疑りの目で見つめると、休看先生（名前で呼ばれるのがいいらしい）は「はい、これ」と生徒手帳を放り投げてきた。

中を確認して手帳を閉じる。

「お連れのもう一人は、先に『学園』案内されるとるで」

「あんたも行きや」と休看先生に保健室を追い出された。

自動ドアを抜けて外に出ると、1人の短髪の女子生徒が待つていた。

「ようこそ、『学園』へ」

淡々と答えて、着いてくるように促す。

「え、えーと。俺の案内役？」

「監視役」

監視役？

「あんた、何か勘違いしてない?」

ぐるりと振り返って、人差し指を俺に向ける。

「確かに入学は許可されたけど、それであんたへの警戒が解かれたわけではないよ。あんなことしておいて、お咎め一つないとでも思つてたの?」

「……」

彼女は前に向き直つて、ずんずん進む。

それに俺は続いた。

彼女は御津見みつつといい、「学園」内の構造を説明した。

「学園」の中央には「メインラボ」のある円柱型の巨大な「センター」が建つており、そこを中心的に8つの小型（小型といつてもそれは中央の「センター」と比べて）の「センター」が等間隔で円周上に並んでおり、北から時計回りに、第一塔、第二塔と番号が振られている。「中央センター」と「小型センター」との間、そして「小型センター」同士は円周に沿つて、通路で結ばれている（俺達が破壊したやつ）。

「学園」内の教育機関は「小型センター」に集中しておつ、「中央センター」は研究施設がほとんどを占めている。

「中央センター」の直径は約2km（「中板区」の直径は約15km）、高さ500m、地下は100メートルである。

隣には「インフレックス」の基地があるが、説明はまた後日。

俺が寝ていた保健室は第5塔の一階部分に位置する。第5塔には主に「学園」内の人間、又、外からのお客の就寝所、初等部の教育施設と実践施設が宛がわれている。

「初等部の実践設備が就寝所と同じ所にあるのは何で？ 危険じゃない？」

「刺激ある日々を送るため」

「……刺激？」

「学園長の方針。学園長、馬鹿だから」

馬鹿ね。

設定としてはよくある設定だが。

そういう学園長に限って、実は凄い切れ者で、何か隠してたりするんだがな。

「Jリーグが中心

「センター」の中心は吹き抜けになつており、移動用のマットが上下している。

教室や実験施設はその周囲に配備されている。マットの移動区域の周囲には螺旋状に階段があり、一階、二階分の移動は階段の方が早いのでこちらで行われる。

周囲にはこの生徒や研究員が見える。

「あなたの顔を知つてるのは生徒会重役員と教師くらいだから」

「騒がれることはなによ」と御津見は言つ。

「私達も別に騒ぐつもりはない。あんたが今まで何をしてこよつといじでは関係無い」

「だったら監視はやめてくれないかな」

「いじの人間を危険に合わせるつもりもない」

御津見と一緒にマットに乗り、一つ田の通路のある10階まで昇る。

通路は各「センター」の10階と20階に設置されている。

俺達が壊したのは20階の、第7塔と「中央センター」を繋ぐ通路らしい。

向かうのは「中央センター」にある職員室。ちゃんと入学の手続きしないとね。

五章 監視役と「学園」案内／一話 監視役（後書き）

やつと「学園」の生徒となつた主人公。
これから監視役の御津見といろいろありそつ。
つて、近藤はどこ？ ヒロインでしょーに。

『なぜなぜに?』

Q 学園の形には何か意味があるのですか?

A 意味はあります。

～まだその時じやなにはびぬ。

五章 監視役と「学園」案内／一話 新展開

御津見によると、俺達が壊したたせいで、第五棟と「中央センターハイツ」とを結ぶ上の通路は現在使用不可とのことだった。通常なら高レベルの「有力者」が相手だからといって、「学園」の建物がほいそれと破壊されることはないらしい。やはりあのときは「無気嵐」の影響で「学園」側の防護システムがダウンしていたようだ（通常、「無気嵐」の中を突っ込むような愚か者はいないため、そこまで警戒していなかつたらしい）。

破壊されていない下の通路を使って、「中央センター」に向かつ。

両側に整備された歩行者用の動く歩道に乗る。

「思ったより人が見えないんだけど」

「ああ、今日は休日だから、皆は外」

「休日って、日曜日?」

「他に何曜日があるの?」

「いや、土曜日とか」

「土曜日は実践練習日」

実践練習なんてやつてるのか。

「言つとくけど、私は『有力者』じゃないから

「ふーん。それでも実践練習とやりこなでてるの?」

「あんたも出るのよ」

暫らく御津見に「学園」の説明を受けながら、通路を移動する。

「そりゃいえ、俺ともう一人いただる。あこつまじこにこるんだ?」

「とっくに入学手続き済ませて、今頃「学園」生活の準備中でしょ」

「中央センター」に着いた。

各センターと通路の間には扉のような隔たりはない。

俺は一步踏み出そうとして、御津見に止められた。

「ひいひ」

御津見は「中央センター」すぐ傍の、通路の壁に手を触れる。

「『指紋証、バス、網膜スキャン、バス、学生証、認証』

「見えないけど、『うつシスティム』なのよ」

御津見に言われた通りに指紋証と網膜スキャン、それと学生証の確認を終える。

「これを忘れて中に入ったらいづなるの?」

「警報装置が働いて、惨事になるわね」

「惨事つて？」

「拘束されて、偽者がどうかの拷問と、事業に支障を来たした分の罰金つてとにかくしら」

どこまでが本当かはおこでおこで、とにかく、まずはいのは分かつた。

教員と顔合わせをして、担任教師との挨拶も終えた。学園長は留守りしく、挨拶は後日とことうことになった。

書類等に印を通してサインして、手続きを終える。

「それでは、これからよろしく」

担任の泉獄先生と握手を交わして、お開きとなる。

「寮を案内するわ」

御津見の後に続いて、第五棟に戻る。

「あのや」

「何?」

「こつまで監視続くの? もしかして、一田中とか言わないよね?」

「はあ? 何言つてるの? 何で私があんたと一田中一緒にいないといけないわけ?」

然様ですか。

「でも、部屋は隣よ」

学生寮はもちろん、男子寮と女子寮の一ひとつに分かれている。

ただ、建物自体は一緒だ。

部屋は円を描くように配置されており、半分が男子専用、半分が女子専用となっている。

その間には仕切りがあり、これが何故か、男子は通れないが女子は自由に通れるという、作りになっている。

そして、俺の宛がわれた部屋なのだが。

男子用と女子用の接する一組の部屋は、緊急避難用に繋がりついたりする。

つまり、行き来が自由なのだ。

で、何故俺がこの部屋を宛がわれたかといつと。

「言つとくけど、勝手に入つてきいたら殺すから」

「俺は別に飢えてねえよ」

非常口と書かれたドアから御津見が顔を覗かせて言つ。

「とにかく、あんたは監視されていふることを自覚して生活しなさい」

「それって、この部屋がつてことがか？」

「さあね。あと、報告義務があるから、定期的にそっちに行くわよ」

「はあ！？ 何言つて……」

「伝えたからね。私が入れる部屋にしてなさいよ」

御津見は向こう側に戻った。

鍵が掛かる音がする（電子音と錠前の二つ）。

つこでこいつと、一いち側には鍵がない。

おいおい。

せめて、監視役は男にしろよ。

ため息をつく。

結局、近藤には会えなかつた。

他にも心配事はある。

生徒会執行部が俺達の入学に尽力してくれたらしいことだ。

何か裏があるのか？

……。

「分からん」

その場に寝転ぶ。

没収された荷物全部帰つてきている。

「天狗之隱蓑」の中には近藤の荷物も多く入つてるので、渡さないといけない（下着とかあつたし……）。

荷物整理でもしようかと（戦闘で「天狗之隱蓑」の中に攻撃を入れまくつたから、中が壊滅的になつてそう）思った矢先、俺の部屋のドアが外から開けられ、数人の男子生徒たぶんが入つて來た。

「転校そうそうすまないが、我々の作戦に協力してもらひづ」

一番最初に入つてきたリーダーっぽい雰囲気の奴が、訳のわからぬことを言う。

「共に、この『学園』の野子のため、戦おう。」

はあ？

五章 監視役と「学園」案内／一話 新展開（後書き）

学園生活、いよいよスタートです。
最初は派手にやらかします。

『なぜなぜに？』

Q 学生証は何か意味があるのですか？

A あります。学生証にはいろいろな「安全装置」が付けられています。
「もちろん、それ以外の機能もね。

「かつて！」の『学園』は、男女平等を謳つ、すーぱらしき『学園』だつた！

だが、10年前のあの日、あのくそ学園長のせいで、我々男子は、屈辱を味わい、苦汁を舐めることとなつた！

女子寮には各部屋に、空調整備システム、温度調節システム、四段階調節の電球、高級綿を敷き詰めた「オージャスベッド、電気刺激を用いたマッサージチェア、大型冷蔵庫、電子ロック四種整備の各種ドア、個人用バスルーム、モーニングホール、各種ドリンク無料取り寄せサービス……等々、男子寮にはないものが今でも多く配備されている。特に、空調整備システムと温度調節システムの有無は大きい。

我々男子は、この状況に意義を申し立てる！

女尊男卑の腐った体制を取り払い、今こそ、眞の平等をこの手に掴むべく、立ち上がるのだ！

確かに、10年前のあの日、『寮改築の際に余った経費をどちらに費やすか決定戦』で敗北したのは、我々男子の同胞、我々の先輩達だ。これは認めよう。確かにそれは、10年前の事実だ。

しかし！

それはあくまで10年前の話。

これだけの歳月がたつた今、我々がこの状況に甘んじる必要はどこにもない。

だが、女子は我々の平和的話し合いにおいて、拒絶を示した。

交渉が決裂した今、我々に残された選択肢はひとつ一

つまり、武力行使により女子寮の制圧、並びに占領だ！」

「「「おおおおおおおおおおおおおおおお…」」

むせ苦しい男達の声が重なり合ひ。

「時は来た！ なんと、同志、山下君は緊急避難用の部屋への入室を果たしたのだ！」

「「「おおおおおおおおおおおおお…」」

「学園」高等部一年に所属する男子達が俺を感動の眼差しで見つめる。

中には、涙を流している者までいる。

……。

御津見と分かれてすぐ、俺は部屋に不法侵入してきた男子らにつられて、風呂に連行された。

150人は収容可能と思われる浴場には、服を着た男達で溢れ返っていたわけだ。

この男達のリーダー、郷馬健のスピーチに無理やり参加させられた俺。

「学園」の教育機関の振り分けは、現実と同様、初等部、中等部、高等部、大学部の四つに分かれており、俺の所属する高等部一年の男子生徒全員がここに集まっている。

「長く、苦しい生活だつた。だが、それもこれで終わりだ。

同志諸君！ 併に、戦おうではないか！」

ମୁଖ୍ୟମନ୍ତ୍ରୀ?

熱氣に押されて、何となく一緒に声を出してみたり……。

要は、女子寮に喧嘩をしけかけ、部屋の設備を入れ替える、といつことだらう。

それはいい!

けど。

「ありがとう、君のおかげだ」

何故俺の参加が当たり前に決まっているのだろうか？

「あ、あのー。郷馬君？」

「何だ？」

「どうして俺も参加なの？」

郷馬は、そうか、と言つて、一人で頷いた。

「山下同志は転校初日。なら、しかたがない。

この『学園』の現状を知らされてはいないのである。

だが、先ほど自分が言つたとおり、この『学園』は現在、女尊男卑が陰の校訓と言われる有様なのだ。我々は、男子の威厳に掛けて、この体制に反抗しなくてはならない。

まだ、疑つているのか？ まあ、最初は仕方がないだろう。

だが、自分の同志は君意外の全ての男子生徒だ。もし反対すれば、全員を敵に回すことにもなりかねん。下の者の動きまで完全に掌握できているわけではないのでな」

いや、ちゃんとまとめよう。

この馬鹿騒ぎに参加することを半ば諦めつづため息をついた。

周りでは、すでに作戦会議が始まっている。

その熱気を破つたのは、女子生徒の声だった。

「生徒会執行部だ！ 寮則違反につき、貴様らを取り締まる。全員

確保！

「全員、各自退散！」このことは絶対に漏らすな！
拘束されたら
プランBを実行せよ！ 以上！」

五章 監視役と「学園」案内／三話 男女（後書き）

なんか、変な方向へ話が進んでいます・・・・・

五章 監視役と「学園」案内／因話 危機？（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「寮改築の際に余った経費をどうに費やすか決定戦」はいつか描くのですか？

A 今のところ、そのつもりはありません。
～最後におまけで作るかも？

五章 監視役と「学園」案内／因話 危機？

浴場から出るには、正面ドアから出るしか方法はない。

したがって、「有力者」が生徒会執行部の『氣』を引き、その間に逃げるのだろう。

一見無謀にも見えるが、生徒会執行部員の数と浴場の男子の数では、その大半が逃げ切ることとなるのだろう。

そうふんで、「瞬動」でも使つてしまつたと逃げよつと思つた矢先、向いの側からドアが開かれた。

と思つたら、すぐに閉められた。

「？」

「催眠ガスだ！」

ドアの近くにいた連中が報告する。

周囲は煙に包まれ始めた。

「催眠ガスつて……」

顔を抑えながらつぶやく。

しかたがない。いつちよやつてやるか。

「『風』」

風を起こしてガスを吹き払う。

「あれ？」

風は出たが、せいぜい俺の顔をくすぐるくらいだった。

「そうやつ、君には言つていなかつたが、『学園』内にいる間は、『力』はほとんど封じられている」

それを先に言え！

平然と立つている郷馬に向かつてつっこむ。

くそつ、視界が霞み始めた。

「だつたらどうするんだ？ 出口は一つ。生徒会執行部が固めてやがる。しかも、向こうは武装してるんだが？」

「按づるな。こちらにて無策ではない」

誰かがドアを開けた。

「ああ、なるほどね」

ガスが外に出て行くのを確かめる。

ドアを開ければもちろんガスは外に出て行く。

そして、ここが重要で、外の女子達にはこちらの中に入つて来れない。

だから向こうは催眠ガスで無力化を狙つたのだろう。

「走れ！」

男子達が一勢にドアに向かう。

そして、外に出た全員が吹っ飛んで帰つてきた。

「やはり駄目か」

郷馬が舌打ちをする。

いやいや、分かつてたんだ、こんな所に集まるなよな。

「生徒会長と生徒会副会長もおらず、非常事態でもない今、これほどまで「力」を發揮できる生徒会執行部員は……3人くらいいたかも？」

「…………」

今分かつた。

「これは「抜けてるキャラ」。こうのは、自分の力じゃなくて他人の力で乗り越えていく、という設定が多い。

そしてもう一つ分かつたことがある。

「それじゃあ、脱出するといつつか」

「それじゃあ、脱出するといつつか」

郷馬がよつとひじょ、と屈伸をする。

そして、ポケットから携帯銃を取り出した。

「誤解がないよつて言つておけば、『学園』内で誰かに怪我を負わせるのは法度だからね。この銃も、無力化だけに特化した一品」

周りを見渡すと、他の奴らも皆それぞれ手に何かしらの武器を持つている。

「それでは、諸君、健闘を祈る」

そう言つて、郷馬は一番先に飛び出した。

俺の腕を掴んで。

「え？ ちょっと……？」

走りながら郷馬はサングラス（後に変装用と判明、つけると認識阻害の何らかの力が出る）をかける。

「田を押されて」

「え？ 田？」

次の瞬間、郷馬の右手から凄まじい閃光と、耳を突き刺すような

音波が発せられた。

「ひえー」

生徒会執行部がひるんだ隙に、傍を走り抜ける。

他の連中もそれに続くが、被害が少なかつた執行部の生徒達がそれを阻止しに走る。

郷馬は暫らく走り続け、移動用マットに乗り、男子寮にまで戻つてきた。

「やつと二人っきりになれたね」

突然、意味不明なことを言い出す郷馬。

確かに、周りには誰もいない。

「さてと」

顔を近づけてくる郷馬。

もしかして、アレか?

アレなのか!?

冷や汗が垂れる。

まづい。この体勢はまづい。

壁に押し付けられて両腕を抑えられて、何をされても抵抗できな
い。

「えーと、何?」

苦笑いで聞く。

「分かってるくせに

俺の耳元で囁く。

分かりたくないよー

五章 監視役と「学園」案内／四話 危機？（後書き）

何か大変なことに・・・・・

『なぜなぜに？』

Q 催眠ガスはどこかで仕入れてきたのですか？

A 化学の授業中にこいつそり大量に作りました。
～少量の物を「力」で増やしたんだよ。

五章 監視役と「学園」案内／五話 ジム

「君、『バッファローズ』の一員だろ？」

「！」

「『解禁』、『』」

「おつと、『力』を使うのは賢明ではないと想つた

「つべ……

「なに、心配する必要はない。僕も『バッファローズ』の一員だ

いきなり信じられるか。

「リーダーの性別、年齢は？」

「少女、年は僕らと同じくらい。それで納得した？」

僕は郷馬を睨むのを止めた。

「もしかして、生徒会執行部員？」

「ああ。君をこの『学園』に入学させるのに一役買わせもらひった

「よ

郷馬は僕の拘束を解く。

「で、何？」

「潜入役の先輩として言つておくと、暫らくは学園生活をエンジョイした方がいいよ。怪しまれずにする」

「分かつてるよ、そんなこと」

「君に監視がついてるのは知っていた？」

「御津見とかいう奴だろ？」

「彼女はあくまで凶。他に五人以上の生徒会メンバーが君を張つてるよ」

つげ。

それは気づかなかつた。

本当だつたらだけど。

「ついでに、全員女子」

あ、そう。

つて、だから浴場だつたわけか。

「で、俺にどうじる？」

「明日の夜明け、女子寮に奇襲を掛ける。君も、本気で参加してほしい。ついでに、その方が監視は緩くなるだろうし、監視対象から

外れるかもよ

「やつ。分かつた」

翌日、朝っぱらから御津見に起された。

「今日は外に行くわよ」

「学園」案内は、昨日が中、今日が外となっていました。

ちなみに、御津見は俺の部屋の田舎ましを勝手にセツトしていた。

御津見について、「センター」の外に出る。

「トーキューティ区」の「中枢区」には「インフレッシュクス」の基地と、「学園」の施設で溢れかえっている。

そのため、買い物等は「生活区」で行ひりじ。

「レジで必要なものを買ひ揃えるの」

御津見の説明を聞きながら、商店街の中を歩く。

「そこで食料は買えるわ。ちょっと高けれど、質は悪くないわよ。
おつと、そこは子供が入ってはいけない店よ」

「つて、なんでそんな店があるんだ？」

「町だもの。当たり前ですよ」

ちなみに、「中板区」内にむかとこつか「学園」の「センター」内にも店は出ている。が、価格が馬鹿高いらしく。

「いつして見ると、実に変だな」

「中板区」は先端技術を用いているのに對し、この「生活区」は中世ヨーロッパ並みの整備でしかない。

「これ、生活環境の違いに文句はでないのか？」

「『学園』は入学届け出せば入れるから、皆子供のこひは『学園』の生徒だったのよ。だから、反発はないわ。私達だって、軍に入るか研究職に就くかしない限りは、ここに住むんだから」

「ふーん」

俺は何となく辺りをきょきょく見回す。

前回、俺は「生活区」で「アスラクライン」の力の持ち主と遭遇している。状況から考へるに、彼はおそらく人間だ。NPCではない。となると、この世界に残るか否か、聞く必要がある。

そういえば、近藤はビリするつもりなんだろう？

彼女に聞くのを忘れていた。

「『生活区』はひんな感じ。分かった?」

「ああ」

「じゃあ、私は用事があるから、付き合こなせー

「はあ?」

「あなたは私の監視対象なの。私の田の届く範囲ここなへてはいけないのは当たり前でしょ」

普通は逆だと思つが。

まあ、他に用事もなことだし。

俺は御津見に付き合つてはいけないことを決めた。

「分かつた。で、どこに行への?」

「ジムよ」

御津見の言づジムよ、づひやひ、現実世界のジムと回りよひだつた。設備レベルは違つが。

「よひ、来たか、嬢ちゃん」

御津見が入ると、屈強そうなおじさん声を掛けってきた。

「ええ

「そつちの彼は彼氏か？」

「唯の馬鹿よ。ちゅうどこいわ。彼も扱いて頂戴

「いいのか？ 素人にはけっこつきつけせ」

「彼は『有力者』よ。ちゅうとやそつと、大丈夫でしょう。たぶん
……」

おこおい、勝手に話を進めるな。

しかも何だよ、たぶんって。

せめて断言してくれ。

「いや言つてゐるけどいいのか？」

「別に構いませんよ」

他にあることもないので、軽く了承する。

「よし、そつか。なら、来い」

おじさんに連れられて、俺はジムの奥に向かつた。

奥は屋外になつており、上からお日様が覗いていた。

「」は、近接格闘を専門とする、総合格闘技場だ。

そして、何故か戦闘は常に屋外。

隣では、御津見がボクシングの構えをとつて、ミットめがけてハイキックをかましている。

不意打ちの練習か？

「」ちだ、ぼうず

おじさんが俺を呼ぶ。

「まずはお前さんの力量を見てみることにせざりもできんからな。まあ、今日一日だけだし、本格的にやるわけじゃないが、『有力者』となれば話は別だ。お前さん、『学園』の生徒だろ？ だったら、『インフレックス』に入るかもしれないねえってこつた。俺はこれでも軍のとある隊長と知り合いでな。せつかくだし、少しくらいなら稽古つけてやるよ」

なんか、どんどん話が進んでいく・・・・。

さすがはゲームの世界。

「」ちが大して苦労することなく、修行の場が手に入る。

「まずは俺に一発入れてみる」

ふー、と息を吐く。

「おじいちゃんの場合、おじいさんはめちゃくちゃ強いのがベタな設定だ。

この稽古で俺は屈辱を味わい、弟子入りとかになるのかな？

「それじゃあ、こきますよ」

だが、やはりゲームはフラグを折ることに意味がある！

「じゃ、華麗に勝つて、フラグを折る！」

それくらいできないうでないと、現実世界には帰れないだろう。

なんせ、俺は、ゲームに囚われたのだから。

「光の精霊 101柱、ケントウホト・ウヌス ベンリーリキヤス・カシモス 集い来たりて敵を射て、イニミクガキテント 魔法の射手、サギタ・マギカ 集束。コンウェル
光の101矢」！！」

101本の「光の矢」を集めさせる。

拳に乗せられる「魔法の射手」はこれで限界。

「のおじさん、がごうなるつと知ったことか。

一発で岩を碎く攻撃が百一発分。

「桜華崩拳」！

大砲並みの威力を誇る拳を、おじさんに叩きつけた。

五章 監視役と「学園」案内／五話 ジム（後書き）

戦闘が戻つてきました。

果たしておじさんに勝てるのか？

ゲームの設定をぶち壊せ、主人公。

『なぜなぜに?』

Q おじさんは御津観とどういった関係なのですか?

A 親戚です。

結構仲はいいですよ。

五章 監視役と「学園」案内／六話 わじわん

突き出した拳に対し、おじわんは俺の腕を下から持ち上げる。

そして、そのまま回り込み、一本背負い。

「つべ……」

背中が叩きつけられる瞬間、障壁に魔力を集中させ、衝撃を緩和する。

せりに、体をひねって、強引におじわんに捕まつた腕を開放し、距離をとる。

おじわんは涼しい顔で、来いよ、と手招きする。

拳は避けられた。同時に放つはずだった「魔法の射手」はまだ健在。

「一やうづ

「瞬動」でおじわんの正面に移動する。

腰をかがめ、「桜花崩拳」の準備。

おじわんが拳を繰り出す。

「瞬動」で背後へ。

おじさんのが腰を捻つて、横からの殴打に変更。

更に「瞬動」でその背後へ。

「のむっ……」

近接戦闘の技術では勝てない。

その理由は簡単。

俺の攻撃は常に、「コンピューターで予めシミュレーションされた業」の組み合わせでしかない。俺自身が攻撃しているのではなく、俺が攻撃コマンドを選んでいるに過ぎない。

ならば、仕方が無い。

「つむあー…」

左肩から前に突っ込む。

右腕を引き、チャンスを待つ。

「おつと」

おじさんは左足を後ろに蹴り上げ、俺との密着状態解く。

そのまま前転し、おじさんは立ち上がった。

「これは意外だな」

おじさんはそう言つたが、全然焦つた様子はない。

思考をめぐらす。

「桜花崩拳」はもう無理だ。

「魔法の射手」をこれ以上キープしておくれでできない。

「つたあー。」

「魔法の射手」101本をおじさんに乱射する。

近接戦闘のジムでこれはやりたくないが、仕方が無い。

勝ち方にこだわりはない。勝利の一文字だけが田舎でだ。

「ふー。やっぱお前さんは『有力者』だな」

懷こぬくもりを感じる。

!

しまつた。

氣づいたときには体が吹っ飛んでいた。

障壁を貫通する一撃。

「『有力者』じゃなくても、戦闘はできるんだぜ、まづや」

おじやんの声が聞こえる。

「うぐ、『解禁』、『獣化』」

肉体を変化させる。

「いいのか？ 遠距離の方が勝ち田あると悪いわ」

「んなことは分かってるよ。」

「瞬動」（この状態でも出来る）。

「むう、来るか」

小細工なしのタックル。

「これなりじうだ。」

「足元がお留守だよ」

足を引っ掛けられた。

体が浮く。

「ぐはう……」

膝蹴りをもひつ。

次に来るのは拳の打ち落としのはず。

これで決めに来るのだろう。

ならう。

「つべ……」

一撃耐えねばいい。

決め手として放たれた一撃を耐えねばいい。

「はいっ！」

背中に拳の打ち落としがなされる。

不意打ちと、予め予想されていた攻撃とでは、体へのダメージが大幅に違う。

「『光の^{ウナ}_{ルキス}一矢』！」

地面に向けて放った。

「魔法の射手」の反動で、おじさん^{の顔面}に背中からタックルを食らわす。

「なつ・・・・・」

不意打ちを食らったおじさんは数歩後退。

顔面への攻撃だ。ダメージも大きい。

近接戦闘では勝てない。

下手に遠距離攻撃を放つても避けられる。

「瞬動」でおじさん正面に移動し、右手を翳す。
「風の精霊 11人、縛鎖となりて、敵を捕まえろ」

「『魔法の射手・戒めの風矢』！！」

「おおっ、これは……」

魔法の繩がおじさんを拘束した。

「俺の勝ちでいいですか？」

「いやー、やられたよ。だけど

背後に殺氣を感じる。

「なっ……」

「まだまだ子供だね

「まだままだべりって、抜け出したんだ？」

あれは基本的な魔法だが、嵌れば暫らくは抜け出せないはずなの

「はい、終わり」

首筋に手刀を食らって、俺はその場に倒れた。

五章 監視役と「学園」案内 / 六話 わじわら（後書き）

なんか主人公、負けっぱなしですね

『なぜなぜに?』

Q おじさんは一体どうやって、「戒めの風矢」から抜け出したのですか?

A 秘密です。読み進めていけばいずれ分かりますよ。
ヒントは次回の話にあるよ。

「なにほけつとしむるのー。」

御津見の声で我に返つた。

あわてて彼女の後を追つ。

っくわ。

地面をこりみつける。

あのあと、一度二度とおじさんに挑んだのだが、どれもあっけなく負けてしまつた。

「五時までは帰らないといけないんだから、やつせと着いてきなさい」

「えりく早いな」

そう呟いたが、それについての説明はなかつた。

ジムを出た後、御津見のショッピングに付きました（ビルして女つていうのは物を買うのにあんなに時間が掛かるんだ？）、昼食に付き合つて（一食ぐら）高カロリーな物を食べても大して変わりないだふ（元氣）、今に至る。

五時に寮に帰るつと思つたら、三時には「生活区」から発つ準備を始めないと云つた。

「中枢区」内にはベルトコンベアを用いた歩道が設置されているのだが、「生活区」にはそれがない。移動は基本徒歩で行わなくてはならず時間が掛かるのだ。

「あつ！？」

後から叫び声が聞こえた。

俺と御津見が振り向くと、大工姿の同じ年くらいの少年がいた。

「知り合い？」

少年が俺の方を凝視しているので、御津見が聞いた。

「いや、大工に知り合いはない」

そう言つて少年の顔を見て、ふと思い出した。

あつ！

「忘れたとは言わせませんよ。コーチさんの仇はまだ取れません」

彼は「アスラクライン」の使い手、俺と近藤がこの町で会った始めての「有力者」だ。

「仇？」

御津見が首を捻る。

「あ、そう言えばあんた、殺人の経験があつたわね」

ぽんつと手を叩いて御津見が納得する。

「なるほど。その相手が彼の『一チさん』といわけね。いいわ。監視役の私が許す。存分にやっちゃつていいわよ」

御津見が俺を少年の方に押し出す。

「つちよつと！俺の罪は問われないんじゃなかつたの？」

「被害者の心の傷までは対象外よ。恨まれる」としたあんたが悪い。あ、そうそう、ここつは元犯罪者だから殺しちゃつてもせいぜい過剰防衛つてところだから」

おい！

ジムでのことといい、お前は俺の監視役じやなかつたのか？

それに少年の方も。お前は例の「一チさんと面識ないはずだ

周りを見渡すと、いつの間にかギャラリーが俺達を取り囲んでいた。

「逃げられないわ。馬鹿ねー」

「お前のせいだらうが」

ପ୍ରକାଶକ

なんか、思い通りにいかねえ。

少年の方を見る。

向こうはやるき満々のようだ。

ええい。

もう知らん。

所詮これはゲームなんだ。

むちゅくちゅな人生にならうが、現実世界に生きる俺としてはなんら関係無い。

「『來い、 ?鐵』！」

少年が「機巧魔神」アスラ・マキーナを呼び出した。

「『闇より深き深淵より出し、其は、科学の光が落とす影』」

黒い鉄の鎧武者が姿を現す。

俺は「魔法発動体」である指輪に触れる。

「『？鐵』！」

少年の声に反応して、「？鐵」が拳を振り上げる。

瞬時に魔法陣が拳の前に現れ、「？鐵」の魔力を増大させる。

「黒の拳撃」。

「『最大防護』！」

障壁を開け、「黒の拳撃」を防ぎにかかる。

だが、重力制御能力を有する「？鐵」の前では、障壁など軽く破られてしまう。

だから。

「瞬動術」！

俺は「？鐵」の正面に跳ぶ。

右手をすでに振るつてしまつた「？鐵」に残されているのは、左手のみ。

「『？鐵』！」

一度目の「黒の拳撃」を「光の矢」の反動で避け、その腕に乗る。

「つな・・・・・・」

「？鐵」を蹴つて、再度「瞬動術」。

「？鐵」の背後に回つこむ。

そしてそこには、「^{ハンタラー}操縦者」の正面もある。

「光の精霊の柱、集い来たりて敵を射て」

無防備な「操縦者」を撃つ。

「『魔法の射手、集束・光の矢』…」

「同じ手は一度も通用しませんよ。『？鐵』…」

少年の正面に「？鐵」の頭が現れた。

黒兜が「光の矢」を防ぐ。

「そうか。部分還

本体の方に目を向けると、首から上がなくなっている。

少年を守った首は持ち上げられ、本体が姿を現す。

それと共に俺の背後の「？鐵」は消えていた。

俺は跳んで、「？鐵」から一端距離をとることにする。

少年が近くの建物に近づいた。

影が曲がって、高くなる。

しまった……

「『？鐵』！」

「機巧魔神」は「演操者」の影を媒介に出現する。

真横から現れた「？鐵」の本体が、重力に従つて俺を潰しに掛けた。

「まったく」

声を聞いたかと思うと、俺の体は誰かの衝突で横に飛ばされた。

御津見だ。

彼女は何かを握った右手を「？鐵」に向かつて突き出す。

「なにを……」

御津見は「有力者」じゃないと聞いた。

彼女に力はないはずだ。無茶だ。

「御津見！」

五章 監視役と「学園」案内／七話 VS 「アスラクライン」（後書き）

忘れている人もいるかもしれない、「アスラクライン」の使い手君の登場でした。

五章 監視役と「学園」案内／八話 急展開（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「機構魔神」の前回のような召還をテレビでは見なかつたんですけど？

A あればオリジナルです。

（本は読んだことないから、本には出てかも？）

五章 監視役と「学園」案内／八話 急展開

御津見の右腕と「？鐵」の右腕が接觸する。

「？鐵」の右腕の重力制御によつて、御津見の腕が潰されるはずだつた。

「……！」

「アスラクライン」使いが息を飲む。

御津見と触れた所から、「？鐵」が戻り始めたのだ。

俺は目を丸くしながら、光る御津見の右手を凝視する。

彼女が握っているのは、小さな金属部品。それが光を放つてゐるのだが、あれは一体何なのだろうか？

「有力者」でなくとも、「有力者」の力によつて生まれた物は、本人でなくとも使うことができる。

だとすると、あれは何かのアイテムか？ だが、無効化とはまた様子が違う。俺の把握していない種類の話か？

「つと……」

御津見が地面に足をつく。

そして、「アスラクライン」使いに向かつて言つた。

「あんた、うちに来なさい」

そして何故か「アスラクライン」使には「学園」に入学する」とになつた。

正式な入学は数週間後になる予定だが、これで一先ず接触の機会が増えたことになる。

「アスラクライン」使いの名を、三木恭介みき きょうすけと言い、現実世界の人間と判明した。

御津見が「学園」と連絡を取つてゐる間に彼と接觸し、誤解を解くために「神のお告げ」を見せる。

「すいません。てっきりそいつ設定なのかと思いまして」

どんな設定だよ。

「とにかく、もう一人現実世界の人間も『学園』にいるから、ここは入学しとくに限るぞ。調べたところ、『学園』に入学しといたほうが、いろいろ楽そうだ。それに、学園が目の前にあるのに、そこに入学しない、なんて設定、ありえないだろ?」

「確かに。それにしても、よくそんなに情報が集まりましたね」

「どうか、なんで『神のお告げ』知らないんだよ？普通、気になって確認ぐらいするだろ」

「いやー。僕、今週は『パーソナル・リアリティ』自分だけの世界やり続けるつもりだつたんで」

「あ、もしかして『アドベンチャーワールド』の方？」

「はい。そうです」

「じゃあ、ランキング戦には出てなかつたのか？」

「ええ

大した収穫はなし、か。

まあ、一人仲間？が増えたことだし、ラッキーとするか。

翌日、俺はトイレで郷馬に捕まつた。

「よつ、同志。作戦会議だ」

個室に無理やり連れ込まれ、俺は再びむな苦しげに男子共と対面することになつた。

男子トイレの個室の一つに「四次元ポケット」(*ドラえもん)

が設置してあり、やうが男子の秘密基地になつてこねりしかつた。

「じいちゃんが使つてこむ中団だが、あれは半年以上干してこない」と盗撮器が設置されてゐるか？」

「な……

「それと君が使つてこむ中団だが、あれは半年以上干してこない」

「な……

「つかもあの船廻せ……。やつぱり止めてしまひ

「最後まで聞けー。」

「こやこや、知らぬが仮とこいつやつだよ」

「郷馬は俺を哀れむよひに見てから、「では作戦だが」と言つて男共と話し始めた。

「やいやー、こんだる。やいやー」

俺は彼らの話をこねりこねりした。

五章 監視役と「学園」案内／八話 急展開（後書き）

次からは戦闘のみの章です。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

『なぜなぜに？』

Q あの回想は何ですか？

A これからへの布石です。主人公の過去が全体の流れを狂わして
いきます。
「最初は少しずつしか出ないけどね。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「魔法障壁」による防御

「瞬動術」による移動

備考 主人公

高校二年生

反政府組織「バツファローズ」のメンバーとして、「学園」

内に侵入

近藤 美紀
こんどう みき

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防衛、移動

備考 ヒロイン

高校二年生

内に侵入
反政府組織「バツファローズ」のメンバーとして、「学園」

雨 休看
あま やすみ

レベル 不明

世界観 不明

備考 保健室の先生
けつこういいかげん

御津見 みつみ

レベル 0(のはず……)

世界観 なし(のはず……)

備考 山下の監視役として派遣されてきた

高校二年生

泉獄 せんごく
篝火 かがりび

レベル 不明

世界観 不明

備考 山下のクラスの担任

郷馬 ごうば
健 たけし

レベル 不明

世界観 不明

備考 高校二年の男子の実質的リーダー

反政府組織「バツファローズ」の一員

三木 みき
恭介 きょうすけ

レベル 不明

世界観 「アスラクライン」

得意技 「?鐵」の召還による物理攻撃（鉄の鎧武者の打撃攻撃）

次章予告

欲する物があるのなら、己の力で得るしかない。

欲した物が他者の物なら、奪い取るより他にない。

欲望に駆られたときこそ、人は眞の姿を曝け出す。

次章、「女子寮攻略戦争」。

力を得ても、欲望は満たされない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

急に人が増えました。

『なぜなぜに？』

Q 「アスラクライン」使い、三木君は何をしていましたのですか？

A 正体を隠して町で出稼ぎとついことで働いてました。なぜ正体を隠していたのかというと、別に「力」を使うことがなかったため、尋ねられることがなかつたからです。

「どちらかっていうと、正体を隠してたんではなく、正体を知られなかつたんだよ。

六章 女子寮攻略戦争／一話 戰闘開始【～10:00】

第一次女子寮攻略戦争

勝利条件 男子・女子寮高校一年生用の最深部に一人以上がた
どり着く
女子・男子の女子寮高校一年生用の最深部への侵入
を防ぐ

景品 男子・女子との寮施設交換

女子・各部屋にメイドorr執事（希望の方）配属

注意事項 相手に全治一ヶ月以上の負傷を負わせてはならない

戦闘開始時刻 本日午前10時

戦闘終了時刻 本日午後8時

翌日早朝、各部屋にこのような紙が配られた。

「まじでやんのか……」

通達書を見て呟く。

はつきつ言って、全然やる気じやない。

が、ここに生活していくには仕方がないのだ。

変な注目は受けたくない。

ここは、一般男子達と同じ行動をとるのが一番。

【午前9時50分・男子寮山下部屋内・山下視線】

狭い部屋に大勢の男子が集まっている。

「」の部屋が今回の戦いでキーになる、らしい。

この部屋の隣からが女子寮だそうだが、その境界にはシールドが張られており、女子意外通ることができないそうだ。

そこで、この部屋の女子寮と繋がる緊急避難用通路を使う。

「でも、ここ盗聴器が仕掛けたあるんだろ？ いいのか？ こんな所で作戦の指揮をして」

「構わない。盗聴器を仕掛けたのは大学部の生徒だ」

郷馬は俺に作戦の続きを説明する。

「とにかく、君には派手にやつてもう一つ

郷馬はそう言つて俺の肩を叩いた。

【午前9時55分・男子寮山下部屋外・清閑視線】

「なんで僕まで……」

清閑聖也きよわな せいじや 17歳。高校二年生。

チャームポイントは、気弱な性格。

クラスメイトで高校二年の男子の実質的リーダーの郷馬のせいで、今僕は無理やり戦わされている。

「だから僕は前線で戦える人間じゃないんだ……」

ため息をつく。

僕も一応は「有力者」の端くれ。そりやあ、活躍したいけど。僕の「力」は実践用じゃないし。

「ほりっ、やるひきやねえだろっ

隣の男子が背中を叩く。

「ほりっ、くるだ

【午前9時58分・女子寮側ゲート前・近藤視線】

何だか知らないけど周りに押し切られて戦闘に参加することになった。

話によると、この「学園」の敷地内で「力」を少しでも使えるといつのは戦力として貴重らしい。

「学園」入学時に、生徒は「学園」側から「力」の封印処置を施されている。

そのため、「学園」内での「力」の行使は「学園」側から封印の解除がないと基本的に不可能となっている。だが、その封印処置も万能ではなく、レベル40以上になると封印しきれなかつた「力」の余波を使用することができる。

私と山下が「学園」に侵入したときに「力」が使えたのは、まだ封印処置が施されていなかつたからだ。「力」が使える「有力者」が侵入したからこそ、「学園」の生徒は皆逃げ出したのだ。そして、あの場で全開の私達と張り合えた生徒会副会長の「力」が異常なのだ。

そしてその生徒会副会長、寿緋麻里（じゅひまり）が私達の頭を務めている（初等部、中等部、高等部、大学部それぞれに生徒会があり、副会長の彼女は高校一年生なのだ）。

ポケットに手を突っ込むと、モデルガンを取り出す。

実弾は入っていない。その代わり、当たると全身を神経を麻痺させる毒が塗られたゴム弾が装備されている。

周りの皆もそれぞれ手にモデルガトリングを持っている。

私達の目標は一つ。

全ての男子にこの弾を撃ち込むこと。

ゲートを超えることは戦闘開始まで許されていない。

時計を見る。

残り、8秒……

……。

そして。

鐘の音が鳴り響いた。

『戦闘開始』

寿の声がマイクを通して、私達が着けている通信機（耳にひょこつとつけるだけ）から聞こえてきた。

女子寮側ゲート前の突入班、総勢20名がモデルガトリングを構

える。

『突入』

六章 女子寮攻略戦争 / 一話 戰闘開始 【～10:00】（後書き）

始まりました、戦闘メイン。

『なぜなぜに?』

Q これから、視線はいろいろ変わるのですか?

A 変わります。

～どこでも乱戦になるときだけだよ

六章 女子寮攻略戦争／一話 ゲート前防衛戦？【10:00～】

【午前10時00分・男子寮側ゲート前・清閑視線】

戦闘開始の合図である鐘の音が鳴り響くと同時に、ゲートの向こう側から20人ほどの女子生徒が乗り込んできた。

「うひ、ちゅうと……」

彼女達は皆その手にガトリングを有していた。

「撃て」

中央にいるリーダー格の女子の一聲と同時に、ガトリングが火を噴ぐ。

「うわああああああああ！」

両手で顔を守る。

「ほりひ、じつちも反撃するぞ！」

が、弾丸が当たった様子はない。

一緒にゲートを守る仲間のリーダーである神崎拳君が僕の手を顔からはがす。

田の前に広がるのは、神崎君の絶対防護を誇る「ヘキサ・ウォール方陣障壁」(* 黒神)によるシールド。

「方陣障壁」は「サウザンド」（＊黒神）という道具を用いて使つてゐるらしいので、「学園」内でも使用可能だそうだ。細かいところは知らないけど。

そうだった。僕らは勝ち田があるから戦いに出たのだ。

「オーケー」

とにかくここは通させない。

この後には山下君やましたとかいう男子の部屋があり、そこには今大勢の精銳部隊が集つているのだ。

緊急避難口からの進入が開始される前にここを突破されたら、彼らは袋のねずみになってしまつ。

上着のサイドポケットから「モンスターボール」（＊ポケットモンスター）を大量に取り出す（小さくしてあるので一杯入るのだ）。

「いっかーつ

【午前10時02分・男子寮山下部屋内・山下視線】

「戦闘が始まつたな」

郷馬が呟く。

「まだなのか?」

俺は緊急用避難口の前で作業する隊員を見ながら聞く。

「分からん

「分からんって……」

女子寮へ侵入するには、この緊急避難用通路を通り抜けるといけない。

そのため、女子が向い側からの扉を封じているのだ。

「まあ、焦るな。 いやとなれば正攻法でこくへ」

女子寮にも「移動絨毯」は通っているので、一回下に降りてから女子寮行きに乗り換えれば女子寮に入ることができる。

「それができたら苦労してないんじゃないのか?」

「……、まあ、焦るな」

【午前10時03分・男子寮側ゲート前・近藤視線】

私達女子は、突如現れた大量のバリケードの前に立ち往生する破目になつた。

『寿さん、バリケードと遭遇しました』

無線機を使ってリーダーの寿に、この場の指揮官、寒簾子かんとれいしが状況を伝える。

『オーケー、見えてるわ』

無線機と一緒に小型カメラも装備しており（服の襟についている）、寿は女子寮の一番奥の作戦ルームで指示を出している。

『では、寒さんのグループは引き続きガトリングガンを使って敵戦力の削減を行つて。別に深追いする必要はなし。例の作戦実行まではその調子で』

通信が切れる。

「りょーかい」

私達はガトリングを担いで、バリケードの隙間を狙う。

「撃ち方始め！」

【午前10時10分・男子寮側ゲート前・清罷視線】

「モンスターボール」から取り出したバリケードと神崎君の「方

「障壁」を用いることで、女子が使うガトリングの弾丸から身を守つていた。

「中はまだなのか?」

神崎君が後方の仲間に向かつて叫ぶ。

「てこぎつてるっぽい」

それを聞いて神崎が顔をしかめる。

「突入されたら防ぎきれないぞ」

【午前10時11分・女子寮作戦室・寿視線】

「どう?」

後でパソコンを操っている草子に聞く。

「順調。このままいけばあと数分つてところかな」

よし。予定通りだわ。

「午前中に制圧するわよ」

六章 女子寮攻略戦／一話 ゲート前防衛戦

?

【10:00～】(後)

女子の方が先に仕掛けようついです。

「力」封じられてるから戦闘が描きにくい……

『なぜなぜに?』

Q 「モンスターボール」は「ポケットモンスター」の「有力者」でなくとも使えるのですか?

A 武器は「有力者」でなくても使えます。
「それに、「モンスターボール」は「力」が弱いから一般人でもなんなく使えるんだよ

六章 女子寮攻略戦争 / 三話 ゲート前防衛戦 ? 【10・13】

【午前10時13分・男子寮側ゲート前・清異視線】

女子の使つてくるゴム弾丸はどうやら神経麻痺毒が塗られている
ようだ。

バリケードの穴を抜けた弾丸に被弾した仲間の様子から確認した。

「清異、バリケードを前に！」

かんざき
神崎君が叫ぶ。

手にある「モンスター・ボール」は三個。

僕はそのうち一つを投げることにする。

空中で一瞬滞空し、「モンスター・ボール」は口を開けてバリケードを放出。

「それしか能ないの？」

知らない女子の声がした。

「馬鹿つ、全部つ……」

神崎君の声が消えた。

そして、展開しかけたバリケードが破壊される。

「……え？」

展開しているバリケードは、廃棄処分になつた「学園」の机を利用したものだ。本格的に「力」を発動されたら何の役にもたたないが、「学園結界」により「力」を封じられているここでなら、十分に障害物となりえる。もちろん、武器による破壊は可能だ。だが、あまり強力な武器を使うと相手を負傷させすぎることにもなりかねないので、その可能性は低いと見込める。

「ぶへへ……」

「方陣障壁」を使ってバリケードの穴をカバーしていた神崎君が隣に吹っ飛んできた。

「か、神崎君ー！」

「つ伏せに倒れている神崎君のもとにしゃがみ込む。

「う……ぐつ」

苦しそうな神崎君に、外傷は見受けられない。

おそらく、急所への一撃によるもの。

今は苦しんでいるが、何日かすればすぐに回復できる程度の一撃。

「　っく……」

神崎君が破れたことにより「方陣障壁」が消滅、僕の後ではバリ

ケードの穴を抜けた弾丸に仲間が被弾していく。

僕達のチームの目的は精銳部隊が突入するまでの防衛。

武器はほとんど『えられていない。

「うるさい？ うるさい？ うるさい？ うるさい？ うるさい？ うるさい？」

出来ることなら逃げたい。

けど。

「あんた、少しば強いかしら？ もつ、手加減するの、飽きたのよね」

例の侵入者の一人、黒髪のロン毛の少女が僕を見下していた。

【午前10時13分・女子寮作戦室・寿視線】

「副会長、近藤が単独行動をとり始めました。ビリしますか？」

生徒会役員の一人、静香静江が報告する。

「やつ……まあ、いいわ。好きにやらせなさい」

「え……、いいのですか?」

静江が呆けた顔をする。

「ええ。寒に伝えておいて」

ゲート前担当の寒に連絡を入れるように手配する。

近藤はレベル40以上の「有力者」であり、危険因子もある。

彼女の力を拝見するいい機会だ。

「静江、記録を余分に作つておいて」

「観察用にですか?」

「ええ」

【午前10時14分・男子寮側ゲート前・清閑視線】

一体どうする?

今の僕に何が出来る?

相手はレベル40代の「有力者」。

侵入の際には、いくら「学園結界」の中でとはいえ、あの寿さんと互角に戦っていた化け物だ。

「つべ……

歯軋りしても情勢は変わらない。

僕の持ち球は「モンスター・ボール」しかない。

やるか？

やれるのか？

ポケットの上から得物を確かめる。

力量差は明白。

だが、男として、「有力者」として、プライドが許さない。

「それじゃあ、やりましょうか

黒髪の少女は、手にする日本刀を一振りした。

武器による「有力者」同士の戦いです。

『なぜなぜに?』

Q たかだか机ごときでバリケードになるのですか?

A なります。なぜなら、あの机は改良され、大量の鉄の棘が装着されているからです。

机自体は勝手に持ち出したんだよ

六章 女子寮攻略戦争／四話 ゲート前防衛戦？【10・14】

【午前10時14分・男子寮側ゲート前・清異視線】

「モンスター・ボール」を前方に投げる。

相手の攻撃方法が全く分からぬこの状況で、僕にできることはこのくらい。

空中で一端停止した「モンスター・ボール」は、バリケードを放出するために、口を開く。

「だから、飽きたって言つてんでしょう」

黒髪女は手にした日本刀投げで、「モンスター・ボール」に突き刺す。

放出途中に妨害された「モンスター・ボール」は、そのまま地面に落_下する。

開閉スイッチの部分を貫通され、おそらくは使用不可能となつた「モンスター・ボール」は、爆発することもなく地面に落ちた。

まづいっ……

僕はすぐさま次の「モンスター・ボール」に手を掛ける。

その間に黒髪女は日本刀を回収し、僕に向かつて来た。

距離にして約5メートル。

歩数にしてプロなら一歩、素人でも四歩。

時間にして一瞬。

「つぐ……」

「モンスター・ボール」をその場で放つ。

放出されたバリケードは、向かってくる黒髪女に向かってそのまま飛びぶ。

「ふんっ」

日本刀で一刀両断する黒髪女。

だがその間、前進する動きが止まる。

バックステップを踏みながら更に「モンスター・ボール」を投げる。

今度は二つ。二つとも一直線に黒髪女に向けて。

黒髪女はなき払おうと日本刀を構える。

続けざまに、今度は三個投擲した。

ちょうど、先ほど放った二つの「モンスター・ボール」を破壊した

黒髪女が前に体を傾けた瞬間。

爆発した。

「つぐ……、田ぐらましつ！」

怯んだ間に「モンスター・ボール」を十三個、一気に開ける。

すぐさま十三セツトのバリケードが展開され、僕と黒髪女の間に距離が生まれる。

手には次の「モンスター・ボール」を用意する。

僕の手では、この程度の田ぐらましがしかできない。

「なるほど、そのボールはただの入れ物じゃなくて、間合いを取るための道具ね」

煙の中から黒髪女の声が聞こえる。

いきなりばれてるつ！

つて、相手はレベル40代。こうなることは十分承知……

「これで、終わりってことはないよね？」

黒髪女はそういつつて、一気に間合いを詰める。

「へ？」

展開していたバリケードを通り抜けて、日本刀と共に僕の目前にいたつ……

「……『剣殺交叉』（＊シーキューブ）」

歎きと同時に、バリケードが粉砕する。

……レベルが違ひ過ぎるー

とうにか、なんなんだ、あの日本刀！？

なんか変なオーラとか出てるし。

あれか？

あれが妖刀とかいうやつか？

「はあー、やつぱり雑魚じや相手にならないわね……」

次の瞬間、僕は意識を無くした……

【午前10時16分・女子寮作戦室・寿視線】

「副会長、近藤^{じんどう}が一人で出張つた結果、ゲート前は完全に制圧できました」

静江^{しずえ}から報告を聞く。

「さう。意外と早かつたわね。どうやったの？」

「何やら日本刀、おそらく妖刀の類だと思われますが、それを用いてバリケードを突破した模様です」

淡々と静江は事務的に答える。

戦闘では、常に冷静でいることが大切だととも、この子のこれは日常的なものだ。

「どうから持つてきたの？ その日本刀」

「どうやら四次元的空间から取り出したようです。あの様子だと、他にもいろいろ武器となるものを持つてこそうですね。彼女の『世界観』は武器に頼るものが主流である可能性もある、かと。まあ、一概には言えませんが」

「ふーん。レベルの方は？」

「武器を使用してでの戦闘だったので、計測不能かと」

「でも、問題なしに振り回してたってことは、あの日本刀は彼女の『世界観』とマッチしたものだとこりこり」と

「はい、そうなります」

私は体の向きを変えて、草子の方に移動する。

「どう？ 調子は？」

「守備は順調ってところ。メインはしつかり掴んだかな？でも、分けるのは難しくて……まあ、最初予定より早く進んでたから、プログラマイヤロー、むしゃりマイナスってところかな」

「草子……」

私はじつと草子を見つめる。

「…………嘘よ、嘘。本当に一割増しひらこのスピードで進んでるから」

びくっとする草子だが、キーを打つ速度は変わらない。

「でも、最終的には私だけの力じゃ無理だよ」

「分かってる。ちゃんと手配は済ませてあるわ」

意外とあっけない勝負になつてしましました……

『なぜなぜに?』

Q 「剣殺交叉」の表現が大きすぎる気がするのですが?

A その通りです。

この技の効果が送れて発動するのはやつすきたかな?

【午前10時20分・男子寮山下部屋内・山下視線】

「そろそろいけるな」

郷馬いのまが突入の準備をさせた。

「爆薬セットできましたーー！」

緊急避難口で作業していた男子が報告する。

女子は入口を反対側からバリケードで固め、入口部分を完全に埋めてしまっていた。

そのため、緊急避難口を抜けたところで待っているのは、大量のバリケードによる足止めと神経麻痺毒塗りの弾丸による迎撃行動。

「よし、点火だ」

次の瞬間、緊急避難口を扉の向むかいのバリケード」と破壊するだけの爆発が起おきる。

「突入！」

【午前10時20分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

緊急避難口が爆破された。

周りを囲んでいたバリケードも破壊され、周囲に散らばる。

周囲に煙が広がる。

「落ち着いて！」

私は周囲に呼びかける。

幸い、こうなることは予め予想していた。

大した混乱にはならない。

バリケードを突破されたところで、それがすぐに敗北に繋がるわけではない。

「撃つて！」

指示を飛ばす。

相手がわざわざ出てくるのを待つ必要はない。

ガトリングが火を噴く。

このガトリングは三年の先輩に提供してもらつたものだ。

反則かどうか知らないけど。

ついでに弾丸の方は自作。

変ね……

突入してくる気配がない。

つな、まさか……

「氣をつけ」

忠告は最後まで言い切れなかつた。

一度田の爆破が起りしる。

それを合図に、男子寮と女子寮の境田である壁が次々に爆発し始めた。

「つく……」

周りから悲鳴が聞こえる。

完全にパニック状態に陥つた仲間に田を向けた。

駄目だ。

これじゃあ指揮系統がむちやくちやになる。

境目となつていた壁が全て破壊される。

「おおおおおおおおおおおお

男子共が突っ込んでくる。

つか、そういうことか。

腕時計を確認する。

予定より少し早い。

が。

『寿、予定変更。』

無線機に叫ぶと同時に、「力」に集中する。

「『封絶』（＊灼眼のシャナ）！」

【午前10時21分・女子寮御津見部屋内・山下視線】

突然、足元に火線が現れ、炎を混ぜたドーム上の陽炎の壁が形成される。

「つな……」

空気が変わる。

爆発音とガトリングの発射音、女子の悲鳴も男子の雄たけびも消えた。

男子を見渡す。

動けているのは、俺と郷馬、それと「有力者」の仲間一人。とにかくよく分からぬけれど。

この結界の中で動けるのは、「有力者」だけってか。

この結界を張ったといつことは、向いには「有力者」同士の戦いに持ち込むつもりなのか。

「おい、郷馬！」

「防御しながら强行突破。我々の目的は女子寮最深部に一人でもたどり着くこと。この結界でこれだけの女子が足止め食らうならそれでよし。無理に結界を解く必要はない。突破するのみ」

「オーケー」

使える魔力は「学園結界」のせいではほとんどない。

なら、武器を用いるしかない。

「『アデアット』！」

「ハマノツルギ」を呼び出す。

「はあああああ」

「ハマノツルギ」を構えて一番槍を努める。

「『炎弾』（＊灼眼のシャナ）！」

炎の塊が吹き飛んでくる。

「ハマノツルギ」を盾に、無効化する。

相手は怯んだ様子もなく、次々に炎の弾を撃ち込んできた。

「！」は俺がやる。あんたらは先に行け！

俺はそう言って、強引に前に進む。

俺ってかっこいい！

「ハマノツルギ」を盾にするだけにして、攻撃はしない。

部屋の中に完全に入つて、相手を確認する。

相手は一人。

長い、赤い髪の少女。

俺は彼女と対峙する。

それを確認してあとの一人は俺の隣を駆け抜ける。

少女はそれを止めなかつた。

「いいのか、止めなくて」

「いい」

少女はそう言って、脇腹の辺りから、大太刀を取り出した。

「さあ、やりましょうか」

VS 「灼眼のシャナ」となります。

『なぜなぜに?』

Q 爆弾で壁を破壊してしまつていいんですか?

A 反則行為に当たると留記りゆきせられていませんが、さすがにまざい
でしょ。う。

～それでも、反則ばんそくじゃないけど……

六章 女子寮攻略戦争 / 六話 緊急避難口前攻防戦 ? 【10・22】

【午前10時22分・女子寮御津見部屋内・みつみ やました 山下視線】

「『炎弾』！」

赤髪少女が炎の玉を飛ばす。

「……」

俺は「ハマノツルギ」を盾にして無効化した。

「」の攻撃 자체は脅威ではない。

問題は、「」の「学園結界」の中でこれだけの威力を發揮させてい
る、ということだ。

俺が以前、風魔法を使用したときその効果は通常の一割にも満た
さなかつた。

つまり、「」の火炎球は通常ならば今の十倍以上の威力は持つてい
るということだ。

できれば遠距離攻撃で様子をみたいのだが……

“ひやりひりひり”といかないみたいだ。

赤髪少女は、先ほど黒のマントの中から取り出した大太刀を構え
た。

田頭を叩いて端末を繋ぐ。

俺にしか見えないキーボードと画面が浮かび上がり、俺を仮想現実から現実へと繋ぐ。

キーワードは「炎弾」。

だが、キーボードを叩いている暇はない。

「つべ……」

大太刀による振り下ろしの一撃を「ハマノツルギ」で受け止めた。

受け止めたときの反動を利用して、後に飛ぶ。

「ハマノツルギ」は相手が召喚されたものなら一撃で送り返し、異能の力によつて作られたものなら問答無用で一撃破壊を行う。それは、「学園結界」の中でも変わらない。

赤髪少女の大太刀を確認。

破壊された様子はない。

といつことは、あれば鍛えられたものだといつことだ。

「『アーティスト』、『ヒ首・十六串田』（*魔法先生ネギまー）」

一口ふつの匕首。

「い・る・は・三刀」

三口を出現させ、飛来させる。

「一。」

赤髪少女は驚いた顔をしながらも、正面に飛んで来た「い」の一口を大太刀で叩き落す。

そのすきに「瞬動術」で背後の周り、両サイドからの「る」・「は」の一一口の飛来より少しずらした時間差攻撃を食らわせばいい。

一度重心を落とし、両足に魔力を集中させる。

……いや、駄目だ。

「の」・「は」の一一口を予定通り赤髪少女に飛ばして時間を稼ぐ。

「学園結界」の中で「瞬動術」はおそらく使えない。

「瞬動術」を用いるには一時的に魔力を集中、発散させる必要があり、この中ではその発散においてうまく機能しないだろう。

頼れるのは武器だけ。

はつ。

いいじゃねえか！

久しぶりの好敵手に全身が震える。

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」で高レベルになつてから、骨のある対戦相手がいなかつた。

けど、今は違う。

「『アーティスト』、『千の顔を持つ英雄』（＊魔法先生ネギまー）」

ありとあらゆる武具に変幻自在の「無敵無類」と呼ばれる至高の宝具。

「に・ほ・て・と・ち・り・ぬ・七刀」

七首を七口。

赤髪少女に飛ばす。

それを見るなり赤髪少女は、手持ちの大太刀を炎で纏わせる。

「はあああ！」

一振りと同時に発せられた炎の尾が、七首を受け止める。

その間に俺は、「千の顔を持つ英雄」でサブマシンガンを作つた。

「おひやあああ！」

銃口が火を噴く。

「浅はか」

そう言つて赤髪少女は飛び上がつた。

肩から生やした炎の翼をはためかせて、空中から一気に攻める。

炎の翼から発せられる炎のバリアがサブマシンガンの弾丸を弾く。

「そんなただの弾丸で、この『贊殿遮那』（*灼眼のシャナ）が敗れるわけがない」

「強者の余裕つてか？」

自分の「世界觀」を相手に知らせるよつなことはするだけ自分が不利になる。

赤髪少女はそれには答へず、「贊殿遮那」を振り下ろす動作をして、炎の尾の攻撃を繰り出した。

「その言葉、そつくりそのまま返してやるよ」

「ハマノツルギ」で炎の攻撃を無効化しながら赤髪少女に囁く。

「我、汝の真名を問ひつー。」

パワーバランスが頭の中でぐちゃぐちゃになっています……

『なぜなぜに?』

Q 山下は狂戦士なのですか?

A いいえ、違います。

「ただ、過去のこれまでからアリマセあるナビ。

六章 女子寮攻略戦争 / 七話 緊急避難口前攻防戦 ? 【10・23】

【午前10時23分・女子寮御津見部屋内・みつみ やました 山下視線】

相手の「名前」を見破る魔法具、「鬼神の童謡」(*魔法先生ネギま!)。

右手の人差し指に填めたそれが、空中に赤髪少女の「名前」を描き出す。

華焰香奈かえん かな

「『火炎かな』?」

暴き出した赤髪少女の名前を呟く。

「華焰香奈だ! 変な発音するな!」

華焰が火焰を纏つた「贊殿遮那」を振り下ろす。

が、その動きが止まる。

「お前、何故私の名を知っている?」

一瞬の動搖。

それは、格上に抱くような恐怖ではなく、知らないとすつきりしなくて、未知への恐怖とも違う、合点のいかないことに対する苛立ちにも似た、動搖。

その間に俺は「アーティファクト」の一つ、「いどねこつわ」(*魔法先生ネギま!)を呼び出した。

この日記は、対象となる人物の名前を呼んでから開くと、その人物の表層意識を読むことができる。

そして、俺は文字を読み上げる魔法具、「読み上げ耳」(*魔法先生ネギま!)を懐から取り出す(「鬼神の童謡」と「読み上げ耳」は予め用意してあつた)。

『上から呪へー。』

「読み上げ耳」が「いどねこつわ」から読み上げた華焰の表面意識を俺に伝える。

「はああああー！」

「おりやつ」

炎の羽を持つ彼女は、上空から降下して俺に接近した。

「ハマノツルギ」を盾に、彼女の「贊殿遮那」を受けとめた。

途端に、彼女の周りを覆っていた炎のバリアが消え去り、炎の羽も劣化していく。

「なつ、これは……」

驚く華焰を余所に、俺は追撃せず後退する。

相手の「世界觀」が分からぬときは、下手に攻撃するのはよくない。

「世界觀」によつてはこちらの攻撃に対し一撃で耐性を持つたり、自分のダメージの相手のダメージに変換してしまつものもいるからだ。

『これは何らかの無効化能力?』

華焰の思考が俺に流れてくる。

『なら、実体剣であるこいつしか使えない……。だが、反撃に出ないところを見ると、奴の火力は低いのか? とにかく様子を見よう』

華焰が再び「贊殿遮那」を持ち上げる。

『まずは「炎弾」で両サイドを潰し、正面から叩く』

「『炎弾』!」

華焰が「炎弾」を俺の右側に投げる。

左に避けずに「ハマノツルギ」で無効化し、左に投げられた「炎弾」をやり過ごす。

『なつ! 悟られた!?』

一発目の炎弾を避けなかつたことで一発目の炎弾を避けた俺を見て、華焰に動搖が走る。

そのため、俺に接近する速度が落ちた。

「おひやつー」

俺は左手で得物を支える。

『なつ！ あの剣じゃない！？』

足元に置いていた「千の顔を持つ英雄」を超極長の槍に変化させることで、「贊殿遮那」を振り上げて突っ込んできた華焰を突き飛ばした。

『そつだ、バリアを……』

「つぐ……」

咄嗟に炎によるバリアを展開し直したらしく、超極長槍が破壊される。

だが、これで距離はとれた。

今がチャンス！

俺は自分にしか見えないキーボードを叩く。

キーワードは「炎弾」と「贊殿遮那」。

出た。

検索結果が俺の前に展開しているスクリーン上に表示されるのと

同時に、距離を縮めた華焰が「贊殿遮那」で炎の尾を作り出す。

『暫撃のついに、タックルを喰らわす！』

該当作品：「灼眼のシャナ」

「ユウの一」

華焰が「贊殿遮那」を横に振るう。

それを俺は「ハマノツルギ」で受け止めた。

「ハマノツルギ」に触れたところから華焰を覆う炎のバリアが無効化されていく。

『つち、また炎のバリアが……。それでも、直接攻撃ならつ』

華焰が右肩を前に突き出して突進してきた。

予め分かつっていた俺はしゃがみ込み、火炎より小さくなる。

『え？』

標的を見失つた華焰の体は、俺の体に躡いて俺の後方に吹っ飛ぶ。

『羽、羽つ』

炎の羽を作り出して地面との衝突を免れた華焰に、俺は「ハマノツルギ」を投擲した。

咄嗟に羽を広げて防御しようとする華焰。

『しまつ……』

「ハマノツルギ」は華焰の羽を貫き、その瞬間から彼女の羽は崩壊し、彼女地面に落下する。

「つくはあつ」

背中を強打し、体を反転して、声を漏らす華焰。

「い・ろ・一ノ刀」

「ヒ首・十六串呂」で事实上華焰を拘束した。

「勝負ありだな」

「つく……」

悔しそうに顔を歪める華焰。

『くつせ……。やっぱ40代の高レベル「有力者」には勝てないか』

……

「ん？ お前、レベル低いのか？」

「つくそ」

華焰が俯いたまま呟く。

「まあ、いいか。情報がほしいところだつたし、いろいろ聞こひやおつか」

俺はにやりと笑う。

「っく……。私はしゃべらんぞ」

「別に構わないよ。それじゃあまづ、初恋はいつだった？」

『は？ 初恋？ そんなこと聞いてどうする。だいたい誰にそんなこと言えるか。志保にも言つてないんだぞ。というか知られたら私のイメージが終わる。初恋相手がマスクシトキヤラクターだなんて』

「マスクシトキヤラクター？ エ？ まじで？」

「なつなつなつ……、何故貴様がそれを知つている…」

華焰が顔を上げて俺を睨んだ。

『お、終わった。私の学園生活が今終わった。くそつ、こんな奴に。どこの馬の骨とも分からん奴に私の学園生活を碎かれるとは……』

「そ、そんなに恥ずかしいなら誰にも言わないでやるか……」

「当たり前だ！ 誰が言わせるか！ つて、お前まさか、読心術師か！」

『なるほど、だから私の攻撃をあんなにも飄々と往なしていたわけか。つてことは、私の心が読まれているということか？ まずい、

作戦を知られたらまずいわよ。いや、でも待つて。こいつはさつき初恋がどうとか聞いてきた。ということはただの変態？ 作戦内容には興味がない？ ふー、一応助かつた。って、全然助かつてないじゃない！ 変わりに私の秘密が暴かれるなんて御免よ！ だつたら喜んで作戦内容差し出すわ！ あ、でもあとで寿にばれたらぶつ飛びさせる…… ああ、もう！ どうすればいいのよ！ いつそこで気を失う？ 黙目黙目。見ず知らずの男の前でそんなことできるわけないじゃない！ 考えただけでもぞつとする。くつそ、解決策が見当たらない。それに、この状況を打破できたとしても、こいつは私の秘密を知つたままじゃない。やっぱりこいつは私の命を絶つか、それともこいつの命を絶つか？ ああ、黙目。こんな高レベルの相手に、暗殺を行える自信がない。いつそあいつらに頼んでみるか？ でも暗殺なんて引き受けてくれると思えないし。つく、ここれは私が死ぬしかないのか？ そんなの黙目よ。楽しい学園生活を守るために死ぬなんて。それじゃあ秘密を守つても意味ないじゃない。それに、私が死んでもこいつの口が塞がるわけじゃない。といふことは、やっぱりこいつを殺すしか私には幸せがないといふこと！？ そんな！？ 人並みの幸せを手に入れるためにその身を血に染める……、そ、そうだわ。別に直接手を汚さなくてもいいのよ。こいつが口を開く前に「学園」にいれなくしてしまえば私の勝ち。ようは退学にしてしまえばいいんだわ。だいたいこいつ不法侵入者だし、事件を起こすように背後からいろいろやればいけるはずつ』

その後、華焰の独り言？は数分間続いた。

六章 女子寮攻略戦争 / 七話 緊急避難口前攻防戦 ? 【10・23～】

まだ一対一の戦いが基本ですが、そのうち多数による戦いもあります。

『なぜなぜに？』

Q 華焰は性格を偽つているのですか？

A はい、その通りです。

「…」といつてもキャラ作り程度だよ。

六章 女子寮攻略戦争／八話 男子残党一掃戦？【10・29～】

【午前10時29分・女子寮御津見部屋内・華焰みつみ視線かえん】

痛みに慣れてきたので体を起こそうとして、動きを止めた。

さつきまでうつ伏せに倒れていたので忘れていたが、今の私は得体の知れない謎の小刀（浮遊している）を突きつけられているのだ。

「攻撃しない限り大丈夫だよ」

私の動きを見てか、はたまた心を読んでか、あの憎たらしい編入生が口を開く。

私は体を起こし（その際、例の小刀は私の動きに合わせて移動した）、私がこの「学園」生活において敵だと認めた憎き編入生（以後、略して憎編）と対面する。

「センス酷くないか？ 憎編って」

「黙れ。貴様なんか、肉片でも十分だ」

口調も元に戻ってきた。

私のイメージ維持のため、すぐに消えるだろつ憎編相手にも、「学園」での私のイメージを定着させておく。

きつ、と憎編を睨んでから、私は口を開いた。

「貴様、どにまで心を読んだ？」

「ん？ どにまでって言われてもなあ。言つちやつていいのか？」

「言わんでいい」

詳しいわけではないが、読心術には一つある。

一つは相手の表層意識を探る、つまり、今相手が何を考えているかを探るもの。

もう一つは、相手の深層意識に忍び込み、自分のほしい情報を取り出すもの。

「いつのそれがどちらか定かではない。

私は腕時計に視線を落として時刻を確認する。

例え知っていたとしても、最早手遅れだな。

「封絶」発動からもうすぐ十分が経つ。

あいつなら、そろそろだろう。

自然と笑みが浮かぶ。

「ん？ 何がおかしい？」

怪訝そうな憎編に私は言ひ。

「貴様に言つておひづ。勝負に勝つことは、勝利を掴むことは別物なのだよ」

決まった！

今私、カツコいいこと言つた！

【午前10時30分・女子寮作戦室・寿視線】

「よしつ、いったわよー。」

キーボードを操作していた草子^{モモコ}が叫んだ。

私は予め用意していた「カーテナ＝セカンド」(*とある魔術の禁書目録)を左手に握る。

「静江^{しずえ}、通信は？」

「準備完了！」

マイクを右手で握る。

「作戦開始！」

【午前10時30分・女子寮御津見部屋内・山下視線】やました

華焰が決め台詞を放った直後、今まで固まっていた奴らが動き始めた。

但し、それは女子のみ。

「なつ、この空間で動けるのは『有力者』だけじゃないのかよ…」

俺は包囲される前に華焰のそばから離れ、距離をとる。

「その通り。私達は今、全員『有力者』」

「なに！？」

華焰はふふふっと笑みを浮かべる。

「貴様の負けだ。憎編は大人しく肉片にでもなれ」

【午前10時30分・男子寮側ゲート前・近藤視線】こんどう

倒した男子の顔を確認して、名簿に記録する。

そうすることで、残りの男子の戦力を割り出していくのだ。

まだ同級生の顔と名前を覚えていない私は、倒した男子に念のためもう一度麻酔を打つ係り。

山下の部屋の入口はすぐそこだが、今はまだ突入せず、作戦開始を待つ。

『作戦開始！』

無線機から寿の声が聞こえてきた。

それと同時に、体に力が沸き起るのを感じる。

作戦が始まったのだ。

「残党を一気に狩りつくすわよ！」

寒かんの号令で、私達は走り出した。

ようやく女子側の作戦が始まりました

『なぜなぜに？』

Q 「カーテナ＝セカンド」が使えるのは、基本、イギリス国内だけではなかったのですか？

A ここ、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の中では、使用者所屬国家内の使用が可能、という設定になっています。
～他にもこんな感じの設定は出てくるよ。

六章 女子寮攻略戦争 / 九話 男子残党一掃戦 ? 【10・32】

【午前10時32分・女子寮御津見部屋内・みつみ やました山下視線】

「つく……」

「千の顔を持つ英雄」で盾を全方位に展開して、女子の攻撃を耐える。

男子の仲間を助けている余裕はない。

華焰かえんを始めとする十数名の女子から一斉攻撃を受けているのだ。

「おもしろくなってきたな」

華焰が思ったよりあっけなかつたので、この展開は嬉しい。

けど、どうなつてるんだ?

「ふつふつふつ」

盾の向こうで笑う華焰の声が聞こえる。

「所詮貴様は一人。いくらレベル差があるといえども、『学園結界』と数の力で押し通してくれるわ!」

華焰意外の女子は手からエネルギー弾を作つて飛ばしていく。

それを「千の顔を持つ英雄」の即席盾で防いでいるが、完全に

包囲されてしまつてもいる。

本来なら風系魔法で吹き飛ばせばいいのだが、「学園結界」のせいで俺の「力」は制限されてしまつている。

そう。「学園結界」が有効なのだ。ここに生徒である限りは。

先ほどの戦い、華焰は確かに「有力者」としての力を振るつていた。「世界観」も判明している。「灼眼のシャナ」だ。

しかし。

ほんの少し前までは、彼女らは確かにただの人間だったのだ。

「い・ろ・は・三刀」

盾の外に「ヒ首・十六串呪」を呼び出し（華焰の拘束に使つていた「に・ほ・へ・と・ち・り・ぬ」の七刀は華焰の体が突然光り出して、その余波？で吹き飛んだ）、牽制として、華焰に向けて放つておく。

「分つかんねーな」

即席の盾にガタがきたので、新たに即席の盾を即席で作る。

今度は三重に作つて、余裕を持てるよつこ。

「さひと

現状を分析する。

敵は華焰含め女子13名。

全員が「有力者」としての能力を「学園結界」内における何らかの方法で行使している模様。

但し、「世界觀」が判明しているのはこの場のリーダーと思われる華焰の「灼眼のシャナ」のみ。

対して、こちらは「学園結界」の制約に阻まれ、十分に「有力者」としての力が使えず、手駒は「アーティファクト」を用いた武器のみ。

一見不利そうに見える。

が。

「本氣出せばちよいのちよいつ、なんだけどな……」

【午前10時35分・女子寮作戦室・寿視線】

「調子はどう?」

さつきまでとは打って変わつて、肩を揉みながらモニターを眺めている草子に尋ねる。

彼女の主な仕事はすでに終わっている。

「順調、順調。力の配分はだいたい均等に行き届いているわ。『学園結界』の方も問題なし」

「男子はあとどれくらい残ってる?」

私は「カーテナ＝セカンド」を手の中で玩ぶ。

「それがねー。『有力者』が一筋縄ではいかないことは最初から分かつてたから、まあ、いいんだけど。問題はそれ以外なのよねー」

楽しそうにモニターを眺める草子。

「何かあつたの?」

「非『有力者』がね、足りないのよ」

「足りない?」

「うん。攻めるはずの男子が、ね。奥に潜んでる可能性もあるけど」

「人数がねー」。

「11時までに大して情報が入らなかつたら、男子をここに連れてきて。頭の中を覗くわ」

六章 女子寮攻略戦争 / 九話 男子残党一掃戦 ? 【10・32】（後

話がなかなか進みません……

『なぜなぜに?』

Q 山下が「本気だせばちょちょいのちょい」と言つて言つていましたが、「学園」に侵入したときは本気ではなかつたのですか?「学園結界」で「力」を抑えられた寿に負けていましたが。

A 「力」は本氣でしたよ。ただ、「力」を最大出力で放つと、「本氣」は違います。それと、いくら山下が本氣を出したとしても、現状では寿には及ばないでしょう。

このとき、山下は自分の力の限界を意識していなかつたみたいだね。

六章 女子寮攻略戦争／十話 男子残党一掃戦？【10・35～】

【午前10時35分・女子寮御津見部屋内・みつみ やました 山下視線】

華焰かえんが低レベルの「有力者」なのは間違いない。

さきほど戦闘において、彼女は炎を繰り出す刀（「贊殿遮那」だつけ？）と、「炎弾」とかいう炎のエネルギー弾を投げてくるだけだった。

低レベルの「有力者」は自身の扱う「世界観」の幅が狭く、使用能力の種類が限られてくる。「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内での常識はここでも通じる。もちろん、戦闘経験も。

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内での一般的なレベルは20代だ。その中でレベル40代に位置しているということがはじつうことか。

「戦闘経験が違うんだよ」

そう、かけた時間が違う。

閉じこもった時間が違う。

そう……。

「違う、違う」

危うくスリップしそうになつて、思考にストップをかける。

終わったことは、終わったことなんだ。

「ふうー

精神安定剤はこの場には存在しないので、激情に少し身を任せることにした。

【午前10時36分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

突然、防御中心だつた憎縞が攻撃にまわった。

憎縞の防壁が一気に崩れ、新たな形を作った。

「つな……」

巨人の武器サイズの超巨大な剣が、憎縞の手の中に生まれようとしていた。

「『斬艦剣』（＊魔法先生ネギま！）！」

その名に恥じぬ、おそらく飛行船でも叩き斬れそうな巨大な剣が、憎縞の手元からじりじりに向かって伸びてくる。

「あやあああー！」

憎編を囮んでいた女子達から悲鳴が上がる。

「斬艦剣」は一直線に彼女達に突き刺さる。

「まづひ」

彼女達の防御力がいくら上がっているとはいえ、もとはただの非「有力者」。

とつさの判断は素人同然。

「炎弾」を調整。

今までのものは、籠める威力を小さくし、打ち出す回数を重視したもの。

今度のは、あの大剣を破壊するための威力を籠めた一撃。

だが、こちらが「炎弾」を放つ前に、彼女達の悲鳴が消えた。

手の中の「炎弾」を構えながら様子を確認する。

例の大剣は、彼女達と接触する部分だけ二股に分かれていた。

つまり、人のいる所だけ剣が避けているのだ。

あの「千の顔を持つ英雄」とかいう変な武器、変化自在のようだ。

「つて、あ……」

気づいたら、私意外の面子は全員謎の大剣に拘束されていた。

なんて武器持つてるのよ、いいつ。

あの変な剣（「炎弾」を受け止めたやつ）とか、あの変な小刀とか、今のこれとか。

もう一度、今度こそあの憎縄に、ぎやふん、と言わせてやる。

【午前10時36分・女子寮作戦室・寿視線】

「カーテナ＝セカンド」を発動させてから五分以上が経ち、現状、女子側の勢力が男子側を遙かに凌駕している。

この戦いのキーを担うのは、「有力者」の存在だ。

「カーテナ＝セカンド」は私の「力」で、高校二年の女子全員に「有力者」としての「力」を振り撒いている。振り撒いているその「力」自体は、レベル10から20程度のものだが、それでも非「有力者」に対しては十分脅威になる。

だが、「学園結界」に「力」を制御されてしまうため、「カーテナ＝セカンド」をそのまま使うことはできない。また、仮に行使できたとしても、「学園結界」によつてせつかく得た「有力者」としての「力」は封じられてしまう。

「どうしても、「学園結界」を落とす必要があったのだ。

幸い、「学園結界」には電子ネットワークからの侵入が可能であり、また、それを可能とする、腕利きの草子がいた。

だが、確実に「学園結界」を掌握するには、草子の「力」を使う必要がある。

だから、そのための、華焰の「封絶」だった。

彼女の「封絶」は外界との干渉を断つその特異性のため、その内部において「学園結界」の干渉下に入らない。

ネットワークへの端末を「封絶」内にいれる」とで、一時的な「学園結界」の無効化を図り、草子の「力」を解放させる」とで、「学園結界」に封じられる」となく「学園結界」を掌握する」ことができたのだ。

だが、これは表の作戦に過ぎない。

本当の狙いはあるのだが。

今のところ、それが生かされる様子はなさそうである。

「草子、調子はどう?..」

「カーテナ＝セカンド」を掲げる。

「うーん、そうねー。私ってあまり『力』を使いつことないからか、あんまり変化とか分かんないわ」

そう答えながら、草子の指がキーボードを軽く叩いている（叩いているのは右手だけで、左手は髪を梳いていた）。

戦況が一気に変わつてから入ってきた情報を、整理しているのだろう。

「あ、華焰が例の侵入者君とまた戦うよつよ。」

「分かつた。静江^{しずえ}、華焰に『封絶』はもう必要ない、と伝えて」「一人でこっそりクツキーを口にしていた静江は、一瞬驚いた顔をしながらも、

「ふあい。分かりました」

と、残りを飲み込んで、答えた。

そろそろ男子の方が反撃してもいい頃合かも?

『なぜなぜに?』

Q 草子の「世界観」は何ですか?

A ネット系です。

～他に何もできないよ。

【午前10時37分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

【午前10時37分・男子寮廊下・近藤視線】

作戦が発動し力を得た私達は、残存する男子を探しては神経麻痺の弾丸を撃ち込んでいた。

「うーん……」

後でこの場の指揮官である寒が首を捻つてゐる。
かん

「どうしたの？」

「有力者」達がガトリングを構えて搜索＆排除に奔走している中、「有力者」である私と指揮官である寒はこの場に留まっていた。

「思ったよりも、残っている男子が少ない」

それがほどの私の独断による戦闘については、何も言われいなかつた。

それに私が今、戦えば、周りの人間を巻き込んでしまうだらう。

「ふーん」

編入直後の私にはよく分からぬので、生返事になる。

まあ、確認作業の方もまつたくだつたし。

「で、どうするの？」

私が興味のあるのは、今後の行動。

「じゅうしき寿の指令を待つ間は、現状維持。あなたの出番はない」

「有力者」である私の実力を披露してからは、ガトリングは邪魔だろう、といつことで、私は手ぶらだった。もちろん、探索にも出かけていない。男子を倒したところで、それが誰か確認できないため、一度手間になるからだ。

と、そのとき、背後で派手な爆発音が上がった。

「えつ……」

同時に強い揺れが私達を襲う。

私と寒は顔を見合わせる。

爆発音の発信元は、御津見という山下についている監視役の部屋だ。

そこは今回の戦いにおける、一つの拠点と聞いている。

男子が唯一女子寮へ侵入可能な通路だそうだ。

そこへの侵入さへ完全に防ぎきれば、おそらくこの戦いに勝利することができるだろう、といふことらしい。

だが、おそらくそれだけでは駄目だろうといふこと。

その気になれば、男子達はかべを破壊して侵入してくる、と生徒会副会長である寿が言っていた。

事実、十数分前に一度、男子側が壁を爆破したと聞いている。

だが、作戦発動と同時に鎮圧されているはずだ。

あの場には「有力者」である華焰がいたはずだ。レベルは20代だが、作戦開始と同時にその「力」を思う存分震えるはず。心配などいらないはずなのだが。

だけど、もし今の爆発が男子のものだったら？

少人数の侵入だけなら、作戦が実行された今、大した脅威ではない。個人個人の能力は格段に上がっているし、予め設置されている四つのバリケードも健在なのだ。

たとえ大人数の侵入を許したとしても、食い止める自身はある。

それに、問題の女子寮の最深部には、寿がいる。

彼女を倒さなければ、男子達は勝てない。

私は悲鳴の元に走り出した。

いかん。

本編に早く戻らなくては……

『なぜなぜに?』

Q 女子のバリケードはどうやって作ってあるのですか?

A 基本は人です(笑)
～男子と違つて机は使っていません。

六章 女子寮攻略戦争 / 十一話 男子残党一掃戦 ? 【10・38~】

【午前10時38分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

体に力が入らない。

周りを見渡す。

嵐の後、といつのはこんな感じなのだろう。

室内の物は全て強引に捻じ曲げられていて、無事な物は見当たらない。

人的被害も大きかつた。

仲間の女子はまだいい。

全員、作戦のおかげで「力」を得てるので身を守る、という行為を行うことができている（それが成功しているか、といつのはまた別の話）。

だが、「封絶」によって動きが止められている男子の方には、大きな被害が出ていた。

ほぼ全員が体の一部を骨折しており、中には腕が吹き飛ばされている者もいた。

だが、IJIは「封絶」の中である。

怪我をしたからといって、血が流れるわけではない。

IJIでの怪我は、ほぼ完全に治すことができる。

だから、あいつの行為はルール違反ではない。

だが。

あいつはそれを知っていたのか？

「学園結界」は「力」を完全に封じているわけではなく、「力」の発現を小さくしているだけであって、「学園結界」内でも「力」自体は発動している。「封絶」は「外界との関係を断ち切る」というその性質上、一度発動させると、「学園結界」の影響下でも、小さいながらその影響を受けない地帯を作り出すことが出来る。後はそれを媒介に、「封絶」を大きくしていくのだ。

「学園結界」内であり、私自身は低レベルの「有力者」であるのに関わらず、「力」を使っていたことから、推測した可能性もあつてなくもないが、ありえないだろう。

としたら、あいつはこの惨状を起こすことに対するして、厭わなかつたといふことだ。

「何なのよ、あいつ……」

【午前10時38分・女子寮作戦室・寿視線】

「状況は?」

「不明。今、近藤が向かってる」

草子は高速でキーボードを叩きながら答えた。

女子寮の御津見の部屋にいたメンバーからの映像が途切れたのは一分前。

例の男子との交戦中に、突如無線機と共に機能しなくなつたのだ。

いや、兆候はあつた。

機能しなくなる寸前、例の男子の姿が揺らいだように見えた。

「副会長」

「ん? どうしたの? 静江

「第一ゲートに、郷馬がいます」

【午前10時38分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

女子両側の廊下には、合計4つのバリケードが設置されている。

男子が女子寮最深部に侵入するには、必ずこのバリケードを突破する必要があるので。

「で、あんたら一人だけ？」

第一ゲートの前まで来れたのは、男子側の大将である郷馬とその友人、斎藤一樹の二人だけ。

余裕ね。

六章 女子寮攻略戦争 / 十二話 男子残党一掃戦 ? 【10・38~】

山下の本性が見え隠れ?

『なぜなぜに?』

Q 山下は何故「学園結界」の中であれほど惨状を引き起しつゝ
とができたのですか?

A 華焰の「封絶」内で山下への「学園結界」も無効化されていた
からです。
～山下自身はそのつもりじやなかつたけど。

六章 女子寮攻略戦争 / 十二話 男子残党一掃戦 ? 【10・39】

【午前10時39分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

「ここの第一バリケードには約二十人の女子が配置されているが、残念ながら「有力者」は配置されていない。

だが、作戦が発動した今、女子全員が「有力者」としての力を有しているのと同じである。

「悪いけど、あんたの首、捕らせてもうつよ」

「我々男子を、少々甘く見てはいいか? この戦いにかける我々の意気込みを舐めるなよ」

郷馬は斎藤の前に出る。

「一人で十分つてこと?」

「そうだ」

郷馬は当たり前と言わんばかりに頷いた。

「舐めてるのはそっちの方よ。あんた、現状分かつてんの? あ、それとも知らない? それなら、教えてあげるわよー」

会話中、右手に集めていた「力」を解放する。

凝縮されたエネルギーの塊が郷馬に向かつて飛び、それが戦闘の

合図となつた。

「じとぶき
寿の持つ「カーテナ」セカンド」によつて私達女子は「有力者」としての力を得たわけだが、「世界観」を得たわけではない。

「カーテナ」セカンドから受け渡された力は、いわゆる「氣」のようなもの。纏つて防壁としたり、集めて投げたりはできても、炎を出したり、地面を割つたりはできない。

だが。

「こ」は「学園」内であり、郷馬は「学園結界」の影響を受ける身。

「力」の制限された今なら、対等に渡り合えるはずだ。

何よりこの人数差。

私達は一斉に郷馬に集中砲火を始めた。

【午前10時40分・女子寮作戦室・寿視線】

第一バリケード前での戦闘を、画面で確認する。

郷馬の「力」特徴は、驚異的な回復能力。

そして、彼の戦いは主に肉弾戦。

両手の甲からそれぞれ、不壊の超金属でできた三本の爪を出して戦う。

どんなダメージもすぐ回復してしまつ代わりに、圧倒的な攻撃力は持っていない。

なら、御津見達で足止めは可能であろう。

「案外、早く出てきましたね」

静江の声が後から聞こえた。

「さう？ 私はさうは思わないけど」

振り返って、画面に背を向ける。

と、静江は無線機を渡してきた。

今回私達が使用しているものではない、生徒会内でのみ使われているタイプのものだ。

「ふき 路会長からです」

【午前10時40分・女子寮御津見部屋内・近藤視線】

室内は荒れ果てていた。

「まるひで台風のあとね」

部屋は変なドーム状の結界^{くわく}に覆われていたが、なんの抵抗もなく（そう思つてゐるだけかもしれないが）入り、華焰^{かえん}の姿を確認して近寄つた。

「うわっ……」

ぐつたりそておた華焰に、まず治療を施す。

髪（私の髪）を伸ばして傷口に当て、そこから精氣を流し込む。これにより、自然治癒力を高めるのだ。

「派手にやられたわね。でもこれって、ルール違反じやないの？」

「……『封絶』の中であるゆえ、そつまはならない」

意味は分からなかつたが適当に相槌をうつり、寿に連絡する。

『ひづら近藤、華焰を発見。惨敗の模様。男子も現場にいることから、山下は逃走した模様』

うわー。それにしても、派手にやったわね、あいつ。

『りょーかい。じゃあ、例の彼を追つて』

何故か、寿じやなくて天応草子^{てんのうくさこ}が答えた。

品は、アーティストによって

「どんどんキャラが増えています（インフレ中）
『状況報告？』は大変そう……」

『なぜなぜに?』

Q 落合長とは誰ですか?

A 次の話で分かれます。

～今回の話に直接関わってくるわけではないよ。

六章 女子寮攻略戦争 / 十四話 男子残党一掃戦 ? 【10・45】

【午前10時45分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

戦況は芳しくない。

さすがは、高一男子「有力者」のトップに立つ男といったところ。

「常に距離をとって！」

周りの仲間に声をかけて、私は打開策を考える。

現状、こちらに被害はない。

だが、郷馬に致命打を与えてもいい。

向こうは高一男子の頂点であるのに對し、こちらは俄か素人の寄せ集め。

向こうは純粹な「有力者」であるのに對し、こちらはただ「力」を与えただけの偽「有力者」。

だが、それ以上に。

あきらかにおかしい。

郷馬の動きを観察する。

彼は「こちらの遠距離攻撃（氣弾放出）に対し、鋼の爪で正面を切り開き、ステップを駆使して交わしている。

問題は、そのステップの速度だった。

郷馬は高レベルの「有力者」だ。

人間では通常不可能と思われる運動能力を發揮したところで別段驚かない。

但し、そこが「学園」内でなければ。

「どうした？ もう五分は優に過ぎたぞ。この自分を捕らえるのではなかつたのか？」

周りの女子達からも徐々に焦りが見え始めている。

今回の戦い。

非「有力者」の者が圧倒的戦力差がある「有力者」と張り合おうという意気込みがあるのは、「力」の分配により、「有力者」と互角の勝負が出来る、という点があつてのことだ。

それが、同じ「有力者」としての「力」を持ちながら、「学園結界」によってその大半の「力」を封じられている人間一人を、「有力者」としての「力」を与えた約二十人の力を持つてしても倒せないとなると、戦いへの意気込みが大幅に低下する。

所詮、自分達は「有力者」じゃない。

俄か「力」を得ても、ただの偽者なんだ、と。

なるほど。確かに、そういう意味では男子と女子で意気込みは違うわね。

悲惨な設備で暮らしてきた男子と。

優雅な設備で暮らしてきた女子。

寮施設入替えに実感が沸くのはいつまでもなく男子。

だからこそ、頑張れる。

一方、女子のほうは寮施設入替えについての実感があまりない。

ただ、悪くなるのは嫌だから戦う。

そろそろ手を打たないと、やばいわね……

【午前10時46分・女子寮御津見部屋内・近藤視線】

回復した華焰かえんは、ドーム状の結界内の破損（物質的、肉体的、問わず）を修復して見せた。

「す、じ、っ、」

「ど」でもできるわけではない。」の『封絶』内だけだ

華焰は復活した仲間達に、転がっている男子（何故か固まっている）に麻酔入りのゴム弾を打ち込んでおくように指示した後、私の方を向き直った。

「そういうば、奴と一緒に転入してきたのだったな。何者だ？　あいつは？」

男勝りな口調の華焰。

私は例の記憶喪失という設定を思い出す。

「えつと、あれ？　なんか思い出せない？」う、靄がかかった感じというか、あと少しで届きそうなんだけど……」

「……」

見つめる華焰の目が痛かった……

覚えてなさいよ……

なかなか終わらない「女子寮攻略戦争」。

このまま横道にすれたまではたしていいのか！？

本編に戻るのはいつになることやら……

『なぜなぜに?』

Q 郷馬と寿、どちらの方が強いのですか?

A 「力」の質、パワー、共に寿に利がありますが、郷馬は回復能力だけを特化させていますので、五分五分です。
（寿だって回復能力はそれなりのものだよ。）

六章 女子寮攻略戦争 / 十五話 男子残党一掃戦 ? 【10・47】

【午前10時47分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

「つぐ……」

「力」で覆つた左腕で、郷馬の鉄爪を受け止める。

受け止めた鉄爪は右手の物。

まだ、左手がくる。

「つづ……」

「力」の付近により強化された跳躍力を生かし、後方へ逃れた。

じついう戦い方は私の主義じゃない。

郷馬はその場に踏みとどまつた。

状況は非常に悪かつた。

郷馬を今だ捕らえられないからではない。

指揮官である私が攻撃されているのが問題なのだ。

集団で攻撃していたにも関わらず、郷馬はすでにその体制を崩してしまっている。

包囲網は崩れ去り、『』のバリケードはもはや意味を持たない。

そしてなにより、奴の仲間である斎藤はまだ何もしていないので。

廊下の端にたたずむ斎藤に田をやる。

ただ傍観なんてはずがない。

必ず何かしてくるはず。

だけど。今の状態じゃ何もできない。

仲間達はすでに意氣消沈しかけている。

『いひら、御津見。応援を……』

【午前10時47分・女子寮作戦室・寿視線】
「くわー」
生徒会専用無線機を放り投げる。

「どうしました?」

「やられた」

その一言で事態を把握した静江は、予め決めてあつた通りに後処理を始める。

「草子」

「分かつてゐる。機密ランクB以上への『学園結界』を復帰させるわ

やはり早かったか……

【午前10時48分・大学部生徒会室・監視線】

「これで、あいつらも少しばかりしくなるんじゃない？」

「そう？ 僕はそうは思わないけど。これはあくまで現状維持にしかならないよ」

ソファーアーに座つて牛乳を飲んでいる麗華の言葉に、僕は反論した。

「まあ、それはおいおい解決するにじょう。今の僕は、別のこと興味がいつてるのでね」

「ん？ どうしたの？」

「どうやら、『バッファローズ』が動き出しつづいてるらしい」

【午前10時48分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

「もう少し遅い」

応援を呼ぼうとした私に、郷馬がそう告げた。

「……遅いって、どういってこと?」

「もう準備は整つたといつことだ」

そう言つて、郷馬は斎藤のそばに飛躍する。

斎藤の手には、いつの間にか銃口がたくさんついた大砲のような物が握られていた。

六章 女子寮攻略戦争／十五話 男子残党一掃戦？【10・47】

すでに二章分くらいの分量になつていて第六章。
本当はキャラ紹介にちょうどいいかな？って感じで作ったのに、こんなに長くなるなんて……
次は男子の反撃です。

六章 女子寮攻略戦争／十六話 男子反撃戦？【10・49～】（前編）

『なぜなぜに？』

Q 機密ワソクB以上への「学園結界」の復帰、とはどういうことですか？

A 「学園結界」によって保護されている、機密情報、その他もうろの施設等への「学園結界」を復活させることなのです。
「まあ、本陣はあるでしょーけど（笑）。

六章 女子寮攻略戦争／十六話 男子反撃戦？【10・49】

【午前10時49分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

齊藤は手にしたバズーカー（？）を構えて、こちらに向かって。
みつみ

「させない！」

私は腕の周囲を覆う「力」を球状にして、齊藤に投擲する。

「手遅れだよ。御津見さん」

齊藤はそう言って、私に向けて、いや、正確には女子寮最深部の方へ向けて、そのバズーカーを放つた。

【午前10時49分・女子寮作戦室・寿視線】

「これからどうします？ 副会長」

静江と草子が私を見つめる。

「どうしようか？」

当初の計画は破綻した。

これ以上無理をするわけにまいかない。

「ちよっと出でへるわ

風にでも当たって頭を冷やすとしよう。

【午前10時50分・女子寮第一バリケード前・一般女子視線】

「やつぱ、突破してこようがへるのかな?」

「たぶんそういうんじゃない? そのために四つもバリケード作って
るんでしょ?」

「アリョーネ。でもアーティー、できることなら
ん?」

何かが横切った。

「どうしたの?」

「え、いや、何か飛んで来たよ! つな……」

【午前10時50分・女子寮第二バリケード前・一般女子視線】

「で、どうなったの？ 第一バリケードの方は？」

「今連絡をとっているのです。少しお黙りなさいなー。」

「遅いよー。そんなんじゃ つて、あれ？」

一瞬、丸い物が見えたよーな……

【午前10時50分・女子寮第四バリケード前・一般女子視線】

「本当にここまで来るのでしょつか？ 私、ちと信じられません」

「来るんじゃない？ でもまあ、そんな気負つ」とはないでしょ

「そうぢつか」

「つてかセー。前から思ってたんだけど、それってワザとなるの？」

「ワザと、と言ふ むやっ」

「どうしたの？」

「いや、何かが……」

【午前10時50分・女子寮作戦室前・寿視線】

作戦室の外には私以外誰もいない。

他の女子生徒はそれぞれの持ち場についている。

「はあー」

ため息一つ。

こんなことなら、「封絶」を使った作戦は取つておくべきだ
ったかも。

バリケードの方へ目をやる。

「！」

向こうから、何かが飛んで来た。

【午前10時50分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

バズーカーは火を噴いた。

だけど、ダメージは感じられない。

防御のために翳した手を除けて、斎藤を見る。

「何をしたの？」

「それはこれから分かりますよ。御津見さん」

ふと視線を移す。

この辺り一体に黒い、卵くらいの大きさの物が散らばっていた。

その数五個。

「反撃、開始！」

郷馬じゅうまがかっこつけて、両手を顔の前でクロスした。

遂に男子が反撃に移りました。

でも今はまだ10時50分。

まだまだ続きます。

六章 女子寮攻略戦争 / 十七話 県子反撃戦 ? 【10・51】（前編）

『なぜなぜに?』

Q 女子寮第四バリケード前にいた女の子はまた出でくるのですか?

A たぶん、出てきます。
いや、たぶん……

六章 女子寮攻略戦争 / 十七話 男子反撃戦？【10・51】

【午前10時51分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

卵型の物体は、カチリ、と音を出して真っ二つに割れた。

いや、割れたのではない。開いたのだ。

その「」とに気づいたときには、すでに私の周りは黒い鎧に囲まれていた。

「　！　な、何？」

五つの弾から飛び出してきた、五人の鎧を着込んだ者達。

「『パワードスーツ 駆動鎧』（＊とある魔術の禁書目録）というんだが、知らないようだな」

郷馬じゅうまが指を鳴らしたのを合図に、その「駆動鎧」とやらを着込んだ男達が私を押さえつけた。

力が強化されている！

床に押さえつけられた私を見ながら郷馬が口を開いた。

「もう分かつてるとと思うが、こいつは着用者の筋力を極端に上げる物だ。そちらが『力』を付したのと同じようなものだな。

だがお前らとは違い、こちらの動力は電力。これが致命的な違い

だ。

いくらあいつとこえども、何時間も『力』の分配に集中できるわけではないだろ？』

「つぐ……」

まるで一から零の作戦を予め知っていたような作戦……

どこかで情報が漏洩したか？

「だけど、それだけじゃあ、うちの大将には勝てないんじゃないの？」

いくら力を得たといひで、所詮素人の真似事でしょ？」

私の言葉を聞いて、郷馬はふつと笑った。

「今回の目的を忘れてはいいのか？」

別に我々はあいつを倒す必要はない。

女子寮最深部に侵入さえすればいいのだ。

そのための手段は用意した

【午前10時51分・女子寮作戦室前・寿視線】

「ちいっ」

鎧男達が最終防衛ラインを突破しないように、床を融解し、高い壁に形を変える。

「『ブラックスコート表層融解（＊とある科学の超電磁砲）』

「解禁」を用いての「力」の使用。

本来なら「解禁」を用いようと、純粹な「発電能力」による電磁波で、床の素材に含まれる鉄分を媒介に同様なことができる。

しかし。

それほどの巨大な「力」を使えば、作戦室にある機材にまで影響を与えるかね？」

あそこにある物を壊すわけにはいかない。

「つなら」

できるだけ使いたくなかったのだが、作戦を直接攻撃に切り替える。

前髪から飛ばす電撃の攻撃。

だが。

「…………」

搔き消された?

電撃は鎧に触れた瞬間、「力」を失つて霧散した。

「…………」

無言で突っ込んでくる鎧達。

その動きは人間にしては以上に速く、しかし重く圧し掛かるよう。

それなら。

頭髪に「力」を集めて発射。

廊下の緊急防壁のスイッチを作動させた。

【午前10時52分・女子寮作戦室・天応視線】

「で、あれは一体何なのですか?」

静香の質問に、あたしは記録した映像を一時停止させて説明する。

「『モンスターボール』よ。

小型化して改造バズーカーの弾丸にして、吹っ飛ばしたよつね。

黒かつたのは煤じやないの?」

「『モンスター・ボール』ですか」

静香が考え込むように俯く。

「ん? どうしたん?」

「いえ。

ただ、妙だと思いませんか?

『モンスター・ボール』にしろ、今出てきているあの鎧にしろ、あれだけの数をどこで仕入れたのか?」

「まあー、確かに言われてみればそりやけど」

「これは

「これは?」

「郷馬さん、実はかなりの大金持ちと思われます」

真面目な顔で手をぐーにする静香。

「それはボケ?」

「ボケ?、ですか。

なら、もう二つひとしきりおこしておこう

どうせ私は少し抜けてます」

女子側の大将がもう動き出していました。

このまま一気に終わるのか?
それともまだまだ続くのか?

次回で確認して下さい

六章 女子寮攻略戦争 / 十八話 男子反撃戦 ? 【10・52】（前編）

『なぜなぜに?』

Q 何故一つのバズーカの一撃だけで、「モンスター・ボール」を
いろんな所に飛ばせるのですか?

A それが、斎藤の「力」だからです。
どんな武器でも自在に使いこなすよ。

六章 女子寮攻略戦争／十八話 男子反撃戦？【10・52】

【午前10時52分・女子寮作戦室前・寿視線】

緊急防壁が下りる。

三段構えの緊急防壁。

一つ目は彼らの後。

二つ目は彼らの真上。

三つ目は私の目の前。

それらは同時に下りる、はずなのだが……。

「ふん！」

鎧男達は緊急防壁を受け止めた。

馬鹿な……

一人が両端で受け止め、残りの三人が潜り抜けてくる。

けど、もう遅いわ。

私の目の前の緊急防壁は下りきった。

正直、びびったわね。

額につつすら浮いた汗を手で拭う。

だが。

「……！」

緊急防壁がへつこんだ。

そして。

最終防衛ライン直前の「とひでおお」は破られ、私は自分に課した掟を破るか否かの選択を迫られた。

【午前10時53分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

「つぐ……」

両腕を押さえつけた男子を振りほどくとするが、びくともしない。

分厚い鎧のせいで、男子達は女子に対する遠慮とつまとのを感じていなかつた。

「あきらめろ。『駆動鎧』は女の力でどうとかできるようなものではない」

あがく私に、郷馬が口を開く。

「えらく余裕そうじやない。あなたは出なくていいの?」

「構わん。余剰戦力だとでも思えばいい」

なめられたものね。

【午前10時53分・女子寮御津見部屋内・近藤視線】

「で、どうするの?」

回復作業も終えて、男子達は眠らした。

「する」とはもうなごよつに思える。

「あの編入生も記憶喪失なのか?」

華焰かえんがふと思いついたように聞いてきた。

「ええ。 ただけど

「そりか……」

ん?

脈絡がよく分からぬが、まあ、別に気にする」とじやない。

「 よし。とつあえず、仕事をしよう。

まずは、もういちど、男子が隠れていなか調べよう

【午前10時53分・大学部生徒会室・ふき監視線】

「ええ、そうです。

戦いはまだ続きそうなので、そつされるのがよいかと。

では、また

受話器を置いて、僕を見つめる麗華れいかの方を振り向く。

麗華は牛乳パックを持ちながら口を開いた。

「どうこうことなの?」

「一応、浄化しておこうと思つてね

僕の言葉に麗華が首を捻る。

「浄化?」

「うふ。 セうだよ。

寿は『カーテナ＝セカンド』の力を使って強化をしていくようだからね。

他にも何かしていふよつなら危険因子を増やすことになる。

まあ、そんなことはないと想ひけれど……ね

そう言つて、ひらりとスクリーンに手をやる。

そこには噂の編入生、山下宏治の姿があつた。やまじた ひろじ

【午前10時53分・女子寮作戦室前・寿視線】じょしふせき

撃は破らない。

「発電能力」を足に込める。

そして、一踏み。

床の成分に含まれる鉄分が、私を軸に吹き荒れ始めた。

六章 女子寮攻略戦争／十八話 男子反撃戦？【10・52】（後書き）

最近、無沙汰していた主人公、山下が少しだけ顔を出しました。
まだ出番は来ないかも知れないです。

『なぜなぜに?』

Q 寿が自分に課している捷とは何ですか? 「力」の暴走とかですか?

A 似たようなものです。

捷の話は今後暫らくは出でこないかも。

六章 女子寮攻略戦争 / 十九話 男子反撃戦？【10・54】

【午前10時54分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

突如、私を押さえつける力が弱くなつた。

否。

私を覆う「力」が強くなつたのだ。

いける！

私は懇親の力を込めて男子達を振りほどくと、お腹に一発ずつお見舞いした。

「つぐ……」

「なに！」

ここは一先ず撤退をしたほうがいいかも……

私は郷馬と身構えた。

【午前10時54分・女子寮作戦室前・寿視線】

「力」を解放する。

「学園結界」の縛りは受けない。現在、「学園結界」は私達女子には無効化されていっているのだ。

制限はない。

「つぐ……」

吹き荒れる砂鉄の嵐に、鎧男達は動きを止める。

「焦るな。こちらには、『海楼石』がある」

なるほど。だから電撃がかき消されたのね。

だけど。

砂鉄を磁力でコントロールし、鎧男達に向かわせる。

「無駄だ。『有力者』の『力』は効かねえ」

先頭の男子が宣告した。

砂鉄の槍が鎧男達に襲い掛かる。

砂鉄は磁力により強化され、槍は鉄を貫く強度を得ている。

「だから、意味ねえんだよ」

無数の砂鉄の塊が鎧男達を覆つた。

砂鉄の槍が鎧に触れた瞬間、その動きが止まる。

「力」は書き消され、砂鉄は殺傷能力を失った。

「ほら」

鎧男は自慢げに告げる。

「お前の負けだ」

打つ手がなくなつた私を拘束するため、鎧男達は動こうとした。
が。

「なつ……」

その関節は動かない。

大量の砂鉄が関節部分に詰まつてゐるからだ。

「『有力者』を舐めないでよね」

動かなくなつた鎧男達に告げる。

あ、パソコン壊れたかも……

【午前10時55分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

『御津見さん、聞こえますか?』

無線機から静香の声が聞こえた。

郷馬の様子を伺いながら無線に答える。

『何?』

『戦況が思わしくありません。一時、第一バリケードまで撤退してください』

『そうしたいところだけど、鎧達はどうするの?』

『大丈夫です。副会長が『力』の放出量を上げたので、我々を覆う『力』は男子の『駆動鎧』の力に劣りません。それに、第二バリケードまでの男子はすでに殲滅しました』

『了解』

無線を切ると同時に、郷馬の後から巨大な車輪と、その後に続く女子の集団が現れた。

「なつ……」

処刑用車輪!?

車輪の周囲は炎で覆われ、男子を牽制している。

「退け！」

集団の先頭をいく華焰かえんが傍にいた男子を炎の剣の一振りで押しのけた。

【午前11時00分・女子寮第一バリケード前・郷馬視線】

「どうする？ 女子は要塞作っちゃってるけど……」

仲間の男子がその要塞を指差す。

寿が合流した女子達は、ものの五分で鉄壁の要塞を作り上げてしまつた。

要塞は廊下一杯に広がり、侵入者を足止めしている。

「まずは同志を全員集めて、戦力を確認。考えるのはそれからだ」

六章 女子寮攻略戦争 / 十九話 男子反撃戦？【10・54】（後書き）

これで第六章は終了です。
ちょっとマンネリ化し始めていたので、ここで戦いの趣向を変えます。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 「海棲石」は簡単に手に入るのですか？

A 実習で取りに行つたことがあるのです。そのとき、元々そこ
大量に取つてきました。
～本当なら取つた「海棲石」は回収されるんだよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

『男子軍』

郷馬 健
ごうば たけし

レベル 不明

世界観 「X - MEN」

得意技 手の甲から生み出すブレードによる攻撃

驚異的な回復力

階級 男子軍隊長 敵戦力撃破・敵本部侵入担当

配置場所 男子寮山下部屋 以後、女子寮侵入

戦闘成績 女子寮第一バリケード前での戦闘（主に御津見との戦闘）において

斎藤 一樹
さいとう かずき

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明

階級 男子軍副隊長 敵戦力撃破・敵本部侵入担当

配置場所 男子寮山下部屋 以後、女子寮侵入

戦闘成績 なし

山下 宏治

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃

「魔法壁」による防御
「瞬動術」による移動

階級 新入り 敵戦力誘導・撃破担当

配置場所 男子寮山下部屋

戦闘成績 女子寮御津見部屋内での戦闘（主に華焰との戦闘）において勝利

神崎 かんざき 拳けん

レベル 28

世界観 「黒神」

得意技 「方陣障壁」^{（ヘキサ・ウォール）}による防御

階級 ゲート前防衛部隊隊長

配置場所 男子寮側ゲート前

戦闘成績 男子寮側ゲート前での戦闘（主に近藤との戦闘）において敗北

清罷 ^{きよわな}
聖也 ^{せいや}

レベル 不明

世界観 不明

得意技 「モンスター・ボール」の投擲による間合いの調整

階級 ゲート前防衛部隊隊員

配置場所 男子寮側ゲート前

戦闘成績 男子寮側ゲート前での戦闘（主に近藤との戦闘）における

いて敗北

『女子軍』

寿 緋麻里
ことぶき ひまり

レベル 不明

世界観 「とある科学の超電磁砲」

得意技 「超電磁砲」による攻撃
レールガン

階級 女子軍隊長 最終防衛ライン担当 作戦指揮担当

配置場所 女子寮作戦室前

戦闘成績 女子寮作戦室前の戦闘において勝利

御津見 みつみ
みつみ

レベル 0(のはず……)

世界観 なし(のはず……)

得意技 不明

階級 第一バリケード守護隊隊長

配置場所 女子寮第一バリケード前

戦闘成績 女子寮第一バリケード前の戦闘（主に郷馬との戦闘）
において敗北

静香 しずか
静江 しずえ

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明

階級 女子軍副隊長 各部連絡係

配置場所 女子寮作戦室

戦闘成績 なし

天応草子 てんのう そうじ

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明(パソコン関係?)

階級 女子軍情報司令官

配置場所 女子寮作戦室

戦闘成績 なし

寒 篠子

レベル 不明

世界觀 不明

得意技 不明

階級 ゲート突破部隊隊長

配置場所 女子寮側ゲート前

戦闘成績 なし

華焰 香奈

レベル 22

世界観 「灼眼のシャナ」

得意技 「贊殿遮那」による一斬

階級 緊急避難通路防衛隊隊長

配置場所 女子寮御津見部屋

戦闘成績 女子寮御津見部屋内での戦闘（主に山下との戦闘）において敗北

近藤 美紀

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

階級 新入り ゲート突破部隊隊員

配置場所 女子寮側ゲート前

戦闘成績 男子寮側ゲート前での戦闘（主に神崎と清異との戦闘）において勝利

次章予告

例え自分がいなくても、世界は正常に機能する。

例え自分が死んだとしても、世界は今日もあり続ける。

「己の知らぬ處で、世界は常に動いている。

次章、「食料調達戦争」。

少年は世界にとって小さすぎる。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

キャラがインフレして大変なことになつてます……

七章 食料調達戦争 / 一話 学生食堂へ（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 女子が数分で要塞を築いていましたが、どうやったのですか？

A 寿の「力」の「表層融解」と、華焰の「力」の「封絶」のコンボです。

「いやー、それにしても凄い早業だね。

七章 食料調達戦争 / 一話 学生食堂へ

「菊さん！ 今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リーフィー・アルバージョン・パート?』ちょうどいい」

「はいよ」

「菊さん！ いつもも、今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リーフィー・アルバージョン・パート?』を！」

「はいよ」

「おばちゃん！ 僕にも今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リーフィー・アルバージョン・パート?』くれ」

「だーれがおばちゃんだつてー？！ お姉さんとお呼び！」

「は、はい！ すいません！」

「言ひ直しな！」

「お姉さん！ 僕にも今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リーフィー・アルバージョン・パート?』を求める

学生達で溢れかえっていた。

「あの中に入るのか……」

「はあ……」

きよわな
清異と一緒に俺（ こゝから山下視線に戻ります）はため息を
つく。

「今日の日替わりどんぶり・パテーン1216・リニューアルバージョンパート？」とは、「学園」が提供する学生食堂のメニューの一つである「日替わりどんぶり」の1216種類目をリニューアルしてさらにリニューアルした、「学園」の技術という技術を結集した、世界中の美食家達の舌をつなぐと噂される（あくまで噂）究極の牛丼のこと、だそうだ。

何故俺がこんな所にいるかといふと……

「え？」

「だから、一端中止してほしんんだよ。郷馬君、寿君」

大学部生徒会会長の落^{ふき}が寿に向かつて微笑む。

こゝは大学部の生徒会室。

現在ここに、高一の「有力者」が集められていた。

君達が今日の戦いで壊した『学園』の設備、全部でいくらすると

思つ?

寿君にいたつては、『学園』のシステムにハッキングするし、ログラムは書き換えるし、緊急時の障壁は破壊するし。

いくら学園長の許可が下りてるといつても、これはやうに過ぎだと思つよ。

郷場君も、あの『駆動鎧』、どこで仕入れてきたの? 駄目だよ、外から勝手に持ち込んだら

路会長が郷馬こぢらひとつ田を向ける。

「しかしですね、会長。自分達はこの戦いを止めるわけには……」

「だからね、郷場君。

一時的に物理戦闘をやめて欲しいだけなんだ。

いいかい。今からこいつとは絶対だよ。すでに、学園長の許可も取つてある

路会長は聞を取つてから、言葉を続けた。

「これより、第一次女子寮攻略戦争の内容を変更させてしまつよ。

内容は、学食の今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1』
ゆつ・・・・・・・舌噛んだ・・・・・・・

七章 食料調達戦争 / 一話 学生食堂へ（後書き）

久しぶりの更新となりました。

第一次女子寮攻略戦争はまだまだ続きます。

七章 食料調達戦争 / 一話 ルール変更（前書き）

『なぜなぜに?』

Q 寿や郷馬達は本当に罰則を受けないのですか？

A 受けません。今回の修理費は全て学園長のポケットマネーから支払われます。

～そのポケットマネーがどこから出てるのかは秘密。

七章 食料調達戦争 / 一話 ルール変更

「まず、君達には今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1-2-16・リーコーバージョン?』を食べてもらひ。

制限時間は一時間。その間に、空になつたどんぶりを持って、こゝ、大学部生徒会室にまできてほし。」

「それ、何の意味があるんですか?」

「枷の軽減だよ、寿君。

もし、制限時間内にどんぶりを持つて来れなかつたら、『学園結界』を強化して君達の行動を抑えさせてもらつよ。

『えられる枷の軽減のために、どんぶりを持つて走る。

これが、変更されたルールだよ』

「じき、一時だ。準備をしろ。」

郷馬の声が後から聞こえてきた。

清麗と一緒に振り返る。

「で、でも郷馬君。あの中に入るのさうひとつ……」

清麗が食堂の中を指差す。

食堂は初等部から大学の先生までたくさんの人で溢れかえっている。

そのほどどんびりが今田の『今田の日替わりどんぶり・パターーン12-16・リーコーバージョン?』を求めているのだ。

日替わりどんぶりの総メニュー数は1461。四年で一周する。そして、四年に一度、学食の料理長である白神菊自身じゆかぎゅくが食材を握る日がある。

いつ白神料理長が出てくるのか、それはいつも分からない。

ただ、彼女が作る日替わりどんぶりの番号はいつも決まっている。

1216。

ちなみに、彼女の誕生日は12月16日らしい。

「相変わらずだなー清麗。そんなんだから負けんだよ

かんだき神崎が清麗の背中をばんばんと叩いた。

「全員揃つたか?」

郷馬が確認をとる。

一度に学食に入れる人数は予め制限されている。各陣、10人までだ。

但し、高一意外の人間はいつも通りに学食を利用できる。

「よし、では作戦の確認だ」

郷馬が全員を集める。

「いいか。まず、我が敵を間違えるな。敵は女子。他の生徒は関係無い。ごたごたに巻き込まれてはいかん。いいな？」

では確認だ。

まず、先行隊が食券を確保。

その間に別働隊が列に並ぶ。

座席の確保も忘れるな。

食べ終わったら外にいる別働隊にどんぶりを輸送。

どんぶりを得た部隊は『有力者』を連れて大学部生徒会へ直行

「表向きは、だろ？」

神崎が郷馬にウインクする。

「口を慎め。やつらが盗聴している可能性も」

「裏があることは向こうだつて考へてるつて」

食券を買いに向かうメンバーは三名。それぞれ、東口、南口、西口、の三方向から侵入。後に三方向に散らばる券売機にそれぞれ向かい、食券を確保する。但し、その際女子側からの妨害を考慮して、護衛をそれぞれに一人ずつ配置。

列にならぶメンバーはタイミングをずらす。

残った一人と食券を確保し渡し終わった者は、一人分の食事スペースの確保。

外の部隊はそれぞれ、食堂前と、中継用の廊下、そして大学部生徒会室前の三箇所に分散。

「そろそろだ」

時計を確認する。

開始時間は一時。

制限時間は一時間。

「Jのミッションに失敗すれば、午後からの戦いで「力」を封じられることになる。

「この戦いで負ければ、我々は負けたも同然だ。
心して掛かれ！」

七章 食料調達戦争 / 一話 ルール変更（後書き）

ちょっと最近話が薄くなつてますね……

なんとかします。

七章 食料調達戦争 / 三話 南口（前書き）

『なぜなぜに?』

Q 白神料理長の年齢はいくつですか?

A 還暦を越えています。

「それでも本人曰く、ぴっちぴちの17歳。

七章 食料調達戦争 / 三話 南口

郷馬の掛け声と共に、「学園」内に鐘が鳴り響く。

大学部生徒会の用意した、開始の合図だ。

走り出そうとした瞬間、足元に火線が現れ、炎を混ぜたドーム上の陽炎の壁が形成された。

「こいつは……」

周囲の喧騒が止む。

展開された「封絶」は食堂全てを飲み込むほどの巨大なもの。

でかすぎだろ。

「封絶」の見上げながら思つ。

「封絶」の影響で、現在動けるのは「有力者」のみ。

だが、女子達は小細工で全員動けるはず。

なら。

「『アデアット』」

「ハマノツルギ」を取り出して、構える。

郷馬の話によると、この「封絶」内では「学園結界」が働かないらしい。

ならば、使えるはず。

「『解禁』、『無極而太極斬』（＊魔法先生ネギまー）」

「ハマノツルギ」を大きく振るう、「力」を断ち切る剣撃。

正確には「魔力」と「気」を分かつ技なのだが、ここでは「力」を分かつ技として作動する。

「おりやあああー！」

最も「力」の弱そうな「封絶」の頂点（ドーム状の）に向かって放たれた斬撃は、「封絶」を一瞬で破つた。

途端に喧騒が吹き返す。

時間にしてわずか数秒足らず。

だが、その間に女子達は数メートルも先に進んでしまつている。

「えつ……何で女子があんな所に？」

隣で走る清閑きよわなが驚嘆の声を上げる。

「んな」とはビリでもいい。いや、「

こいつは非「有力者」か。

「んな」とはビリでもいい。いや、「

清異ともう一人の男子（名前はまだ覚えていない）に発破を掛け
て、俺達は食堂の南口に向かう。

『目標、距離20。最優先ターゲットは確認できず。オーバー』

『了解。攻撃せず、中に入つたら拘束してくれ』

思念を使って斎藤さいとうと交信する。

田の前を走る女子はおそらく非「有力者」。

この二人はこのまま南口から食堂に入るのか、それとも陽動か。

まあ、どちらでもやることは変わらないが。

今回のルールである、食堂に一度に入つていい人数は、各陣10人までというのは、実は大変扱いが難しい。

同時に10人以上入つてはいけないだけで、入れ違いで何人も入つてよいからだ。

つまりは、力のない者10人を相手側から見繕つて食堂内で身動きを取れなくしてしまえば、相手は何もできなくなるのだ。

もちろん、これはこちら側にもいえることだが。

と、前の二人が振り向いた。

「おおっ」

二人は構え、「力」で体を覆い始める。

陽動か？ それとも待ち伏せか？ だとしたら、ここはすでに別働隊に囲まれている可能性も。

「ええい、面倒くさい。突っ込んじまえ！」

右手の「ハマノツルギ」を前方に投げ飛ばしながら、隣を走る人に叫んだ。

「え、ええーっ」

驚く清罷ともう一人（やつぱり名前を思い出せない）を余所に、「ハマノツルギ」は二人の女子の間を通過する。

「えつ……」

無意味な投擲に驚く女子二人。

今だ、「瞬動」で……

足に「力」を込めて、放出する。

が。

「しまつた……」

前にぼてり、とけただけ。

「何してるの？」

そうだった。「学園結界」……

「はああああー！」

俺がこけたのをチャンスとばかりに襲い掛かってくる女子一人。

それに対し、清麗が空の「モンスター・ボール」を投げた。

「！」

空の「モンスター・ボール」は一人のうち、右の方に当たると、口を開いて「キャプチャーネット」を放出して、「モンスター・ボール」内に取り込もうとする。

「ナイスアシスト！」

俺は起き上がって、もう一人の女子の一撃を受け止めた。

そのまま引き寄せるようにして、投げ飛ばす。

「ふんっ」

だが、「力」によつて強化された体を持つ女子は、難なく着地を決めて見せた。

もう一人の方も「キャプチャーネット」を破り終える。

だが、位置は先ほどとは逆転、俺たちの方が食堂に近い（女子が

「キャプチャーネット」に絡まっている間に隣を走りぬけた)。

「悪いが、相手してる暇ないんで」

格好つけて、南口へと一步進む。

と、足元が爆発した。

七章 食料調達戦争 / 三話 南口（後書き）

久しぶりの更新となりました。

さつと今までの話を見返してみたのですが、最終話まで書き上げるのにどれだけかかるのかを考えて、ちょっと突然としてしまいました。

執筆速度上げないとまずいですね（笑）

いや、ほんと。

七章 食料調達戦争 / 四話 ピンチはいつも突然に（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 清眼は「有力者」なのですか？ それとも非「有力者」なのですか？ どちらの表現も出てきたので分かりません。

A 「有力者」ではありますが、「力」の発動に条件があります。だから、「力」が発動していくときは非「有力者」。

七章 食料調達戦争 / 四話 ペンチはいつも突然に

「うわあああっ！」

なつ、爆弾！？

突然の爆発で、最も弱い足元の障壁（常に簡易の障壁を身に纏っている）が破られた（ただでさえ弱い障壁は「学園結界」によつて紙切れ同然になっていたわけだが）。

「あー、軍事研の……」

吹き飛ばされた俺の傍にいた女子（食堂と対側に飛ばされた）が呟いた。

「つ伏せのままダメージを確認する。

大丈夫。怪我はない。

体が痺れているが、すぐに治るだろ？

「あ、動かない方がいいよ。たぶん、神経毒盛られても

は？

みるみる意識が遠のいていく。

「あー、ほらや駄目ね」

「そつかー、そりゃ大変やつたなー」

休看先生やすみが豪快に笑つて俺を叩いた。

「

叩くな、と訴える俺。

「まあ、でもラッキーやつたで。骨折も何もしてへん。」

「

だから叩くな、と訴える俺。

「まあ、残念なことに倒れてから30分は経ってるから、いろいろ
とまざいんとちやう？」

「

だ、か、ら、叩くなつて言つてんだよー

心の中で叫ぶ。

「ん？ どうしたん？ 何か言いたいん？」

神經麻痺で動きの取れない俺は、目で訴えかける。

「そんじゃ、まあ、治療しますか」

休看先生は白衣のポケットから怪しげなカプセルを取り出した。

「 」

「ん？ あー、これ？」

俺の視線を感じて、カプセルを俺の目の前に持ってくる休看先生。
「これは、『インフレックス』の技術と『学園』のサンプルから作り出した秘薬でな、回復形の『有力者』の肉体の一部からできんのや。』利益あるでー』

ねーよ！

ぐひひひひ、と涎を垂らしそうになりながら笑う休看先生に、恐怖を覚える。

「いやー、なかなか飲んでくれる生徒がいなくてさー。せつかく保健室の先生になつて合法的に実験するつもりやつたのに、最初に失敗して以来、誰も来ーへんかったからなー。こんなチャンス滅多にないし、逃すつもりはあらへんでー』

マ、マッドサイエンティスト！？

「ほな、さつそく飲んでもらおつか。つて、あんた、動けへんのやつたな」

休看先生は思案するように顎の下に手を持つていぐ。

「やあ、口移しで飲ましたるわ」

とさでもなこと言ひ出した休看先生に、俺の目が点になる。

「えーと、コラコラコラ……」

いやいやいや、ちょっと待て。おかしいだろ。どう考へても。一体どんな思考回路になつてんだよ。口移しなんてしなくて、他に方法はいくらでもあるだろ。つーか、大体、そんな怪しげな薬を使おうとする前提が間違つてゐる。それに俺、その、それは初めてつてゆーか……

抵抗したいが動けない体に悶々しながら、俺はせめて「無詠唱呪文」を行使しようとする。が、「」は「学園結界」の影響下。

「あつたあつた。よし。そんじゃあー、山下君」

人体実験がそんなに嬉しいのか、満面の笑みで微笑む休看先生。

「覚悟はえーなー？ なくともやるけど、あつた方がえーで

お、俺の貞操がー！」

今までこ、休看先生が薬を飲もうとした時に、第三者の声が聞こえてきた。

「待つて下さい。できれば変わつて欲しいのですが」

そう言つて現れたのは、なんと、大学部生徒会長（名前忘れた）！

え、ちょっと、何で……

突然の展開に眩暈を覚える。

とにかく一つ言える事は。

俺、汚れちまつた……

七章 食料調達戦争 / 四話 ピンチはいつも突然に（後書き）

話がおかしな方向へ……

ガチバトルを望んでいた人は、ごめんなさい。

七章 食料調達戦争 / 五話 貞操意外もいろいろアソブ（前編）

『なぜなぜに？』

Q 軍事研という単語が出てきましたが、これは、今後のストーリーで部活や研究会、同好会などが出てくるといふことですか？

A はい、その通りです。

所属する活動団体と「有力者」の「世界觀」は一應合わせるつもり。

七章 食料調達戦争 / 五話 貞操意外もいろいろパンチ

「きたきたきたー、ガチ、B Lー！」

先ほどまでは違ひ輝きを田から放ちながら、休看先生は歓喜の声を上げた。

「わわわ、ぶけりーと、むけりーと、やけけけけけ！」

休看先生は落会長（名札を付けていたので、名前を確認）にコップと例の丸薬を手渡す。

その、休看先生のキス真似の唇を見ながら、落会長は両手を前に差し出した。

「あのー、すいません。初めてなんでそのー……」

顔を赤らめて俯きかけの落会長。

「オーケー、オーケー。そりゃそーだもんねー。なーに、私も野暮なことは言わないよ。

お姉さんは外で待つてゐるから、後は若いのでもうくつづけ

休看先生は、やつほーと叫びながら、ステップで保健室を出て、こつづけを振り向いた。

「一応、ひこ」「

路会長が扉を閉めた。

その顔には氣のせいか、疲れが見える。

改めて見ると、路会長はかっこよかつた。

ハンサムでもイメンでもなく、筋肉でもなくインテリでもなく、ただ、かっこよかつた。

つて、そんなこと考えてる場合じゃねえ！

近寄つてくる路会長を田で牽制する。

そんな様子の俺を見て、路会長は「ああ」と頷いた。

「もしかして君つて、初めては好きな子じゃないと駄目なタイプ？」

ほっとけ！

更に険しさを増す俺の視線をお構いなし、路会長は俺の傍まで来た。

やばいやばいやばい！ いりうとやばい！ 身体的にも精神的にも！

慌てる（体は麻痺している）俺に微笑みかけると、路会長は口を開いた。

「さて、始めようか。

吸血鬼君

!!

吸血鬼。

その一言で、保健室の空氣は一変した。

路会長はにこりと笑う。

「まあ、聞いてよ。独り言だと思って。

生徒会の活動にね、校内の治安維持があるのは知ってる?

それでね、生徒会は生徒に秘密に監視カメラを設置してるんだよ。
あ、カメラの権限があるのは大学部だけね。じょくぶ寿君のところは勝手に
やつてるようだけど、あれ、校則違反だから。

早く用件を言えって顔だね。

まあ、そう焦らずに。急いだつて事実は変わらないんだから

いや、じきに方をしてくる路会長。

「君達の戦いも見させてもらつたよ。下手に備品壊されると困るからね。いくら学園長のポケットマネーがあるにしても、調達その

ものは僕らがやることになるのだし。

閑話休題。

本日午前10時20分、女子寮の御津見みつつ君の部屋の周りの監視力カメラ、正確には女子寮と男子寮の境に設置していたカメラが一斉に途切れたんだ。

時間にして17分。カメラが復活した後、送られてきた映像には退廃した寮室が映っていたんだ。

これ自体はさして重要なことじやない。うちの学生ならこれくらい珍しくないからね。

問題はその後。

実はね、そのカメラ。『力』の分析機能がついててね、『学園』のデータバンクから誰が『力』を使ったか分かるようになってるんだよ。

で、まあ、何があつたのかといふと

「

そこで一端区切る蕗会長。

俺の反応を楽しむよつてひきあひを向く。

だが、俺は神経麻痺状態なので心境が表情に出ることはない。

「君の『力』が、華焰香奈君の中から確認されたんだよ」

七章 食料調達戦争 / 五話 貞操意外もいろいろパンチ（後書き）

ちゃんと話は元に戻りましたよ（笑）

おふざけを期待していた人は、ごめんなさい。

『なぜなぜに』

Q 監視カメラの「『力』の分析機能」は元からついていたのですか？

A はい。姿を消す「力」の持ち主もいますので。
「まあ、申請したときよりも強力に改造されてるのは間違いないけどね。

七章 食料調達戦争 / 六話 主人公の知らないところで、物語はちゃんと進

「 さて、ここで何か言つことはないかい? って聞きたいんだけど、麻痺つてゐるようだから、僕は勝手に続けるよ。

『力』はね、『有力者』の存在そのものに宿つてるんだ。

だから、ちょっと血が混ざつたりするだけでは、『力』が相手の体内に入ることはない。

『力』を相手の体内に入れようとするとには、どうしても意図的にするしかないんだよ。

すばり、相手に自分の存在を植え付ける、とかね。隸属化に置くつてのもあるね。

まあ、別にそういうのはどうでもいいんだ。この『学園』にはそういう口で仲間を作つてゐる奴もいるから。

問題はね、やました山下君。

君がどこの派閥にも属していない、といつことなんだよ

「 」

派閥? 話が見えねえ。

ふき路会長の話の本筋がどこにあるのか分からず、俺は困惑する。

もちろん、顔には表れていない。

「相手を支配下に置く『力』はそれなりに存在する。

けどね、それはどれも不安定で、使いにくいものばかりなんだ。

純粹な支配だけに特化した『力』、そう、例えば、吸血鬼のよつ
な眷属化能力はね、とても珍しく、そして、とても強力だ」

「

「話を元に戻そつか。
どつ

」の『学園』にはいくつかの派閥が存在する。

『生徒会』、『委員会』、そして『帰宅部』。主にこの三つが『
学園』の三大勢力で、もちろん僕は『生徒会』に所属しているわけ
だけど。

『学園』の生徒はね、ほとんどがどこかの派閥に所属する暗黙の
ルールがあつてね。

まあ、高等部の間はそこまで関係ないんだけど、大学部に入ると、
将来、組織の中で生きる者としての訓練として、どこかの派閥につ
かないといけないんだよ。

まあ、つまりは、予約つてとこかな。

大学部に来た暁には、うちの『生徒会』に入ってくれるっていう
約束をしてほしいんだ

路会長は右手で俺の額をとん、と叩いた。

途端に、体中の痺れが取れていくのが分かる。

「これで痺れはとれたはずだよ。

じつ、うちに来ない？

もし来てくれるなら、さう言ってほしんだけど」

びひする、びひする、

俺は路会長を見つめる。

一応俺は『バッファローズ』の人間として『学園』に侵入している身だ。なんか一番でかそつな『生徒会』の中に組み込んでもらえるなら断らない手はない。だが、罠の可能性は？ 大体、普通の生徒ならここでどう答える？ やっぱ、考えさせてくださいか？ だが、俺はすでに『学園』の中でも異質な存在として見られる気がする。となると、逆にノーマリティーは狙っているようにも捕らえられる可能性が。ええい、面倒くさいー。

「断ります。まだ編入してきたばかりの身なので」

その答えを予め予想していたよ、うんうん、と頷いて聞き取る路会長。

「やつぱつやつぱつと思つてたよ。でも、君の『力』が余所に取られるといひは大損害だ。

それに、やっぱり君には格の違い、レベルの差っていうのは知つてもうつた方がいいと思つんだよね」

「

不穏な言葉にさつと身構える。

だが。

「まあ、そういうわけだから、その吸血鬼の『力』は消させてもらいうよ。『解禁』、『吸血殺し』《ディープブラッド》（*とある魔術の禁書目録）」

時すでに遅し。

吸血鬼を灰にする『力』が、俺に向かつて放たれた。

七章 食料調達戦争 / 六話 主人公の知らないところで、物語はちゃんと進

今回のこの流れ、失敗したわけではありませんので、あしからず。

七章 食料調達戦争 / 七話 で、結局は……（前書き）

『なぜなぜに？』

Q 今更ですが、午前中に倒されたキャラが復活しているんですが

……

A 「なんでもなおし」（＊ポケットモンスター）で「麻痺」状態を直しました。

→使えたのは数人だけ。

七章 食料調達戦争 / 七話で、結局は……

「吸血殺し」。

食虫植物の「」とく、吸血鬼をおびき出し、自らの血を吸わせることがその者を灰にする力。

たとえ「解禁」によつて現れる吸血鬼の能力であるため、普段は吸血鬼でないとしても、「吸血殺し」の前では意味をなさない。

「吸血殺し」に誘われ、「解禁」の「力」が勝手に表に現れる。

だから、ふき路会長の「力」に当たられた俺は、否応なしに吸血鬼の力を引き出されるはずだった。

しかし。

「何ですか?」

路会長に俺は告げる。

路会長の腕は、まわりに腫んでトロトロ、とでも言つた風に俺の口元に差し出されている。

だが、俺に吸血衝動は現れない。

「な、なぜだ……」

驚きを隠せない路会長。

けれども、すぐに踵を返し、腕を引っ込める。

「なるほど。そういう風にしておくよ」

露合長は悔しそうな、嬉しそうな顔をして、保健室を出て行った。

「

暫り緊張を解けない俺。

「危なかった……」

俺はベッドに倒れこんだ。

俺の吸血鬼としての力がバレばかっただけの理由がある。

この吸血鬼の力。

原作（魔法先生ネギまー）では持ち主が力を封じられている設定
なのだ。

学園結界と原作の力の制限、そして、「解禁」状態でしか使えない
といふ条件が重なって、何とか「吸血殺し」に耐えることができ
たのだ。

だけビ。

「あー、血が足りない……」

吸血鬼としての欲望が渦巻いていた。

時刻は午後1時55分。

食料調達戦争終了まで後五分。

保健室での一件の後、吸血衝動が治まるまで保健室で休むことにした俺は、結局、食料調達戦争に出ることほとんどなかつた。もちろん、勝敗がどうなつたのかも知らない。

「ん？ 出ていくん？」

休看先生^{やすみ}が、立ち上がった俺に声を掛けた。

「はい。体の痺れも取れましたので」

「ちえつ、治つちやつたか。まあ、ええで。次来たときにはちやんと薬飲んでな」

手をふりふりと振つて俺を見送る休看先生^{やすみ}。

「あー、そつそつ。この話知ってる？」

休看先生が「ひらりを向かずに言つた。

「一昨日の明朝に、女子寮に侵入者があつたらしいよ」

「へえー、そうですか」

「うん、そんでなー。その侵入者、一人組みやつたらしいんやけど、なんでか監視カメラに映つとらんかつたんよ。でもな、逃げる途中で見つかってな、片方が股の辺りに攻撃受けたんやつて。攻撃した子が言うに、絶対傷になつとるとか」

「 で？」

「ひからを振り返つた休看先生は、俺をじつと見つめる。

「股、見せてくれへん」

「お断りします」

田を鈍く光らせて請う休看先生に、俺は団長から預かった丸薬（休看先生が俺に飲まそとしたやつ）を投げ返して、保健室を出た。

七章 食料調達戦争 / 七話で、結局は……（後書き）

今章は「刀語」の第4話をモチーフにしています。
気づいてる人も多いですね？

現状報告？ & 次章予告（前書き）

『なぜなぜに』

Q 結局、落は山下を吸血鬼だと信じているのですか？

A それはおいおい分かります。

「あと、何故吸血鬼を欲したのかも。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギまー」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「サギタ
マギカ
マテリアルシールド」による防御

「瞬動術」による移動

備考 反政府組織「インフレックス」所属

路 当麻
ふき とうま

レベル 不明

世界観 「とある魔術の禁書目録」

雨 休み
あま やすみ

備考 「生徒会」派所属、大学部生徒会生徒会長

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明

備考 保健室の先生

次章予告

一度勝てたからといって、次も勝てる保障はない。

一度勝てたからといって、それが正しい結果である保証はない。

間違っているのは、大概は自分であるのだ。

次章、「後半戦」。

力敗れたとき、積み上げた物は価値を無くす。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

さて、やつと一也第一次女子寮攻略戦争の終わりが見えてきました。

八章 後半戦 / 一話 吸血鬼（前書き）

『なぜなぜに？』

Q この女子寮攻略戦争が終わつたら、話はどのよつな流れに進むのですか？ まだ学園生活も始まつていませんし、聖地を探す話もまだですし、建国の話においては、全然先が見えないのでですが。

A 今の話が終われば、次は部活紹介にいきたいと思つています。それが終われば、晴れて学園生活突入です！
つまりはまだまだまだ終わらないということだよ。話の構成はできているからそこは安心してね。

八章 後半戦 / 一話 吸血鬼

【午後2時40分・大学部生徒会室・ふき路視線】

「で、結局どうだったの?」

麗華れいかが「コーヒー牛乳を手に聞いてきた。

「どう、とは?」

「吸血鬼ボーイのことよ。当たりだつたの?」

数週間前、「生活区」で吸血騒ぎがあり、生徒会大学部にその解決依頼が来ていたのだ。

今回彼と接触した真の理由は、彼の吸血鬼としての「力」と被害にあつた方達に残された「力」を鑑定するためだつたのだが。

「それが、消えちゃつたんだよね」

「消えた?」

「うん。『吸血殺し』で『力』を無理やり引きずり出そうと思つたんだけど、何故か『力』が出てこなかつたんだよ。『吸血殺し』に關しては、『限定解除』の許可はとつてあつたから、不備はないはずなんだけど」

今回のために、「学園結界」の一部無効化、つまり保健室内での無効化処置を施していた。

「学園」内の「有力者」はその「力」において秘匿権利があり、直接調べるしかないからだ。

「ふーん。当麻じょうまでも無理なことつてあるのね。『神淨の討魔』（*とある魔術の禁書目録）なのに？」

「麗華」

「うう、分かつてるわよ。もう言わない

僕の声に麗華がびくっと肩を震わす。

「それで、どうするの、当麻？ 結果が出ないと上はつるやこんじゃない？」

「まあ、なんとかするよ」

【午後2時50分・女子寮作戦室・寿視線】

「先ほどの戦いの結果、我が軍の戦力は80パーセントダウンしました。しかし、相手側もかなりの損害を被った模様です。そういう点では五分五分でしょうが」

「やっぱ『カーテナ』『セカンド』使えたのは痛いなー。向こうの鎧は『力』に頼つてないし。それに緋麻里ひまりが動けないからなー」

「それは決して関係ありません。副会長はたとえ『力』が使えない
ても、副会長ですから。戦力としては申し分ないかと」

「そりやあーそりよーね。なんたつて、副会長は副会長なんだし」

- 1 -

この二人は高等部生徒会副会長に何の幻想を描いていっているのだ
ろう?

私は後ろで話している静江と草子を振り返った。

「いや、あの——人とも。私にどんなイメージを……」

正直、困る。過度な期待は。

私は、自分が決して無敵ではないことを知っている。

期待されてやつていけるのは、無敵の王者だけ。そつ、あい
つレベルでないと……

「二人とも、私は戦力外よ」

「またまたー、謙遜しちやつて。『力』無くたつて、腕つ節がある

じゃない」

「そうです、副会長の腕力は人の域を超えています」

「それって、私がゴリラ女ってこと?」

【午後2時55分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

吸血鬼としての「力」が最も發揮されるのはもちろん深夜。

だが、深夜は「力」が強くなりすぎるために逆に発見されやすい。

だから。

狙うは黄昏時。

それまで、ターゲットを選んでおく必要がある。

八章 後半戦 / 一話 吸血鬼（後書き）

今章で女子寮攻略戦争を終えます。

最初はキャラ紹介のつもりだったのに、そんなにキャラ出でないし、半年もやってるし、とほほほほ……

八章 後半戦 / 一話 一騎打ちへ（前書き）

なぜなぜに？

Q 前回「神淨の討魔」の名が出てきましたが、原作ではその真意は今だ明らかにされておりません。どのように使つつもりですか？

A 一応、作者独自の見解の元で使用しましたが、本編の話と関わりを持たせるのはだいぶ先になるとと思うので、そのときまでに原作での説明がなされるのを期待しています。もし間に合わなかつた場合は、独自の見解のもと使用します。

）戦闘能力以外の原作知識が必要になるのは、最後の辺りかな？

八章 後半戦 / 一話 一騎打ちへ

【午後3時03分・男子寮山下部屋内・山下視線】

郷馬曰く、昼の「食料調達戦争」において、俺達は戦力の80パーセントを失つたらしい。具体的に言つと、男子のほとんどが保健室送りになり、また、「有力者」は男女問わずその全員が枷を強いられた、といつことらしい（その詳しい経緯についてはまた後日）。

「女子寮攻略戦争」の決着方法は依然として変わらず、俺達は女子寮最深部を目指すらしいが、男女互いに兵力を大幅に失つた今、戦いは泥沼化していた。

数少ない男子の力では、女子が「力」で既に築き上げた防壁を突破することはできず、また、数少ない女子の力では、「機動鎧」で逃げる男子を捕らえることはできない。

「で、どうすんの？」

何故か俺の部屋に集まっている郷馬達に俺は聞いた（保健室を出て他の奴を探して歩いていたら、郷馬にここに連れてこられた）。

「奴らと一騎打ちでもするしかなかろう」

郷馬は然もありなん、といった顔で俺に答える。

「後は、平和的解決であるな」

【午後3時10分・女子寮作戦室・寿視線】

「会長、生徒会専用無線機より、通信です」

静江しずえがそう言って、一度私が投げ捨てたそれを私に渡した。

この状況で連絡してくるのは、大学部生徒会会長である路ふきの野郎か、もしくは……。

「まさか、まだ持つてたなんてね。郷馬」

【午後3時12分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

俺過あいかわりに感じた、何とも言えない魅惑的な匂いを感じる。

匂過ぎに感じた匂いはすぐに消えてしまったが、今度のは消えず
に漂い続けている。

だが、誘われる」となけれ。

おやぢへひれは罷やめ。

甘い、甘い、死への罷。

私は騙されない。私は惑わされない。

目的を達するのみ。

「ふうつ

獲物を探すために開放していた「力」を封じる。

まだ奴と対峙するわけにはいかない。

力が、血が、全然足りないのでから。

「 つけられては、いない」

周囲に田をやる。

ここは「生活区」。

真昼間から「有力者」のいるような所じゃない。

もし他の「有力者」が接近すれば、「力」が干渉を起こすはず。

今のところはその様子はない。

「ああ、それにしても

足を止める。

「お腹減った」

お腹を鳴らしながら空を仰いだ。

私自身は完全な吸血鬼ではない。

吸血鬼としての私は、あくまで、「力」の副産物としての存在なのだ。

それ故に、私は人であり、吸血鬼もある。

つまり何が言いたいのかといつと。

「おい、嬢ちゃん、大丈夫か？」

血をいくら飲んだところで、お腹は減るのだ。

ここ最近吸血活動に勤しむあまり、人間としての食料摂取を等閑にしていたわけで。

「何か、食べ物を……」

私は今、空腹で路上に倒れていた。

『ああ、その通りだ。場所はそこで。開始時刻は、そうだな。30分でいいだろ』

郷馬が無線機で寿と一騎打ちの話をつけたらしく、寿と無線で話しながら俺達に親指を上げた。

郷馬の提案と寿の妥協により、この「女子寮攻略戦争」（まともにやつてたのつて、最初の一時間だけ？）は最終局面を迎えることになりそうだ。

『いちら側から教職員にはその顔を伝えておく。もちろん、^{さとう}路会長にもだ』

郷馬が無線機に向かつて話しているのを聞きながら、俺は斎藤に質問する。

「郷馬つて、生徒会役員だったのか？」

「ええ、そうです。といつても、すぐここ辞めましたが

「何で？」

「さあ？ 分かりません。何かあつたんでしょう？」

八章 後半戦 / 一話 一騎打ちへ（後書き）

更新が遅れました。

話も飛び飛びですいません。

一応、この後一騎打ちをしてこの話は終わらせるつもりです。

八章 後半戦 / 三話 戰闘開始（前書き）

なぜなぜに？

Q 噂の吸血鬼さんは「吸血殺し」の力、つまりは「とある魔術の禁書目録」を知っているから「吸血殺し」に気づいたのですか？

A いいえ、違います。彼女は完全な吸血鬼ではないので、「吸血殺し」に誘われても残った半分の人間としての力で、理性を保つことができます。罷だと思ったのは唯の勘です。

／彼女がCPHなのか否かは、まだ秘密。

八章 後半戦 / 三話 戰闘開始

【午後3時30分・第3塔屋上競技場・やまじた山下視線】

気づいたら皆でここに集まっていた。それはもう、予め練習していたんじゃないからくらいスマーズに。

「さあか気になる」とはあるにはあるけど、今はどうでもいいので置いておく。

で、何でか知らないけど、この「女子竜攻略戦争」は五対五の殴り合い(?)で決着をつけることになっていた。

出場するのは、男子は郷馬、斎藤、神崎、清罷、俺の五人。全員「有力者」である。

女子の方は寿、静香、寒、華焰、近藤の五人。こちらも全員「有力者」らしい。

「有力者」以外でここにいるのは男女共に数名しかいない。

一体先の戦いで何があったのかは後日聞くことにする。

今日の戦いつて、もしかしてここにいる奴らの私情じゃないだろうな?

なんとなくそんなことを思つ。

それにも、無茶苦茶だな。

例の「枷」については、この戦いにおいて取り外されるらしい。

じゃあ僕のアレは何だったのか、と抗議したいところだが、開始早々リタイアした俺にはおそらく口を挟む権利はないだろう。

で、この競技場についてだが。

何でも、「学園」内で唯一「学園結界」を気にせず「力」を使える競技場らしい。

改めて思うが、この「学園」は戦闘という行為について日常会話と同レベルで捕らえているのではないだろうか？ 普通、こんな風に学生を戦わせたりしないはず。まあ、おそらくそれが「インフレックス」の強さ、強いては「トーキュー特区」の強さとなるのだろうが、今一現実味がないというか、納得がいかないというか。とにかく、「おかしい」と思う。

話を元に戻す。

現在俺は他の男子達と共に、競技場の西側の選手控え室にいる。女子は東側の控え室にいるらしい。

で、一回戦は俺と華焰かえんの戦い。

はつきつ言つて、一度手合わせしているので余裕だと自負している。

郷馬の声援を受けて、俺は競技場に上がる。

競技場は小型センターの屋上一杯一杯に造つてあるので、半径500メートルという巨大なものとなつてゐる。

移動用マットに乗つて、俺と華焰はそれぞれ競技場の中央に下りた。

武器の使用、「力」の使用に制限なし。

タイムアップなし。

ギブアップあり。

両者共に体に取り付けられた「逝かしません君」が発動した時点で敗北（着用者の体力が限界に近づくと発動し、治療のために保健室に強制的にワープされる。ここにいる人間は教師学生問わず皆これをつけている）。

華焰と対面する。

つい数時間前にコテンパンに倒したといふのに、華焰は笑みを浮かべている。

何か策もあるのか？ それとも……

ブザーが鳴り響いて、試合開始を告げた。

【午後3時30分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

今私は、人の温もりといつものを感じている。

「そんなにあわてて食べなくても、誰も取つたりしないよ」

どんぶりを搔きこむ私に、命の恩人、三木恭介みぎ きょうすけ君が笑いかけた。

ああ、なんとすばらしいものなのだろう。人情といつもの。

私達が人であるおかげで、今こうして食料を惠んでもらえる。

もし私達がただの獣であつたらならば、通りかかった三木君もうして助けてはくれなかつただらう。

これぞ人が人であるが所以。

「己を捨て、他者のために生きる、全生命体唯一の奉仕生物。

私は今、人に生まれたことを神に感謝する。

「いや、そこまでのことがじゃないと想つけど……」

思考を口にしていたのか、三木君が苦笑いを浮かべていた。

八章 後半戦 / 三話 戰闘開始（後書き）

何だから都合主義といつゝとすら生ぬるに超え都合主義的展開かも
しませんが、裏でいろいろとあつたんです。

次回からは戦闘に移ります。

八章 後半戦 / 四話 一回戦 「魔法先生ネギま！」VS 「灼眼のシャナ」

なぜなぜに？

Q 「逝かしません君」の発動基準の明確な情報がほしいです。

A 蘇生系の「力」を解析して作られた物なので、説明できません
(笑)

「ごめんね。本当はそこまで考えてなかつたんだよ。いつか作
るからそれで勘弁(泣)。

八章 後半戦 / 四話 一回戦 「魔法先生ネギま！」VS「灼眼のシャナ」

【午後3時31分・第3塔屋上競技場・山下視線】やました

華焰かえんとの距離は約5メートル。

この配置は近距離戦闘が圧倒的に有利。

確かに、俺の「力」には近距離戦闘を行うだけの力はある。

だが、近距離戦闘は何かと危険が付きまとつ。

この華焰の余裕。恐らく何があると踏んで間違いないだろう。

前回俺は近距離で戦つた。それに対して対抗策を用意してきたとなると……

「『瞬動』」

戦闘開始と同時に、それまで足に溜めていた「力」を解放する。「力」の解放と同時に「魔力」が満ちる。

瞬。

「贊殿遮那」を構えた華焰の姿が遠くなる。

十数回「瞬動」を繰り返して、後方に500メートルほど離れた。

その様子を見て、華焰は何かを確信したような強者の笑みを浮か

べる。

真意が分からぬ。いつそのこと「いどん絵につき」でも使つてみるか？だが、それが狙いだつたら面倒だし……。

「カニアント・スピリトゥ・スター・アーレス。
『來たれ、雷精、風の精！』

直線的に放出される、雷と風の融合呪文を詠唱する。

「レベル」の差がかけ離れているのは先の戦いで確認すみ。なら、有無を言わせぬ力技で押し切つてしまえばいい。

「クム・フルグラティオナリゼイ・
『雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐！』」

華焰は動く気配はない。

唯じつと、こつちを見ているだけ。

呪文詠唱が終わつたところで、華焰が炎の翼を作り出した。

こちらの威力に気づいて回避にでたか。

「もう遅い！　『^{ヒュイステンペスター・フルグリエンス}雷の暴風』（＊魔法先生ネギま！）！」

強力な旋風を発生させ俺の周囲を覆つ。竜巻の要領で中心の推進力を上げ、その中央を強力な雷が一気に駆け抜ける。一般的な決め技の雷と風バージョン。「雷の暴風」。

その力は直線的に放出されるが、初見の場合、最初に発生した旋

風のため、広域呪文と勘違いし、対処を誤ることとなる。

かくして華焰は。

予め決めていたように、直線状に放出された雷だけを華麗に避けた。

華焰は雷の周囲を回るように避け、そのままこちらへと接近する。

「くつ……」

「雷の暴風」をもののかわらけたことに驚くが、「瞬動」で後方に移動しながら、次の詠唱へと即座に移る。

「光の精靈199柱、集い来たりて敵を射て」

華焰の目的は接敵。

なら、こちらの攻撃に対しても耐えるのではなくかわしていくはず。

「ものみな焼きぬくす淨化の炎」
オムネ・フランマーンス フランマ
ブルガートウス

華焰が残り100メートルにまで近づいた。

「『魔法の射手、光の199本』！」

199本の光の矢をあらゆる方向から華焰に発射する。

予想通り華麗に旋回する華焰。

見ると、「贊殿遮那」には何やら炎が取り巻いているが、防御に使つ気配は一切ない。

「アミネー・エクステイング・キドオシガヌヌタネラーニスイン・メダマー・エンドリード・カタシト
破壊の主にして再生の徵よ、わが手に宿りて敵を喰らえ！」

光の矢をかわして油断しているであろう華焰が十分近づいたところで、広域呪文である回避不能な爆炎を放つ。

「『フラグラルモガマス
紅き焰』（＊魔法先生ネギま！）－」

少々詠唱が長いが、威力は申し分ない一撃。

案の定、華焰は回避を諦め、「贊殿遮那」で相殺した模様。

だが、ここで「レベル」の差が顕著に現れる。

おそらく華焰が溜めていた一撃は彼女の中でも大きいやつだったのだろう。だがそれは俺の中の中程度の一撃と同等の威力。疲労度も違う。そして何より、消費した「力」の、個人の総合絶対量に対する割合が違う。

「『解禁』、『アゲアツト』、『ヒ首・十六串呪』－」

16首全部使つて華焰を16方向から襲わせる。

「くつ……」

華焰は守りの要であると思われる炎の翼を広げるだひつ。

そうすることで翼の局部の鍛度が落ちる。

「『解禁』、『虎砲』（＊魔法先生ネギま！）！」

「虎砲」と叫ぶ声と共に、口から高密度エネルギーを放出する。本来はエネルギー波であるそれを、口の形を調整することにより、一転集中型へと変更させた一撃。

詠唱不要の不意打ち砲。

密度の落ちた華焰の守りを突き破る一撃。

のはずだったが。

「どうやら」の勝負、私の勝ちだな」

「虎砲」を旋回して避けた華焰が告げた。

「んなつ……」

華焰の体にはいくつもの傷がある。

おそらく「ヒ首・十六串呪」の攻撃を防ぎもせず、避けもしづに突っ込んできたのだらう。

だがそれは、じつらがその後に放つ一撃を予想していないと出来ない芸当。

なぜなら、あの段階で高「レベル」である俺が「ヒ首・十六串呪」つまり武器を使うところと、技による攻撃が不可能だと証明することになるからだ。武器は技とは違い、「レベル」によって威力

を変化させない。だから、俺の「ヒ首・十六弾頭」は逃げの手でと捉えられるはずなのだ。

それとも、それすら見越していたといつか？

「ひげ、『風……』

セイは闇。

永き時により静止した世界。

唯あるのは。

光のない紅蓮の炎。

「もひつた！」

「贊殿遮那」の一撃をもろに貰つ。

「ひげ……

常時展開しているはずの障壁も、やつき展開しようとした障壁も、俺の全ての「力」が静止した。

だが、そんなことより何よつ。

頭が痛い。

先の一太刀のせいではない。

その前に頭に流れ込んできたイメージ。

あの、静かな紅蓮の炎。

意識を戦闘に戻そうとするが、あの炎のイメージがこびり付いて離れない。

落下していく中で、華焰の声が聞こえる。

「確かに憎編、貴様の『力』は純粋に強い。それは認める。だが、『有力者』としてはあまりにも稚拙過ぎるな」

地面に落ちる寸前、試合終了のブザーがなり、俺の「逝かしません君」が発動した。

八章 後半戦 / 四話 一回戦 「魔法先生ネギまー」 VS 「灼眼のシャナ」

今回は戦いの途中で次話に持ち越し、などという野暮な真似は回避しました。

本当は何故山下が敗れたのか、華焰から説明してもらひつもりだつたのですが、そんなことする間もなく、華焰が山下を倒してしまいました。

よっぽど泣んでたんですね？（笑）

八章 後半戦 / 五話 一回戦 「黒神」VS「喰靈」（前書き）

なぜなぜに？

Q 前話での勝敗の要因がよく分からぬのですが。

A 今話で分かります。

／もしかしたら、御津見の力も分かるかも？

八章 後半戦 / 五話 一回戦 「黒神」VS「喰靈」

【午後3時45分・第3塔屋上競技場・寒視線】

第一試合、私の相手は神崎拳君。
かんざきけん

正直、私は彼の「世界観」を見たことがない。

彼が訓練で使うのは、主に「方陣障壁」という盾と、「超新星儀」
（＊黒神）という指輪型の射撃武器だけだ。構えから近接戦闘でも
齧っているようだが、実際に使用したところを見たことがない。

「方陣障壁」で攻撃に耐え、「超新星儀」で遠距離から攻撃する。
接近してきた敵は「方陣障壁」でバリアを複数発生させて、敵を四
方向から挟み込んで肉迫。その間に距離をとり、再び「超新星儀」
による遠距離攻撃。これが彼の攻撃パターン。

もしかしたら「有力者」じゃないのかもとも思つたが、「世界観」
の干渉の際を見る限り、彼にも彼自身の「世界観」が構築されてい
ることは分かつていて。

そのとき覗えたのは。

自分と同じ顔を持つ同一の存在。

おそらく、それが彼の「世界観」の根源。

それが何を意味するのかは分からないが……。

試合開始のブザーが鳴った。

彼が指に「超新星儀」を填めた右手の人差し指を私に向けるのを確認しながら、私は自分の「世界観」を描いた。

その力は己を喰らい。

その身は慟哭を纏い。

愛する者に手を下す。

「『喰靈解放』（＊喰靈）」

印を組み、靈獸「白叡」（＊喰靈）を呼び出す。

「ぐぐがうぐぐがうがうが……」

白い毛並みで狗の頭に龍のよつた長い首を持ち、私をはるかに凌駕する大きさを持つ靈獸「白叡」。その身体の至る所が鎖で巻かれ、その鎖は全て私の下へと繋がっている。

「はあああああー！」

十分な距離を得るために後退しながら、神崎君が「超新星儀」で無数のエネルギー弾を放出し始めた。

「『白叢』…」

鎖を引き、「白叢」を従わせる。

「ぐが「ひべひつぶがうが……」

「白叢」はその巨体を神崎に向けた。

「白叢」は確かに大きいが、一体だけでは無数に飛来するエネルギー弾を防ぐことはできない。

だから。

「突っ込みなさい」、「白叢」…」

「ぐぐぐあ「ひが「つぐあがうが「つ…」

接近させて、神崎君のエネルギー弾の攻撃範囲を狭める。

漏れたエネルギー弾は、余裕のある鎖を使って弾いた。

神崎君との距離はすぐに縮まり、「白叢」はその巨体で突撃する。

「『方陣障壁』…」

神崎君が四枚の「方陣障壁」を重ねて、「白叢」の前に展開した。

「ぐが「ひべが「ひ…」…」

「白叢」の動きが止まる。

だが、それも一瞬のこと。

「学園」内有数の強度を誇る神崎君の「方陣障壁」を突き破り、「白叢」は神崎君に突撃した。

「ぐふつ……」

肺の中の空気を吐いて、吹き飛ぶ神崎君。

「白叢」が神崎君に襲い掛かる前に、「逝かせません君」が発動して神崎は戦闘を脱出した。

「 ふつ……」

呆気ない決着。

だが、それも仕方がない」と。

私の「レベル」自体はそこまで高くない。

だが、私が「力」を持つて呼び出す「白叢」は別格だった。

「有力者」が「力」を用いて呼び出す武器、生物等の力は、「レベル」に左右されることなく一定である。故に、私の「白叢」は私の「レベル」を遥かに超えた力を有しているのだ。

もちろん、低「レベル」の私には「白叢」を制御下に置くことができとはいひ（）。だが、それであっても十分戦力となるのだ。

そして、私達「有力者」は戦つ際にそれぞれ独自の「世界観」を構築する。

独自の解釈を持つて構築した「世界観」を展開することによって、「有力者」は「力」を使用することができるのだ。

故に、異なる複数の「世界観」が同時に展開された場合、干渉が起ころ。

相手の「世界観」の「解釈」が自分のものと相容れない場合、より「解釈」の強い方が相手の「世界観」を飲み込むこととなる。逆に互いに許容できるもの同士なら「力」の鍛度は相乗効果で跳ね上がる。

つまり何を言いたいのかといふと、何故だか知らないけれど「世界観」を開けできない（しない？）神崎君には、私の「白黙」を止める術はないということ。

ふと、香奈^{かな}が言つていたことを思い出した。

『あの憎編、いや、編入生はおそらく『世界観』の『干渉』に関して素人だと思う。だから、『力』の使用技術で負けることはない』

確かに、一回戦は香奈の圧勝だったわね。

ん？ だとしたら近藤さんは大丈夫かしら？

八章 後半戦 / 五話 一回戦 「黒神」VS「喰靈」（後書き）

「世界観」の設定が少し顔を出しました。

「世界観」の設定は最終的に物語の中心になつてきます。

『なぜなぜに？』

Q 「世界観」を構築して初めて「力」を使うのなら、山下達は何故「力」を使ったのですか？ 又、「有力者」は「世界観」を構築していない間は普通の人と同じなのですか？

A 「世界観」の構築は、常に無意識で行っています。但し、意図的にそれを行うことで、より「力」を純粋なものにすることで強力にし、相手の「世界観」への影響力を増すことができます。山下が今まで「世界観」の構築による干渉で「力」を使えなくなつたことがなかつたのは、相手に「世界観」を構築する時間的余裕がなかつたからです。又、「有力者」は通常時でも「有力者」で、その場合は「補正効果」を受けています。

（「補正効果」については「世界観一覧」を見てね。）

八章 後半戦 / 五話 二回戦 「ゼロの使い魔」VS「シーキューブ」

【午後4時00分・第3塔屋上競技場・齊藤視線】

ここで僕が負ければ、僕達は負けが決定する。

それだけはなんとしてでもさけないといけない。

そして、最後の砦である郷馬君に引き継ぐために、次の清閑君にも勝つてもら……

うん、無理だね。

清閑君には悪いけど、彼が他の「有力者」に勝てる事はないと思う。

となると、ここでいくら自分が奮闘したところで無意味な気もするけど、だからといって仕掛けた側が最後まで全力で戦わないなんていうのは、僕の意思に反する。

だから。

「『八番機構・碎式円環態《フランク王国の車輪刑》』！」

手に持つルービックキューブを巨大な車輪に変形させてこじらに向かってくる近藤さんには申し訳ないけど。

「ひとつ

本来掴める筈のない巨大車輪を器用に掴み、車輪の後から現れた近藤さんが振り下ろした剣を人差し指と中指で止める。

「えつ……」

近藤さんは驚くも、すぐにその剣から手を離し、離したその手から闇を噴出してきた。

だけど、それすらも僕にとつては驚きではなく、使い慣れた武器のように難なく闇の支配権を奪いつ。

そして、あくまで常人のその速さで近藤さんの背後に回り、両手を拘束する。

「つな……」

掴まれた瞬間、驚きを浮かべる近藤さん。

その瞬間から、彼女の攻撃は一切止み、大車輪も元のルービックキューブに戻る。

「僕の勝ちでいいよね？」

戸惑う近藤さんに僕はそう問うた。

近藤さんはまだ手を多く残しているはずなのに、反撃をしない。

否。

反撃ができない。

どれほど「力」を使おうとも。

その「力」が「世界観」を通して構築される瞬間から、その支配権は現在僕のものとなっていく。

別におかしなことではない。

勝負は、始まる前から決していたのだから。

「世界観」そのものが道具に依存し、攻撃手段が常に似武器の延長と思われる彼女と。

「神の左手・ガンダールヴ」（*ゼロの使い魔）の証のルーンが刻まれた左手を持ち、あらゆる武器や兵器を自在に操る能力を持つ僕。

レベルを無視した、圧倒的な相性。

それが彼女が負けた原因。

そして、僕は予め彼女についての情報を持つていたこと。

それが僕が勝った原因。

試合終了のブザーが鳴るのを聞きながら、僕は近藤さんの腕を放した。

その途端、僕の右足の親指にありえないほどの重みが掛かったのは何故だろうか。

近藤さんまじめに顔を向けずに去つて行った。

短いです。はい。

八章 後半戦 / 六話 四回戦 「おおかみかぐし」VS「神様ドオルズ」

『なぜなぜに?』

Q 「ゼロの使い魔」の力を持つ齊藤は魔法は使えないのですか?

A 基本は「伝説の使い魔」の力です。
「もちろん強くなれば使えるよ。」「虚無」とかの方が割と早い
よ。

八章 後半戦 / 六話 四回戦 「おおかみかくし」VS「神様ドオルズ」

【午後4時15分・第3塔屋上競技場・清閑視線】

はつきり言おう。

僕が勝てるはずがない。

だけど、僕が負ければその時点で男子の負けが決定する。

だから戦うのだけだ。

「『玖吼理』（＊神様ドオルズ）！」

試合開始と同時に、静香さん^{しづか}が相棒の名を呼ぶ。

「玖吼理」。

それはでっかいコケシのような巨大人形で、静香さんの、たぶん唯一無二の武器。他にもいるのか知らないけど。

頭部からツインテールのように腕が生えていて、右腕のナイフで攻撃してくる。ぶつちやけ、本体で突進してくる。

だから、僕にできるのは、その突進を避けて自滅しても「うー」とだけ。

僕の唯一の武器である「モンスター・ボール」を複数取り出し、向かってくる「玖吼理」に向かって投げつけた。

「それつ

刺激臭を含む煙幕が周囲を覆い、僕の姿を隠す。

その間に、僕は一応、走って自分の位置を変える。

だけじ。

煙が晴れて正面に現れるのは、何故か僕の位置を把握している「玖吼理」で、もちろんそのまま吹き飛ばされるのは僕。

そして気まずそう顔をしている静香さん。

どうして僕の位置がバレたのか？

そして、どうして静香さんが気まずそうなのか？

分かりきつてはいるが、それでも自分の不運に飽き飽きする。

他の「有力者」曰く、僕がどこに隠れようが、逃げようが、なんとなく分かるらしい。

なんだよ、なんとなくって。

これが熟練の「有力者」ならまだしも、今までまともに「力」を使つたことのない幼稚園児の「有力者」ですらそう答えるのだ。

まあ、それでも僕は「有力者」だから。

突つ込んでくる「玖吼理」の突進を横に転がつて回避。これは僕の位置がどうせばれるだろうと踏んでいたが故に成功したわけだが。

勢い余つて行き過ぎた「玖吼理」が僕の方へ戻つてくる前に。

「の世界に不思議などなく。

」の世界に神秘などなく。

」の世界に動く巨大コケシなどいない。

「うぐ……」

静香さんの「世界観」を否定するように「世界観」を「力」で描く。

僕の「世界観」を引き出すのではなく、あくまで、静香さんの「世界観」が相容れないものだということを強調して。

途端に静香さんが頭を抑え、自身の「世界観」の安定のために「力」を使い始める。

だが、その間彼女の注意は薄れる。

僕も「世界観」を開いてはいるが、彼女と違い僕は「世界観」を用いて攻撃するわけではないから、綿密な「世界観」を描く必要

はない。あくまで、静香さんと全く異なるところだけを意識すればいいのだ。

だからその間に彼女のと距離を詰め、肉弾戦で決着を。

着けれるはずもなく。

多少制御を失いながらも一いちらに向かつて来た「玖凪理」が僕の周りで無茶苦茶に飛び回り、それが当たつて吹き飛ばされた。

八章 後半戦 / 六話 四回戦 「おおかみかくし」 VS 「神様ドオルズ」

次でやつとこの戦いを終われるかも。

もう決着は付いてますが……。

『なぜなぜに?』

Q 清農は何故「おおかみかくし」の「力」が使えないのですか?
少なくとも、狼の力ぐらいは使えそつだと思うのですが?

A 「レベル」が低いのもその理由の一つですが、一番の理由は、「おおかみかくし」の主人公だった一般人君の「力」が主な「力」だからです。
「蜜」だけは常に発動しているみたいだけどね。詳しくは「世界観一覧」か、「技一覧」へGO!

【午後4時30分・第3塔屋上競技場・寿視線】

すでにこの茶番は終了している。

結局、これだけの騒ぎを起こしておいて、本命の方はあの憎き大学部生徒会長によつて防がれてしまった。

やつぱり、もつと大きな騒ぎを起しそうだったか？　いや、やついたら危険視されて消される可能性も……

とにかく、一度作戦を考え直す必要があることは確かであるので、私は郷馬にそのことを伝えなくてはならない。

接近してきた郷馬の額に手当てて、電気情報に変換したメッセージを郷馬の脳内に直接送り込む。

テレパシーとかでもいいのだが、途中で傍受されるのを防ぐためにこの方法を探るのだ。

瞬時に状況を把握した郷馬は、私から離れて構える。

それを見た私も構えた。

そもそもこの乱騒ぎは、私達が業と起したものだつた。

騒ぎに乘じて、「学園結界」を無効化し、その隙に草子の「力」で「学園」のサーバーに侵入するつもりだつたのだ。そのための香か

奈の「封絶」、目的カモフラージュのための「カーテナ＝セカンド」。

他にもいろいろ計画はあつたが、全ておじやんになってしまった。

あの大学部生徒会長は、私達のことと上には伝えていないらしいが、だからといって下手な真似はできない。暫らくは静かにしていなくてはならない。

あの二人のことも気になるけど……

編入してきた「有力者」一人の方に暫らくは関わろうと思つ。

高位の「有力者」でありながら、「力」の制御がまったくできていなかつた辺り、興味深い。

なんにせよ、現在私にできる「ことは」の騒ぎをやつせと終わらしてしまつことだけ。

もうこれ以上続ける必要はないから（事実、決着もついている）。

電流を迸らせながら、私は郷馬に電撃を放つた。

【午後4時44分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

「くつ……」

右腕を押さえながら、走る。

確かに私を捕らえるための動きがあるということは聞いていた。

それもそうだ。

度重なる吸血行為。田もつけられない方がおかしい。

だけど。

「いくらなんでも早すぎる……」

「ちいちもプロ。

痕跡を残すような真似はしていない。

つまりは。

「これが、『学園』の力……」

いや、「トーキュー特区」の力とでも言つべきか。

数多くの「有力者」を抱え込む「ジャポンアカデミー」のもう一つの顔。

「復古の乱」以降、表向きは「有力者」の安全と「力」の制御向上のため、裏は「有力者」の独占と脅威の排除のため、「有力者」を世界各地から集めてきた組織。

一種の独立国家と見られているが、上層部は「ジャポン」との繋がりが深く、実質「ジャポン」である。

「君は知らないようだから教えてあげると、君の存在は侵入したときから分かつてたんだ」

私を捕らえるための刺客が、声を掛ける。

だが、そんなものに構っている暇はない。

私の命はもう無理だが、先ほど世話になつた少年にまで被害が及ぶことがないよう、少年のいた場所とは正反対の方向へ少しでも移動する。

「泳がしてれば仲間が出てくるかな、と思つてたけど、少々おいたが過ぎたね。まあ、実質君自身も純粹な『有力者』じゃないみたいだし、完全に捨て駒だったようだけど。うん、まあ、あれだ」

刺客が「力」を纏う。

「その幻想を抱いて死ぬんだね」

かつて私吸血鬼へと変えられたときの傷跡、吸血の後に触れられ、「力」が抜けた。

元の肉体へと戻った私は、夢が覚めて現実へと墮とされる。

私が唯一持つた感情を奪われ、虚となつた私にはもうどうでもいいことだが。

「 なんて、甘い死に方させないよ。所詮君は作り物なんだから、
感情なんていらないでしょ。検体番号199324号」

八章 後半戦 / 七話 五回戦 「X-MEN」VS「ある科学の超電磁砲」

検体番号の桁数がおかしいって？

これでいいんです。

八章 後半戦 / 八話 ハキシビジョンマッチ 「とある魔術の禁書目録」

なぜなぜに？

Q 郷馬と寿が裏で繋がっていたということは、寿、ひいては生徒会は「バッファローズ」の一員なのですか？

A 違います。「バッファローズ」の一員であるのは郷馬だけです。郷馬が生徒会を辞めた理由と関係していたり、してなかつたり。

【午後4時48分・「生活区」・^{ふき}路視線】

目の前の倒れた少女の体を担ぎ上げ、「学園」に戻る準備をする。それにしても、検体番号が20万近いということは、少なくとも50万くらいは覚悟した方がいいのかもしれないね。

「欠陥電氣」(*とある科学の超電磁砲)。

ことぶきまり
寿緋麻里がまだ「トーキュー」に来る以前、何者かに採取された

DNAマップから創られたクローン達の総称である。

「高位の『有力者』は量産可能か?」という命題に基づき始まつた、かつて「トーキュー」が行っていた「量産型有力者計画」を元に外部組織が始めた「有力者」のクローン製作の成果が、「欠陥電氣」である。

すでに「トーキュー」ではクローンでは「有力者」を作ることは不可能と判明し、計画は永久凍結となっている。

そもそも計画は当初から失敗を予想されていた。「有力者」の「力」とは想像力が源であり、クローンがオリジナルと同じ想像力を持つことはありえないからだ。

そのため事が大きくなる前に計画は凍結し、その存在は闇に葬り去られたはずだったのだが。

「復古の乱」の騒ぎの中で情報が漏れ、それを手にしたある組織が寿緋麻里のDNAマップを入手、計画に着手したと思われている。

そして彼らは、どうやったかは謎だが、「有力者」のクローン生成に成功した。

しかし、オリジナル程の「力」を得ることはできなかつたようで、レベルは10にも満たないと分かつている。

「……」

肩の上で、「欠陥電気」の少女が寝息を立てている。

これから彼女は「インフレックス」の研究所に運ばれ、体の隅から隅まで弄くされることになるだろ？

でも、もう「力」は使えないみたいだし、それも無意味に終わるかな。

「欠陥電気」の少女に与えられていた、吸血鬼としての「力」を「幻想殺し」で破壊してからは、彼女から「力」を感じなくなつた。これまでに捕らえた「欠陥電気」の少女達も、同様に吸血鬼としての「力」を保持していたようだが、捕らえると同時にその「力」を失つっていた。

そして結局、あの少年達については何も分からなかつた。

つい最近、「学園」に編入してきた一人の「有力者」。

「学園」侵入時に裏で糸を引いている者がいることは分かっているのだが、どうも精神系の「力」を使つたらしく、候補が有り過ぎているのが現状だ。

「バッファローズ」の手の者と考えられるけど、証拠は少ないし。

「欠陥電気」の少女の頭を覗いてみても、分かつたのは彼女の検体番号が199324ということだけ。どうやら完全に頭の中を弄くつてあるらしく、それ以外は何も読めない。

下手に事を大きくしても、寿に感ずかれるのは面倒だし……。

寿は自身のクローンの事は知らない。

知つていたら今のような方法ではなく、もつと積極的に「学園」を探ろうとしているだろう。

さつきは何でも分かつてゐたく言つたけど、実際のところほとんど嘘だし……。

「欠陥電気」の少女を見つけたのは偶々だ。

まあ確かに、上は最初から知つていたと思われるのと、強ち嘘といつわけでもないんだが。

「やつぱ様子見かな?」

僕は思考の海に浸かりながら呟いた。

八章 後半戦 / 八話 ハキシビジョンマッチ 「とある魔術の禁書目録」

「とある魔術の禁書目録」の「量産型能力者計画」が登場です。

「」につづいて、「世界観」の事件? が出てくることがあります。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

なぜなぜに？

Q 「欠陥電気」の「世界觀」は「とある科学の超電磁砲」、というのですが、「、」ところとは「とある科学の超電磁砲」とは違つ部分があるということですか？

A その通りです。

～その最たる例として、「解禁」が使えないってのがあるね。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

一回戦 山下VS華焰

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「マギカルシールド」

「魔法障壁」による防御
「マテリアルシールド」

「瞬動術」による移動
「サギタ」

華焰 香奈
かえん かな

レベル 22

世界観 「灼眼のシャナ」

得意技 「贊殿遮那」による一斬
「サジマツヅナ」

二回戦 神崎VS寒

神崎
かんざき
拳
けん

レベル 28

世界観 「黒神」

得意技 「方陣障壁」
「ヘキサ・ウォール」による防御

寒
かん
籐子
とうこ

レベル 13

世界観 「喰靈」

得意技 「白蠹」の使役による攻撃

斎藤一樹
さいとう
かずき

二回戦 斎藤VS近藤

レベル 28

世界観 「ゼロの使い魔」

得意技 「神の左手・ガンダールヴ」による武器の精密操作による戦略的攻撃

近藤 美紀
じんどう みき

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

四回戦 清賀VS静香

清賀 聖也
きよわな せいや

レベル 20

世界観 「おおかみかぐし」

得意技 「モンスターボール」の投擲による間合いの調整

静香 しずか
静江 しづえ

レベル 29

世界観 「神様ドオルズ」

得意技 「吼吼理」の使役による攻撃

五回戦 郷馬 VS 寿

郷馬 健

レベル 不明

世界観 「X - MEN」

得意技 手の甲から生み出すブレードによる攻撃

驚異的な回復力

寿 紺麻里

レベル 不明

世界観 「とある科学の超電磁砲」

得意技 「超電磁砲」による攻撃

エキシビジョンマッチ

落户 VS 檢体番号199324号

落户 ふき
当麻 とうま

レベル 不明

世界観 「とある魔術の禁書目録」

得意技 不明

検体番号199324号

レベル 5

世界観 「とある科学の超電磁砲」

得意技 不明

次章予告

日常があるから、その逸脱の形として非日常があり。

非日常があるから、その基盤としての日常を認識する。

故に、日常のない非日常は存在し得ない。

次章、「山下な日々」

日常が日常とは限らない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

これで、やつやく「編入編」（上から読んでも下から読んでも、漢字で書けば編入編……なんぢやつて）が終了です。

長かった。

本当に長かった。

まさかこれだけに一年かかるとは思つてもこませんでした。

おまつこにも更新速度と進行速度が遅く、その上で話の内容も薄いといつこの辺、諦めずにこじらめで読んで下さり、ありがとうございます。

とこりゃね。

これからもゆづくまつたり続けていくので（別にほのぼのライフを描くわけではありませんよ）、今後とも、なにか、ゆづくお願いします。

九章 山下な日々 / 一話 やつと女子寮攻略戦争が終わりました（前書き）

なぜなぜに？

Q 「現地点での各キャラの状態」に「欠陥電氣」の検体番号「199324号」がいましたが、今後も出てくるのでしょうか？

A 分かりません。

「インフレックス」が彼女をどう扱つかによります。
意見があれば再登場するかも？

九章 山下な日々／一話 やつと女子寮攻略戦争が終わりました

「パーソナル・リアリティ」における一般的なレベルは、最大レベル100に対し、20代とされている。

そのため、高レベルとは通常、レベル40以上を指す。

そして、高レベル保持者の証として、レベル40になつた段階でプレイヤーは「解禁」を与えられる。

つまり、何が言いたいのかといつと。

44とこいつレベルは伊達や醉狂で取れるものではないのだ。

そのことが俺にとっての支えだつたし、何より、そのために費やした時間は他ならぬ自分が知つていてる。

このレベルこそが、今の俺を外界と繋ぐツール。

このレベルこそが、あの事に唯一意味を持たせることのできる結果。

だというのに。

負けた。

たかだか20代のそこらへんの女子に負けた。

確かに、ここは「パーソナル・リアリティ」の世界で、俺のやつ

ていた「パーソナル・リアリティ」とは違つ。

「力」とか「世界觀」とか知らない設定があるよつだし、ゲームと生身では違うところは世の常識。

それでも。

高レベルというのは、それすらも覆す絶対的な力の象徴だったのだ。

それが俺の存在する証拠であり、俺という存在の許容の形だったといつこの。

こんな風に負けるなんて。

それならまるで。

あれは。

あいつは。

俺は。

……。

「なんて、鬱モード終了」

布団から起き上がりつて、うんつと伸びをする。

「でもまづいかもな。いつも何度もなつてると、そのうち戻れ

なくなるかも」

幸い、薬はまだ効いているはずだから、大事には至らないと思つが……

思考を放棄する。

「まあ、大丈夫だろ。もうガキじゃないんだ ぐうえ……」

腰掛けっていた扉が内側に強引に開かれ、吹き飛ばされた。

「あら。田を見ましたの？ あのまま意識がない方が私も楽だつたのに」

田の前には冷えた田で俺を見下ろす監視役が一人。

「まあ、いいわ。とりあえず、服を着ることね

そう言つて、彼女、御津見みつは自分の部屋に戻つた。

下着姿で布団の上に倒れている俺を残して。

女子寮攻略戦争（戦争なのか？）から数日が経ち、俺はようやく「学園」での生活を送り始めていた。

よく考えれば、「パーソナル・リアリティ」の中に着てからまと

もな日常を送つていなかつたし、それは「学園」に着てからもやつ
だつた。

やつぱり日常は大切だ。

異世界トリップといえばやはり、非日常な日常。

それこそが異世界トリップの魅力だと俺は思つてゐる。
ので。

今日は俺の一 日を紹介しようつと頑つ。

九章 山下な日々 / 一話 やつと女子寮攻略戦争が終わりました（後書き）

といふことで、今章は我らが主人公、山下宏治君の一日にカメラを当ててみました。

九章 山下な日々 / 一話 起床から朝食まで（前書き）

なぜなぜに？

Q 、異世界トリップ、と言つていましたが、違いますよね？

A はい、違います。山下が勝手にそう思つてゐるだけです。
～これからどんどんそういう思い込むよ。

九章 山下な日々／一話 起床から朝食まで

俺こと、山下宏治の朝は別に早くない。

起床時間は午前6時。

本当ならもつと寝ていられるのだが、隣の監視役が俺の部屋に来るので、それまでに片付けておかなければならぬからこの時間である。

監視役こと御津見みつみが俺の部屋に顔を出すのは、6時30分ごろ。

それまでに、布団を片付けて（汗臭いと言われた）、着替えて（女の御津見が着替えてきているのに、男の俺が着替えていないのはどうかと思った）、歯を磨き（寝ている間に菌が増殖し、臭いが酷くなるらしい）、寝癖を直し（Hチケットだと思つ）、女に見せるわけにはいかない男の秘蔵を隠し（今は持つていないが、そのうちそうなると予測）、埃等のゴミの掃除を済ませる（事前に注文された）。

起床から30分後、俺と御津見の部屋を繋ぐ緊急避難口を開けて、御津見が現れる。

「 今日も生きるようね。ついでに、おはよう」

先日の女子寮攻略戦争の後半戦の一騎打ちでの敗北後の鬱状態後、御津見は毎朝これを口癖としている。その度に心の傷が疼く。

でも、挨拶は絶対してくれるんだよな。

いつものように俺の部屋を見渡して、生活チェック（？）をする

御津見。

それが終わったのか、御津見は俺の方を向いて口を開いた。

「今日はサンディッチをお願い。具は任せるわ。但し、気に入らなければ作り直させるから」

女子寮攻略戦争において決められていた勝利者への景品。

男子は女子との寮施設交換、女子は各部屋にメイド・執事（希望の方）配属。

で、先の戦いは女子が勝ったため、高等部一年生の女子は全員メイド・執事を手に入る権利を得た。

だが、突如如何百人も人を雇うわけにはいかない。

そこで学園長は（おそらく最初からそのつもりだったのだろうが）先の戦いで敗北した高等部一年生の男子の中からメイド・執事を敗北のペナルティーとして選ばれることとなつた。その際、相手を指名できるが、期限は一週間、という条件の下で。

もちろん、気に入る相手がない場合は、選ばなくていい。その

代わり、景品は何もないらしいが（女子はもともとの戦い（？）にそこまで興味があつたわけではないらしい、これといった反発もなく受け入れられたらしい）。

そして、一部の男子が女子に指名されて（清閑きよわなとか結構人気がある）、現在執事の真似事をやらされている（実際は体のいいお手伝い、というか舍弟？）。

つまり、何が言いたいのかと言つと。

俺は御津見に指名されたのだ。

……。

いやいや、別に期待してるとかありませんよ。

フラグが建つた！とか喜んだりしてませんよ。

御津見は俺の監視役。俺が他の誰かに指名された場合、監視がし辛くなる。

かといって事情を話すわけにもいかない。俺の存在（こいつらとちょっと大袈裟感が否めない）は秘密であるから。

そこまで気にして監視するなら、一緒に二人で暮らしたり、そんな夢（別に御津見と一緒にいいという訳ではないが）のような生活があつてもいいんじゃないか、と思つた時期が俺にもありました。

恐らく御津見は形だけの表の監視役で、実際には裏の監視として俺の見えない所に何人かいるんでしょう、はい。

だとしたら、もし何かしら動いとしたりに面倒だなって思つたりもしたけど、今はその件については保留。

何故なら、あの日以来、「力」が使えなくなつてしまつたからだ。

話を元に戻して、現在食堂。

「小型センター」第6塔は完全な寮施設となつており、中等部から高等部、大学部までの学生が全員住んでいる。

下の階から中等部、高等部、大学部となつており、それぞれの宿泊施設の一一番下に位置する階には食堂が設けられている。

つまり俺は今、高等部の食堂に来ている。

食堂の食事は基本、バイキング形式。費用は学費に含まれているらしい。

ちなみに俺の学費については、一体全体どうなつてしているのか全く持つて、不明である。

閑話休題。

食堂の料理は申告すればお持ち帰り用にしてくれる。故に、自分の部屋で食事を取る生徒も少なくはない。

サンドイッチの具つて、何がいいんだ？　トマトか？　チーズか？　それともあるもん全部入れとくか？

サンディッチの「一erner（既にできているタイプと、自分で作るタイプに分かれている）で具を眺めていると、後から声が掛かつた。

「あら、山下じゃない」

長い黒髪が特徴の、俺の仲間（？）、「シーキューブ」の「世界観」を持つ近藤が、手にご飯と味噌汁の乗ったお盆を持ってそこにいた。

「おひ。なんだかんだで久しぶりだな

「学園」に侵入してから音沙汰なし、女子寮攻略戦争の後半戦の一騎打ちでも互いに相手の存在を確認しただけ。なので、近藤の道具がまだ俺の「天狗之隱蓑」の中に残っていたりする（下着とか……）。

「ねえ、今日の放課後暇？　時間あつたら預けてる物とか返してもらいたいんだけど」

「ああ。いいぞ」

そして、打ち合わせのあと、俺は作ったサンドイッチを持って御津見の部屋に向かった。

九章 山下な日々 / 一話 起床から朝食まで（後書き）

六章のような感じで分単位になりそうだったので、変更しました。

九章 山下な日々 / 二話 授業（前書き）

なぜなぜに？

Q 近藤にも監視役が付いているのですか？

A はい、います。

～出でくるかどうかはまだ未定。

九章 山下な日々 / 二話 授業

目覚めると、そこは学び舎であった。

聞けば、自分はその学徒だといつ。

聞けば、そこは不变の時が流れるといつ。

聞けば、死者の為の癒しの提供といつ。

いつまでも終わることのない学生生活。

何をしても終わることのない時間。

だが目的を忘れた者にとっては、永遠に終わることのない無限地獄でしかなかつた

「新世界の御伽噺 改訂版 エンド

レススチューデント「アト より抜粋

御津見の部屋にサンドイッチを届け、その後自分の部屋に追い返された俺は、依然御津見に渡された童話集を読んでいた。

御津見曰く、この「新世界の御伽噺」は何故か世界各地に広まつており（誰がいつ書いたものなのか、分かつておらず、日夜研究されているらしい）、皆が知つてゐる常識なのだそうだ。但し、この「新世界の御伽噺」、かなりの量があるあらしく、全てを知つている人は少なく（少ない）といつても知つてゐる人は普通に知つてゐる（「学園」では道徳の時間で使つため（教育制度の問題？）、必読となつてゐるらしい）。

暫らくして、朝食を終えた御津見の呼び出しに答へ、食器を取りに彼女の部屋に入った。

食器を回収し、それを食堂に運ぶ。

その後、御津見は所謂外出の準備をするため、部屋に入ろうともなら護身用ナイフが飛んでくる（そもそも鍵が掛かっていて入れないが）。

食堂から戻ってきた俺も自室に入り、今日一日の授業の準備を確認する。

「学園」の授業は70分×5で午前3コマ、午後2コマとなつていて。授業終了時刻は午後4時ジャストだ。

ついでに今日の授業は、「物理」、「数学」、「国語」、「体育」、「開発」の5つ。

割と普通である。

当初は「異世界だし『魔法学』とか『神学』とかあるのかな？」

と思つていたりしていたが、考えれば当たり前のことである。

「」はあくまで学校。普通の勉強するのは当たり前。「開発」というおかしな授業が一つあるが。

朝食後、俺と御津見は別行動し、最終的に自分のクラスへ向かう。監視役の御津見が俺について来るのは外出したときだけ。「学園」内では朝と夜の点呼を取るしかしてこない。

まあ、クラスは同じだったが・・・・

ついでに言つと、奔洞は隣のクラス。

同じ転生者の仲間が傍にいなのはちょっと心細かつたりする。

これが原作介入できる世界とかだったら、別に仲間なんていなくともよかつたんだけど。

「さて、突然だが、編入生を紹介しよう」

うちのクラスの担任、せんじくかがりび泉獄篝火先生が、ホームルーム開始早々、そう言って、男子を一人教室に入れた。

「三木恭介です。これからよろしくお願ひします」

あ。忘れてた。

三木の傍に浮遊霊がいるのを見て、彼が「アスラクライン」の「力」を持つ、故郷を同じにする仲間だったといふことを、俺は久しぶりに思い出した（ちなみに名前言われても、顔見ても分からなかつた）。

一限目、物理。

特筆することはない。

ただの物理の授業である。

三木を盗み見て、彼が当初の俺同様驚いているのを確認する。

そうだろ、そうだろ。ここの授業は「普通」の授業だ。そして……

三木の手が止まる。

気のせいか、冷や汗が出ているように見える。

案外、気のせいじゃないかもしけないが。

「ん？ どうした、三木？」

顔色の悪い三木を心配して物理教師が聞く。

「……いえ、なんでもありません」

三木の返答を聞いて、「そうか」とせじて『氣に』ある様子もなく授業を再開する物理教師。

その後、三木の手はなかなか動かない。

なぜならこの「学園」の授業では、特に理数系において、見たことも聞いたこともない公式が溢れかえっているからだ。

もちろん俺も授業が分からぬ。

九章 山下な日々 / 三話 授業（後書き）

「開発」はパクリです。

九章 山下な日々 / 四話 授業、続（前書き）

なぜなぜに？

Q 三木にも監視はついているのですか？

A 少しだけついています。

「有力者」には基本全員監視がついているよ。

九章 山下な日々 / 四話 授業、続

死神を視た。

現世に残つた僅かな想いまでも刈り取り、輪廻転生の輪へと連行する執行者。

それが死神。

「新世界の御伽噺 改訂版 死神」

より抜粋

「学園」の授業が難しいのは、考えれば分かることだ。

「世界觀」で起こす現象はある程度解析できているような世界だ。おまけにワープ装置なんかも付いている。元居た世界の科学力を遥かに凌駕しているのは当然と言えるだろう。

だから、授業が意味不明でも俺は悪くない。悪くないばず。

まあ、実際のところは、基礎は同じなので知らない公式や原理を覚えるだけで何とかなるとは思つてはいる。ただ、ちょっとその数が多いだけ。

それに、国語の授業なんかは問題ない。

なら、文系科目はなんとかなるかもしれない。

歴史と地理は意味不だけど……。

授業が終わり、10分休みに入る。

編入生の三木は例のごとくクラスメイトの質問攻めにあつていた。

そんな中、ふと御津見に目を向けてみる。

彼女は三木の所には行かず、一人淡々と次の授業の準備をしている。

この「学園」に編入してから一週間近く経つが、御津見が誰かと一緒に話している所はほとんど見たことがない。

いや、「有力者」の女子とは話しているのを見たことはあったが。

午前の授業が終了し、昼休みに入った。

昼食は朝食同様食堂で食べる。そのため、第4塔に戻らないといけない。

といつても、すぐ隣の塔なので、近いと言えば近いが。

「今日は人が多いね」

きよわな
清罷が食堂の中を覗いて言った。

余談だが、昼食は事前に頼めば弁当という形で朝に支給してもらうこともできる。

話を元に戻す。

あの女子寮攻略戦争以来、男子の「有力者」との関わりが出来た俺は、いつの間にか清罷と神崎かんざきの三人で行動するようになっていた。

「なあ、神崎」

昼食をとりながら俺は聞いた。

「御津見って、いつも一人なのか？」

「ん？ 御津見？ ああ、あれね。

御津見は『対世界觀力』が強すぎるんだよ。

だから、『力』の覺醒の邪魔にならないように、過度な接觸を禁じられているんだ」

「『対世界觀力』？」

「『世界觀』を否定する『力』のことだよ」

俺の疑問に清異が答える。

「ふーん」

思い出すのは、三木と戦った「生活区」での事。

あの時、御津見は三木の「?鐵」を無理やり送り返していた。

あれは、三木の「アスラクライン」の「世界觀」を否定したといひことなのだね。

5限目は「開発」だった。

「開発」は、「有力者」として覚醒させるための授業だ。

「有力者」には一種類いるらしい。

生まれつき「世界觀」を持つ者と、後天的に「世界觀」を生み出す者。

「学園」では後天的に「有力者」を生み出す研究が行われている。

といつても、実際に「有力者」になれるのは雀の涙ほどの人数らしいが。

ただ、「対世界觀力」だけは鍛えることができるらしく、「開発」の主な内容は「対世界觀力」の訓練になつていていたりする。

「対世界觀力」を得ることは、己の「世界觀」を得る為の道になるらしいが、詳しい理由はよくしらない。

「開発」は全クラス同時に行われる。

「対世界觀力」を得るには、「世界觀」を展開できる「有力者」との訓練が必要不可欠らしく、授業中、「有力者」達は「世界觀」を展開しなくてはならない。そしてこれは、「有力者」自身の訓練にもなる、らしい。

「世界觀」の展開など、意味不明だが。

九章　山下な日々 / 四話　授業、続（後書き）

一気に放課後まで飛びます。

九章 山下な日々 / 五話 一日終了（前書き）

なぜなぜに？

Q 「対世界觀力」は所謂無効化能力と考えていいのですか？

A 概ね間違いありません。

／相手の「世界觀」そのものを否定するんだよ。

九章 山下な日々 / 五話 一日終了

今の為に未来を捨てるか。

未来の為に今を捨てるか。

今があるから未来があるのか。
未来があるから今があるのか。

選択は一つに一つに。

「価値」より抜粋

「新世界の御伽噺 改訂版 未来の

放課後は近藤（じんとう）と約束があつたので、清閑達（きよわな）と別れて先に自室へ戻（もど）った。

「天狗之隱蓑」を取り出し、待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせをしたのは、図書館。図書室ではなく図書館なのは、規模が半端じゃないから。

待っていた近藤に会い、「天狗之隱蓑」を渡す。

一体どこに何を直したのかを知っているのは近藤だけなので、彼女に任せることはないのだ。

「天狗之隱蓑」を受け取った近藤は、ふと俺に聞いてきた。

「ねえ、あんた、今『力』使える?」

「ん? 『力』か? いや、何でか使えない

「そう、やっぱりあんたも……」

「これはやつぱり……」と一人で納得したように考へ始める近藤。
「つて、おい。一人で納得しないで、どうこうことなのか教えてくれ。

どう考へても今の状況つて、やばいだろ。

『有力者』じゃなくなつたらどうせつけてこの世界で生きてくんんだ?

「この世界つて……まあいいわ

やう言つて俺の方を向き直る近藤。

改めて見ると整ったその顔に見つめられて、気恥ずかしくなる。が、それを知られるわけにはいかない。何となく、負けた気がするから。

「私達は『パーソナル・リアリティ』自分が現実で、『世界観』の技を使うとき、本当にその技を使っていたわけじゃない。

あくまでコマンドを入力して、予め決められた通りに体が動いていただけ。

確かに、その行動プログラムを少し変更したりはできたけど、基本はプログラム任せ

「つまり？」

「つまり、今ここでは、そのプログラムが使えないってこと。

コマンド入力は出来ない。

『世界観』の技は、自分で全てやるしかないのよ

「言っていることは分かったけど、どうやんの？

俺の力、魔法とかだけど、精霊の感じ方とか分からねえぞ」

「まあ、何とかなるんじゃない？」

それだったら、私達以外のここに送り込まれた人も皆すぐにやら
れちゃうでしょ。

それだったら、ゲームにならない

「 ん？ でも待てよ」

一つ疑問が浮かぶ。

「お前の考えだと、俺達が最初、技が使えた理由が分からねえぞ」

「それもたぶん推測だけど、『世界観』の設定を知るか、触れるかすると同時に、設定が変更されてコマンドが無効になるんだと思う。じやないと、突然使えなくなったりどうしようもないから」

御津見と別れて自室に戻った俺は、御津見に言われたことを整理しながら、宿題を片付け、明日の準備をした。

その後、御津見の夕飯を届けに行つたり、清閑達に誘われて風呂に入つたりして、寝た。

九章　山下な日々 / 五話　一日終了（後書き）

ぐだぐだになりそつたつたので、強制的に終わらせました。

次章は過去編になります。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

なぜなぜに？

Q 三木はまだ「ママンド」で技が使えるのですか？

A いいえ、もう使えません。

「生活」で教えてもらひつたよひだよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 宏治
やました こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま!」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
「サギタマギカマティアルシールド」による防御

「瞬動術」による移動

備考 反政府組織「インフレックス」所属

近藤 美紀
こんどう みき

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区『奈落』」の噴出による攻撃、防御、移動

御津見 みつみ
みつみ

レベル 0

世界観 なし

備考 山下の監視役として派遣された

高校一年生

清罷 聖也

レベル 20

世界観 「おおかみかくし」

得意技 「モンスターボール」の投擲による間合いの調整

神崎 拳

レベル 28

世界観 「黒神」

得意技 「^{ヘキサ・ウォール}方陣障壁」による防御

三木 恭介

レベル 不明

世界観 「アスラクライン」

得意技 「？鐵」の召還による物理攻撃（鉄の鎧武者の打撃攻撃）

次章予告

話し合いなど最早不要。

全力を持って排除するだけ。

勝利者だけが、正義を語れるのだから。

次章、「復古の乱」。

歴史とは、戦いの奇跡。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

これで一区切り、かな？

プロフィール？ 山下浩二

作者にすら名前を忘れられし男

山下 浩二
やました こうじ

男

17歳

高校一年生

身長 162

体重 55

容姿 黒髪。スポーツ刈りより少し眺めの髪。偶に跳ねている。
普通の日本人男子。痩せ気味。

本作の主人公。だが、名前は適當。故に、作者ですら名前を忘れる。

苗字で呼ばれることがほとんどで、名前で呼ばれる事はあまりない。本人は、名前で呼ばれることを良しとしていない。曰く、名前を呼ばれる仲になつた覚えは無いそうだ。

「レベル」は高レベル保持者だが、それは引き籠もり経験が成せる業。何故引き籠もつたかは今だ不明。後に明かされる模様。

引き籠もり時代の後遺症で、精神が不安定になることがしばしば。所謂暴走状態に。一応自覚はしている。

両親は健在。従兄弟も鳩子も兄弟もない、一人っ子。

「ネギま！」との出会いは学校のパソコンの授業中。若さの至りで「エッチ」関係を調べていたところ、学校のパソコンのフィルターに引っかかりずにヒットしたのが「ネギま！」だった。

戦闘は基本、適当。高レベルなのでそれで勝てる。わざわざ派手な技を使いたがる傾向もある。

プロフィール？ 近藤美紀

出番のないヒロイン

近藤 美紀
こんどう みき

身長 160

体重 53（但し、「箱型の恐禍」状態では80近くなる）

スリーサイズ 77 - 61 - 78

容姿 黒髪を腰の位置まで長く伸ばしている。

本作のヒロイン。のはず。何故か出番が少ない。苗字は今後重要なつたりする。

始めて出てきた女性キャラ。だが、「学園」編入後、山下と別行動を取ることにより、出番が消えた。山下との恋人フラグでも建たせようと思っていたのに、何だか無理そう。

ウエストがどうしても60を切らないのが最近の悩み。貧乳なのも悩み。髪には自信を持っている。否、髪にしか自信が持てない。「世界観」の選択には意味があるらしいが、今のところ一切不明。

プロフィール？ 御津見みつつ

ヒロインを喰う準ヒロイン

御津見 みつみ みつつ

身長 158

体重 52

スリーサイズ 79 - 58 - 79

容姿 茶髪をうなじよりも長く伸ばしている。

ヒロインよりも出番の多い氣がする準ヒロイン。体型が似ていたり、性格が似ていたりと、色々な意味でヒロインを喰っている。名前の由来は「いつも見てる」。ストーカーではなく監視役として「いつも見てる」。

当初、監視役として四六時中監視させようと思っていたが、全然監視しておらず、名前だけの役職になっていたので、監視役としては形骸化してしまった。

監視役としては、かなり上から派遣されており、生徒会とは関係無い。

成績はトップクラス。運動もかなりできるが、友人が少ない。

理由は、「世界観」を否定する「力」、「対世界観力」の力が強すぎるため、学生の「世界観」習得を妨げるという理由で、交友を制限されているから。そのため、「有力者」にしか友人がいない。本人がそのことを気にしているかは不明。

「^注団活」の「ジム」に通つてゐる。そのため、肉弾戦を得意とするのか？

十章 復古の乱 / 一話 鹿児島消滅（前書き）

今章は三人称視点になります。

十章 復古の乱 / 一話 鹿児島消滅

外が嫌いだった。

他人が嫌いだった。

世界が嫌いだった。

自分が嫌いだった。

全てが嫌いだった。

だから。

「嫌い」を許容できる「身体」を創った。

「新世界の御伽噺 改訂版 悪魔」

より抜粋

ジャポン暦2260年。

さすがの「ジャポン」も世界の流れには逆らえず、帝国主義を辞

め、民主主義化した。

だが、それをよしとしない者が軍内部を中心に大量に発生。

各地で反乱が起ころも、幸い大規模な物はなく、何らく鎮圧に成功。

「民主主義国家ジャポン」は安定したものと思われていた。

だが、反乱軍はずつと地下で力を蓄えていた。

そして、「ジャポン」が安定し、油断したといひで。

真っ向から敵対すべく、反乱軍が侵略を開始した。

それは、「ジャポン」平定後、20年後のことだった。

きっかけは、台風だった。

赤道付近で発生した台風は、真っ直ぐに「ジャポン」に向かっていた。

別段気にする必要もなく、「ジャポン」はそのまま平和に過りしていた。

だが、突如としてそれは崩れ去る。

台風が「キューシュ」（九州のこと）に上陸したその日、桜島を中心とする鹿児島県のほぼ全土が吹っ飛んだ。

「キューシュ」が吹き飛んだ15分後に反乱軍から声明が送られ、その15分後には「ジャポン」から「トーキュー特区」に戦闘要請が下った。

「トーキュー特区」は形だけとは言え、「ジャポン」の一部であり、特区の上層部は「ジャポン」の上層部との関係も深く、互いが互いを飲み込もうとしたため、最早一体化してしまっていた。そのため、非常事態においては「トーキュー特区」が戦闘の指揮を執ることが暗黙のうちに決定していた。

そのため、この異例事態においてマニアル通りに「ジャポン」は最も安全だと思われる「トーキュー特区」内に作戦司令部を置くことを即座に決定した。

「インフレックス」が約1000年振りに表舞台に出ようとしていた。

【トーキュース特区・インフレックス内・作戦司令部】

「状況は？」

作戦指揮官（女・三十路）はオペレーター三人組に確認をとらせた。

「『キューシュ』鹿児島県は、桜島を中心で完全に消滅しています」

オペレーターA（男・ロン毛）の言葉に、

「例の台風は依然、『キューシュ』上空に停滞したままです」

オペレーターB（女・百合）が続け、

「『キューシュ』には次々に反乱軍が終結してますね」

オペレーターC（男・めがね）が締めくくる。

「そう」

指揮官は考える。

敵の最終目標は恐らく「ジャポン」の帝国主義化。

そのための方法は一つ。

国会で承認されるか、実質的に「ジャポン」を支配してしまうか。

敵はわざわざ「キューシュ」に本陣を置き始めていた。

ならば、後者の方が高いか。

そのとき、背後の扉が開いて、司令（男・めがね兼ヒゲ）と副指令（男・白髪）が入ってきた。

「第零種戦闘配置」

司令の言葉に、オペレーターAが尋ねる。

「零種ですか？ 一種じゃなく」

「ああ、これがさつき届いた映像だ」

副指令がその問いに答え、メインスクリーンに映像を映し出す。

それは、思念系の「力」を使える「有力者」に例の台風の中を念写させた物だつた。

「ハ、これは……」

誰もが息を飲む。

そこには伝説とされ、かつて世界を恐怖のどん底に叩き落したと言われる、恐るべき空中要塞都市が浮遊していた。

「 天空の城、『ラピュタ』（*天空の城・ラピュタ）……」

誰かが呟いた。

十章 復古の乱／一話 鹿児島消滅（後書き）

これでやっと、ロボとか飛行船とかを用いた大スペクタルな話が書けそうです。

本当は過去編なんてするつもりはなかつたけど、話が全然進まないので、思い切つてやつちゃいました。

むりむりしてやつた。でも、後悔はしていない。

ついで、ラピュタとか無敵でしょ（笑）。

十章 復古の乱 / 二話 大量破壊兵器（前書き）

なぜなぜに？

Q 「ラピュタ」を包んでいた台風は何なのでしょうか？

A 「龍の巣」です。

「龍の巣」は巨大低気圧の渦だったよね。

十章 復古の乱 / 二話 大量破壊兵器

世界に不満を持つ少年がいました。

ですが、力のない彼には何もできませんでした。

力のない世界では何もできませんでした。

そんなある日、彼は力を得ました。

人に許されざる、神の力を得ました。

だから彼は。

新世界の神となることを決めました。

より抜粋

「新世界の御伽噺 改訂版

裁き」

【トーキュース特区・インフレックス内・作戦司令部】

『『キューシュ』在住の陸軍、及び空軍は大分基地まで後退。熊本、宮城の両基地は廃棄します』

作戦指揮官（女・三十路）は「ラピュタ」の危険性を考慮して、被害を抑えるべく撤退を指示。

ちょうどその時、オープンチャンネルで敵の指揮官と思われる男から通信が入った。

「どうします？」

「出て」

オペレーターB（女・百合）はそう言ひて、指揮官はモード一見つめた。

『私は、『ジャポン帝国』作戦指揮官の』

『御託はいいわ。用件は何？』

『つむ、いいだろ？ 我々の用件は一つ。降伏してもう』

『却下ね。じゃあ、そういうことで』

『おいつ、ちよつとは話を聞』

強引に通信を遮断する指揮官に、オペレーターA（男・ロン毛）

が苦笑いを浮かべる。

「よかつてんですか？」

「構わん」

指揮官の代わりに司令（男・めがね兼ヒゲ）が答えた。

「反乱軍と相容れる訳にはいかないからな」

副指令（男・白髪）が補足する。

そんなことをしている間に、オペレーターC（男・めがね）から報告が上がった。

「『ダモクレス』（*コードギアス）機動しました」

その言葉に、司令部に新たな緊張が走る。

「ダモクレス」は新型核兵器「フレイヤ」（*コードギアス）を搭載する天空要塞であり、第零種戦闘配置時にのみ使用可能な封印指定兵器である。

「ダモクレス」自身は高度な防御力を誇るが、問題はそこではない。

「ダモクレス」が封印指定を受ける理由、それは、、搭載されている「フレイヤ」にあつた。

確かに、核兵器であるため、使用が忌避されるのは当然と言える。

だが、「フレイヤ」は爆発、熱反応、放射能などは全く発生させない。

なら、なぜ忌避されるのか？

それは、「フレイヤ」の効果範囲にある。

「フレイヤ」はリミッターを解除すれば最大半径100kmを消滅させることができが可能なのだ。

一度使用すれば「キューシュ」のほぼ全土を消滅させることができるもの。

故に、封印指定。

「第零種戦闘配置」は、最悪の場合、「キューシュ」、「ラピュタ」を葬ることを意味する。

故に、今まで発令されたことはなかった。

だが、それをさせるほどの脅威なのだ。

「ラピュタ」という存在は。

「『ラピュタ』付近で、巨大な生命反応を確認。何だつ！」の大
きな声！

オペレーターAの報告を聞くと同時に、指揮官は命令を下した。

「宇宙軍に強力を要請。『EHS』（＊H.S インフィニット・ストラトス）を可能な限り応援に回させて。

『MS』（＊機動戦士ガンダムSEED）部隊は第一から第二十部隊まで出動。

『シゴーク』、『チューゴク』の『KMF』（＊コードギアス）部隊は全機出動準備。『G-1ベース』（＊コードギアス）に積めるだけ積んどきなさい」

「機動兵器ばかりですが……」

「ええ」

オペレーターBの疑問に指揮官は答える。

「映像、撮れました」

そう言って、オペレーターAが先ほど確認した生命反応の持ち主をメインスクリーンに映し出す。

そこには、生物としては有り得ないほどの巨体を持った人型生命体が映っていた。

優に50mは超えるであるかつ身体。

その姿を見て、司令部の誰もが唖然とする。

「ラピュタ」に続く伝説の大量破壊兵器。

「巨神兵」(*風の谷のナウシカ)が「ラピュタ」が送り出した
先陣だった。

十章 復古の乱 / 二話 大量破壊兵器（後書き）

ところが、『ラピュタ』に引き続き、『ナウシカ』でした。
過剰戦力ですね。

十章 復古の乱 / 三話 勇者部隊（前書き）

『なぜなぜに?』

Q 「巨神兵」はどうやって操っているのですか？

A とある「有力者」の力です。

～説明になつてないけど、ごめんね。ネタバレにもなつかけつから……

十章 復古の乱 / 三話 勇者部隊

――一を犠牲に十を救う。

それは正義と言えるのか？

零を徹して十を救う。

それは可能と言えるのか？

正義とは。

犠牲が伴うが故に。

正義と為せる業なり。

――「新世界の御伽新 改訂版

正義の

鎖」より抜粋――

鹿児島消滅から一週間。

戦線は混迷していた。

「巨神兵」による攻撃により展開していた航空部隊はほぼ全滅。

ただ幸いなことに、展開していた部隊は全体の数パーセントでしかなかつたため、被害は軽傷と言える。

防衛ラインはからうじて維持してはいるが、IJのままではホンシューへの撤退も考えられている。

「IIS」「MS」部隊は反乱軍の展開した機動兵器「ロボット」(*天空之城・ラピュタ)と交戦の後、両軍撤退。その後、「インフレックス」は「ラピュタ」殲滅に向けての準備を、反乱軍は「キューシュ」での地盤作りを行つていた。

反乱軍は「キューシュ」の7割を掌握、その後衛星をジャック、「ジャポン帝国」の復活を宣言した。但し、この放送はすぐに止められたが。

もちろん、「ダモクレス」による「フレイヤ」投下の準備も進められていた。

【トーキュ一特区・インフレックス内・作戦司令部】

「『勇者部隊』を出動せしめ

司令（男・めがね兼ヒゲ）がそう命令を下した。

「遂に『勇者部隊』まで出動ですか……」

オペレーターA（ロン毛）が呟く。

「勇者部隊」。

それは「インフレックス」に所属する最強の部隊で、少人数で構成される精鋭部隊である。

隊員全てが高レベルの「有力者」で構成されており、一人一人が一騎当千の力を持つている、まさに勇者を思わせる猛者達の集まり。故に、「勇者部隊」。

「指令、『勇者部隊』の出動と同時に、『電腦コイル』（＊電腦コイル）を作動させようと思いつのですが」

作戦指揮官（女・三十路）が指令に提案をする。

「『勇者部隊』の出動と同時に、『I.S.』、『M.S.』部隊も出動。物量作戦と思わせながら、『勇者部隊』に『電腦コイル』を作動させるための『力』を展開させます。

『電腦コイル』作動後は、敵『ロボット』を通して敵のネットワークに侵入。

最初に『巨神兵』とのネットワークを切断、コントロールを失つたところを威力を抑えた『フレイヤ』で破壊。その後、航空部隊を出動させ、上空からの『ラピュタ』への物理的侵入。

その間、侵入した敵ネットワーク内からの『ラピコタ』への侵入も同時に進行させ、敵を無力化します。

『田神兵』と『ロボット』の制圧終了後、『KMF』部隊を出動、地上基地の奪還と制圧を行います

指揮官はオペレーターB（女・百合）と共にスクリーンを使いながら作戦を説明した。

「いいだろ？ やりたまえ」

久しぶりです。

十章 復古の乱 / 四話 決戦前（前書き）

『なぜなぜに?』

Q 「ダモクレス」投下したら勝てるんだから、この戦い、「インフレックス」には負けはないんじゃないんですか？

A 「ラピュタ」は無事な可能性もありますし、そんなことをすればただでさえ狭い国土が更に狭くなってしまうので投下を懸念、なんてしている間に奇襲でやられたりするかもしませんよ。
「それは言つちや駄目（笑）　あ、でも対策とか考えといつかな？」

十章 復古の乱 / 四話 決戦前

――一世代が変われば時代が変わり。

時代が変われば正義は変わる。

その動乱の世に繰り出す者達を人は

海賊と呼んだ。

――「新世界の御伽噺 改訂版 海賊伝」
より抜粋――

反乱軍は「ロボット」を鹿児島を中心とする円周上に展開。

その真下では、反乱軍の地上軍による統治が着々と行われていた。

反乱軍の旗艦である「ラピュタ」は奇襲に備え、その周囲全てを球体状に「ロボット」で覆い、その防壁の中で次々に「ロボット」を増設。増えた「ロボット」のほとんどがそのまま前線へと運ばれ、戦力の強化となる。

「巨神兵」は逆Vの形で配置され、航空部隊の牽制を行っていた。最も、「インフレックス」が最初から航空部隊を然程送り込んでは

いなかつたので、ほとんど攻撃はしていないが。

反乱軍であるが故の兵力の少なさを、「ラピュタ」内での「ロボット」建造という形で補い、時期に訪れる戦いの準備を進めていた。

もちろん、それは「インフレックス」も同様。

「IS」部隊は宇宙軍から引き寄せ、「ラピュタ」上空（といつても大気圏外）に待機。「MS」部隊は前線上空にて待機。両軍、いつでも突入できるようにしてある。

高い機動力と防御力を誇る「IS」部隊が「ラピュタ」に直接侵入し、数の多い「MS」部隊が「ロボット」と交戦する。

「KMF」部隊は、その間に地上の民間人及び軍人を確保、避難させ、最後の手段である「ダモクレス」による被害縮小のために動く。市街戦を前提に作られた「KMF」では残念ながら一部の特殊機体を除き飛行が不可能なため、空を飛ぶ「ロボット」相手では歯が立たないからだ。

そして、反乱軍のアキレス腱と言つてもいい超巨大人型生命兵器「巨神兵」については、「勇者部隊」の本陣が対応に当たる。して、「勇者部隊」の別働隊には、「IS」部隊と共に「ラピュタ」に侵入し、反乱軍と直接戦つてもらつ。

仮に「ラピュタ」を攻略したとしても、一個人が戦略的価値を持つこの世界では、本人を直接取り押さえなければ意味がないのだ。

【トーキュー特区・インフレックス内・作戦司令部】

「まるで世界の終わりっすね」

オペレーターA（ロン毛）がサブスクリーンに映る光景を曰にしながら言った（メインスクリーンには互いの位置情報が表示されている）。

「事実、世界の終わりよ」

作戦指揮官（女・三十路）が親指の爪を噛みながらぼやく。

「全世界で最も戦力と技術を保有する『ジャポン』がこのまま内戦、なんてことになつたら、各國は我先に平和の免罪符を掲げて軍を霸権してくるわ。世界のパワーバランスは崩れ、人々は互いによりよ——」

「なーにうじうじ陰気臭い事言つてんのよ！ ようは勝てばいいんでしょ、勝てば」

突然通信が入り、作戦指揮官の眩きは途中で遮られた。

画面に映し出されたまだあどけなさが残る勝気な少女は、「勇者部隊」の一人、赤色が好きで全身真っ赤なコスチュームの、通称、レッドガールだった（そのままやないかい！）。

「勇者部隊」の隊員にはそれぞれ二つ名がついている（隊員それが自身の二つ名命名権を持つていて、自分で付ける人もいれば、

一つ名を募集する人もいる。ちなみにこの少女の場合は血縁姉妹（勇者に「一つ名がつく」とはよくあることだから、らしい）。

「オーケイ。それまで言つんなら、期待してるわよ」

十章 復古の乱 / 四話 決戦前（後書き）

次回から戦闘に入ります。たぶん……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6064j/>

パーソナル・リアリティ/自分だけの現実

2011年10月9日19時39分発行